歴史群像シリーズ㉜

信長・秀吉・家康3代の天下人に仕え、乱世を生き抜いた夫婦の軌跡！

山内一豊

功成り名を遂げた一国一城の主



【特別折込】
一豊関連人物相関図
豊太閤御葬式之図

【カラー企画】
一豊出世の階梯
ゆかりの品／史跡紀行

【ドキュメント一豊・千代の生涯】
信長・秀吉・家康に仕えた夫婦二人三脚の人生
一豊戦歴ダイジェスト

【一豊の生きた時代】
「功名」とは何か／戦国武士の妻の諸相／土佐20万石の実相

【一豊アラカルト】
一豊・千代出自の謎／名馬の条件／「内助の功」伝説の真相

【人物列伝】一豊をめぐる人々

歴史群像シリーズ 既刊絶賛発売中

表紙イラストレーション・大沢山水

歴史群像シリーズ(82)　信長・秀吉・家康3代の天下人に仕え、乱世を生き抜いた夫婦の軌跡！

山内一豊

功成り名を遂げた一国一城の主



【特別折込】
一豊関連人物相関図
豊太閤御葬式之図

【カラー企画】
一豊出世の階梯
ゆかりの品／史跡紀行

【ドキュメント一豊・千代の生涯】
信長・秀吉・家康に仕えた夫婦二人三脚の人生
一豊戦歴ダイジェスト

【一豊の生きた時代】
「功名」とは何か／戦国武士の妻の諸相／土佐20万石の実相

【一豊アラカルト】
一豊・千代出自の謎／名馬の条件／「内助の功」伝説の真相

【人物列伝】一豊をめぐる人々

歴史群像シリーズ(82)
【山内一豊】功成り名を遂げた一国一城の主
学研

歴史群像シリーズ(82)
【山内一豊】功成り名を遂げた一国一城の主

発行 株式会社 学習研究社

学研

ISBN4-05-604242-X
C9421 ¥1300E
雑誌69613-28
Ⓗロングセラー
GAKKEN 85-16231
定価：本体1,300円
※税が別に加算されます。
9784056042429
1929421013002

歴史群像シリーズ 82
山内一豊

2006年1月20日　第1刷発行
◎ 発行人＝工藤徳治
◎ 編集長＝新井邦弘
◎ 印刷所＝大日本印刷株式会社
◎ 発行所＝株式会社　学習研究社
〒145−8502
東京都大田区上池台4−40−5

●この本に関するお問い合わせは、次のところへお願いいたします。
【文書】
〒146−8502
東京都大田区仲池上1−17−15
学研第2ビル　お客様センター
「歴史群像シリーズ」係
【電話】
記事内容については［編集部直通］
03(5447)2316
ご注文・不良品のお問い合わせは［雑誌販売室］
03(5496)0637
それ以外のこの本に関することは［お客様センター］
03(3726)8124
歴史群像ホームページ　http://www.gakken.co.jp/rekigun/

歴史群像シリーズ㊷号

山内一豊

功成り名を遂げた一国一城の主

Gakken

歴史群像シリーズ㊷

山内一豊

功成り名を遂げた一国一城の主

学研

歴史群像シリーズ**新機軸!!**

マンガで読む 山内一豊&千代



名馬をネットショッピングで買っちゃった?!
のほほん一豊とてきぱき千代の
ゆる～い出世物語

山内一豊夫婦の出世物語がマンガになった!
とはいえ、これまでの学習マンガとは一線を画した
脱力系ギャグマンガだから歴史が苦手でも問題ナシ!
歴史群像ならではの歴史コラムもついた、
歴史ファンも納得の1冊!!
大河ドラマは気になるけど分厚い本は読みたくない——
そんな読者の声に応えた1冊!!

12月20日発売予定 乞うご期待!!

B5判・96ページ
予価525円(税込)

歴史群像特別編集 **戦略・戦術を具現した16堅城を徹底検証!**

戦国の堅城II

絶賛発売中!!



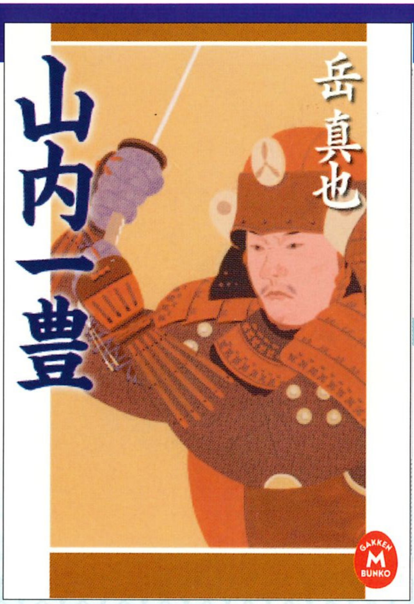
【境目の城・繋ぎの城】
遠江 諏訪原城／**近江** 宇佐山城／
越後 荒砥城／**上野** 名胡桃城／**会津** 久川城／
安芸 亀居城／**会津** 馬入峠の塁

【居城・根城】
下総 本佐倉城／**近江** 小谷城／**上野** 岩櫃城／
陸奥 南部根城

【実戦にみる城の戦い】
月山富田城総力戦／韮山城包囲戦／
山中城攻城戦／上田城防衛戦／
戦国最強 名古屋城

B5判／204ページ／定価:1995円(5%税込)

学研M文庫 **好評発売中!**



信長、秀吉、家康に仕えた男の真摯な生涯!

山内一豊

■798円(5%税込) **岳 真也**

信長、秀吉、家康に仕え、関ヶ原の戦いでの功績により二十四万石の土佐藩祖となった山内一豊。
愛妻・千代の黄金十両で手に入れた名馬が信長の目に止まり、一豊の立身出世のきっかけを作った「内助の功」の逸話は有名。
朝倉との一戦では、顔面に矢を受けながらも敵の勇将を討ち取るという武勇伝も残る。
戦国武将としては珍しく側室を置かず、妻一人を愛し通し、突出した才能がなくとも謹厳実直な姿勢を貫くことにより、徐々に頭角を現わした一豊の真摯な生涯を描く!

好評既刊

信長の家臣団	樋口晴彦
柴田勝家	安西篤子
蜂須賀小六正勝	星 亮一
斎藤道三 全3巻	岩井三四二
立花宗茂	志木沢 郁
結城秀康	志木沢 郁
竹中半兵衛	高橋和島
嶋左近	近衛龍春
真田昌幸	江宮隆之
島津義弘	江宮隆之
直江兼続	江宮隆之
石田三成 (1月発売予定)	江宮隆之

◆歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説 日本武器集成

刀槍・銃砲から手裏剣までオールカラーで徹底網羅!!

図説シリーズに待望の武器集が登場!!
刀・槍をはじめ弓、火縄銃、手裏剣などの
変わり武器まで一挙掲載!
「歴史群像シリーズ」で好評を得た実験・検証も
ふんだんに取り入れたファン必携の1冊!!



●主な内容

【掲載武器】刀剣／槍・薙刀／弓矢／鉄炮／忍具(手裏剣・忍び刀ほか)／変わり武器(鎖鎌・十手ほか)
【構成】イラスト図解・武器の基本構造／種類と変遷／効果的な使い方／実験・検証
【関連記事】楯と防御施設／馬と馬具／武器の差異と勝敗の関連／新解釈・武器と軍装の変遷史
【特別折込】主要武器寸法比較表／武具・武装変遷年表

絶賛発売中!!

オールカラーB5版・168ページ
2100円(税込)

学研・歴史群像シリーズが贈るお城ムックの決定版！

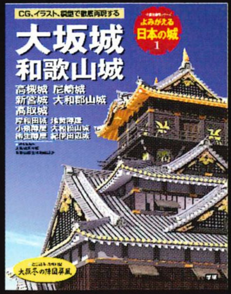
CG、イラスト、模型で徹底再現する

よみがえる日本の城

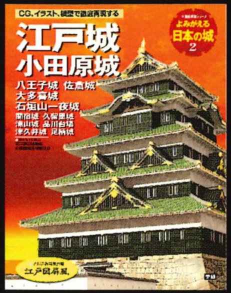
在りし日の名城の雄姿が今、鮮やかによみがえる！
通常のガイドブックや城跡の写真だけでは物足りないという
ワンステップ上のお城ファンのための内容充実のシリーズ。
お城の見方にちょっと詳しくなると、お城めぐりの魅力は倍増します。

全30巻
完結予定
シリーズ続々
刊行中！

① 大坂城



② 江戸城



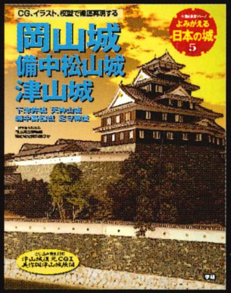
③ 名古屋城



④ 姫路城



⑤ 岡山城



⑥ 萩城



⑦ 広島城



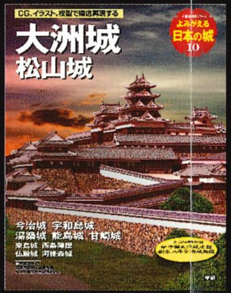
⑧ 金沢城



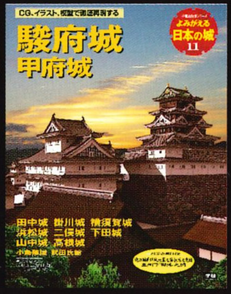
⑨ 盛岡城



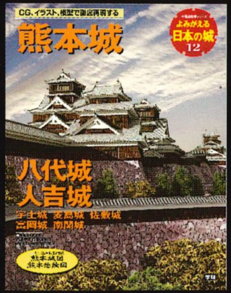
⑩ 大洲城



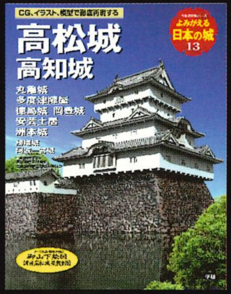
⑪ 駿府城



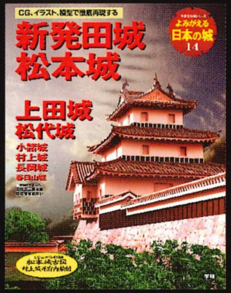
⑫ 熊本城



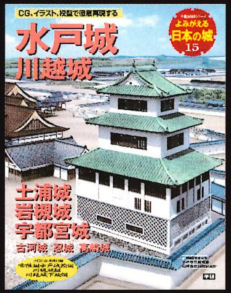
⑬ 高松城



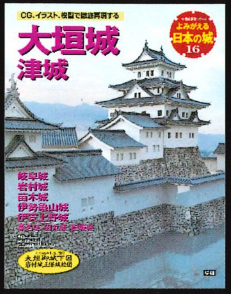
⑭ 新発田城



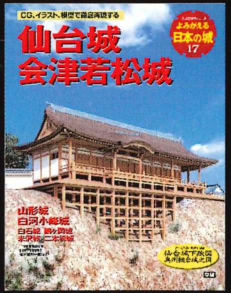
⑮ 水戸城



⑯ 大垣城



⑰ 仙台城



⑱ 鹿児島城



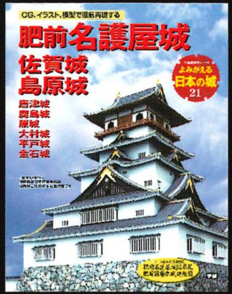
⑲ 二条城



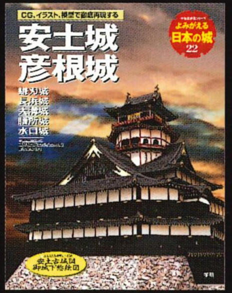
⑳ 小倉城



㉑ 肥前名護屋城



㉒ 安土城



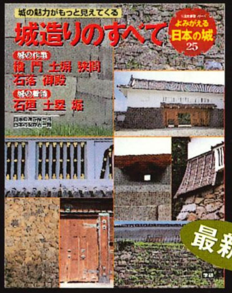
㉓ 天守のすべて①



㉔ 天守のすべて②



㉕ 城造りのすべて



最新刊

体裁：菊倍判／オールカラー／
64〜72ページ
定価：714〜819（税込）
詳細は歴史群像シリーズ・ホームページ
http://www.gakken.co.jp/rekigun/castle.html
でご確認いただけます。

お求めはお近くの書店で。書店ご不便の際は、
ショップ.学研http://shop.gakken.co.jp/（携帯アクセス可）
または「学研通販受注センター」
0120-92-5555（通話料無料）にてご注文ください。
税込3000円以上のご注文につきましては送料は弊社が負担いたします
（ただし3000円未満は送料350円をご負担ください）。
お支払方法：後払振込（手数料はご負担ください）・
クレジットカード（携帯注文では不可）。
在庫切れの場合はご容赦ください。
内容に関するお問い合わせは03-5447-2316（編集部直通）まで。

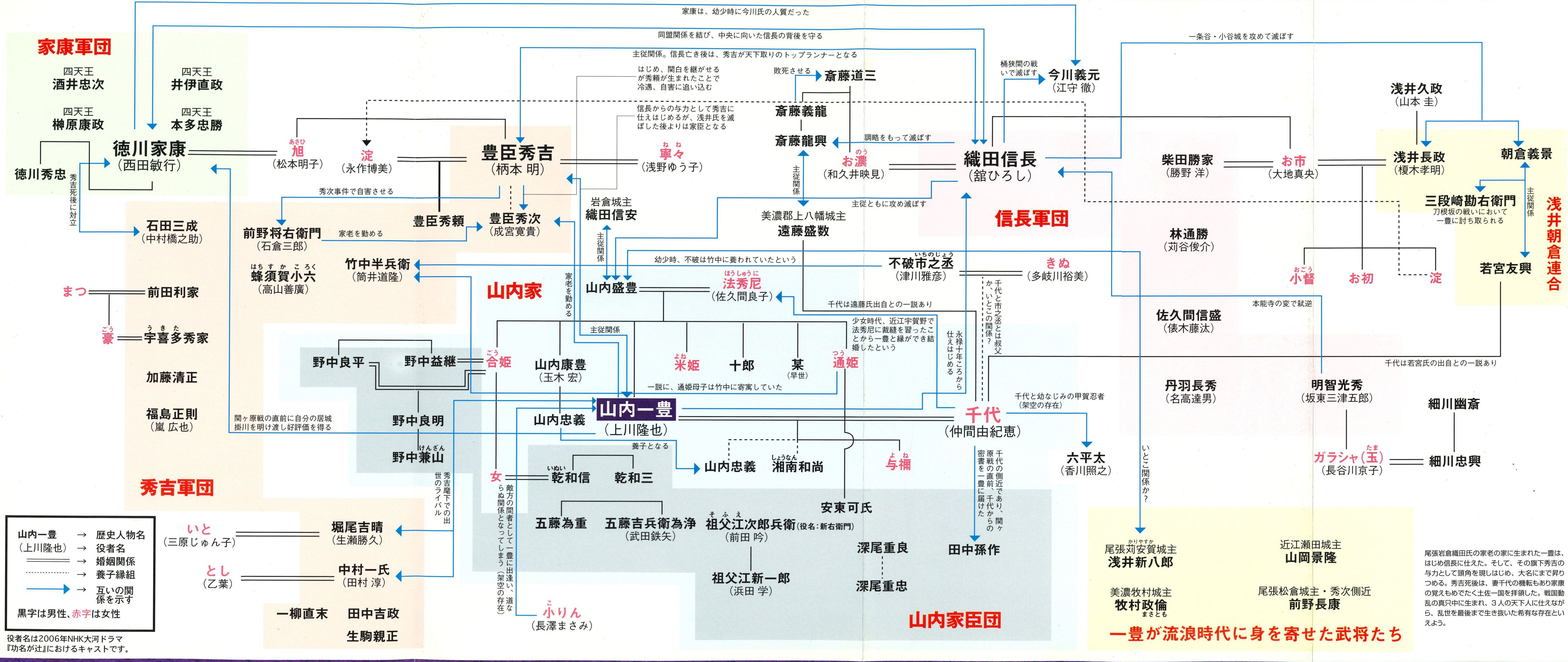
歴史群像シリーズ82号

山内一豊

~功成り名を遂げた一国一城の主~

「山内一豊人物相関図」

覇者三人とともに戦国を駆け抜け土佐二十四万石の大大名となった一豊の人間関係を解き明かす



役者名は2006年NHK大河ドラマ『功名が辻』におけるキャストです。

尾張岩倉織田氏の家老の家に生まれた一豊は、はじめ信長に仕えた。そして、その旗下秀吉の与力として頭角を現しはじめ、大名にまで昇りつめる。秀吉死後は、妻千代の機転もあり家康の覚えもめでたく土佐一国を拝領した。戦国動乱の真只中に生まれ、3人の天下人に仕えながら、乱世を最後まで生き抜いた希有な存在といえよう。

製作=編集部

戦国武将勢揃い!

豊太閤御葬式之図

監修・文＝谷口克広
Taniguchi Katsuhiro
撮影＝染谷 學
Someya Manabu
所蔵＝国立国会図書館

『豊太閤御葬式之図』(久保田小太郎編／明治31年・1898)には、秀吉の死から半年後の慶長4年(1599)2月18日、諸国の大名が総動員されて盛大に秀吉の葬儀を行っている有様が描かれている。御供の人数を合計すると3万に近い。その中にあって山内一豊も、200人の供を連れて参列している。

一豊は、秀吉の長浜時代からの家臣である。生え抜きの臣といってよい。生駒親正・中村一氏・堀尾吉晴あたりが同列から出発したライバルだった。しかし、秀吉が天下を取った以後は、石高の上で彼らライバルたちに水を開けられていった。それのみか、福島正則・加藤清正・石田三成など後輩にも抜かれがちになってしまった。武辺一辺倒だった一豊の限界というべきだろう。

この『豊太閤御葬式之図』でも、徳川家康・前田利家・宇喜多秀家といった大大名は御供500人、生駒・中村・堀尾ら10数万石の大名はいずれも300人である。5万9000石の一豊が200人というのは妥当なところだろう。

5万9000石にすぎないけれど、掛川城主一豊にはある意味で重要な役割があった。それは、徳川家康の領地と京都との間に位置することである。秀吉は、江戸と京都との間に生え抜きの大名たちを並べた。家康を牽制することがそのねらいである。一豊もそのひとりだったのである。

しかし、一豊に関しては、そのねらいが裏目に出た。江戸と京都方面を往復する家康を一豊が途中で歓待し、かえって親密になっていったからである。秀吉の生前のものだが、家康が一豊に宛てて、その心遣いに感謝の旨を伝えている書状がある。一豊に、秀吉の次は家康という深い読みがあったとは思われないが、こうして家康の信頼を得ていったのは確かであろう。

さて、秀吉の死没時の一豊の地位をほぼ的確に表している『豊太閤御葬式之図』だが、ひと言ことわっておく必要がある。

秀吉の葬礼の参列者を列記した史料が、このほかにも多数伝わっている。『太閤秀吉公御葬式行列書』(東京大学史料編纂所蔵)、『慶長己亥二月十八日御行列次第』(『山内家史料』所収) 等々。久保田小太郎氏は、それらを参考にして『豊太閤御葬式之図』を描いたのだろう。しかし、そのどれもが偽書なのである。だいたい秀吉の葬儀などは、行われた形跡がないのである。これほど盛大な葬儀が行われたならば、当時の僧侶・公家たちが無視するはずはあるまい。ところが、だれの日記にもそれが記されていないのである。

秀吉の死はしばらく「極秘」とされた。それが公表されるのは、死後8か月たった豊国廟造営のときである。おそらく江戸時代も中期以降、何者かが秀吉の葬儀という架空の出来事をつくりあげ、それが広まってこうした文献があちこちで作られたのであろう。

（たにぐちかつひろ・戦国史研究家）

本図は、国立国会図書館所蔵の史料を翻刻したもの。山内家宝物資料館にも同じ史料があるが、そちらはもともとの形通り巻物になっている。(注記＝編集部)


⑪筒井定次(順慶の養子)　⑩小西行長



⑨立花宗茂　⑧堀尾忠氏(吉晴の二男)



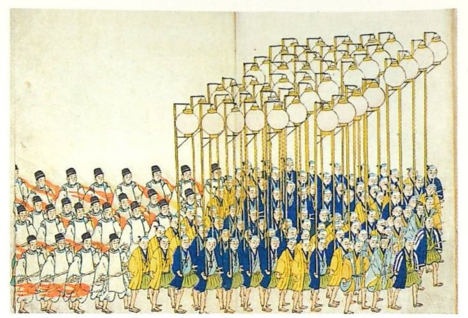



⑦北条氏勝(綱成の孫＝氏繁の子)


⑥伊達政宗　⑤島津義弘


④長宗我部盛親　③鍋島直茂


②浅野幸長　❶黒田長政




㉓堀尾吉晴　㉒浅野長政　㉑小堀遠州(政一)　⑳木食上人

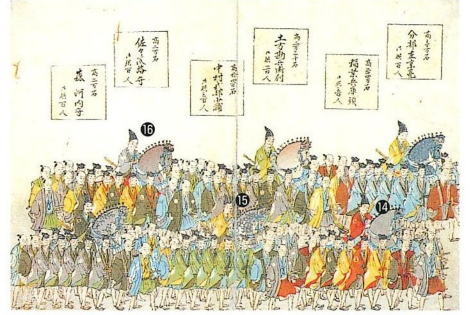



⑲「真岡安房守」とあるが、真田昌幸であろう。


⑱織田秀信(三法師＝信長嫡孫＝信忠嫡子)




⑰生駒親正


⑯佐々行政(秀吉の鷹匠頭)　⑮中村一氏　⑭稲葉重通(一鉄庶長子)


⑬吉川広家　⑫毛利輝元


㊳前田利家




㊲宇喜多秀家



㊱羽柴下総守(滝川雄利)　㉟羽柴三河守(藤掛永勝)　㉞片桐且元


㉝安国寺恵瓊　㉜福島正則


㉛藤堂高虎　●秀吉遺骨　㉚大谷吉継　㉙増田長盛


㉘脇坂安治　㉗加藤嘉明　㉖小早川秀秋　㉕石田三成　㉔加藤清正


㊺淀殿


㊹北政所


㊸一柳直盛(直末の弟)


㊷徳川秀忠




㊶足利義氏(天正11年・1583没)とあるが不明。


㊵九鬼嘉隆　㊴細川忠興







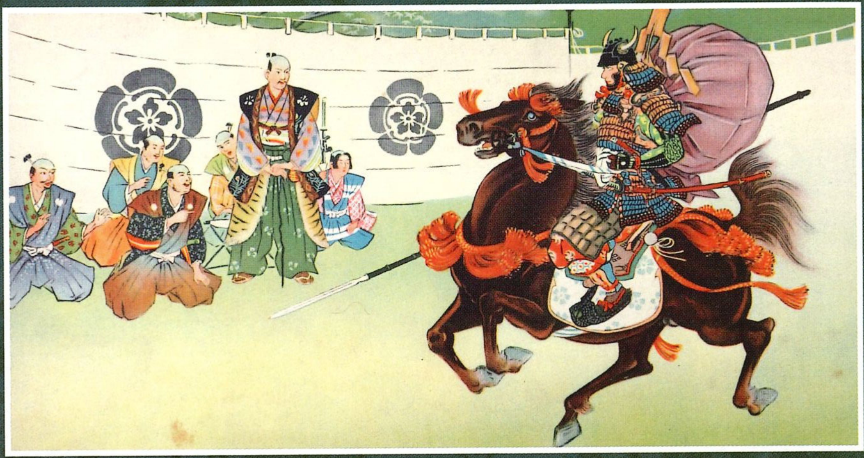

㊾山岡景友(道阿弥)　㊽古田重然(織部正)


㊼織田有楽斎(長益＝信長の弟)


㊻直江兼続(上杉景勝の名代)



【巻頭カラー企画】



『國史画帖大和櫻』より（個人蔵）

一豊
出世への階梯

時代の波に乗って順調に立身出世

戦国覇者版図と一豊配置

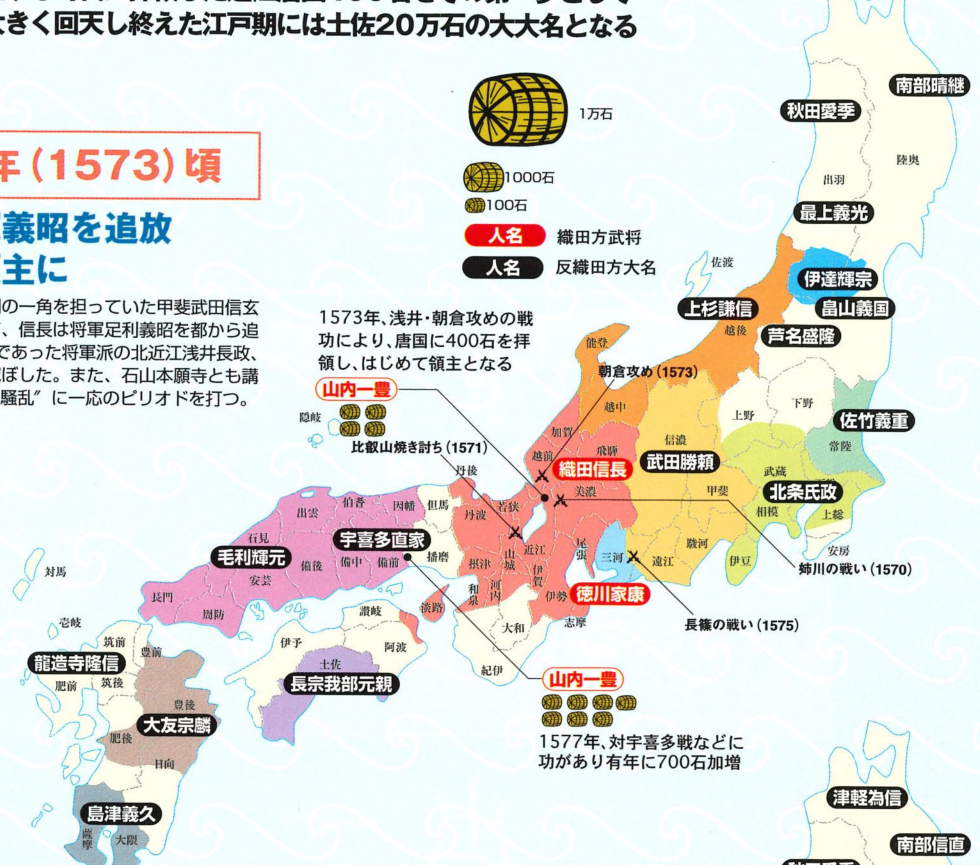
戦国大名が乱立する時代に拝領した近江唐国400石をその第一歩として
一豊は時代が大きく回天し終えた江戸期には土佐20万石の大大名となる

監修=橋詰 茂
Hshizume Shigeru

天正元年（1573）頃

信長は将軍義昭を追放
一豊は初領主に

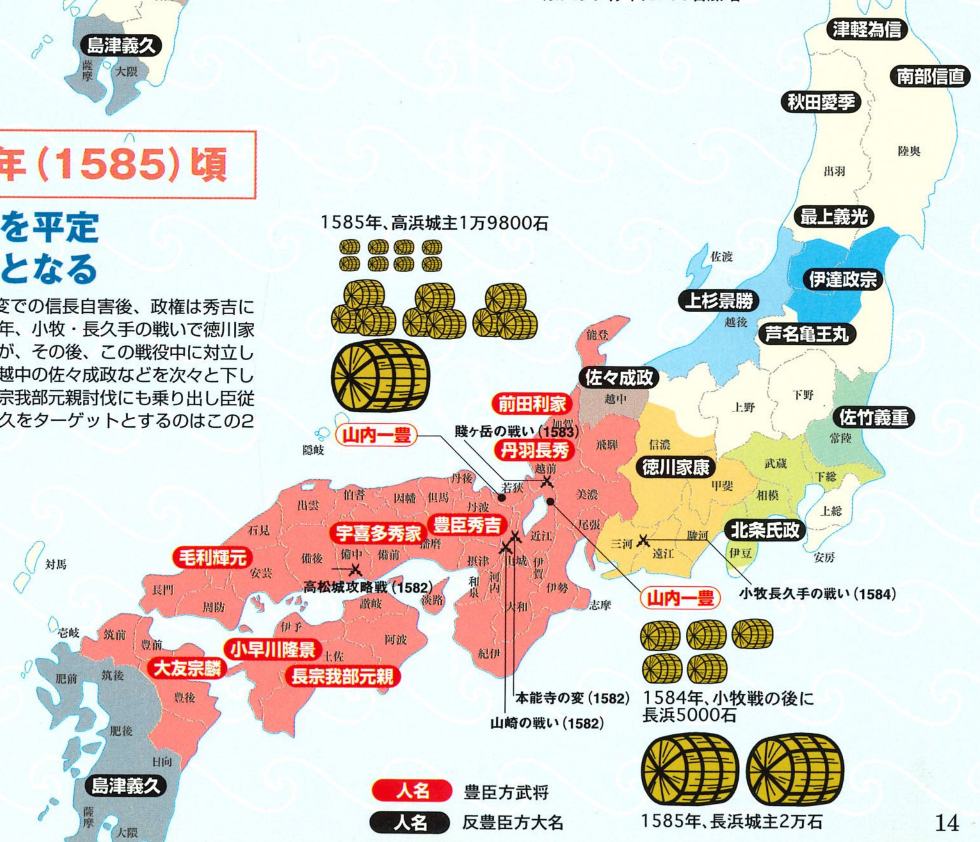
この年、反信長包囲網の一角を担っていた甲斐武田信玄が死亡。それに乗じて、信長は将軍足利義昭を都から追放。さらには長年の敵であった将軍派の北近江浅井長政、越前朝倉義景を攻め滅ぼした。また、石山本願寺とも講和し、いわゆる〝元亀騒乱〟に一応のピリオドを打つ。



天正13年（1585）頃

秀吉は四国を平定
一豊は大名となる

天正10年の本能寺の変での信長自害後、政権は秀吉に移る。そして、この前年、小牧・長久手の戦いで徳川家康に敗れた秀吉だったが、その後、この戦役中に対立した紀州の根来・雑賀、越中の佐々成政などを次々と下した。返す刀で四国の長宗我部元親討伐にも乗り出し臣従させる。九州の島津義久をターゲットとするのはこの2年後である。



慶長5年（1600）頃

関ヶ原戦直前
一豊は掛川5万石で東軍に参戦

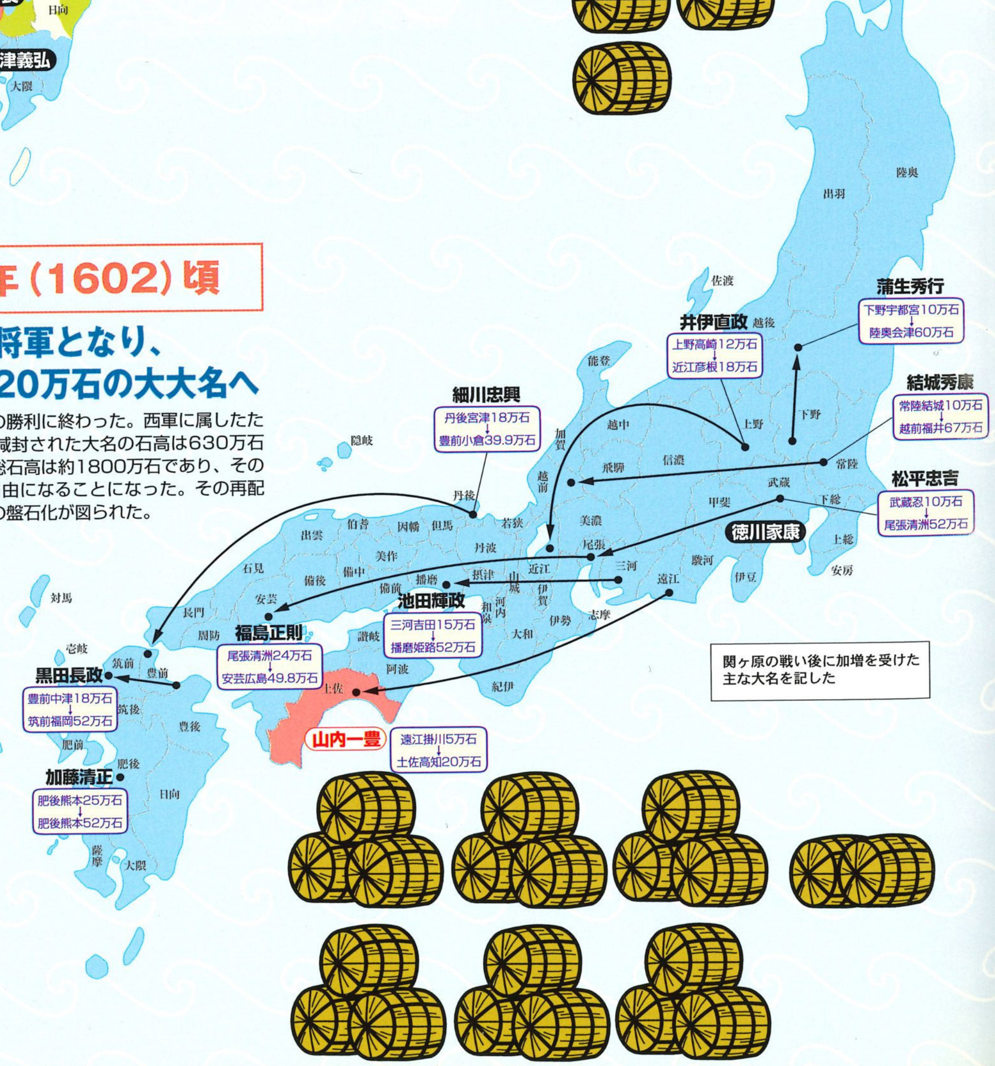
慶長3年（1598）の秀吉の死亡により、諸大名の関係に亀裂が入り豊臣政権に軋みが発生。関八州に255万余石を有する家康は、加藤清正や福島正則など秀吉恩顧の大名を巧みに自軍に取り込み〝吏僚派〟石田三成率いる西軍と関ヶ原にて対決する。



慶長7年（1602）頃

家康征夷大将軍となり、
一豊は土佐20万石の大大名へ

関ヶ原の戦いは家康の勝利に終わった。西軍に属したために取り潰されたり減封された大名の石高は630万石余り。当時の日本の総石高は約1800万石であり、その約3分の1が家康の自由になることになった。その再配分により、徳川政権の盤石化が図られた。



一豊獅子奮迅

越前 朝倉攻め

信長が朝倉・浅井と苦闘する中、一豊は三段崎勘右衛門を討つ。微禄だった一豊が摑んだ戦功。その死闘を山内家史料で見る。

文=佐伯哲也
Saeki Tetsuya

『一豊奮闘絵図』は、織田信長の朝倉攻めに従軍した山内一豊が、朝倉家の豪士・三段崎勘右衛門と死闘を繰り広げた末、これを討ち取り、その首を持って引き上げる姿を描いたものである。

この戦闘の時と場所については二説ある。いずれも朝倉攻めの折ではあるが、一つは元亀元年（一五七〇）四月、越前金ケ崎城攻めのときだとする説、もう一つは、天正元年（一五七三）八月十四日に近江・越前国境で行われた刀根坂合戦だとする説である。

三段（反）崎氏は朝倉弼景を祖とする朝倉一門で、朝倉義景書状等によって「三反崎八郎左衛門」、「三段崎景敬」の名は確認できるが、残念ながら勘右衛門は一級史料の中で見出すことはできない。『信長公記』によれば、刀根坂合戦で織田軍が討ち取った朝倉氏の武将の中に「三段崎六郎」の名が見え、あるいはこの人物が勘右衛門か、同族である可能性がある。

秀吉麾下として参戦したこの戦いで、一豊は三段崎勘右衛門為之の矢を受け、左の眦から右の奥歯まで射抜かれながら、二の矢が放たれる前に勘右衛門↘に挑みかかり、組み打ってついにはその首級を挙げたという。

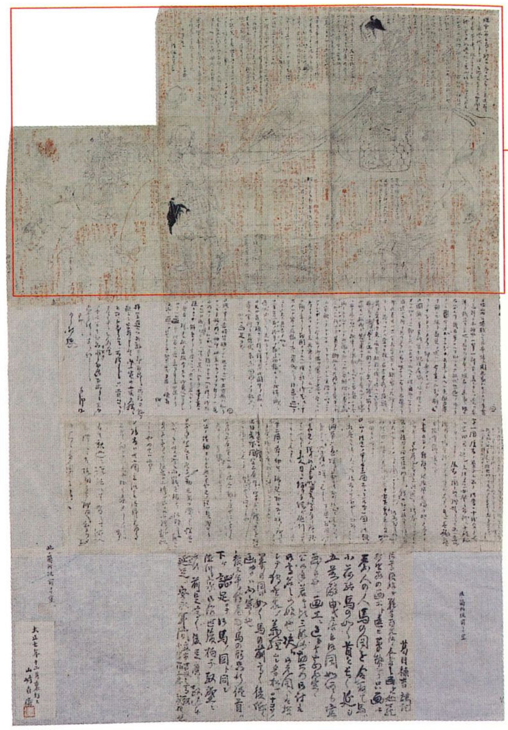
絵図には、馬に乗って帰陣する一豊と、その馬を引く五藤吉兵衛（為浄）が描かれ、吉兵衛の手には、黒羽二重に包まれ↖た勘右衛門の首が描かれている。さらに黒羽二重は、鏃でつり下げられている。勿論この鏃は、勘右衛門が一豊に放ち、顔面に刺さった鏃である。

絵図は無傷の一豊を描いているため、絵図の左下に紙を貼り足し、そこへ顔に包帯を巻き、さらに鏃の刺さった一豊の顔を描いている。また首級を黒羽二重で包んでいたのでは「三段崎ノ黒髪ト□混シヨロシカラズ」と、紛らわしいとして黒羽二重を描かず、勘右衛門の黒髪を摑んで歩く吉兵衛の図も付け足している。「首付ヨクナリマシタ」と注記している通り、髪を無造作につかんだ生々しい生首となっているが、「シカシ貧相ニナラン」と不満も残している。

このほか絵図には後筆の注記として、馬を引く吉兵衛の小指の描き方が悪いとか、一豊の顔の包帯はこれでよいとか、非常に細々とチェックしているが、肝心の勘右衛門との死闘の詳説は、残念ながら書いていない。

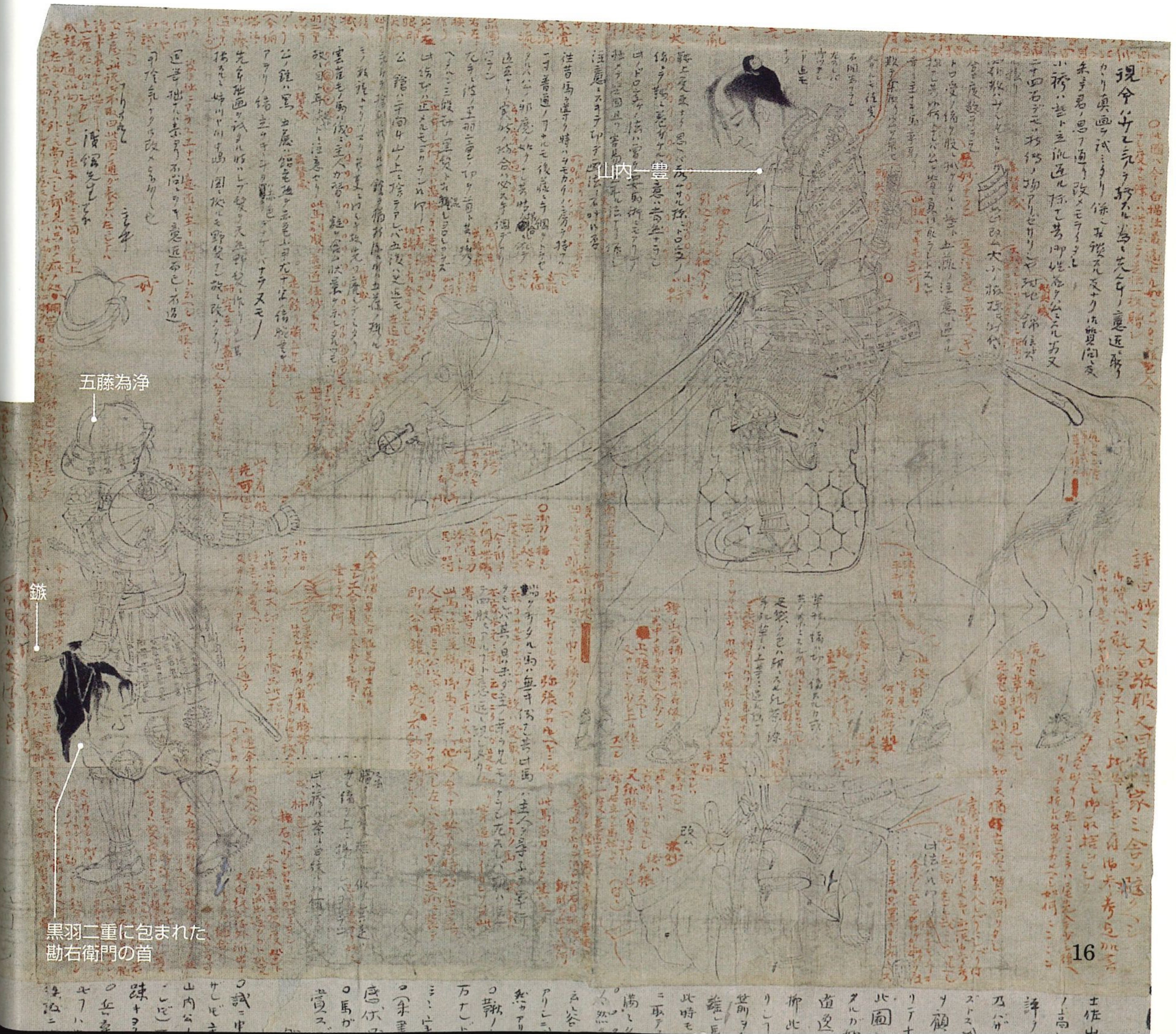
ちなみに一豊はこの戦功で、初めての知行地四〇〇石を近江国唐国（滋賀県東浅井郡虎姫町唐国）に賜ったとされている。

（さえきてつや・中世城郭研究家）



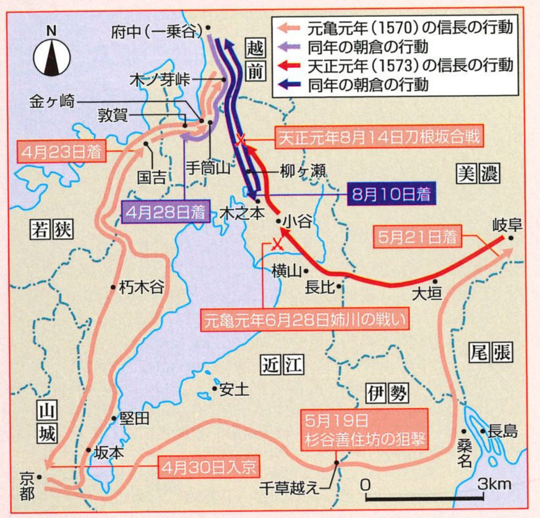
「一豊奮闘絵図」（土佐山内家宝物資料館蔵）。上は全体像、右は絵図部分の拡大。その成立年代及び製作意図についてはわかっていない。戦闘で刺さった矢を抜くため、一豊に「顔を踏みつけて抜け」と命じられた五藤為浄は、草履を脱ごうとしたが「そのまま踏め」と重ねて命じられ、ようやく抜き取ったという。一豊の乗る馬は戦死した味方のものだったことが、「山内一豊家伝記」などに記されている。





朝倉・浅井氏滅亡の軌跡

文=佐伯哲也



織田信長が朝倉攻めに京都を出発したのは、元亀元年(1570) 4月20日のことである。信長は琵琶湖西岸を通って4月23日、若狭国国吉城に入城するが、東岸の浅井氏の小谷城下を通過しなかったのは、今一つ長政が信用できなかったからなのであろうか。

織田軍は4月25日から手筒山城攻めを開始し、同日落城させ、続いて金ヶ崎城を攻め、これも翌日落城させている。だが、織田軍が木ノ芽峠を越えて越前本国に進攻しようとしていたとき、浅井長政が裏切ったという情報が入った。信長の行動は早く、金ヶ崎城に殿軍として木下秀吉を残し、自身は撤退を開始した。一方、朝倉義景の動きは遅く、27日にようやく一乗谷を出陣し、28日に敦賀に着陣する。この遅さが信長を討ち取る絶好のチャンスを逃してしまうのである。

信長は4月30日、朽木谷を通過し、入京に成功する。そして千草越えで杉谷善住坊の狙撃を受けながらも、5月21日、無事岐阜に帰陣した。その後、6月28日には姉川で浅井・朝倉軍に勝利するが、両氏を滅亡させるまでには至っていない。

信長が浅井・朝倉を滅ぼす機会を得たのは、天正元年（1573）になってからである。同年7月17日、義景は信長勢に囲まれた小谷城を救援すべく一乗谷を出陣、8月10日、近江木之本付近に着陣する。しかし浅井家家臣・阿閉貞征が織田方に寝返ったため形勢不利を悟り、13日夜中、義景は越前に向けて退却し始めた。

信長はこれを見逃さず、全軍に追撃を命ずる。朝倉軍は一旦柳ヶ瀬辺りで留まっていたため退却に手間取り、ついに刀根坂辺りで追いつかれ、将兵3000余りを討ち取られる大敗北を喫してしまう。義景自身は山崎吉家や朝倉掃部助の必死の防戦によって一乗谷まで逃げ落ちたが、安住の地はすでになく、頼みとしていた平泉寺や朝倉景鏡に裏切られ、8月20日、義景は越前大野の六坊賢松寺にて景鏡に自害を迫られ、果てた。一方、小谷城も27日落城し、浅井長政も自刃した。



イラストは秀吉時代の長浜城下を描く（監修＝中井均・米原市教育委員会／イラスト＝伊藤展安）。天正2年（1574）春、秀吉によって始められた長浜の城下町建設は段階的に発展していき、柴田勝豊を経て、一豊へと受け継がれた。❶長浜八幡宮❷米川❸江戸時代に大通寺が建てられた場所❹知善院（ちぜんいん）❺追手門❻鍛冶屋など❼役所など❽秀吉城主時代の一豊邸（「伊右衛門屋敷跡」・イラストには建物は描いていない）❾米蔵❿一豊時代にはなくなっていた長浜城天守⓫御殿

城主の夢と悲劇

近江 長浜城

長浜で念願の城主となった一豊は、この地で出世街道の出発地点に立ったともいえる。一豊・千代夫妻の長浜での夢成就と悲劇を探る。

監修・文=**森岡榮一**
Morioka Eiichi

天正十三年（一五八五）、四十一歳になった山内一豊は、同年閏八月二十一日に秀吉から湖北地方において二万石を与えられ、長浜城主となった。初代秀吉、二代柴田勝豊についで三代目の城主である。

しかし山内家の家伝では、一豊は前年の天正十二年に一時期、長浜城主となっており、これを「初の長浜」と呼び、天正十三年の領有を「後の長浜」と呼んで区別している。だが、湖北に残された史料では「初の長浜」は確認できない。

天正十三年閏八月に秀吉から与えられた知行地については、秀吉からの宛行状と知行目録の原文書が、山内家に残っていた（原本は残念ながら戦災で焼失）。しかしその写本が残るため、領有した村の名前は判明している。その範囲は、長浜の中心である城下町を含む八幡庄から、坂田・浅井・伊香三郡の広範囲にわたっている。また、天正元年に秀吉から初めて四〇〇石の領地を与えられた「唐国」（滋賀県東浅井郡虎姫町）も石高は減っているが、二一九余石として再度与えられている。

湖北の地の領主となり、長浜城主となった山内一豊であるが、その知行地二万石はすこぶる注意が肝心である。北近江三郡は江戸時代には約二二万石で、生産力の劣っていた安土桃山時代に秀吉が領有した江北三郡でさえ、二万石と伝えられている（『改訂坂田郡志』等）。二万石は、あまりに小さいのである。

つまり一豊は、北近江三郡すべての領主であったのではない。これは、この当時の一豊の地位と密接に関係しているのである。

秀吉は、天正十三年閏八月二十一日に甥の秀次に近江国を与え、秀次は近江八幡城主となった。このときにまだ年若い秀次を補佐する五人の宿老が付けられた。つまり一豊は、秀次家臣団の一人として長浜城に入ったのである。ちなみに一豊以外は、田中吉政*を筆頭に中村一氏（水口城）、堀尾吉晴（佐和山城）、一柳直末（大垣城）の面々である。

そして城も、本丸は使用しなかったと推定される。この当時、長浜城は、天正十三年正月の秀吉の城割りによって天守がなかったと考えられる。二万石の実力からいっても、二の丸や三の丸を使用し、いわゆる江戸時代の陣屋大名のようであったと思われる。

長浜城下町は、一豊が秀吉に従って各地を転戦している間、妻の千代が暮らしていた町で、愛娘・与禰姫もここで生まれ、そして悲運にも天正大地震で亡くなった。有名なへそくり・黄金一〇枚と名馬購入のエピソードもこの地でのことであろう。

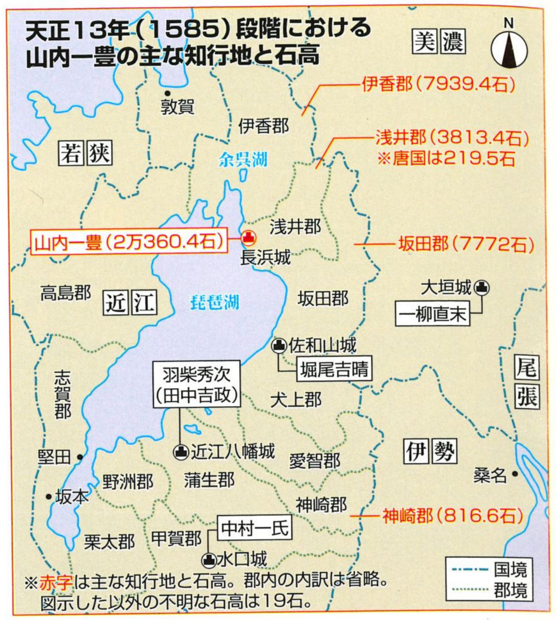
湖北長浜は、一豊・千代夫妻にとって「ふりだし」の地であると同時に、愛娘を亡くした悲しみの町でもあるといえよう。

（もりおかえいいち・曳山博物館学芸専門員）

*田中吉政は、恐らく京都にいたであろう秀次の城代として、近江八幡城に在城したと思われる。



大通寺台所門（提供＝市立長浜城歴史博物館）。元は長浜城の追手門と伝わる。大通寺は、城の一郭に「長浜御坊」と称して創立され、城の追手門を御坊の門とし、現在地（長浜市元浜町）に移されたとき、門もまた移された。





【上】天正13年段階における一豊の知行地と石高のうち、最大の石高は伊香郡の7939.4石だが、庄単位で見ると、最大のものは城下を含む八幡庄の4660石だった。【右】「山内伊右エ門一豊屋敷跡」の碑（提供＝市立長浜城歴史博物館）。なお同地周辺の字名は、明治6年（1873）頃まで「伊右エ門屋敷」と呼ばれていたという。

天正大地震での悲劇

文=森岡榮一



ほぼ無傷で出土した朝鮮半島製の高麗茶碗

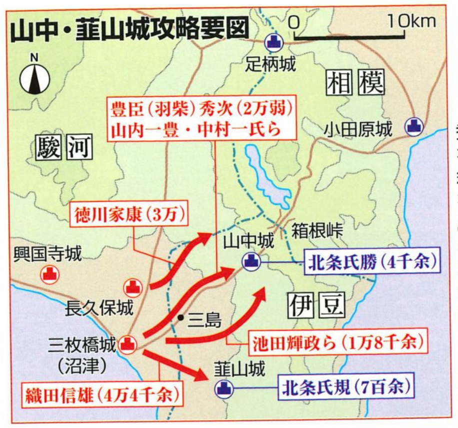
天正13年（1585）11月29日夜半、近畿を大地震が襲った。長浜城内でも建物が倒壊し、大きな被害が出た。この地震での一番の悲劇が、城内の寝殿が倒壊し、当時6歳であった一豊最愛の娘「与禰（よね）姫」と乳母が圧死したことであろう。このとき妻千代は難を逃れたが、娘の死を嘆き悲しみ、その菩提を弔うために仏門に帰依するのである。

この地震で秀吉以来、繁栄を続けていた長浜城下町は壊滅したという。当時、下関に滞在した宣教師ルイス・フロイスのインド管区長アレシャンドロ・バリニャーノ宛書簡に「近江の国の長浜は三千の戸数を有する小都市なるが、土地陥落して人家の半分を飲み他の半分は火事のため焼却せられたり」と記してあり、聞き書きではあるが、大きな被害を受けたと推定される。

そして、この事実を裏づける遺構・遺物が発掘された。平成8年（1996）に実施された下村藤右衛門邸跡の発掘調査での発見である。最下層から側柱礎石（そせき）列・石組溝・石組井戸・木戸・建物跡等が検出され、いずれも2～50センチの焼土層におおわれていた。また、建物跡は茶室と推定されるものや土蔵等があり、そこから多数の陶磁器類が出土し、土蔵からは指し銭（さしぜに）・灰匙（はいさじ）・穀物類・布等も出土している。

特に陶磁器は中国産の青磁・白磁・青花が多く、遺物全体の六割を占めている。土蔵跡から発見された「灰匙」は日本最古で、この陶磁器が「茶の湯」関係の遺物であることを推測させる。また茶碗は、すべて朝鮮半島製の高麗茶碗で11口も発見された。当時、一般に好まれた中国製の天目（てんもく）茶碗が一つもなく、主人（下村藤右衛門）の好みを反映しているのだろう。なおこのうち1口は、金銅製銚子の中にすっぽり収まった状態で見つかり、火災を免れてほぼ無傷で出土している（写真前列左端の茶碗）。

地震とその直後の火災の跡と大量の遺物が発見された邸跡の主人下村藤右衛門は、長浜開町以前にあった今浜村の住人で、秀吉の城下町建設に協力した有力者と考えられる。江戸時代は町年寄（十人衆）を務め、江戸後期には町政を担当する三年寄の職を独占する名家である。下村藤右衛門邸跡からの出土遺物は、その財力と長浜商人の交易の広さがよくうかがえる重要な史料である。



秀吉は北条氏の本拠・小田原を攻めるにあたり、手始めに箱根の手前の山中城、韮山城を攻めると決めた。沼津・三島に集結した豊臣軍は10万を超える大軍であり、そのおびただしい兵数は、先鋒が沼津に着いてなお、後備の兵は50キロ以上離れた駿府にあって行軍を続けていたほどだったという。秀吉はこの大軍を二手に分け、一豊は山中城攻略軍に編成された。

【右】山中城空撮（提供＝三島市教育委員会）。画面奥は三島方面。【下】岱崎出丸から国道246号線を望む。斜面下の凹みは「堀障子（ほりしょうじ）」と呼ばれる防御施設で、攻城兵が容易に内部に進入できないよう設けられたもの。一豊ら豊臣軍は、飛び交う矢玉の間隙を縫いつつ、こうした堀に梯子を渡し、あるいは槍を杖代わりにするなどして城域への進入を図ったことだろう。それに対し、高所からの城兵の射撃は、的確に攻城兵を撃ち抜いたに違いない。





天下平定戦の一翼

相模 小田原攻め

北条氏の支城、山中城での戦闘は激烈を極めた。秀吉の北条討伐に従い、東下した一豊はその合戦のさなかに何を見、そして何を得たか。

協力＝髙田 徹　文＝編集部
Takada Tôru



イラストは、山中城をやや北西から望んで描いてある。❶岱崎出丸❷大手口❸三の丸❹本丸❺二の丸❻元西櫓❼西の丸❽西櫓（出丸）❾北の丸（イラスト監修＝髙田徹／イラスト＝板垣真誠）戦闘は岱崎出丸で開始された。南北に長い岱崎出丸は、一角を崩されると意外にもろい。防御を破綻させないためにも、北条氏の抵抗は熾烈を極めたと思われる。ここで始まった戦闘は、大手口から三の丸、二の丸を経て本丸へと推移していった。山中城は巧緻を極めた北条氏の築城術をもって築かれた城だが、豊臣軍の圧倒的兵力は、その防御力を上回るほどだった。

山中城は後北条氏の小田原城の支城として、同じく支城の韮山（にらやま）城・河村城などと連絡すること、また箱根越えの山中道（ほぼ近世の東海道にあたる）を城内に取り込んで、街道の往来を監視することを主な目的として築かれた中世城郭といえる。

山中城は土造りながら、後北条氏の築城術を駆使した城郭である。織豊（しょくほう）期には畿内を中心に石垣造りの城が出現し、近世城郭への大きなステップとなった。後北条氏は本格的な石垣造りの城は築かなかったが、山中城に代表されるような、石垣造りの城にもひけを取らない独自の近世化を目指した城郭を造り出していた。

その一つの特徴として、畝堀（うねぼり）あるいは堀障子（ほりしょうじ）と呼ばれる堀内部に畝状の高まりをいくつも造った施設があげられる。なお、この城は城下町・町場に相当する施設を有していない。現在の山中新田の集落は、江戸期に成立したものである。山中城は純軍事的な城郭であったため、地域の拠点的な城とは異なり、町場機能を伴わなかったのである。

山中城は天正18年（1590）の小田原合戦の際、豊臣軍の猛攻による攻城戦が展開され、わずか1日で落城した。戦国期の攻城戦では、山中城に見られるような苛烈な強攻が行われたことはほとんどなかった。それだけに、両軍ともに受けた打撃は大きかったが、この結果はその後の両軍の明暗を大きく分けることにもなった。（文＝髙田徹・城郭談話会会員）

北条攻めのため東下

天正十七年（一五八九）十一月、秀吉は小田原進攻を布告した。すでに四国・九州を平らげ、関白宣下を受けて従一位となった秀吉は、事実上、政権を確立していたのだが、なお臣従を誓わない北条氏に対し、討伐軍を催すことに決したのである。

翌年二月、まず徳川家康の軍が東下し、続いて上杉景勝をはじめ、前田利家・蒲生氏郷・織田信雄らも小田原を目指して軍を起こした。

さらに豊臣（羽柴）秀次も軍を進発させるに至り、一豊も秀次麾下の将として、弟康豊とともに軍旅に着くこととなった。秀次軍には一豊のほか、田中吉政・中村一氏・堀尾吉晴・一柳直末らが属し、総勢一万七〇〇〇。これらが二月十五日から二十日にかけて一路、小田原を目指して動き出し、三月三日、駿河国沼津へ着陣した。その後、秀吉が着陣するまでの間、一豊らは、北条の領地である「伊豆ノ浦浦在在所所ヲ焼立」（『武家事紀』）などした。

一方、秀吉が京を発ったのは三月一日である。沼津着陣が同月二十七日。翌日には諸将を率いて山中城周辺を視察した秀吉は、山中城と韮山城の攻略を決し、総勢一〇万を超す大軍を二手に分けた。

韮山城へは織田信雄を総大将とし、福島正則・蒲生氏郷・生駒親正ら四万四千余の兵が向かい、山中城方面へは豊臣秀次を総大将とした六万八千余の兵が向かう。なお、この山中城方面軍はさらに三隊に分けられ、池田輝政・長谷川秀一・堀秀政ら一万八千余が右翼を進み、徳川家康麾下の三万が左翼を進むとされたため、豊臣秀次以下、攻略を担当したのは山内一豊・中村一氏・田中吉政・堀尾吉晴・一柳直末など総勢二万弱であった。

山中城は小田原に本拠を置く北条氏にとって、西からの脅威に対する備えとして築かれた城である。守将は玉縄城主北条氏勝で、松田康長、間宮康俊以下、四千余の兵が籠もっていた。

山中城にとって、かつてその脅威は武田氏だったが、いまは圧倒的兵力を誇る豊臣軍である。彼我の兵力差を考えれば、山中城の運命は風前の灯火だった。

だが、一豊らの攻城軍もそうした油断があったのか、戦端が



※写真提供=㈱リモート・センシング技術センター／参考=下山治久『小田原合戦』

豊臣軍は家康をはじめ、一豊の隊を含む秀次らが東海道を東進し、北陸方面からは上杉景勝・前田利家・真田昌幸らが南下し、北条氏の勢力圏を寸断しつつ、小田原へ迫った。四国・九州を平定し終え、それまで敵対していた勢力すら糾合して動員された大兵力の豊臣軍に対し、北条氏政・氏直父子を頂点とする北条一族は、ひたすら小田原城の守りを固めて籠城するほか、なす術がない状態に置かれた。

開かれると、この山中城攻防戦は戦国史でも類を見ない激戦が展開されたのである。

折り重なる味方の死骸

三月二十九日、三島を発して山中道を進んだ先鋒隊は、右手に見える岱崎出丸を最初の目標とした。岱崎出丸が山中道の押さえとして築かれたものであるため、攻城軍はまずこの出丸を攻略し、ここを足場にほかの曲輪へ攻撃を加えることが重要課題となるからである。

また一説に、先鋒の中村一氏配下の渡辺了があらかじめ岱崎出丸を偵察したところ、鉄砲の射手が少なく、また各塁の備えも万全でないと報告していたからだともされるがどうであろう。

籠城側が雨のごとく矢玉を降らせる中、一豊ら攻城軍は堀を越え、出丸斜面に取りついた。一豊らは折り重なって死んだ味方の死骸を飛び越し、あるいは乗り越え、矢玉も厭わず攻め入ったという。

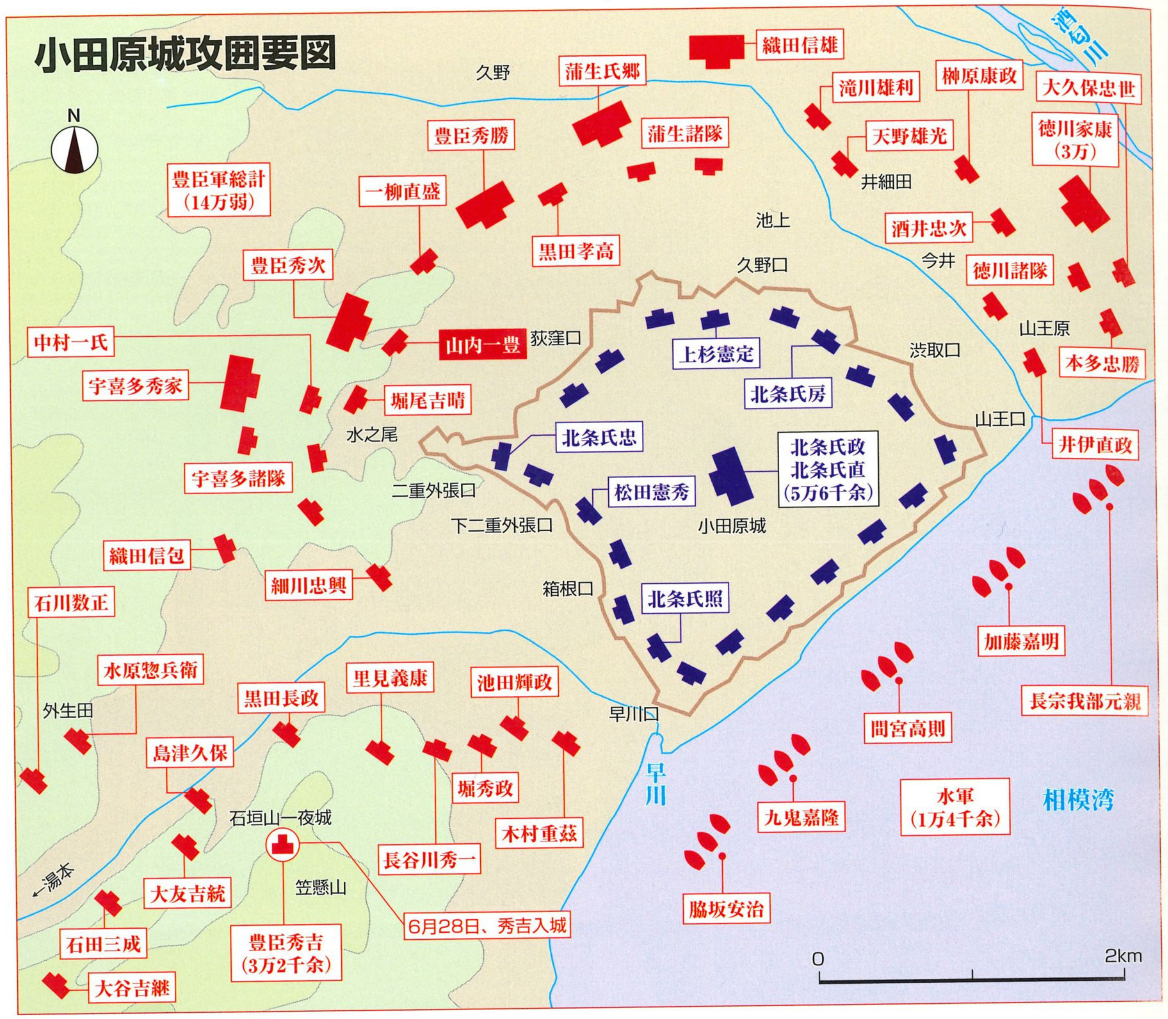
一豊ら攻城軍の数に任せた攻勢に、籠城側は次第に支えきれなくなり、三の丸から二の丸、さらには本丸へと追いつめられていった。一豊とその配下も遅れず進み、敵の首級一四、五を挙げたという。この乱戦の中、康豊が頬当てに矢を当てられたが無事だった（一説に股に当たったとも）が、一豊の朋輩である一柳直末は、緒戦において流れ弾に当たって戦死した。

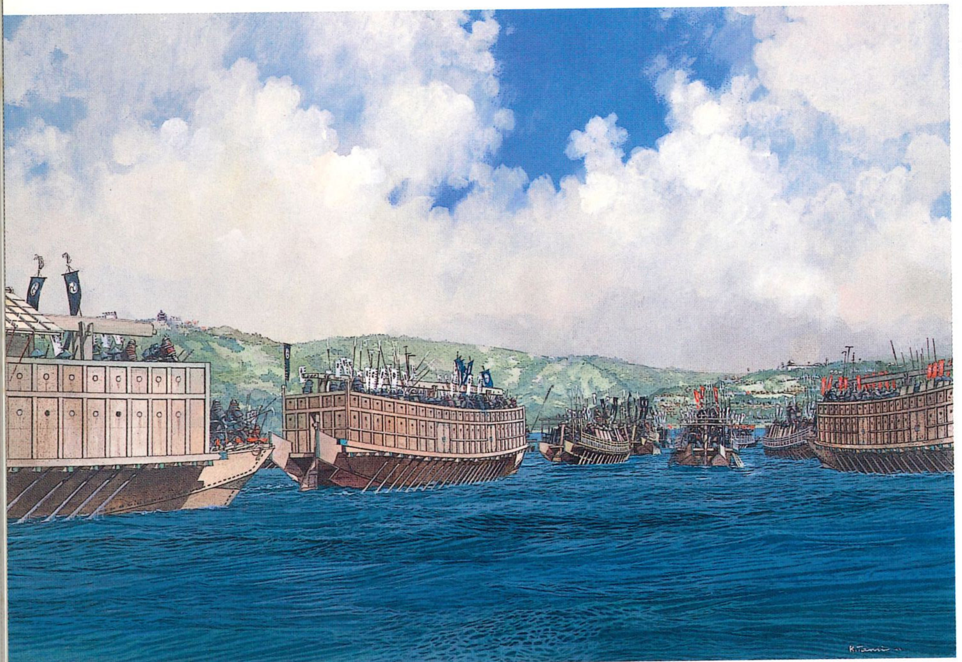
やがて敗勢の混乱に乗じ、北条氏勝は居城の玉縄城へ向けて落ち延びた。松田康長、間宮康俊の二人は戦死し、正午過ぎには山中城は落城した。

一方、韮山城の抵抗は頑強で、容易に落ちなかった。このため、一部包囲軍を残し、残りの軍は小田原を目指して箱根を越えた。一豊らもこの戦闘後、小田原へ向かった。豊臣軍はこのほか、北陸方面からは上杉勢が北条方の諸城を蹂躙しつつ南下し、海上は長宗我部元親・脇坂安治・加藤嘉明・九鬼嘉隆らがびっしりと船を浮かべて包囲していた。北条の小田原籠城軍は五万六千余、対する豊臣軍一四万弱――。

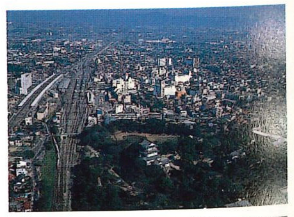
三か月の籠城を経た七月五日、北条氏は抵抗を断念して城を明け渡し、同十一日、氏政とその弟氏照は自刃した。

戦後、一豊はその戦功により、遠江掛川城を与えられ、五万石の大名に取り立てられた。





【上】豊臣軍の小田原包囲網。【左】九鬼水軍をはじめとする、長宗我部元親・脇坂安治・加藤嘉明らによる小田原の海上封鎖。秀吉が小田原に着陣した天正18年(1590)4月6日から落城の7月5日までの3か月間、小田原は陸海から包囲され続けた。6月28日には、秀吉がおよそ80日間で「石垣山一夜城」を完成させるなどし、北条氏の戦意はさらに衰えていき、やがて降伏するに至った。(イラスト=谷井建三)



小田原城上空から東を望む。小田原落城後の7月11日、主戦派と目された北条氏政・氏照兄弟は秀吉から切腹を命じられ、当主氏直は高野山へ追放された。ここに、北条氏の関東支配は終わりを告げた。



「遠州掛川之城図」(安芸市立歴史民俗資料館蔵)。寛政元年(1789)の写本。原図の所在、年代は不明。図には3層の天守が描かれている。のちに一豊が土佐へ入部した際、築いた高知城天守は、掛川城天守のように作られたと伝えられる。

北条氏が滅亡したのち、秀吉は北条氏の旧領、関八州に家康を転封させた。これに伴い、関東の家康に対する東海道筋の押さえとして、山内一豊が五万石の封邑をもって掛川城に入城した。

それ以前は今川氏配下の朝比奈氏の居城で、中世城郭の域を出ない平山城形態の城だったのだが、一豊は当時の先端技術である石垣を用いるなどした職豊系城郭の築城技術により、大規模な改築を行った。

『掛川誌稿』が「慶長ノ初メニ至リ、山内対馬守一豊城主ノ時城外ノ総堀ヲ浚イシ事有リ」と伝えるように、総堀は一豊時代に作られたとされ、併せて天守も築造された。城下は、掛川の中央を東西に流れる逆川を境とし、経済の基盤となる町屋などは川の南に配され、武家屋敷などは北側に多く置かれた。これら城下町を防衛的意図から囲い込んだのが、一豊による総堀である。

こうした整備により、掛川城は近世城郭へと変貌した。だが、秀吉から期待された東海道の防衛拠点としての掛川城は、のち関ヶ原合戦で家康に利することとなる。

東海道の要衝

遠江 掛川城

秀吉にその精勤ぶりを評価された一豊は、東海道の要衝、掛川城に配された。入城後、一豊が行った掛川改造の一端を見る。

監修=掛川市教育委員会
文=編集部


二の丸御殿より天守を望む(提供=掛川市商工観光課)。現存する二の丸御殿は書院造によって建てられたもので、江戸時代後期の建物である。

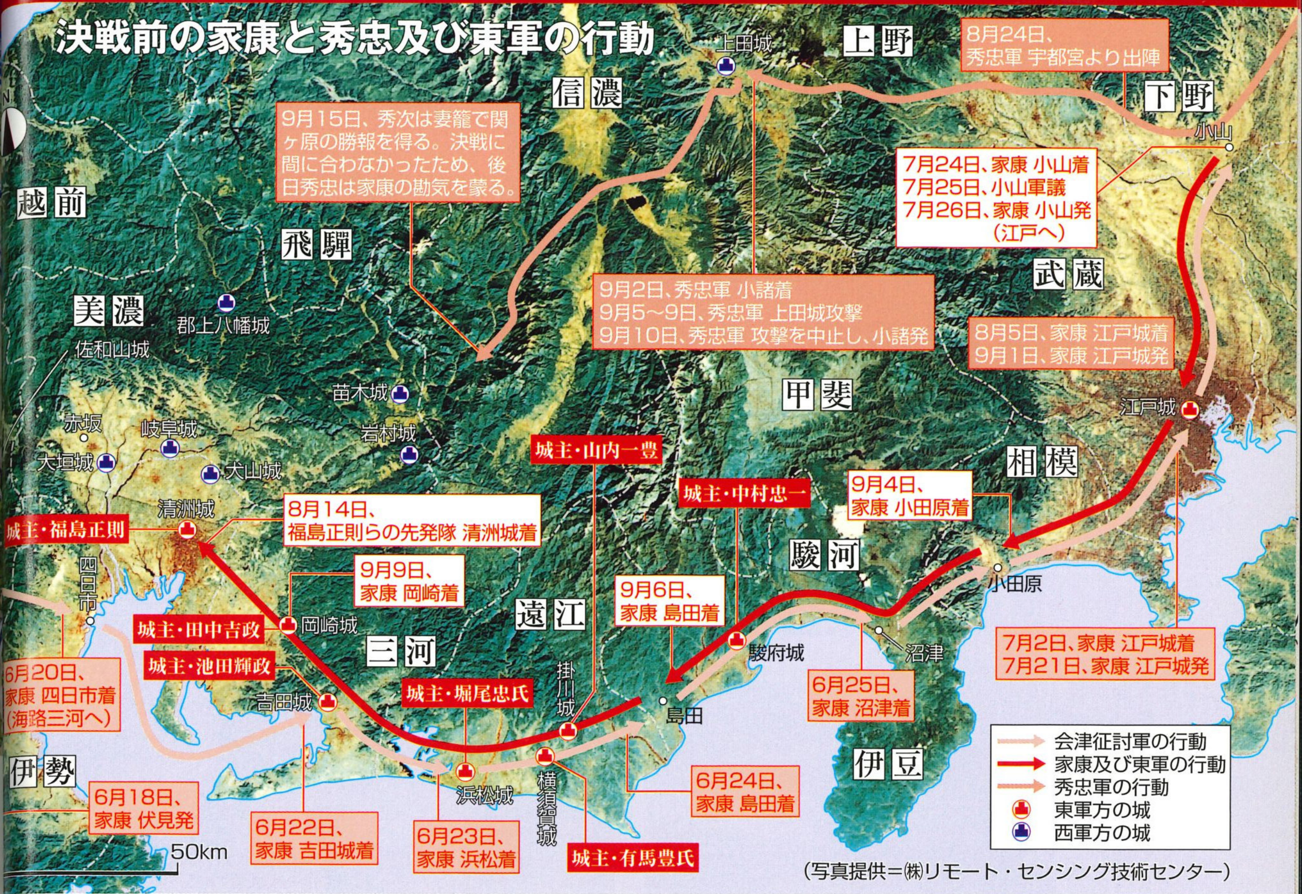

掛川城復元天守(提供=掛川市商工観光課)。天守は、建物の最上部に物見櫓(ものみやぐら)を載せた「望楼型」天守で、『御城築記』に「天守の通一豊公物数寄を以て高欄に被仰付」とあるように、一豊の好みによって高欄がめぐらされたことがわかっている。復元された天守は、日本初の本格的木造によって作られた。なお、白漆喰(しっくい)塗り籠めの外容は、秀吉が京都に築造した聚楽第(じゅらくてい)にならったといい、黒塗りの廻縁(まわりえん)・高欄は大坂城天守を模したと見られている。


太鼓櫓(提供=掛川市商工観光課)。かつては城中城下に時刻を告げた大太鼓が備えられていた。現在、大太鼓は御殿広間に展示されている。掛川城は一豊が土佐へ転封されたのち、一家二六代の居城として栄えた。



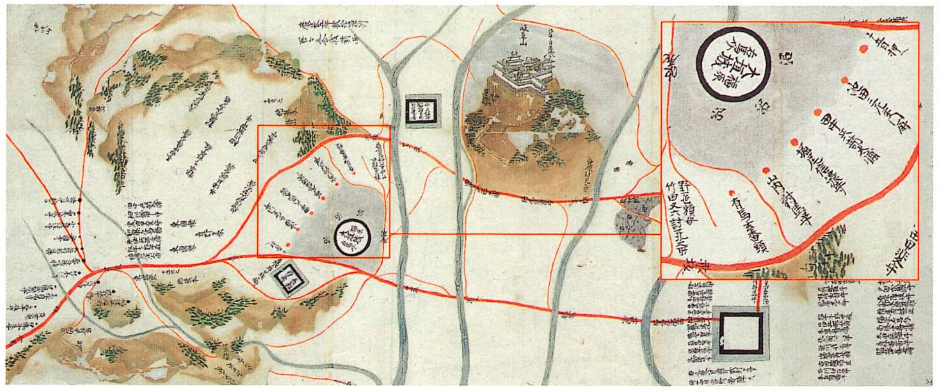


「正保城絵図　遠州掛川城絵図」(国立公文書館蔵)。徳川幕府の命によって製作されたこの絵図は、正保年間(1644～47)の掛川城の様子を描いている。もちろん一豊以降の縄張(なわばり)ではあるが、城下の川や池などを利用したプランの基礎は一豊が作ったとされている。



（写真提供＝㈱リモート・センシング技術センター）

上杉景勝討伐軍を起こした家康は、諸大名を従え会津へ向かう。7月19日、三成がこの隙を突いて畿内で挙兵すると、家康は下野小山に軍を留めて軍議を開いた。その席上、一豊が提案した掛川城明け渡しにより、東海道を進んだ東軍諸勢は迅速な転進が可能になった。



「関ヶ原合戦図」（部分・安芸市立歴史民俗資料館蔵）。8月22日、岐阜城に籠もった織田秀信（信長嫡孫＝三法師）は、福島正則ら東軍先鋒の猛攻を受けて23日には降伏、死一等を減ぜられ、のち高野山で出家した。図は岐阜落城後、池田三左衛門尉（輝政）、田中兵部大輔（吉政）、堀尾信濃守（忠氏＝吉晴の二男）、有間玄蕃頭（則頼）らとともに、山内対馬守（一豊）が大垣城を囲む様子を描く。

文＝大山 格
Ôyama Itaru

天下分け目の転機

美濃 関ヶ原合戦

石田三成との天下分け目の決戦を控えた家康に一豊は、城を明け渡すことで協力した。戦後、破格の待遇を得た一豊の「功績」の意味とは!?

城の明け渡しを宣言

遠江掛川の城主だった山内一豊は、関ヶ原の論功行賞で土佐一国を得た。決戦の場では後方警戒の役割を演じており華々しい殊勲はなかったが、それ以前の段階ですでに大きな功績を挙げていたのである。

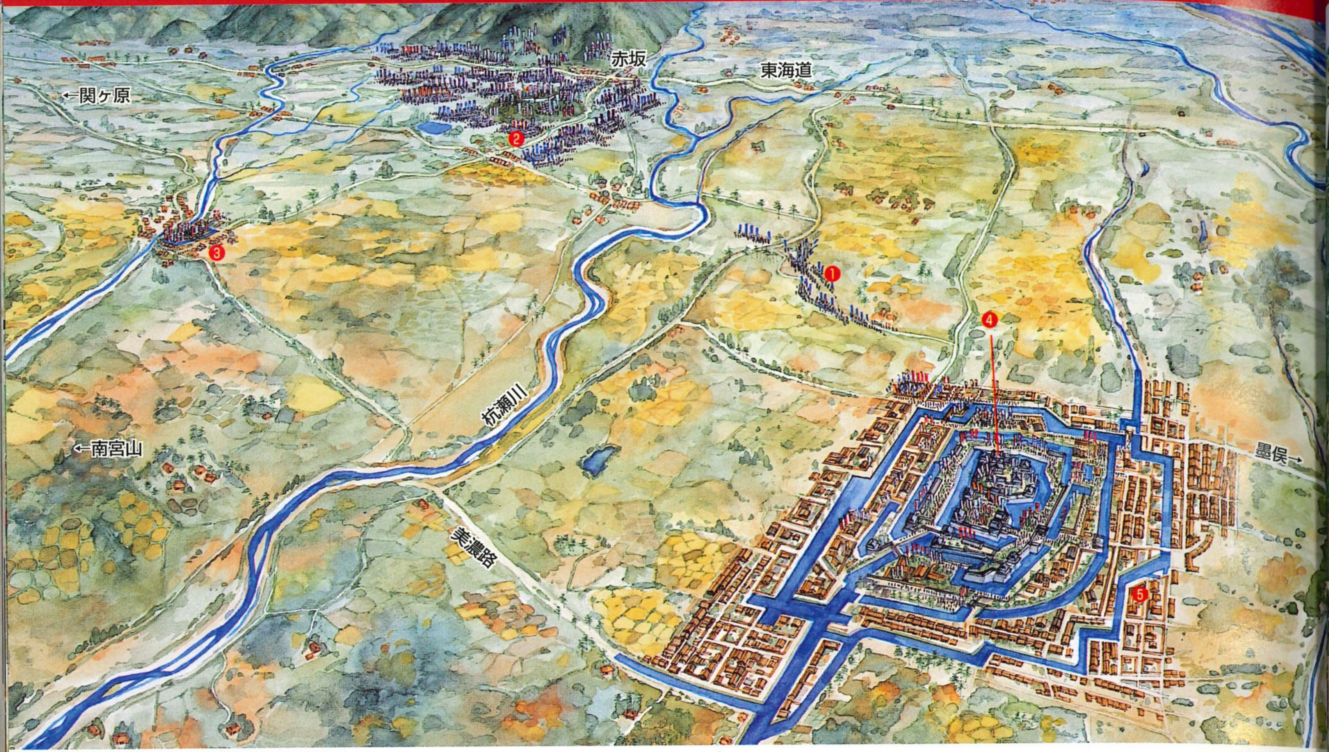
慶長五年（一六〇〇）に行われた関ヶ原の戦いは、豊臣政権の実権を握った徳川家康が、上杉景勝に謀反の嫌疑をかけて会津攻めを催したことで軍事的な動きが始まっている。豊臣家の臣下であった一豊も豊臣秀頼の名代として会津を攻める家康に従い軍勢を下野にまで進めたところで、石田三成が家康に反旗を掲げて兵を挙げた（七月十九日）。

三成挙兵の報に接した家康は、小山に諸将を集め、軍議を開いた。会津攻めは正式な手続きを経たうえでの軍事行動だったが、家康と三成が戦うのは豊臣政権の内部分裂であり、家康の家臣ではない一豊ら豊臣系の諸大名は家康に従う義務がない。

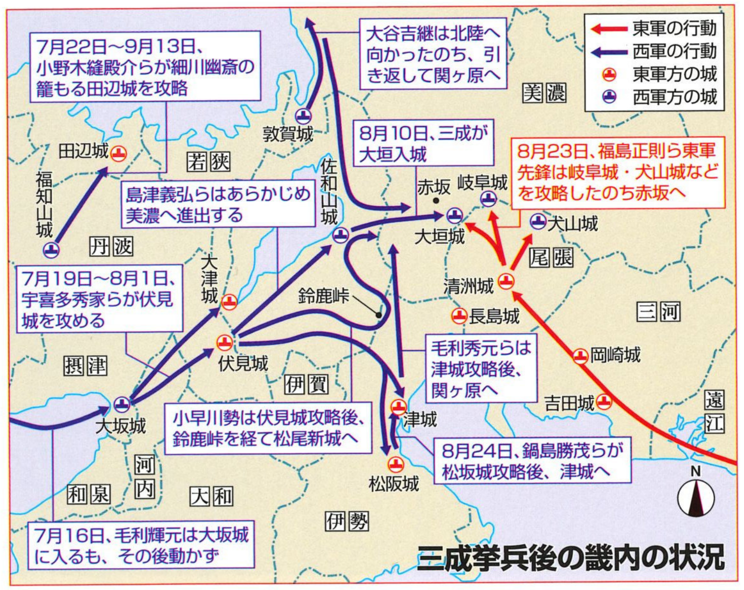
軍議の席上、福島正則がこのまま三成との戦いに加わるべく家康に従うことを宣言し、続いて一豊が掛川城を家康に明け渡すことを申し出たとされる。

大軍を動かすには兵糧が必要であり、その兵糧を運ぶには人足を雇う軍資金が必要で、城を明け渡すということは城に蓄えた兵糧と軍資金を提供することを意味した。

もともと東海道に位置する諸城には、関東一円を支配していた徳川家に対する抑えとして豊臣系の諸大名が配置されていた。

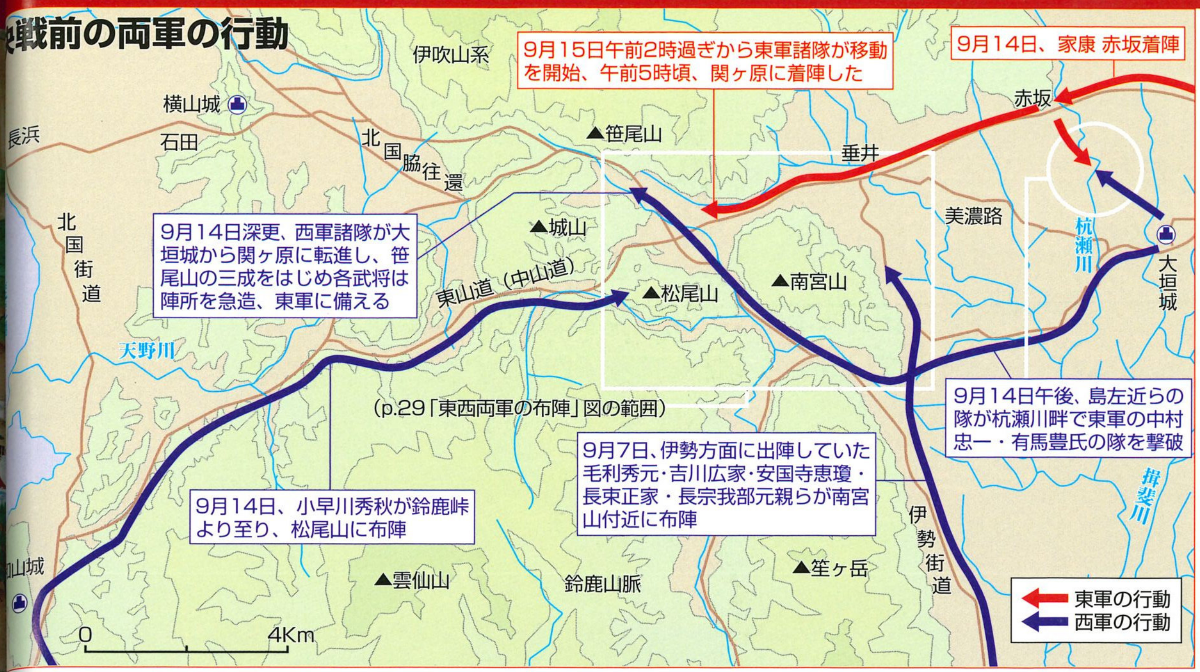


東軍諸将が忠誠を尽くすか見極めるためか、家康はゆるゆると東海道を西上し、9月14日、大垣城北西の赤坂にある岡山に着陣した。イラストは、決戦前日の9月14日午後2時頃、三成の謀将・島左近らの隊（❶）が、東軍（❷）を挑発するため、西軍の籠もる大垣城を出て杭瀬川（くいせがわ）付近へ向かうさまを描く。長松城（❸）は西軍方の武光忠棟の居城だったが、東軍の赤坂進出で早々に撤退、その後は東軍の一柳直盛（直末の弟）が入城した。なお、杭瀬川での戦闘は、島左近の巧みな指揮で西軍が緒戦を飾った。❹大垣城天守❺大垣城惣構堀（イラスト監修＝中井均／イラスト＝藤井康文）

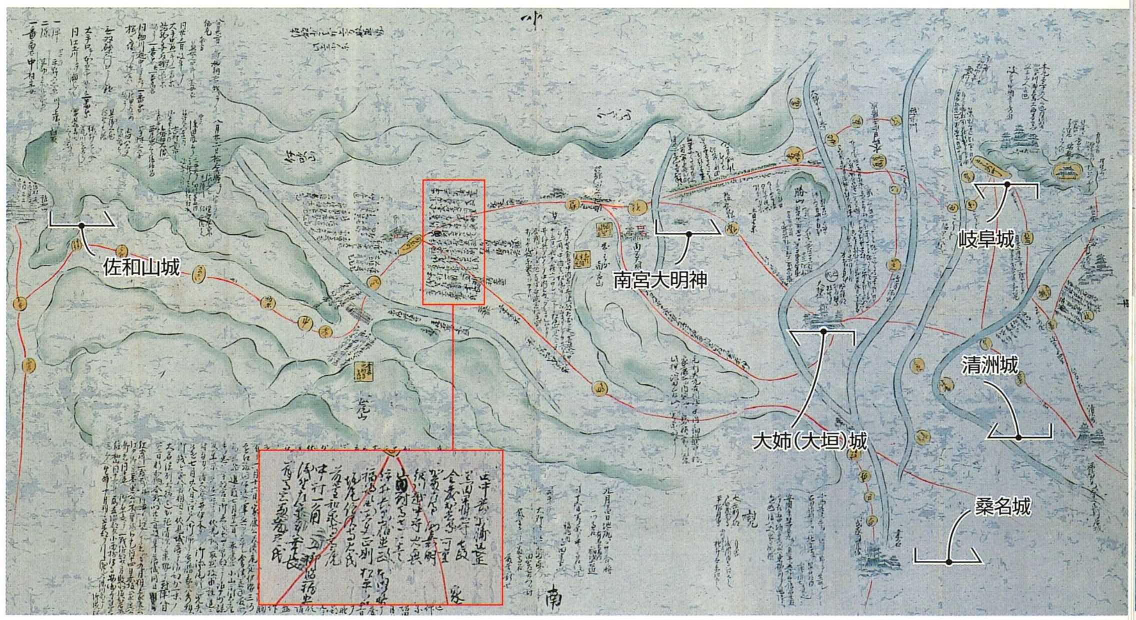


挙兵した西軍は、東軍が反転して戻ってくるまでに有利な拠点を確保すべく、伏見城をはじめ近江・美濃・伊勢の各方面に兵を展開した。だが、一豊の掛川城明け渡しなどにより、東海道を進んだ東軍は三成の予想を遥かに上回る早さで西上したため、各地に展開した兵が容易に集結できないという状態に陥ってしまった。

決戦前の両軍の行動



決戦前日の9月14日深夜、三成が笹尾山に陣したのをはじめ、島津義弘、小西行長、宇喜多秀家らの西軍は、大垣城から転進して関ヶ原に陣を築いた。同じく14日には、当日西軍を裏切ることとなる小早川秀秋が松尾山城に入った。



「関ヶ原陣図」(安芸市立歴史民俗資料館蔵)。本図では福島正則、井伊直政らに並び、一豊は最前線中央付近に描かれている。だが実際は、南宮山の北に陣したとするのが一般的で、南宮山と大垣城への押さえとしての働きが求められていたと考えられる。いずれにしろ主決戦場からは遠く、関ヶ原合戦の戦闘局面においては、一豊が大きな戦功を挙げることはできなかったと思われる。

それらの城主が一豊に続いて城の明け渡しを申し出たことで、家康に従う東軍は迅速に軍勢を上方へ転進させることが可能になった。

四国攻め、九州攻め、また小田原攻めなど何度も大遠征を経験した豊臣家とは異なり、家康は諸大名を従えての大遠征をした経験がなく、かなりの不手際を演じていた。会津へ向かう行軍でも、先頭と後尾との間隔は六〇キロを超えている。これでは先頭が目的地に到着しても後尾の到着まで二日は待たねばならない。

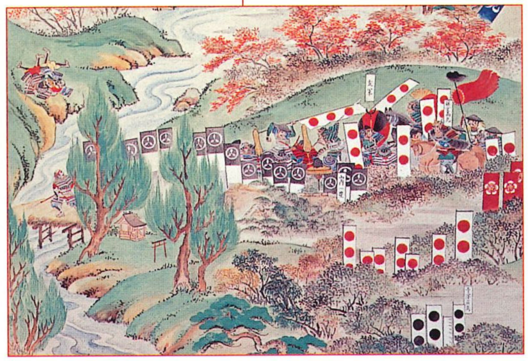
そうした行軍の序列を定めたり兵糧を手配する後方業務を差配してきたのは、三成をはじめとする吏僚派であり、家康の陣営に加わっていた武断派は、それを不得手とした。

このような事情から、行軍の道筋にあたる城に蓄えた物資を提供されることで、状況は家康にとってかなり有利になった。

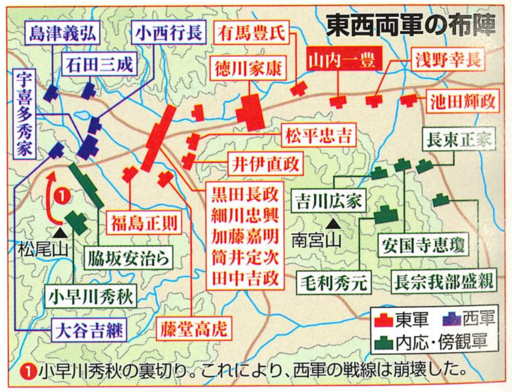
一豊に破格の待遇

三成ら西軍は東軍の動きをもっと遅いものと予測し、畿内各地に兵力を分散してしまっていた。一豊ら東軍諸将は家康に先





「関ヶ原合戦図屏風」(関ヶ原町歴史民俗資料館蔵)。左は、山内一豊隊が描かれた部分。同屏風は彦根城博物館が所蔵する「彦根本」の模写とされる。
慶長5年(1600)9月15日午前8時頃、両軍の間でついに戦端が開かれた。第一・二扇の下方に描かれたのは❶家康本陣で、葵紋の幔幕が張られている。第二扇下方から上方へ描かれた赤い旗指物は❷井伊直政、❸木俣守勝の隊。その左、第三扇下方には3本の波線に五七桐紋がかたどられた旗指物の❹福島正則隊が躍動する。同扇上方はすでに敗勢に覆われた❺石田三成の陣所。第四扇上方の山は❻伊吹山。その下方では、丸に十字の旗指物の❼島津義弘・❽豊久隊が敵中突破を試みる。第五扇上方の幔幕内には駕籠があり、❾大谷吉継がいる。西軍敗退の原因となった❿小早川秀秋の陣所は第六扇の下方にある。主決戦場に進出したのか、黒地に白い土佐柏の旗を指した⓫山内一豊隊は第五扇、藤川が流れる辺りにおり、横には白地に朱丸の旗を指す⓬藤堂高虎隊が描かれている。



んじて東海道を西へ進み、東西交通の要衝であった岐阜城を攻め落としている(八月二十三日)。

その一方で、徳川秀忠を主将として中山道を進んだ徳川家の軍勢は、西軍に加わった真田昌幸が籠もる信濃上田城に向かっていたが、小諸まで達したところで軍資金が底をつき、数日間の停滞を余儀なくされている。さらに降伏勧告に従わない昌幸に手こずり、上田で無駄に日数を費やしたことから関ヶ原での決戦には間に合わなかった。

城を明け渡された東海道筋と、籠城して抵抗された中山道筋では、これほどまでに違いがある。

こう見てみると、一豊が城を明け渡したことで家康は関ヶ原での勝利を得たとさえいえるのではなかろうか。もっとも、家康がそれを痛感するのは決戦の後だったろう。

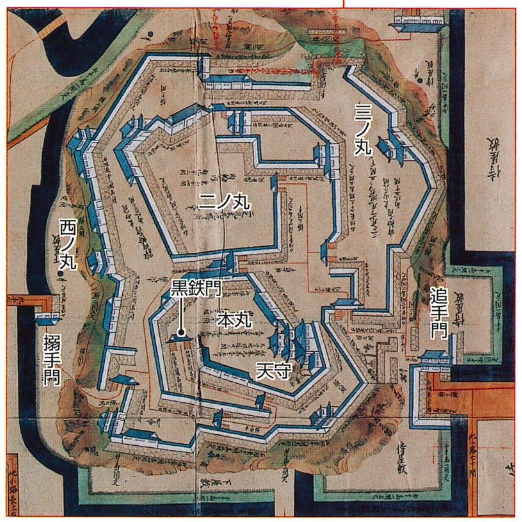
さて、江戸で岐阜落城の報に接した家康は旗本を召集して東海道を進んだ。その途中、福島正則に発した書状では、秀忠も岐阜落城を知れば上田を捨て置いて濃尾平野へ向かうに違いないから、その軍勢を収容できる陣所を確保するよう指示している。その頃、秀忠は軍資金の欠乏で立ち往生していたのだから、家康にしても大軍の移動が難事だという認識に欠けている。

明け渡された城の兵糧を使いながら易々と移動できた家康は、中山道を進んで遅参した徳川家の軍勢からの報告を得て、あらためて行軍の困難さを悟ったことだろう。

これほど明確な結果の違いが現れたのでは、一豊が城の明け渡しを申し出た功績は大いに評価しなければならない。だからこそ決戦の場での功績がない一豊に、破格の待遇が与えられたといえるだろう。

（おおやまいたる・歴史研究家）





「正保城絵図　土佐国城絵図」(国立公文書館蔵)。2代忠義の時代の様子で、享保12年(1727)に焼失した三層の天守が本丸の東隅に描かれている。焼失後、天守は延享4年(1747)末には再築され、現在に至る。一豊は慶長6年8月、高知城築城にあたり、百々(どど)越前を総奉行に任命、浦戸城から足繁く督励に通ったといい、百々は昼夜兼行の工事で期待に応え、同8年に本丸と二ノ丸が完成した。

一国一城の夢

土佐 高知城

若き頃からの夢ともいうべき一国一城の主の地位。
一豊が築城した高知城とはどんな城だったか。
発掘調査の状況とその成果を知る。

文=松田直則
Matsuda Naonori

慶長六年(一六〇一)一月、山内一豊は土佐に入国した。一豊は浦戸城に入城したが、その年の九月には大高坂山に新城を築城すべく、鍬初式を行っている。浦戸は海上交通には適した場所ではあるが、近世的な城下町を形成するには土地が狭かったからだとも伝えられるがどうであろう。

一豊が見た大高坂山はどのような景観が広がっていたのか、今まで知ることができなかった。だが、近年始まった発掘調査でその姿を少しずつ復元できる資料が見つかっている。

最初に本格的な発掘調査がされた場所は、本丸の西側に位置する御台所屋敷跡である。ここでは、遺構として中世から近世にかけての溝状遺構や土坑状遺構、そして柱穴群などが検出されている。

今回新たな発見となったのは戦国期やそれ以前に遡る遺構や遺物である。遺構としては、十五世紀から十六世紀の柱穴等が検出されている。出土遺物は、貿易陶磁器の青磁や染付、国産陶器では備前焼などが出土している。その他石鍋等も見られる。

これらは、南北朝期に居城した大高坂氏や、それ以降の領主時代から長宗我部氏段階のものと考えられる。これまで、文献でしか語られなかった長宗我部以前の姿を確認できたのである。

平成十二年(二〇〇〇)、高知城石垣整備事業に伴い、三ノ丸の石垣周辺部において試掘確認調査が実施された。調査の結果、現存する東側石垣の裏側八メートルの地点で、現存石垣より古い時期に構築された旧石垣が検出され、裏込め部分から桐文軒丸瓦も出土した。

高知県内で確認された石垣の中で、今回の三ノ丸旧石垣は最も古いもので、天正十五年(一五八七)から十六年頃に構築された石垣と考えられている。本丸も長宗我部期において構築されていた可能性は大きい。しかし現段階では調査が進んでおらず、遺構は確認できていない。

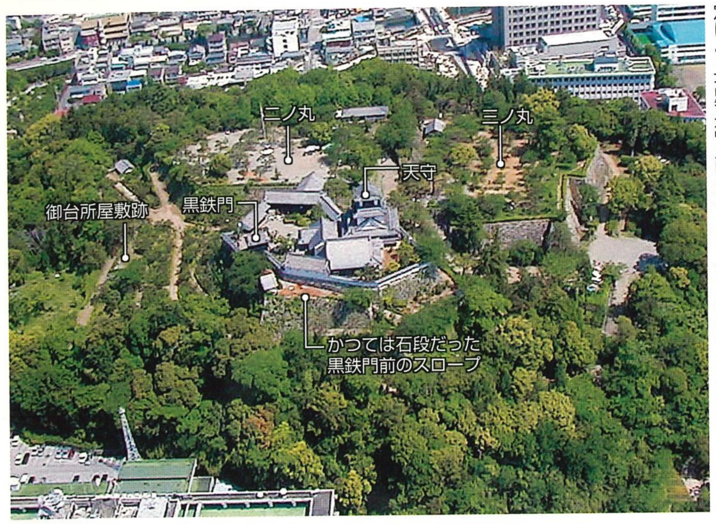
今回の発掘調査において、長宗我部氏が三ノ丸に石垣と櫓を構築している事実が確認できた。山内一豊が鍬初式をおこなうため最初に入城した段階で、三ノ丸の石垣と櫓を含め、長宗我部期に造られた遺構など、山内一豊の目にどのような姿が映ったのか興味深いところである。

平成十三年度には、本丸の黒鉄門の門前部分の調査が実施された。調査の結果、現在土盛りのスロープになっている箇所は江戸期には石の階段であったことが確認された。調査では、享保年間(一七一六〜一七三六)以降に構築された石段と考えられており、天保(一八三〇〜四四)段階で現在の位置に黒鉄門が移築された可能性を指摘できた。その上で、明治年間に現在のような土盛りのスロープにされたと考えられている。

最新の調査は、追手門の南側に位置する丸の内緑地地区で実施されている。十七世紀初頭の鍛冶遺構などが検出されており、高知城築城に関わる工人等の存在が確認されている。

このように、発掘調査成果から少しずつではあるが高知城の不明なところが解明され始めた。だが、多くのことが未解明のままであり、現在も続けられる発掘調査のさらなる成果に期待するところである。

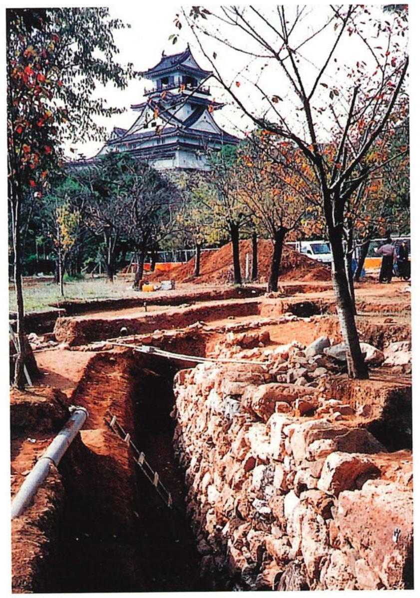
(まつだなおのり・高知県埋蔵文化財班長)



上空から望む高知城(提供=高知県埋蔵文化財センター)。創建時は「河中(こうち)城」と名づけられたが、しばしば水害に悩まされたため、慶長十五年(一六一〇)、忠義は僧空鏡(くうきょう)の選定により「高智城」と改めたという(のち「高知城」と改称)。



本丸御殿と天守(提供=高知市観光課)。江戸期には登城の便を考え、大名の居館などは山麓に作られるようになったが、高知城は天守の建つ曲輪に本丸御殿を有する古い形式を伝えている。



三ノ丸旧石垣の発掘調査現場から天守を望む(提供=高知県埋蔵文化財センター)。慶長16年に完成したとされる三ノ丸は、もともと土地が狭かったために、中高坂山を崩して盛り土して築造されたという。享保12年(1727)の火災で城の大部分が焼けた際に三ノ丸も焼失し、宝暦3年(1753)に復興された。

"見た目"でわかる「立身」の様相

軍装・平服で見る一豊・千代の出世階段

「出世」は武士にも究極の目的。出世すれば衣も食も変わってくる。一豊と千代の生活ぶりも出生段階に応じて変貌していった。

文・監修＝伊澤昭二（軍装・服装）
Izawa Shouji
永山久夫（食）
Nagayama Hisao
イラスト＝鈴木吉男

近江唐国四〇〇石の時代



父、盛豊が仕えた岩倉織田氏が織田信長との戦いに敗れ滅んだ後、一豊は数え年十五歳にして、残された家族とともに縁を頼っての逃亡生活を余儀なくされる。一豊の尾張や美濃国内の流転は十数年の長さに及んだ。イラストは、一豊と老いた家人の出陣の出立である。豊臣秀吉のもとで、天正元年（一五七三）に近江唐国四〇〇石を得るまでの時代を想定して描いている。現在のサラリーマンに例えれば課長クラスであろうか。尾張国や美濃国を放浪し、ようやく主持ちの武士に取りたてられた時代である。

一豊は槍を持ち、古頭形兜を被り、最上胴丸に篠籠手、筒臑当を着用した姿。家人は槍を持ち、兜は被らず腹側だけ護る腹当のみの極めて簡素なスタイル。新式の具足もあるなかで、当時の一豊の懐具合では、かくあったかと想定し、やや古い形式に描いている。

長浜二万石までの時代

天正十年（一五八二）、織田信長が京都・本能寺で討死にするという悲報が、備中高松城攻め中の秀吉の陣中にもたらされた。秀吉軍はすばやく行動を起こし、「中国大返し」を行い、山崎の合戦で光秀を破り、さらに柴田勝家との賤ヶ岳の合戦でも大勝利を収め、秀吉は天下人となった。この一連の戦いで手柄を上げた一豊は、近江長浜二万石を拝領することとなった。

イラストは、下級武士時代から一躍、長浜二万石の中堅・城持ち大名に出世した一豊と家来の出陣の出立である。その出世ぶりは、現在でたとえれば、サラリーマンの課長が重役を通り越して、一気に中小企業の社長になったと言えるだろうか。一豊は槍を持ち、数ランクアップの高級な兜、咽喉輪を付け、最上胴丸に壺袖と籠手・佩楯に篠臑当を付けた完全武装の馬上姿である。側には旗持ちの家来も従えている。





一豊時代の食事情① 雑炊●下級武士の日常食

戦国時代、足軽クラスの下級武士の普段の食事は、朝餉（あさげ）も夕餉（ゆうげ）も「雑炊」が多かった。昼食はとらなかった。武士が昼食をとるようになったのは、江戸時代に入ってからのことだ。雑炊は「増水」という言葉がもともとの表記であることからもわかるように、米穀よりも水の量が多いことが普通で、葱や大根、蕪、青菜などの雑菜を「かて」として加えて煮込み、増量をはかった。石田三成に仕えた下級武士の娘の思い出話を記した書物である『おあむ物語』でも、朝夕は雑炊ばかりであったが、兄が山に鉄砲を撃ちに出かけるときだけは、弁当に菜飯を炊いて持たせたので、このときばかりは、自分も相伴にあずかって菜飯を食べることができたので、兄に鉄砲を撃ちに出かけるように再三すすめたことが記されている。菜飯は、茹でた大根葉などを入れて炊いてつくるが、雑炊よりもはるかにうまい。一豊と千代が結婚したころの食事も雑炊が多かったと思われる。

（P32〜34の食の写真は、撮影＝今井ちづか）



一豊時代の食事情② 玄米に一汁一菜●上級武士の日常食

戦国時代の上級武士も食事も朝餉と夕餉の1日2回の食事で、1食で玄米2.5合を食べた。おかずには、鰯の丸干しや芋や大根の煮物が付けば、かなり高級な食事となり、梅干か漬物だけのことも多かった。これに味噌汁がつくというのが代表的なパターンといえる。1日に5合の玄米をとるということは、熱量に換算すれば約2600キロカロリーを摂取していることになる。玄米には、ビタミンC以外の、人間が健康を保つうえで必要なビタミンやミネラルが豊富に含まれている。ビタミンCも味噌汁に加える野菜でとれるので、玄米食はほぼ完全食といえるのだ。玄米に味噌汁と焼き魚くらいはつくだろうから、合計すると1日の摂取カロリーは、約3500キロカロリーになると思われる。現在の日本人の成人が1日に摂取するカロリーは約2000キロカロリーであるので、戦国時代の上級武士は生き抜くために、普段からかなりの熱量をとって、体力強化をしていたことがうかがえる。

小袖姿から衣冠姿へ

衣冠に到る服装の変遷

■■■近江唐国四〇〇石までの時代

一豊（右）と千代（左）が出会った頃の姿を想像したイラスト。両者とも由緒のある家門の出だが（千代は不明な部分あり）、戦乱に巻き込まれて庶民生活を余儀なくされていた。一豊は水干（すいかん）という麻などを水にさらして干した布でできた上着を着し、小袴（こばかま）という短い袴をはいている。千代は庶民の女装である小袖（袖が小さい着物）を着ている。



下は長浜2万石から掛川5万石の頃の一豊と千代の城中での平服姿を想像して再現したイラスト。一豊（右）は肩衣袴（かたぎぬばかま）という上級武士の日常着。脇差をつけ、手に扇子を持ち、ヒゲをはやした堂々たる武者ぶりである。千代は白の下着に最上衣（さいじょうい）である打掛（うちかけ）を腰にまとった姿で、これは当時の流行とも言えるスタイルであった。

■■■城持ち大名の時代





■■■正五位下に任じられた後の時代





一豊は、天正15年（1585）に正五位下対馬守に任じられている（異説あり）。右は正五位下の衣冠スタイルの一豊。衣冠とは正装である束帯の略服で、上着の袍（ほう）の色は位階によって定められており、正五位は緋。千代は公家風の袿袴（うちぎばかま）姿。袿とは本来、重ね着をする上着のことだが、この時代には一枚だけを羽織っていることが多い（2点とも妙心寺大通院蔵）。



■備具足
合戦に際して、家臣に貸し出された具足。主家が常日頃から備えていたので、こう呼ばれる。

■当世具足
鉄砲の伝来により、当世具足という甲冑が登場した。主に二枚胴と五枚胴の形があり、頬当、佩楯などの小具足を身に着ける。

■■■掛川五万石の時代

小田原の役において一豊は秀次軍の一員として伊豆山中城の攻略に奮戦する。その甲斐あって小田原の役後、天正十八年（一五九〇）に遠江掛川五万石を拝領する。掛川は家康の旧領で、東海道の要衝であった。

秀吉の死後、ついに慶長五年に関ヶ原の合戦が起こった。秀吉存命中から家康と懇意にしていたという一豊は、このとき家康に従い、掛川城を家康に明渡し、そのまま関ヶ原に出陣して家康の勝利に貢献した。

イラストは、長浜二万石の中堅大名から、掛川五万石の大名にスピード出世した一豊と、側近（近習）の陣中での出立である。現在で例えれば、一部上場の社長クラスであろうか。一豊は当時の流行の最先端を行く当世具足を着用し、床几に腰掛けて軍配を持つ。近習クラスの高級な備具足を着用した家来を両脇に従えて、伝令の報告を聞いている。





栄養満点の陣中食

戦国時代の陣中食は、玄米ではなく白米だ。白米は炊き上がりが早く、消化もいいので、生味噌を添えて、好きなだけ食べた。生味噌は高タンパクで、生きた消化酵素が豊富なので消化に良い。戦陣へは、「味噌玉」という丸い形にして携帯した（右）。「兵糧丸」（ひょうろうがん）は、戦ううえで欠かせない栄養分を練りこめてあり、これを2個食べれば1日中空腹にならなかったというが、確かなつくり方は伝わっていない（左）。



黒糸威七十六間小星兜（くろいとおどししちじゅうろっけんこぼしのかぶと）

天正19年（1591）に祖父江勘時が一豊から拝領した兜。ちなみに一豊は長浜・掛川城主時代を通じて馭初（のりぞめ）を祖父江邸で見物したという。馭初とは正月に行う閲兵式のこと。鉢の左右径20.9cm×外鉢高13.6cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。



一豊所用枇杷耳形脇立（びわみみなりのわきだて）

木札に「一豊公御分」とある。「脇立」とは兜の側面につける飾り物。兜と一対という形ではなく、単体で現存する。全長49cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。

夫婦連携で戦国の世を生き抜いた証

一豊・千代ゆかりの遺品選

貧しい時代から労苦を共にし、富貴になってもそれを忘れなかったという二人の形見に、一貫した理想の夫婦像の様子がうかがえる。

なお、藩祖一豊から十六代に至る土佐藩主にまつわる至宝は、高知市の土佐山内家宝物資料館に美術工芸品約二五〇〇点、古文書約三万点が所蔵・展示されている。

ここでは当館の所蔵品を中心に一豊・千代にまつわる品々を取り上げてみた。

構成＝編集部



黒羅紗地日輪鍋蓋文様陣羽織（くろらしゃちにちりんなべぶたもんようじんばおり）

舶来の黒羅紗地に緋色の日輪を入れ、そのなかに鍋蓋文様をはめ込んだもの。対する裏地は黒漆塗を施した革製。肩幅52cm×丈79cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。



五藤家家宝の鏃（ごとうけかほうのやじり）

天正元年（1573）8月の越前刀根坂の戦いで一豊の左顔面に突き刺さったという鏃。一豊は矢を受けながらも、放った相手の朝倉方・三段崎勘右衛門を討ち取る軍功を立て、出世の糸口をつかんだ。なお、所蔵先の安芸市の資料館には、当地を治めていた土佐藩家老・五藤家ゆかりの資料が豊富にある（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。

天下泰平の世に向けて
戦国の群雄と刃を交えながら
一豊は戦場を駆け抜けた



五藤家家宝の草鞋（わらじ）

家臣の五藤為浄（ためきよ）が一豊の顔面を踏みつけて鏃を抜き取った際に履いていたもの。為浄は一豊に「足で顔を踏みつけて抜け」と言われ、草鞋を脱ごうとしたが、一豊から「そのまま踏みつけて抜け」と命じられたという（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。





一豊所用褐麻地立波紋付具足下着（かちあさじたつなみもんつきぐそくしたぎ）

立波紋のついた陣羽織。家臣の前野氏が定紋に立波紋を用いているのをみた一豊は、繰り返し寄せては打つという波の性質が戦いの心に通じるとして気に入り、山内家の家紋に用いたと伝えられる。桁42.5cm×丈75.5cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。

一豊・千代ゆかりの遺品選

束の間の平穏な
日々がうかがえる
日本と南蛮文化の調度品



一豊所用の南蛮帽

縁の広いソンブレロ型の白ラシャ製。周囲には七宝の飾りがめぐらされ、ヤク（チベットに生息する野生牛）の毛の房がついている。幅44cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。

一豊書「神」

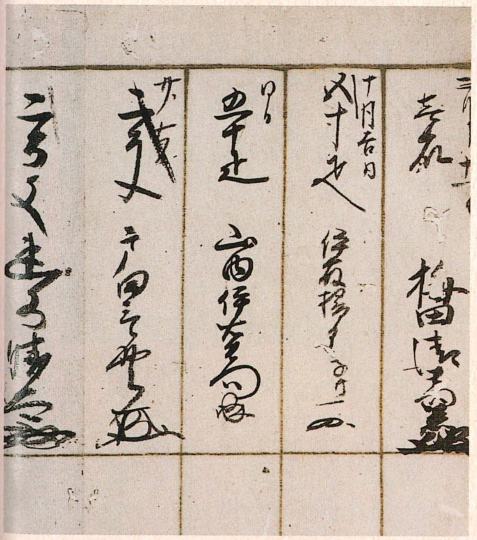
一豊の通称「伊右衛門」の署名があり、一豊が桃山時代に書いたと伝わる。縦45.5cm×横34cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。





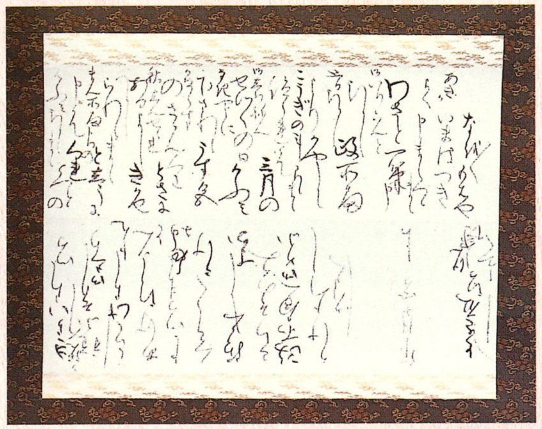
一豊所用白木綿地陣羽織（しろもめんじじんばおり）

襟先についている金モール巻のトンボ頭と受け輪奈（わな）は南蛮様式。一豊が南蛮文化の影響を受けたと思われる遺品。片幅42cm×丈81cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。



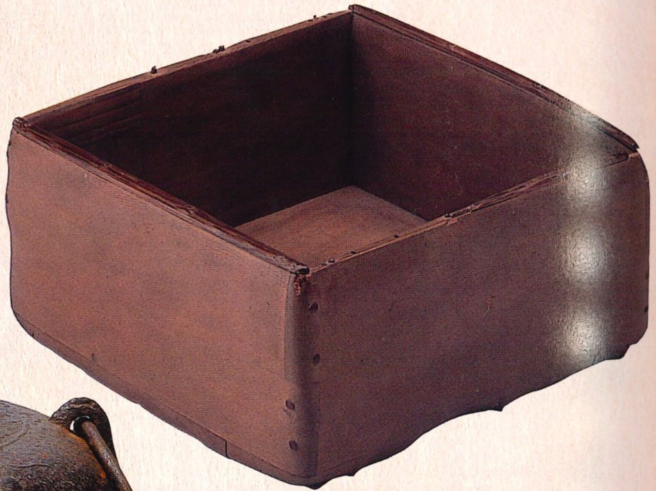
竹生島奉加帳（ちくぶじまほうがちょう）

一豊の署名「山内伊右衛門尉」と花押（サイン）がある。竹生島堂舎復興のため、秀吉はじめその家族や家臣団が寄進した金品の記録簿。天正4年（1576）から同16年に至る総計131人の奉加者が記され、一豊は天正4年10月に50疋（銭500文相当）を寄進している（竹生島宝厳寺蔵）。



見性院書状（けんしょういんしょじょう）　山内忠義（ただよし）宛

京都に隠棲した見性院（千代）が土佐二代藩主忠義に宛てたもの。秀吉正室の北政所が所望する「うす色のささんくわ（山茶花）」を送るように依頼している。見性院は北政所との交流が深かった（土佐山内家宝物資料館蔵）。



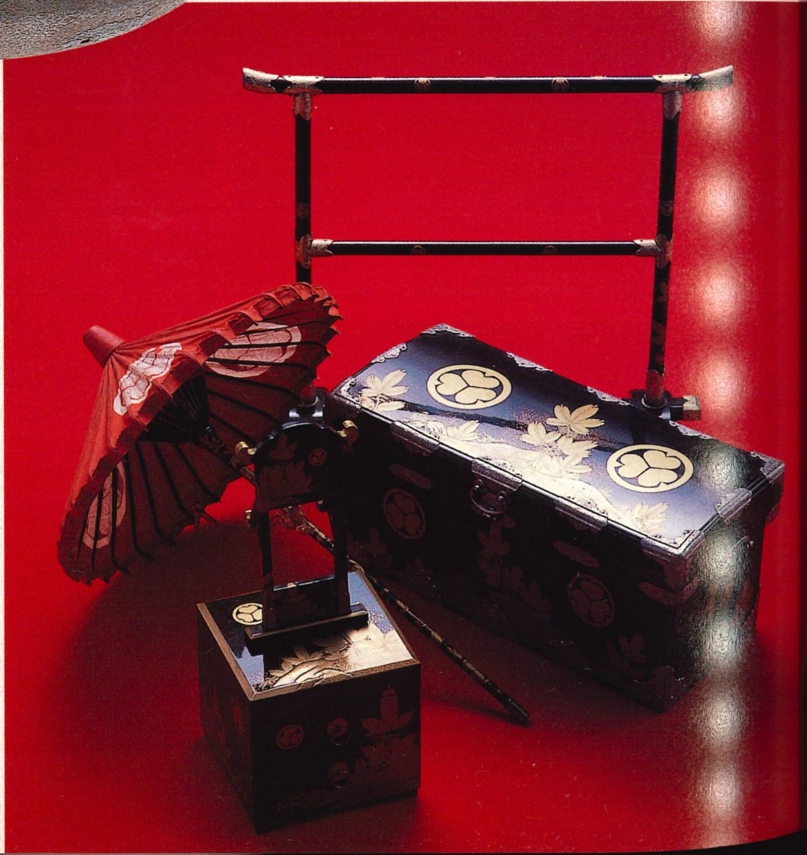
見性院ゆかりの枡（ます）

秀吉家臣として長浜城下にいた時代、一豊・千代夫妻は生活が苦しかったため、まな板がなく枡を裏返して代用したという。一豊が土佐入国後「本御蔵」に納められていたが、戦災で焼失。現存の枡は文化3年（1806）、藤並神社に奉納する際に作られた模造品である。縦17cm×横17cm×高8cm（土佐山内家宝物資料館蔵）。



北方様（きたがたさま）所用茶釜

一豊の姉通（つう・1533～1606）の遺品。通は美濃北方（岐阜県北方町）城主安藤守就（もりなり）の弟郷氏（さとうじ）に嫁いだので「北方様」と呼ばれた。夫の郷氏が天正9年（1581）に信長に背いて稲葉貞通に討たれたあとは、姻戚関係にあった竹中重治のもとで世話になっていたが、一豊が長浜城主になると嫡子可氏（よしうじ）とともに呼び寄せられた。一豊が土佐入国後は宿毛（すくも）に知行を与えられて余生を過ごした。宿毛の妙栄寺は北方様の菩提寺（妙栄寺蔵）。



若松葵紋蒔絵雛道具（まきえひな）

慶長10年（1605）、一豊の養子忠義と家康の養女阿姫（あひめ）が婚儀をあげ、その際に阿姫が持参したと伝わる。このとき忠義14歳、阿姫11歳。「雛道具」とは婚礼道具のミニチュアで長持・衣桁・日傘・鏡台の4点が残る（土佐山内家宝物資料館蔵）。

夫婦出世の舞台をめぐる

一豊・千代史跡紀行

戦国時代を駆け抜け、土佐藩の祖となった山内一豊と妻千代。
二人の生涯はまさに二人三脚での歩みであった。
一豊・千代の出生から終焉まで、二人の軌跡を追ってみる。

構成=編集部

一豊2つの出生地【一宮・岩倉】

山内一豊の出生地については、父盛豊の居城・黒田城説と、
盛豊の主君の居城・岩倉城説の2つの説があり、
それぞれの城跡近くに一豊出生の碑が建立されている。
たしかにどちらでも可能性があったことは間違いない。
黒田城のあった木曽川町は、平成17年4月に一宮市に編入されたが、
今もなお一豊出生の地としてのPRが盛んで、
JR木曽川駅からぐるっと史跡めぐりが楽しめる。




黒田城趾◆愛知県一宮市木曽川町黒田
尾張岩倉城主織田信安の命で一豊の父盛豊が城代となり、天文14年(1545)に一豊がこの城で生まれたとある。1600年代の慶長年間に廃城となった。現在は黒田小学校の敷地内の一角にあるが、模擬冠木門とともに公園として整備され、平成10年に完成した一豊立志の像も建つ。




法蓮寺◆愛知県一宮市木曽川町黒田
一豊の父盛豊と兄十郎を葬った寺。弘治3年(1557)、黒田城が夜襲を受けたときに一豊の兄十郎が戦死し、父盛豊も岩倉落城前後の永禄2年(1559)に亡くなったとされる。本堂裏に盛豊・十郎父子の墓があるほか、山門手前には「山内一豊公出生之地」の碑も立っている。




一宮市木曽川資料館
愛知県一宮市木曽川町黒田

●入館無料。
月曜(祝日の場合は翌日)休。
9時30分～17時。
☎0586-87-5197

旧木曽川町議事堂を利用して平成17年3月にオープン。一豊顕彰会が管理・運営しており、一豊関係の資料が豊富にそろう。なかでも裏をまな板代わりに使ったとされる千代愛用の一升枡は必見。12月より改修工事に入り、平成18年1月6日にリニューアルオープンする。





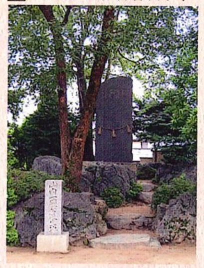
一豊まつり
昭和59年より毎年8月第1日曜に開催。一豊と千代に扮したパレードが黒田小学校を出発して町内の銀座通りを練り歩く。他にもイベント会場ではさまざまな催し物があり、夜は花火も行われる。問い合わせは木曽川町商工会☎0586-87-3618。



岩倉城跡
愛知県岩倉市下本町
交 名鉄犬山線岩倉駅下車

一豊の父盛豊が仕えた尾張上四郡の守護代織田伊勢守信安(岩倉織田氏)の居城。黒田城代であった盛豊は、織田信安の家老に就任したため、岩倉にも居を構えていた。永禄元年(1558)に尾張浮野(一宮市)で信長に敗れ、城は翌年落城した。盛豊は浮野の戦いで戦死したとも、落城の際に自刃して果てたともいうが定かでない。一豊が母や幼い弟たちとともに流浪するのはこのときからである。

山内一豊誕生地
愛知県岩倉市下本町
交 名鉄犬山線岩倉駅下車

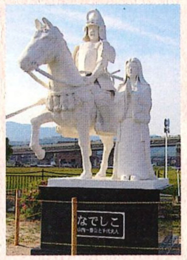


岩倉城跡に近い神明生田神社境内にある。天文23年(1554)に父盛豊が社殿の造営を行ったことが、大正時代になって判明したため、一豊出生地として石碑が建立された。脇を流れる五条川には一豊橋も架かっている。

千代2つの出生地【米原・郡上八幡】

一豊の妻千代の出目については近江若宮氏と美濃遠藤氏の2説あって、
いまだ決着をみていない。以前より出生地として知られてきた近江町は
平成17年10月に米原市に編入されたが、
JR坂田駅から千代ゆかりの史跡が一巡できる。
一方、近年になって出生地説が浮上してきた郡上八幡は、
美しい町割と真夏の祭典・郡上踊りで知られ、
町の至るところで湧く名水が旅人の喉を潤し、何度訪れても飽きることがない。

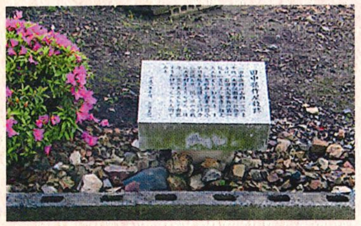




山内一豊公と千代夫人の像
JR坂田駅前に建つ。平成17年5月に完成したばかり。



若宮家顕彰碑
滋賀県米原市飯
児童公園の一角に建つ。この地域は「若宮外記仲間」という仲間組織があって、若宮家の遺領を共同管理してきた。



田中孫作屋敷跡◆滋賀県米原市高溝
田中孫作は関ヶ原の戦いのとき、千代の命で石田三成挙兵の第一報を一豊および家康に伝えた人物。案内碑によれば、一豊の命で松尾山に布陣した西軍の小早川秀秋を寝返らせる使者に立ったのも孫作であったという。

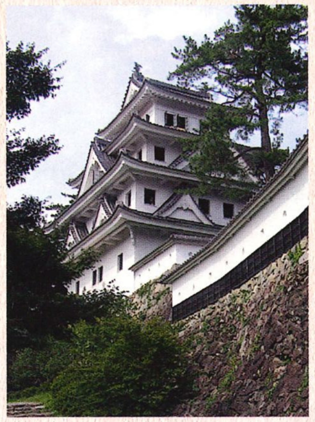
法秀院殿墳墓◆滋賀県米原市宇賀野
山内一豊の母は夫盛豊の死後、出家して法秀院となり、天正初期に当地の長野家に身を寄せた。近隣に住んでいた千代が少女時代に法秀院から裁縫や行儀作法を教わったという。一豊が長浜城主になったあとも長野家にとどまり、天正14年(1586)に没。墓は明治27年(1894)に改修され、平成9年には現在の五輪塔が建てられた。近くには法秀院ゆかりの長野家屋敷(非公開)も残っている。





若宮氏館跡◆滋賀県米原市飯
浅井氏の重臣であった若宮氏の居城があった場所。現在は宅地の一角に碑があるだけだが、いまも残る水路に堀跡を確認することができる。

郡上八幡城◆岐阜県郡上市八幡町柳町
千代の父遠藤盛数が郡上郡を支配した永禄2年(1559)に築城。その後、千代の兄慶隆の居城となったが、天正15年(1587)の秀吉時代に左遷される。その後、井上、金森氏を経て、江戸中期に青山氏が藩主をつとめ明治に至る。城は維新後に取り壊されたが、昭和8年(1933)に木造の模擬天守が再建された。天守からは吉田川沿いに形成された美しい町並が一望できる。



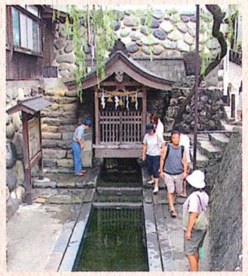


山内一豊と妻の像◆岐阜県郡上市八幡町柳町
郡上八幡城の建つ城山中腹の公園にある。近年浮上した千代の出生地説にちなんで平成3年に建立された。8月初旬には当公園で千代にちなんだ縁日おどり「山内一豊夫人の夕べ」が行われる。



郡上踊り
江戸時代から400年の伝統をもつ郡上踊り。毎年7月中旬～9月上旬の32夜にわたって町内各所で行われる。もともと士農工商の融和を図るために奨励されただけあって、観光客でも自由に〝踊りの輪〟に参加できるのが魅力。メインは8月13～16日の4日間にわたる徹夜踊り。

宗祇水◆岐阜県郡上市八幡町本町



環境庁選定の日本名水百選の一番手となった名水。名称「宗祇水」は室町時代の連歌師飯尾宗祇(いいおそうぎ)の庵が近くにあったことに由来する。千代の祖である東常縁(とうのつねより)が古今伝授の創始者で、宗祇に古今伝授を受けたことからも、あながち千代と無縁ではないだろう。こんこんと湧出する清水を求める客があとを絶たない。



城主への歩み～近江路をゆく～【虎姫・長浜・木之本】

一豊が初知行を得たのが近江唐国。
一説にはこの頃に千代と婚姻し、
名馬購入伝説も近江木之本の馬市でのこととされる。
のち一豊は累進して長浜城主となり、
延べ6年にわたって秀吉の築いた城下町を整備する。
だが、不幸にも天正13年(1585)の大地震で
愛娘与禰姫(よねひめ)を失うという
痛恨の惨事に遭遇した場所でもあった。





琵琶湖畔に面した長浜城跡の敷地内は、豊公園として整備されており、天守閣跡(左)や太閤井戸跡(右)といった往時の面影を偲ぶことができる。



長浜城◆滋賀県長浜市公園町
長浜ははじめ今浜といい、天正3年(1575)に秀吉が初めて城主となった際に改名した。天正12年、一豊は秀吉から長浜に5000石の知行を得て城主となる。翌年に若狭高浜へ移封されたが、4か月後には2万石の知行で長浜に戻ってきた。元和元年(1615)の一国一城令の際に廃城となったが、現在も市街地に堀跡などが残る。城は昭和58年に鉄筋コンクリートの長浜城歴史博物館として再建された。館内には一豊と千代ゆかりの品々が所蔵・展示されている。
●入館400円。無休(年末年始を除く)。10～17時。☎0749-63-4611





山内伊右ェ門一豊屋敷跡◆滋賀県長浜市公園町
のちに城主となる一豊が、秀吉の長浜城主時代に屋敷を構えた地といわれる。道路沿いに建っているが、碑は小さくて目立たない。一豊の部将時代を知る数少ない貴重な史跡。

大通寺◆滋賀県長浜市元浜町
●拝観冥加金500円(平成18年1月より)。無休(年末年始を除く)。9時～16時30分。☎0749-62-0054



元亀2年(1570)に当地の町年寄が「惣会所」を設けたのが始まり。「長浜御坊」とも呼ばれる。脇門(台所門)は一豊時代の長浜城追手門を移築したものであるといわれている。他にも伏見桃山城の遺構と伝わる本堂や大広間、国の名勝指定の庭園など見どころ豊富。





牛馬市跡
滋賀県伊香郡木之本町大字木之本／交　JR北陸本線木ノ本駅下車
北国街道の宿場町木之本は、室町時代から昭和50年頃まで毎年2回牛馬市が開かれていたところ。一豊が身分不相応な名馬を欲しがっているところに、千代が実家からもたされた金子をそっと出し、出世の糸口をつかんだ「内助の功」の舞台は、この木之本宿の馬市だったと伝えられている(出典によって諸説あり)。街道沿いにはうだつ(防火壁)をつけた旧家の街並みが往時の様子をとどめ、軒下の柱には馬つなぎの金具が残されているところもある。牛馬市跡は横田弥太郎家付近。ここからは賤ヶ岳古戦場も近い。

山内一豊公初所領之地
滋賀県東浅井郡虎姫町大字唐国／交　JR北陸本線虎姫駅下車
天正元年(1573)の越前刀根坂の戦いで一豊は、朝倉方の猛将三段崎勘右衛門を討ち取る功を立てたが、一豊自身も左の眦から右奥歯にかけて矢が貫通するという重傷を負った。この話を聞いた信長は一豊に薬を与えて看病を怠りなくするよう命じたという。この軍功で近江唐国400石の知行を得て、出世街道の糸口となった。顕彰碑は平成17年6月に除幕された(提供＝虎姫町)。





●入館300円(御殿共通)。無休(年末年始を除く)。9～17時(11～1月は～16時30分)。☎0537-22-1146

掛川城◆静岡県掛川市掛川
文明年間(1469～87)に駿河守護今川家の臣・朝比奈氏が築城。永禄12年(1569)に家康が今川氏を滅ぼして、石川家成を置いた。天正18年(1590)の家康関東移封にともない一豊が入封。城下町とともに城の大改築を行い、近世城郭に生まれ変わらせた。一豊の土佐移封後は城主がめまぐるしく交代しながらも明治を迎える。当時の建築物としては掛川城御殿、太鼓櫓、大手門番所が現存する。現在の城は平成2年から5年にかけて当時の様子をそのままに日本初の本格木造による天守を復元。その後、大手門も復元した。

東海の城主時代をゆく～【掛川】

秀吉の天下統一後、一豊は長浜から掛川5万石の領主となる。
他の秀次宿老衆とともに家康の旧領であった東海地方に移封されたのは、
秀吉がもっとも恐れていた関東の家康の西上を阻止するためであったといわれる。
約10年にわたって城主をつとめ、
現在の城下町・宿場町の基盤を作りあげた。



現存する太鼓櫓は嘉永7年(1854)の大地震以後のもの。



掛川戦国城下市
毎年5月3・4日に行われる。戦国・江戸期の掛川城下をテーマに物産市やイベントが盛りだくさん。恒例の子供ミニ武者行列では、毎年応募の中から選ばれた小学生扮する一豊と千代の行列が城下を歩く。問い合わせは掛川市商工観光課 ☎0537-21-1149(提供＝掛川市)。



円満寺◆静岡県掛川市掛川
もともと掛川城内にあったが、一豊の掛川城大改修の一環である総堀普請の際に現地に移転。山門に使われている蕗(ふき)の門は、掛川城の内堀ほとりにあった四脚門。廃城後の明治5年(1872)に円満寺が買い受けて移築したものである。



書院造の掛川城御殿は文久元年(1861)のもの。




久延寺
静岡県掛川市小夜鹿字新茶屋
交　東海道新幹線掛川駅からバスで約20分、日坂下車徒歩1時間。または東名自動車道掛川ICからクルマで約20分

東海道の三大難所といわれた小夜の中山峠にある寺。慶長5年(1600)、関ヶ原に向かう家康を一豊が煎茶で接待したところでも知られる。境内にはそのとき建てたという茶亭跡の碑や、接待のお礼として家康が植えた五葉の松(2代目)が残る(提供＝掛川市)。



【第1章】



長屋重名『かゞみ草』より

夫婦二人三脚の出世街道

一豊と千代の生涯

千代終焉の地【京都】
土佐藩祖一豊が築いた町を歩く【高知】

関ヶ原の合戦後、一豊は長宗我部氏の旧領である土佐20万石に
大幅な加増を受け転封する。一豊は土佐藩祖として高知城を築き、
「一領具足」と呼ばれる長宗我部氏旧臣の抵抗を鎮圧し、
着実に高知の支配・発展に尽力してゆく。そして16代の藩主を経て、
坂本龍馬をはじめとする維新の志士たちが新しい日本をつくるのである。



山内神社・土佐山内家宝物資料館

高知市鷹匠町 ●入館300円。9~17時。
年末年始以外の休館日はWEBか電話で確認を。
☎088-873-0406

明治4年(1871)、最後の藩主山内豊範(とよのり)が祖霊を祀るため、藤並神社のお旅所があった現地に社殿を建立。昭和7年(1932)に別格官幣社山内神社として新たに創建した。のち戦火で両神社とも焼失したが、昭和45年に社殿を再建して藤並神社と合併。藩祖一豊と同夫人以下歴代藩主を合祀した。平成14年には山内容堂の像も境内に完成。隣接する土佐山内家宝物資料館は歴代藩主にまつわる美術工芸品、古文書類など約6万7000点を収蔵し、一部が常設展示されている(提供=川口素生)。

●入館400円。9~17時。
無休(年末を除く)。
☎088-824-5701







土佐高知城◆高知市丸の内

慶長6年(1601)、家康から土佐一国を拝領した一豊が大高坂山に築城。同8年には本丸など主要部分が完成したが、全城郭の完成は一豊没後の慶長16年。城名も河内山→高智山→高知と推移。残念ながら享保12年(1727)に大火で大半を焼失してしまったが、宝暦3年(1753)に再建。全国に現存する12天守のひとつ。周辺には山内一豊や千代と馬の像も建つ(提供=高知市)。

はりまや橋◆高知市はりまや町



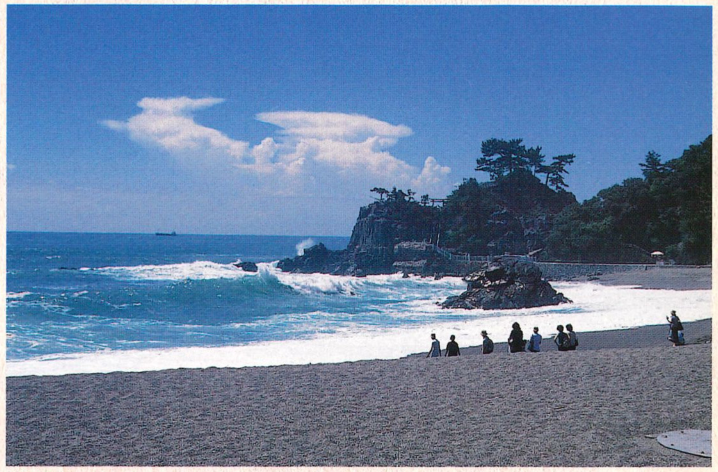
よさこい節でも知られる高知有数の観光地。昔は高知城の堀川に架かっていたが、川はなくなって朱色の欄干のみとなってしまった。平成5年公園として整備され、イメージされた橋が作られた(提供=川口素生)。

六体地蔵・一領具足の碑◆高知市浦戸

一豊の土佐入封に抵抗し、慶長6年(1601)に起きた浦戸一揆で犠牲となった長宗我部旧臣の一領具足273人を供養する。長宗我部氏の居城であった浦戸城跡に近く、跡地には高知県立坂本龍馬記念館が建つ(提供=川口素生)。







桂浜◆坂本龍馬の銅像が建つ月の名所(提供=高知市)。

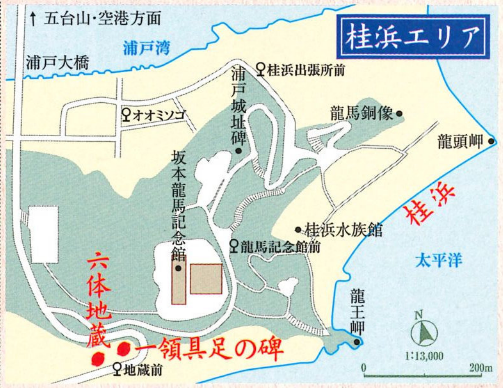
一豊・見性院廟所(非公開)

京都市右京区花園妙心寺町

慶長10年(1605)に一豊が61歳で亡くなると、千代は落剃して見性院となり、翌年京都の桑原町(京都市中京区)に移り住んで余生を過ごし、元和3年(1617)12月4日に亡くなった。遺骸を荼毘(だび)に付した妙心寺内の大通院には一豊と見性院の廟所があり、霊屋内には一豊と千代の墓碑と肖像画が安置されている(撮影=房前政彦)。







漂泊の戦国浪人、風雲児信長のもと武功を立てる



戦国争乱の中でともに父を失い辛酸を舐めた一豊と千代。前世からの縁であったかのように結ばれた二人だが、暮しは貧しい。窮状から脱するには功名手柄を立てるしかない——そう心に誓った一豊は、疾風怒濤の如く天下取りを目指す信長に従い、戦場を駆け巡った。

文=永岡慶之助
Nagaoka Keinosuke



木曽川町の黒田城趾に建つ山内一豊公像（提供＝一宮市経済振興課）。

落城の記憶

まこと、不思議なる武将である。

この人物、格別、衆に優れた天賦の才を身に備えていたわけでは、無い。また智謀、諸将を超えた武人というわけでも、無い。

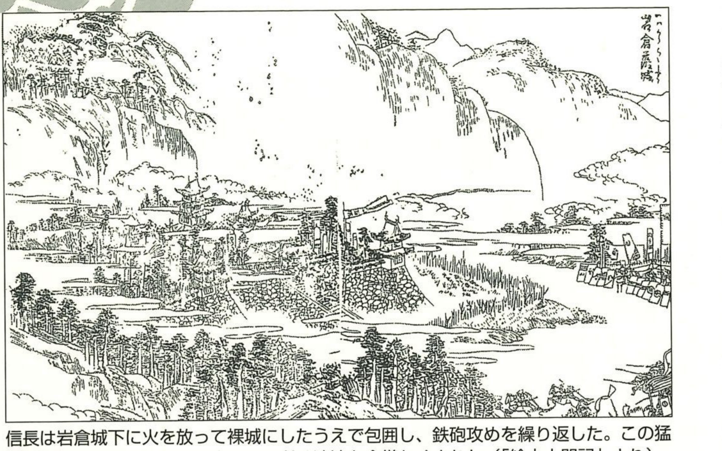
ただ、日頃、寡黙にして平凡な漢ではあったが、ひとたび合戦場に立つと、その馬鹿でかい大音声は、敵味方の間に明晰に響きわたるとともに、時として思わざる豪気放胆の行動を発揮した。そして、まるで前世から赤い糸で結ばれていたような賢く、機転のきく妻女に恵まれたことで、この平凡なる漢に奇跡が生じたのである。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下人三代に仕え、徐々に小出世を重ねながら、生き難い、苛烈波乱の極まる戦国時代を無事に生きのびたばかりか、ついには土佐二〇余万石の国主になりおわせたのだ。

この強運の武将の名は、山内伊右衛門一豊と言い、天文十四年（一五四五）、尾張国葉栗郡黒田（一宮市木曽川町）の城主山内但馬守盛豊の次男に生まれた。母は羽黒（犬山市）の城主梶原氏の娘であり、彼は幼名辰之助として、のびやかに育った。

父の盛豊は、尾張上四郡を領する岩倉城主織田伊勢守信安の家老であり、その支城を預けられたのだが、黒田城下を岐阜街道が通っており、西は美濃の墨俣から下津をへて東は鳴海へとつづく鎌倉街道の要衝である。

往昔、源 頼朝上洛の際、この地の地蔵を拝し、地領と剣一口を奉納したと伝わる大徳山剣光寺も、一豊の幼時にはすでに廃寺となっていたが、母の夜語りに、廃寺は地蔵が盗難にあったためと知り、子供ごころにも憤りと人間の怖さを覚えたものであった。



信長は岩倉城下に火を放って裸城にしたうえで包囲し、鉄砲攻めを繰り返した。この猛攻に岩倉城は落城。織田信安配下の者は流浪を余儀なくされた（「絵本太閤記」より）。

この城下を通過した法師が詠じた、

夜もすがら光は見せよ
うば玉の黒田の里に咲ける卯の花

の一首が、幼い一豊の眸に映じた、黒田城下の風光のすべてを物語っているといってよい。だが、のどやかな日々の流れは、弘治三年（一五五七）七月夜半をもって、突如、断ち切られた。清須の信長の意を受けた刺客十余人が、深夜、城内へ乱入したのである。深い青闇の中に飛び交う怒号や白刃のきらめきは、終世、消えざる光景として、幼い一豊の記憶に深く刻まれた。

来襲した刺客たちは、いずれも一豊が顔を見知っている者たちであり、城での祝い事や春秋の祭日には、にこやかに来訪した連中ばかりなのだ。一豊は地蔵泥棒の場合と同様、人間の心にひそむ闇の深さに戦慄した。

この夜襲で父盛豊と兄十郎が討死し、一豊は母や弟妹たちとともに、家臣に助けられて危うく虎口を逃がれ、岩倉城へと身を寄せた。一豊十三歳の夏の出来事であり、これが一家流転の始まりであった。

岩倉城での母子の平和は、しかし、わずか二年にして破綻した。永禄二年（一五五九）二月、織田一族の異端児信長が御伴衆八〇余人を引き連れて上洛、将軍足利義輝に謁見し、尾張統一の承認を得て帰国するや、直ちに岩倉城攻撃を開始したからである。その状況を『信長公記』が、

「或る時、岩倉を推し詰め、町を放火し、生か城になされ、四方しし垣、二重三重、丈夫に仰せ付けられ、廻番を堅め、二、三ヶ月近陣にとりより、火矢・鉄砲を射入り、様々攻めさせられ、越訴抱へ難きに付いて、渡し進上候て、ちりぐ〱、思ひぐ〱罷り退き……」

と記している通り、岩倉城は明け渡され、城中に籠もっていた者は、城を出て四方へ散り去ったのだ。

その中に一豊一家もいた。夫の討死後、法秀院を名乗った母や弟妹ともども、十五歳の一豊は、今や山内家の当主として生きねばならなかった。まさに流浪への旅立ちである。

漂泊の日々

山内一家の漂泊は、尾張の刈安賀城主浅井賢政、美濃松倉城主前野長康、牧村城主牧村兵部政倫など、縁辺知己を頼って転々とした。

流転漂泊の日々は辛い。知己縁類を頼りの食客暮しは、やはり心労多く、ともすれば挫け、崩れがちな少年一豊の精神を支えてくれたのは、幼き日、亡父但馬守盛豊が折りに触れて、

「辰之助、よう聞け。わが山内家は、大織冠藤原鎌足公の裔ぞ」

と言った一語であった。一豊は、その一語を思い出すたびに、「今に、いまに！」と、萎える気力を奮い立たせてきたのである。

十六歳を迎えた一豊は、縁者前野長康を烏帽子親に元服して、幼名辰之助から通称を伊右衛門、一豊と名乗るにいたった。その彼が牧村城に寄寓している間に、後年の放胆な武人の片鱗を見せ、城主の兵部政倫ほどの漢に舌を巻かせている。

それは永禄三年（一五六〇）、美濃の中空に白い積乱雲が湧き上った日、兵部政倫が一豊を伴って城を出た途端、待ち受けていたように五、六騎の敵が襲いかかった。それで政倫は、城に引き返そうとした。ところが意外にも一豊は、白刃を抜いて逆襲に出たではないか。これを見た政倫も、

「若衆に過ぎたる振る舞いぞ！」

足利義輝（あしかがよしてる）
天文5〜永禄8（1536〜1565）
室町幕府第13代将軍。足利義晴の子。天文15年(1546)、将軍となる。治世中は、細川晴元と三好長慶の抗争のため、しばしば京都を逐われた。永禄元年(1558)に長慶と和睦して帰洛。信長ら諸大名の力を利用して将軍権威の回復に務めた。永禄8年(1565)、松永久秀らに襲われ、自ら奮戦の末、自害。



（光源院蔵）

織田信安（おだのぶやす）
？〜天正19（？〜1591）
尾張上四郡の守護代。岩倉城主。弘治3年(1557)、信長の弟信行を支持して信長に反旗をひるがえす。永禄元年(1558)、信長の攻撃を受け、浮野で戦って敗戦。子の信賢に岩倉城より追放される。その後も美濃の斎藤義龍を頼って信長に対抗した。のち京都に移り、晩年は信長に庇護され閑居した。

といって抜刀し、一豊とともに敵を追い払った。彼は、一豊の働きにはよほど感心したらしく、

「さすがは、山内但馬の子じゃ」

と称賛したといわれる。

また、家臣の萩原市助なる者が反逆したと知れた際、政倫は家臣二人に討手を命じたが、市助を恐れる二人は、なかなか手を出せずにいた。それを見届けに赴いた一豊が一気に市助を斬り仆して首を掻き、城に戻って二人が討ち取ったと政倫に報告した。が、立ち帰った二人の説明で真相が知れ、改めて一豊の武勇が高まったと伝える。

そうしたうちにも、時代は激しく動き始めていた。尾張清須城の織田信長は、「大うつけ」と冷笑されていたが、この永禄三年の五月、桶狭間の合戦で東海の雄今川義元を撃破し、一躍天下に、「尾張に織田上総介信長あり」と名声を博した。

意気高揚した信長は、時を移さず美濃侵攻を企てた。実は、信長の妻奇蝶の父、すなわち美濃国主斎藤道三は、隠居後に嫡男義龍と抗争し、去る四年前殺される寸前に、娘婿の信長に美濃一国の譲り状を与えているのだ。

故に、信長の美濃侵攻には、舅の弔い合戦という名分があるわけだが、さすがに美濃は強国である。以来、信長は侵攻しては敗退し、また敗退を繰り返し、まさに蟷螂の斧の感があった。

「やはり、大うつけか……」

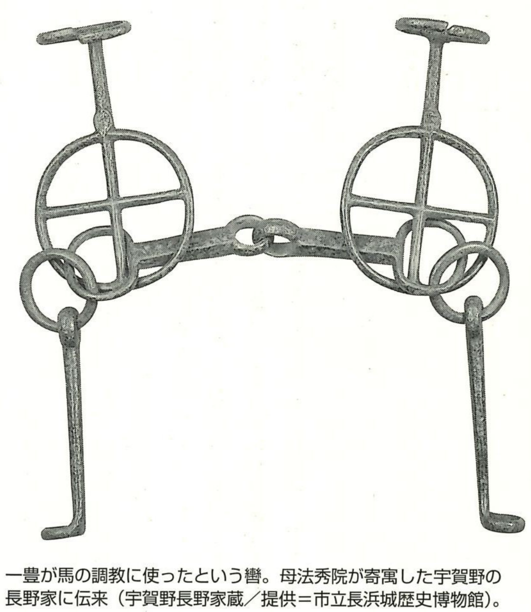
ふたたび、冷笑の噂が聞えるようになり出しており、客観的にも、信長の美濃侵攻は不可能と思われた。稼働兵力、財力等を比較して、誰もがそう見た。

が、信長は諦めず、三河の松平元康（後の徳川家康）と結び、美濃の北隣、近江小谷城の浅井長政に妹お市を嫁がせて同盟し、更には甲斐の武田信玄との同盟を実現させるなど、あらゆる手段を用いて、驚くばかりの根気強さで、着々と美濃包囲網を構築したのである。

その信長の頭上に女神が頬笑んだのは、侵攻開始から七年目になる永禄十年（一五六七）八月のことだった。当主龍興の重臣で「美濃三人衆」と称される稲葉一鉄、氏家卜全、安藤守就らが信長に降るという。内部崩壊が斎藤家に起きたのだ。

この時、目覚ましい働きを示したのが、木下藤吉郎秀吉だった。この才覚に富んだ漢は、斎藤方の兵に擬装し、間道伝いに稲葉山城中に潜入、竹竿に結びつけた瓢箪を振ったのを合図に味方を城内へ引き入れた上、火を放ったのが落城の糸口となったのだ。ついに敵将斎藤龍興は城を捨て、木曽川を舟で下り、伊勢長島へと落ちのびていった。

ここに、梟雄といわれ、蝮と称された斎藤道三以来の美濃国は、ついに信長の手に帰した。上洛の足場が確立された信長は、ただちに尾張小牧城から美濃稲葉山城へと居城を移した。この信長の居城移転が、はからずも山内伊右衛門一豊という、漂泊流転の若者の運命に、一筋の光をもたらすことになろうとは、なお当人も気づいてはいない。



一豊が馬の調教に使ったという轡。母法秀院が寄寓した宇賀野の長野家に伝来（宇賀野長野家蔵／提供＝市立長浜城歴史博物館）。

赤い糸の縁

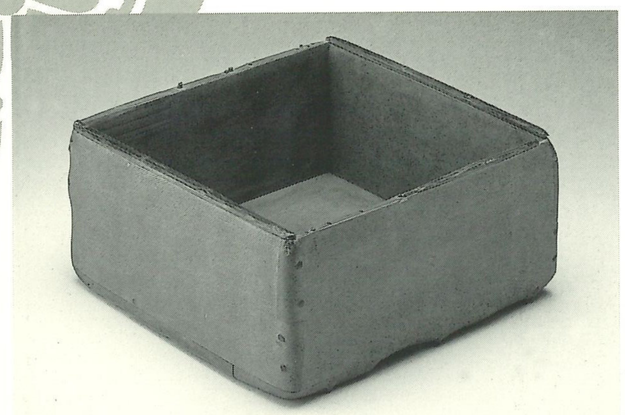
牧村兵部政倫は、「美濃三人衆」の一人稲葉一鉄の一族ゆえ、一鉄とともに信長に降った。この漢は、転身を決断するや、牧村城内の大襖に墨痕もあざやかに、

「羈絏」

と大きく書きなぐり、

「これからは、これでいく」

と言って、阿々大笑した、とある。「羈」は馬具の一つ「面繋」の意。「羈絏」とは、主君の馬の「おもがい」を執ることで、すなわち彼は、信長に臣事する、と言っているわけである。



結婚当初の一豊・千代夫妻は貧しく、枡を裏返して俎板代わりに使ったという。この枡は、文化3年(1806)に作成された模造品（土佐山内家宝物資料館蔵）。

一豊は、こうした気性磊落な兵部政倫が好きであった。政倫もまた、口数は少ないが時に目を見張るような放胆さを発揮する伊右衛門一豊という若者を好んだ。彼は、懇意になった稲葉山城攻めの殊勲者木下藤吉郎秀吉に、「お馬廻りになりと、良き若者を」といって一豊を推挙し、許された。

その上、この兵部政倫は、一豊の人生に更なる華を添えてやっている。貧しくはあるが嘱望するところのある若者のため、媒酌の労をとったのだ。そしてこの一事こそ、媒酌人たる政倫も、花婿の一豊すら露気づかなんだ最高の贈り物だった。

結婚の時期については、『山内家御記録』にも、「年月は不詳」とあって分明ではないが、恐らくは一豊二十六歳、花嫁千代十四歳頃であったろうと推定される。そしてこの二人が、冒頭に述べたごとく、まるで前世から赤い糸で結ばれていたような過去を有していることに驚かされるのであった。

一豊の母法秀院は、かつて兵部政倫のはからいで、戦乱の美濃を避け、近江国坂田郡法性寺村宇賀野の土豪長野助市の屋敷に寄寓していた。そこで近在の子女に裁縫や読み書きを教えていたが、その中に宇賀野の南隣りの飯村から通っていた少女がおり、それが他ならぬ千代だったのだ。

千代は、小谷城の浅井氏の家臣若宮喜助友興を父に、明智光秀の家臣石川小四郎の娘を母に生まれ、四歳のとき父が討死して孤児となった。それで一時母親は、妹の稼ぎ先である美濃の豪族不破市之丞方に身を寄せたが、やがて生まれ故郷の飯村に戻ったのである。言うなれば戦国遺児同士の婚姻だが、千代の賢さ、気性を知る法秀院は、息子一豊の嫁として異存はない。

それにしても、花嫁千代は、母娘とも食客とはいえ、美濃不破地方切っての豪族不破家で、殆ど実の娘同様に、豊かに過ごしてきた女だ。岐阜城下における貧しい暮しには、さぞかし驚いたに違いない。なにしろ、俎板が無いので、米をはかる枡を裏返して青菜を刻んだほどなのだから。この窮状から脱出するには、ただただ功名手柄を立てるしかないと、胆に銘じた一豊であった。

永禄十一年（一五六八）十月、将軍足利義昭を奉じて上洛を果した信長は、二年後の元亀元年（一五七〇）四月、越前朝倉征伐の軍を起こし、若狭から敦賀へと攻め入り、手筒山城を落とし、金ケ崎城へと進撃した。一豊も木下藤吉郎の手に属し、その攻め手の中にいた。

「押せ、押せい！」

全軍奮い立ち、朝倉氏の本拠一乗ケ谷まで一気に駈け抜けるかとすら思われた。ところが、不測の事態が生じた。信長の妹お市の嫁ぎ先であり、強固なる同盟と信じられていた近江小谷城の浅井長政が離反したという情報がもたらされたのだ。

この時である。お市が陣中見舞いと称して、小豆を入れた布袋の両端を紐で結んだものを届け、兄信長に挟み討ちの危険を報じた、というエピソードを生んだのは。戦国にあっては、婚家の安泰よりも実家の利を優先するのが、女人の負わされている倫理なのである。

「これは……」

信長は顔色を変えた。

功名一番

浅井長政の離反を知ってからの信長がとっ

斎藤道三（さいとうどうさん）
明応3?～弘治2（1494?～1556）
山崎屋と号し油を商ったと伝わる。美濃守護土岐氏の老臣長井氏の門に出入りし、享禄3年(1530)、長井氏の名跡を継ぐ。天文7年(1538)、守護代斎藤氏を継いで稲葉山城に拠る。同11年(1542)、土岐頼芸を追い美濃を押領。弘治2年(1556)、子の義龍と長良川で戦い敗死。娘奇蝶は信長の室。



（常在寺蔵）

今川義元（いまがわよしもと）
永正16～永禄3（1519～1560）
今川氏親の子。兄氏輝の死により家督を継ぎ、駿河·遠江を領国とする。太原崇孚(たいげんすうふ)に補佐され三河も支配。今川家の全盛時代を築く。北条氏康·武田信玄と三国同盟を結んで東方の安定を得たのち、永禄3年(1560)、西上を図り尾張に侵攻。信長の奇襲を受け、桶狭間で討死した。



浅井長政（あざいながまさ）
天文14～天正元（1545～1573）
浅井久政の子。近江小谷城主。永禄3年(1560)、六角義賢を破り、南進政策をとって近江での勢力を拡大。永禄11年(1568)、信長の妹お市を室とする。元亀元年(1570)、信長の越前侵攻が始まると、朝倉義景とともに姉川に戦うが敗れる。天正元年(1573)、信長に小谷城を攻められ自害。

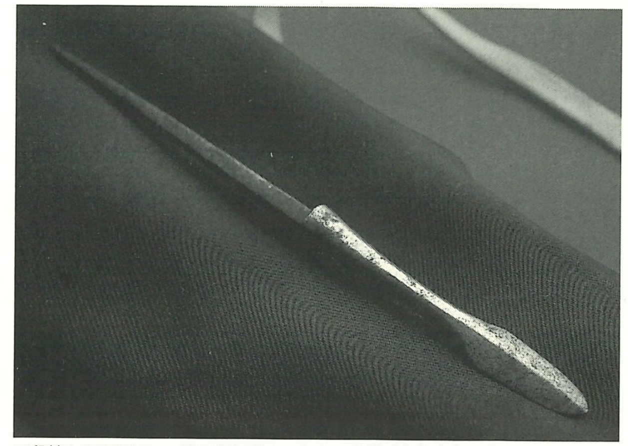


（高野山持明院蔵）

斎藤義龍（さいとうよしたつ）
大永7～永禄4（1527～1561）
斎藤道三の長男。土岐頼芸の子ともいわれ、道三と義龍の不和はこれに起因するという。弘治元年(1555)、長井道利と謀って2人の弟を殺し、道三と絶縁。翌2年、長良川の戦いで道三を討ち、稲葉山城主となる。以後、舅の敵を名目に美濃に侵攻する信長とたびたび戦う。永禄4年(1561)病死。



（常在寺蔵）



三段崎との死闘で、一豊の顔に刺さったという鏃（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。

た行動は、まさに迅速というに価した。急拠、秀吉を金ヶ崎に殿軍として残し、身辺わずか十名ほどで馬に飛び乗ると、急ぎ朽木越えで京都へ逃げ帰ったのだ。

実は、このとき一豊は、瀕死の重傷を負っていた。朝倉軍を追撃中、近江と越前の国境近い刀根越えの峠で、朝倉方の猛将として聞こえる三段崎勘右衛門と遭遇。死闘のすえに討ち取ることが出来たのだが、一豊自身も、豪弓で知られる勘右衛門の矢を受けたのだ。矢は左の眼尻下から口中を刺し貫いて、奥歯までいたる、という凄まじさであったが、屈せず一豊は、二の矢を継がんとする勘右衛門に組みつき、坂を転がり落ちたところで、ようやく鎧通しで仕止めることが出来た。

しかし、顔に受けた重傷と組み討ちに精根使い果たした一豊は、勘右衛門の首を掻き取る力が無く、ただ呆然と座していた。すると、そこにかねて昵懇の大塩金右衛門が通りかかって首を落とし、

「介抱して進ぜたいが、命によって先へ進まねばならぬゆえ、お許しあれ。いやいや、その首は貴公の手柄、拙者はただ加勢したまでのこと」

といって、先へ進撃していった。戦陣中での佳話であり、金右衛門の人柄がしのばれて心暖まるものがある。

金右衛門が立ち去るのと入れ代りに、「おお、これに御座りましたか！」と喜びの声を上げて走り寄ったのは、一豊の家来五藤吉兵衛である。乱戦の中で主従はぐれたのだが、吉兵衛は主人の矢傷に驚き、急ぎ抜き取ろうとした。然し、三段崎勘右衛門との組み打ちで矢の柄は折れ飛んで短く、目尻から口内を貫いた鏃は、引き抜くに引き抜けない。

止むなく吉兵衛は口を寄せ、歯に挟んで抜こうとはかったが、これも徒労におわった。一豊は、苦痛に顔を歪めながらも、顔に足をかけて抜けと命じた。それで吉兵衛は草鞋を脱ごうとした。草鞋を履いたままでは主人に失礼になると思ったからだが、一豊はそれを見て、「草鞋履きで構わぬ」という。乱戦の最中だ。「それでは御免！」。吉兵衛が草鞋履きの足を一豊の顔に掛け、力一杯に引き抜くと、一豊は一声唸って気絶した。

このとき五藤吉兵衛の履いていた草鞋は、のちに山内家の重臣となった五藤家の家宝として伝来したという。ともあれ、三段崎勘右衛門を討ち取った一豊の武功は、秀吉から信長に言上され、感じ入った信長は、これにて手当てせよと、薬を一豊に与えたと伝える。

配下の一豊の武功を言上した秀吉自身も、実は、調略によって金ヶ崎城を開城させ、朝倉勢の追撃を阻止するなど、殿軍の任務を見事に果たしており、「藤吉郎の金ヶ崎退き口」という武名を上げている。

主従そろって功名手柄を立てたわけだが、一豊は矢傷を養いながら、

「まだまだ、これからよ」

と不敵なのであった。

そして六月、江北小谷城に近い姉川を挟んで、織田信長・徳川家康の連合軍三万四〇〇〇と、浅井長政・朝倉義景連合軍一万八〇〇〇が対峙した。姉川の合戦場について、『武功夜話』は、

「姉川大きく迂回、河原広大にて水流二条、水枯れて床あらわなり。北国街道より六、七町離れて人家粗なり。前方に野村郷あり、この間は格別遮るもの相無し。姉川は深き所三尺余り。石河原打ちつづき……」

と記している。

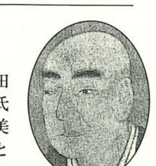
この姉川を挟んで、敵味方合わせて五万余もの大軍が対峙したのだ。さしもの秀吉も、

足利義昭（あしかがよしあき）
天文6～慶長2（1537～1597）
室町幕府第15代将軍。足利義晴の次男。僧籍に入り覚慶と号したが、兄義輝が自刃したのち還俗。幕府再興を目指して信長と結び、永禄11年(1568)、信長に奉じられて上洛、将軍となる。のち信長と対立し、武田氏や朝倉氏と結んで信長打倒を企図。天正元年(1573)、挙兵するが敗れ、室町幕府は崩壊。



（等持院蔵）

稲葉一鉄（いなばいってつ）
永正13～天正16（1516～1588）
美濃の国人。幼時に仏門に入るが、大永5年(1525)、牧田合戦で浅井氏と戦った父と兄が討死したため、還俗。土岐氏に続いて斎藤道三に仕えるが、その孫龍興と対立。信長の美濃攻略にあたり、同じく美濃三人衆の氏家卜全、安藤守就と謀って内通。のち信長に仕え、姉川の戦いなどで功を立てた。



「某、かくの如き大軍の対陣野戦の出入りは、かつて相無く候。江州の猛将磯野丹波の正面、これに当るは是非なき事に候」

と、思わず弱音を吐いたほどであった。軍師の竹中半兵衛にはかると、こう答えた。

「わが木下陣所は、信長公の御本陣と離るること一町半ばかり、いざ開城となれば、恐らく浅井・朝倉勢は、信長公本陣めざして、まっしぐらに突入してくるに相違なく、われらが陣は真向からぶつかることになる。御覧の如く敵を支える堀割りも防柵も無い現状では、人馬の被害が大きいから、直ちに横一線に配した陣形を急ぎ立て直して候え」

直ちに半兵衛の下知に従い、馬乗六〇余騎を前方に備え、残りの馬乗五〇余騎は円陣を組み、大将の秀吉を囲んで、鑓の歩卒で四方を固める陣形をとり、開戦の時を待った。

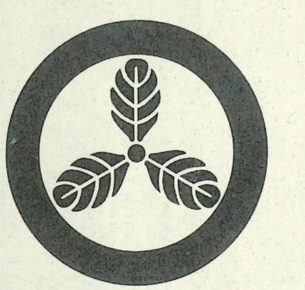
これも『武功夜話』によると、「開城は辰五ツ半の頃合い」とあるから、今の午前九時頃か。たちまち両軍激突し、入り乱れて大乱戦となった。敵味方の旗差物が揺れ動き、陣太鼓が鳴り響いて、どよめく人馬……。もはや山内伊右衛門などは、こうした大軍の乱戦の中にあっては、単なる一つの黒点に過ぎない。

野獣のような怒号の中を、一豊は夢中で駈けずり回り、眼前に大きく迫る馬体を渾身の力を込めた白刃で薙ぐと、馬上からもんどり打って落下した敵将の喉に、さっと刃を刺した。この姉川合戦は、「野戦の駆引き、三州徳川家康公に勝る者相無し」という客将家康勢の活躍で織田・徳川方の大勝に帰し、一豊は論功行賞で四〇〇石を与えられた。

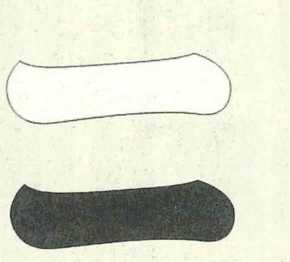
（ながおかけいのすけ・作家）

Column　一豊使用の家紋

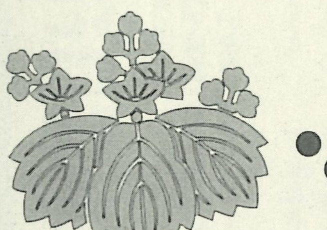
（資料提供＝土佐山内家宝物資料館）



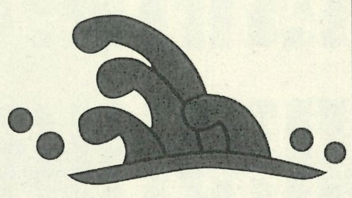
丸三葉柏紋
（まるにみつばかしわもん）
使用開始の時期には諸説あるが、一説によると、一豊の父盛豊が丹波の合戦において柏葉を指物とし、苦戦の末勝利したときに三枚の柏葉が残っていたことを吉例にして、家紋にしたという。



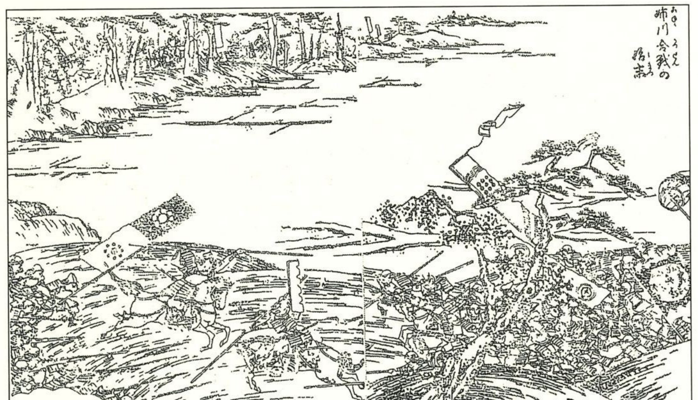
白黒一文字紋
（しろくろいちもんじもん）
「一」は「かつ」とも発音され、これが「勝」に通じることから武家の名乗りや紋に好んで用いられた。鎌倉時代に山内を称し始めた俊通の頃から使用された紋といわれ、全国の山内家で使用されている。



五三桐紋
（ごさんのきりもん）
豊臣秀吉が朝廷から下賜された桐紋を一豊が拝領したものといわれるが、その時期など詳細は不明。



立波紋
（たつなみもん）
もとは家臣前野氏の紋だったが、打っては引く波が武家の紋にふさわしいとして、一豊が一時期使用。



織田・徳川連合軍と、浅井・朝倉連合軍は姉川を挟んで対峙。激戦を展開したが、朝倉軍の敗走を機に浅井軍も総崩れとなり退却した（「絵本太閤記」より）。

竹中半兵衛（たけなかはんべえ）
？～天正7（？～1579）
竹中重元の子。美濃岩手菩提山城主。はじめ斎藤龍興に仕える。永禄7年(1564)、龍興の居城稲葉山城を奪取するが、すぐ龍興に返した。龍興没落後は信長に仕え、秀吉に付属。秀吉麾下の智将・謀将として重んじられた。天正7年(1579)、秀吉の播磨平定戦に参加した際、三木城攻囲の陣中で病死。



（個人蔵）

朝倉義景（あさくらよしかげ）
天文2～天正元（1533～1573）
朝倉孝景の子。越前守護。永禄8年(1565)、将軍足利義輝が自刃すると、その弟義昭を迎えて元服させた。元亀元年(1570)、信長の侵攻を受け、浅井長政とともに姉川に戦うが大敗。以後、浅井氏・武田氏・本願寺などと結び、信長に敵対。天正元年(1573)、近江刀根坂の戦いに敗れ、越前で自刃。



（心月寺蔵）

夫婦ともども出生地に二説あり?!

山内一豊と妻千代の出生地にはそれぞれ二説がある。一豊のほうは父母がはっきりしているが、尾張国内で岩倉と黒田の二説ある。妻千代に関しては近江説と美濃説とがせめぎ合い、いまだに決着をみていない。

文=川口素生
Kawaguchi Sunao

藤原秀郷を祖とする山内家 一豊の出生地は尾張国で二説が

山内一豊は天文十四年（一五四五）に尾張国（愛知県西部）で出生した。なお、生年を天文十五年とみる説もある。

この山内家は平将門を討伐したことで名高い藤原秀郷の子孫。十二世紀初頭、首藤（藤原）俊通が、相模国山内（神奈川県鎌倉市付近）に住んで山内を称した。俊通の子経俊の時に源頼朝に仕え、伊勢・伊賀（三重県）両国の守護に抜擢される。鎌倉時代中期、山内家の俊家・時俊の兄弟が所領をめぐって争い、敗れた兄俊家は丹波国三宮城（京都府京丹波町）に移り住む。この俊家が、一豊の家の直接の先祖ということになる。以来、山内家は二百数十年間、この三宮城を居城とした。

『寛政重修諸家譜』によると、大永年間（一五二一〜二八）の頃、当主山内久豊は三宮城を離れ、第十二代将軍足利義晴に従って各地を放浪。のちに義晴のもとを去って尾張国で客死したという。久豊の子盛豊は尾張国岩倉城（愛知県岩倉市）主織田家に仕官し、家長（家老）、尾張国黒田城（愛知県一宮市木曽川町黒田）主にまで栄進する。なお、岩倉織田家は、尾張半国の守護代であった。この盛豊こそが一豊の父である。母は正室の法秀院で、尾張国羽黒城（愛知県犬山市羽黒）主梶原氏の女であった。

ところで、父が岩倉織田家の家長兼黒田城主であったことから、一豊の出生地については古くから尾張岩倉説と尾張黒田説とが主張されてきた。まず、尾張岩倉説とは、一豊が主君の居城である岩倉城、もしくはその城下で出生したとみる説である。次の尾張黒田説とは、一豊が父の居城・黒田城で出生したとみる説である。こういった関係で、岩倉城跡に近い神明生田神社の境内と、黒田城跡に近い法蓮寺の境内とに、それぞれ一豊の出生地の石碑が建立されている。神明生田神社は盛豊が天文二十三年に社殿を寄進したといわれる神社で（『同社棟札』）、法蓮寺は盛豊と兄十郎の墓所である。なお、『御家傳記』（『一豊公紀』所収）などの系譜類には、一豊が黒田で出生したと明記されている。


法蓮寺の山門手前に建つ一豊出生之地碑と案内碑（愛知県一宮市木曽川町）。

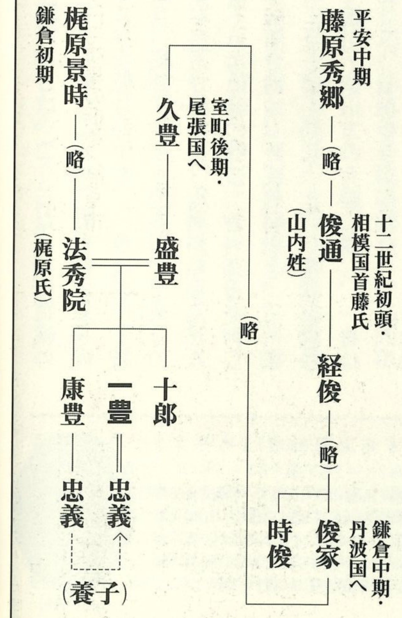
従来の近江若宮氏説に対し近年は美濃東氏説が浮上

「内助の功」で名高い一豊の正室千代（見性院）は、弘治三年（一五五七）に出生したとされている。けれども、見性院という法号は未亡人となってから名乗ったもので、実のところ俗名や生年は正確には伝えられていない。

出自や出生地についても同様で、複数の説があって判然としない。そういったなかで、かつて千代の出自、出生地については近江説が優勢であった。近江説とは、千代の父を若宮喜助友興、母を石川小四郎の女、出生地を近江国飯（飯村／滋賀県米原市〔旧近江町〕飯）とみる説である。若宮氏も藤原秀郷の末裔とされるが、飯に近い若宮（同市）に住み、「若宮」を称した。

友興は近江国（滋賀県）の戦国大名・浅井長政の家臣で、永禄九年（一五六六）に討死を遂げる。外祖父の小四郎は明智光秀の重臣で丹波国亀山城代であったというが、定かではない。『若宮文書』によると、同年閏八月十三日、長政は友興の女と思われる「御まつ御料」に三か所の領地を安堵している。飯には若宮家の屋敷跡といわれる場所があり、二種類の若宮氏の石碑が建立されている。

【山内家略系図】



御料とは正しくは御料人といい、婦人に対する敬称である。「御まつ御料」というのが最初の俗名という主張がある。ただ、「御まつ」は千代とは別人で、五藤為重（山内家の家老）の妻となった女性の俗名という見方が根強い。なお、天正初年に飯に近い宇賀野（同市宇賀野）に住んでいた法秀院が、少女時代の千代に裁縫を教えたという伝承も残る。これが縁となり、千代は一豊に嫁いだとされている。

これに対して、平成に入ってから俄然脚光を浴びるようになったのは、美濃説（美濃郡上八幡説）である。美濃説とは、千代の父を遠藤（東）盛数、母を正室東常慶の女（友順尼）、出生地を美濃国郡上八幡（岐阜県郡上市八幡町）とみる説である。

『寛政重修諸家譜』は一豊の正室を「若宮喜助友興が女」と記す一方で、盛数の三女のことを「山内対馬守一豊が妻」と記している。以上のように、江戸時代後期に早くも、一部では美濃説が取り沙汰されていたのである。このことに関しては、土佐藩士の系譜集『御侍中先祖書系図牒』（高知県立図書館所蔵）に、土佐藩士遠藤三作（留守居組）の先祖について、

「遠藤但馬守慶隆弟、助次郎慶胤男（中略）山内対馬守一豊公室と家系ニ有之」

と記されている。さらに、岐阜県下に残る『秘聞郡上古日記』などにも、千代は盛数の女と記されている。以上の系譜集・史料などから、千代は遠藤（東）盛数を父、東常慶の女・友順尼を母として美濃国郡上八幡で生まれたと断定しても良いであろう。ちなみに、近年、郡上八幡城に近い城山公園に千代、一豊、それに愛馬の銅像が建立された。

この遠藤（東）氏は桓武平氏千葉氏の末裔で、下総国香取郡東荘に住み、「東」を称した。子孫は美濃郡上郡に移り住むが、室町時代の東常縁は和歌の奥義・古今伝授を受けたことで名高い。戦国末期の盛数は分家の遠藤氏から宗家の当主常慶の女婿となり、常慶の嫡子と争った末に家督を相続。郡上郡を版図に収め、新たに郡上八幡城を築く。

以後、盛数は美濃国（岐阜県南部）の戦国大名・斎藤龍興（道三の孫）に仕えていたが、永禄五年（一五六二）十月十四日に井ノ口（岐阜の旧称／岐阜市）で討死を遂げた。このことが、女の千代（六歳）の生活環境を一変させたものと思われる。

盛数の嫡子は千代の兄に当たる遠藤慶隆であったが、当時やはり十三歳と若かった。このため、遠藤家の一族や家臣たちは評定の上、斎藤家とのつながりを強化するべく政略結婚をまとめた。それは盛数の未亡人、つまり慶隆や千代の母友順尼を美濃国関城（岐阜県関市）主長井道利に再嫁させるという驚くべきものであった。友順尼は当初は難色を示すが、家臣が説得して故道三の子（もしくは弟）に当たる道利のもとへ再嫁させた（『遠藤記』）。

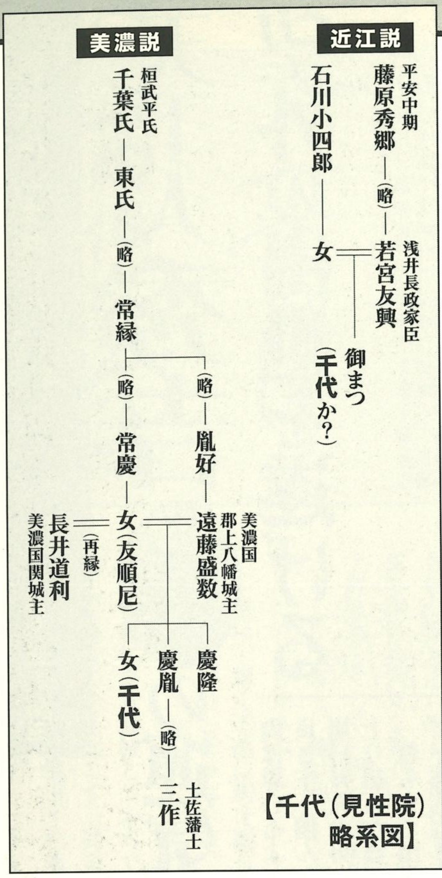
やがて永禄十年に斎藤家が滅亡すると、道利は織田信長に降るが、のちに離反して畿内で討死を遂げる。こういったなかで、母と千代が道利に伴われて各地を放浪したと説く向きもある。

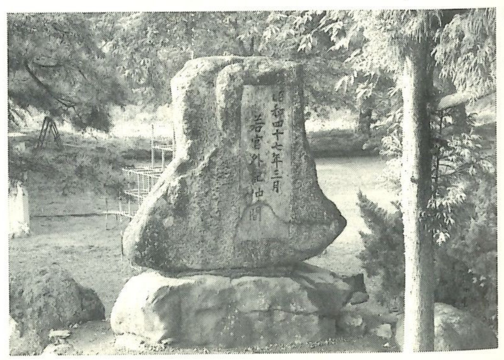
しかしながら、遠藤氏の菩提寺・乗性寺（岐阜県郡上市美並町〔旧美並村〕）の文書（『美並村史』所収）によると、友順尼は斎藤家が滅亡する直前の永禄十年七月に没している。

したがって、母と千代が道利に伴われて放浪したという事実はないのである。ともあれ、慶長十年（一六〇五）に一豊が病死すると、家督は一豊の甥忠義が嗣ぐ。千代は半年後に京都へ移住し、元和三年（一六一七）に没した。自身の出自を忠義に詳しく伝える機会がなかった、あるいは京都移住などにより系図類が散逸したというのが、千代の出自が忘れ去られていた直接的な原因ではないかと考えられる。

（かわぐちすなお・歴史研究家）

【千代（見性院）略系図】




千代ゆかりの若宮氏遺領を地元の人が共同管理して建てられた顕彰碑（滋賀県米原市）。

一豊・千代の生涯Ⅱ

天正1（1573）～慶長3（1598）

一豊29歳～54歳

天下人秀吉の運気に乗り望外の出世を遂げる

俺は思いもよらぬ良き主を掴んだのかも知れぬ！
旭日昇天の勢いで太閤の地位へ上り詰めた豊臣秀吉の傍らで一豊もまた出世を重ねていった。
だが秀吉亡き後、再び天下は動きだす。
果たして一豊は――。

文＝永岡慶之助
Nagaoka Keinosuke

小領主誕生

ついに一豊は、唐国四〇〇石という、小さな領主となり得た。とにもかくにも、小なりといえども領主なのだ。漂泊流浪の来し方を思えば、さすがに深い感慨を覚えずにはいられなかった。

北国街道沿いの、往昔、韓国連が住したという来歴を有する、この特異な地名の所領に、一豊と千代は明るい希望を抱いた。が、領主となりえた喜びも束の間に、たちまち厳しい現実に直面した。

にわかに、一二万石小谷城主となった木下藤吉郎秀吉は、これを機に羽柴筑前守秀吉と名乗ると同時に、不便な小谷の山城を捨て、琵琶湖畔の今浜に新城を築き、移転することを決意したのだ。今浜は秀吉によって長浜と改称されるが、古来、湖上水運の要衝である。

天正二年（一五七四）春、秀吉は江北の三郡――伊香郡・東浅井郡・坂田郡の全領民に対し、職種を問わず僧侶にいたるまで、各戸に一人ずつ人夫として、鋤・鍬・畚を持って参集し、築城工事に従事するよう厳命した。

一豊も工事現場の監督を命ぜられ、家臣とともに出動したが、勤番当日、たちまち困惑したのは、夜食の用意も出来かねると気づいたからである。四〇〇石の領主になったとはいえ、美濃以来の旧臣らも集まり加わったこともあり、山内家の台所事情は、まさに赤貧洗うが如しだったのだ。

一豊の妻千代が長い黒髪を切って売り、夜食を調達したという美談が誕生したのは、この時のことである。黒髪は、当時すでに髢の材料として高価に売れたようで、かもじ屋なる商売すらあった。ちなみに髢は、髪を結う際、自毛の少ないときに、髪の短さ、薄さを補うのに用いるものである。

千代が髪を売ったこの話、実は似た前例があるのだ。いま信長麾下にあって秀吉と出世を競い、やがて対決することになる宿命的なライバル、明智日向守光秀が世に出る前、越前坂井郡長野村（丸岡町）に浪居していた当時、妻女が髪を売って、夫の客を遇しているのだ。後世、この地を過ぎた俳人松尾芭蕉は、右の語り遺しを聞いて感動し、

月さびよ明智が妻の咄せむ

と詠み、「かの日向守の妻、髪を切て席をもうけられし心ばせ……」と記している。

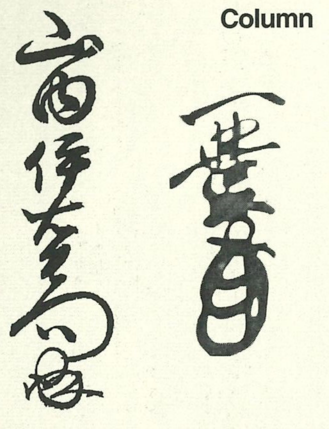
そして千代の母は、光秀の家臣石川小四郎なる者の娘という。もしかすると千代は、光秀の妻の髪売りのエピソードを、母から聞き知っていたのではなかろうか。ともあれ一豊は、千代の才覚により、危うく領主たる面目を保つことが出来たわけだが、さらに彼は、妻千代に頭の上らぬ、決定的な内助の功にあずかることになる。

天正四年（一五七六）淡春、信長は安土城を築いて岐阜から移った。すなわち、秀吉の長浜築城二年後である。安土城は、天守閣や二の丸など、一部が完成したのみなのだが、待ち切れずに乗り込んだ信長は、普請奉行丹羽長秀に名器「珠光茶碗」を与えて労をねぎらう一方、馬廻衆などの直臣に、安土山麓に屋敷を普請するよう命じている。

この安土城を拠点に、信長の天下制覇の戦略は本格化した。すぐさま秀吉は、中国攻略という重大使命を与えられ、これより数年の間、得意の調略作戦を駆使して、次々と諸城を落していくことになる。彼は播磨攻略の戦功で、信長から名器「乙御前の釜」を与えられ、以後、茶湯会を催すことを公認された。さらに翌天正六年（一五七八）晩秋には、信長の四男於次丸を養子に迎えており、まさに上昇気流をその手に握った感があった。

（もしかすると、俺は思いもよらぬ良き主を掴んだのかも知れぬ！）

一豊は、輝く予感に胸を躍らせた。その予感が現実のものとなったのは、天正八年（一五八〇）正月、播州三木城が、城主別所長治の自殺により落城してからである。一豊もまた、秀吉の巻き起こす上昇気流に乗ったように、播磨有年（赤穂市）の地に二〇〇〇石の所領を賜ったのだ。



Column　一豊の署名と花押

【左】天正4年（1576）、竹生島の堂宇復興のために寄進を行った際の記録簿「竹生島奉加帳」（竹生島宝厳寺蔵／提供＝市立長浜城歴史博物館）より。「山内伊右衛門尉」と記されており、一豊の署名と花押を確認できる最古の史料とされている。

【右】慶長6年（1601）、土佐一国の太守となって領国経営にあたる一豊が下した「領地判物」（個人蔵／提供＝安芸市立歴史民俗資料館）より。「一豊」の署名と花押がある。

名馬を買う話

天正九年（一五八一）二月十八日、信長は大馬揃えを催した。兵馬倥偬の間に、ふっと訪れた平安の一日に、閲兵式という華麗なる一大イベントを企てたのだ。これを『信長公記』は、

「二月廿八日、五畿内隣国の大名・小名・御家人を召し寄せられ、駿馬を天下に集め、御馬揃へをなさる」

と記している。

所は京都上京・内裏の東に八町の馬場をしつらい、馬場には緋毛氈で包んだ木材で仮の行宮を設け、聖上および摂家・清華の衆の来臨を仰ぐという空前の豪華さであった。

この一大馬揃えで、山内伊右衛門一豊の持馬が信長の眼にとまり、激賞されるという思いもよらぬ事態となった。ここに一豊・千代夫妻の馬買いの美談が浮上することになる。今や天下の気運、信長の拠る安土城に集まるという威勢を当てに、諸国の名馬駿馬の馬市が城下に立った。

その数百頭にもおよぶ駿馬の中でも、誰もが目を奪われながら手を出しかねたのが、奥州南部産の名馬だった。高価に過ぎるのだ。もとより一豊には手が出せず、ただただ嘆息するばかりである。ところが、これを知った千代が、鏡箱の底から黄金一〇枚を取り出し、一豊に「これにて購められよ」と言った。これはと驚く一豊に、「こなたへ嫁入る際、夫



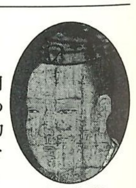
郡上八幡城の本丸跡に建つ山内一豊・千代の像（提供＝郡上市産業振興課）。

丹羽長秀（にわながひで）
天文4～天正13（1535～1585）
丹羽長政の子。信長に仕え、元亀元年（1570）、近江佐和山城主となる。信長の死後、秀吉とともに明智光秀を破り、清洲会議では秀吉を支持。天正11年（1583）、賤ヶ岳の戦いで秀吉に従って柴田勝家を破り、越前、若狭と加賀半国を領した。同12年（1584）の小牧の戦いでも秀吉に属した。同13年死去。

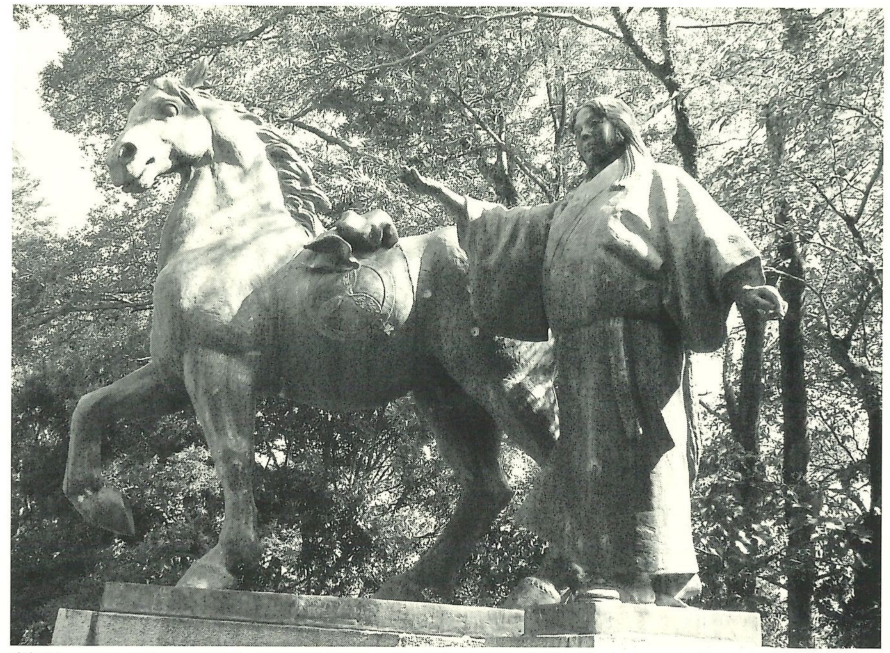


（大隣寺蔵）

明智光秀（あけちみつひで）
享禄元？～天正10（1528？～1582）
美濃土岐氏の一族。はじめ朝倉義景に仕え、のち信長に重用されて足利義昭の上洛に尽力。寺社や公家との交渉役を務めた。元亀2年（1571）、近江坂本城主。のち丹波攻略などに功を立て亀山城主となる。天正10年（1582）、本能寺に信長を討つが、山崎の戦いで秀吉に敗れて逃走中、農民に殺された。



（本徳寺蔵）



高知城にある見性院銅像（提供＝高知市観光課）。千代が黄金10両で名馬を買ったという逸話をもとに製作された。

の大事の時に用えよと、母から贈られたものにございます」と答えたとある。

この時のことを『常山紀談』は、

「一豊悦ぶ事限りなく、やがて其の馬求めてけり。程無く京にて馬揃へありし時、打乗りて出しかば、信長大いに驚き『あっぱれ馬や』とて事の由を聞き給ひ、『東国第一の馬、遥かにわが方に牽きて来たりしを、空しく帰さんは口惜しき事ぞよ。それに年比山内は久しく浪人してありしと聞く。家も貧しからんに、求め得たるは、信長が家の恥を雪ぎたるよ、弓箭取る身のたしなみこれに過ぎたる事やある』と感じて、これより次第に用ひられしとぞ」

と記しているが、新井白石の『藩翰譜』は、

「価、貴き馬なり。当時天下に信長の家ならで買ふべき人なしとて、奥よりはるばる来りしを、空しく還したらんには、無念の至りなるべし。その山内は、年頃久しき浪人と聞く、家もさぞ、貧しからんに買ひ得たる事の神妙さよ。且は信長の家の恥をもすすぎ、且は武士のたしなみ、いと深し」

と信長が絶讃したと述べているが、いかにも冷徹な白石らしく、右の美談を記したあと、「誠にや」と疑念を呈している。

先に記したように、天正九年の一豊は、すでに播磨有年に二〇〇〇石の所領を有する身なのだ。いかに高価な名馬とはいえ、馬一匹買うのに、妻の助力を仰がねばならぬとは、いささか腑に落ちない。これが唐国四〇〇石を貰いたての天正四年頃とあれば、咄も落ち着くのだが。

その一豊も、翌天正十年（一五八二）五月には、秀吉に従って備中高松城を攻囲中に、生涯の命運を決する大事件に遭遇している。六月二日、本能寺の変が激発、翌三日夜半、信長横死の秘報が届いたのだ。

（これからどうなる!?）

さすがに一豊も驚いたが、秀吉は信長の死を秘して毛利輝元と講和し、高松城主清水宗治が自決するのを見届けるや、昼夜兼行で京都へ引き返した。京都郊外山崎で光秀を撃破してからの秀吉は、さながら風をはらんだように行動し、その前途を阻む者は、ことごとく弾きとばされた感があった。

翌十一年（一五八三）賤ケ岳に柴田勝家を撃破し、北ノ庄に勝家を自殺させた秀吉は、まるで急階段を馳せ上るように、天下制圧に直進した。一豊は勝家軍を追撃した戦功により、河内交野に三六〇石余を加増されている。この年秀吉は大坂城の築城を開始。工事は全国三〇余国の城持ち大名によって進められるという、わずか数年前には思いもおよばぬ豪勢さであった。

一豊は、こうした秀吉の大きく変貌していく姿を眼のあたりにして、

柴田勝家（しばたかついえ）
大永2〜天正11（1522〜1583）
はじめ織田信行、次いで信長に仕える。元亀元年（1570）、長光寺城籠城の際「瓶割り柴田」の勇名を轟かす。天正2年（1574）、越前国を与えられ北ノ庄城主。本能寺の変後、秀吉と対立。同11年（1583）、打倒秀吉の兵を挙げて近江に進出するが、賤ヶ岳の戦いに敗れ、北ノ庄で妻お市とともに自刃。



（西光寺蔵）

毛利輝元（もうりてるもと）
天文22〜寛永2（1553〜1625）
毛利隆元の長男。永禄6年（1563）、家督を相続。信長の中国侵攻に対抗。信長没後は秀吉に協力し、四国・九州征伐に加わった。天正19年（1591）、広島に移り中国9か国112万石を領す。豊臣政権の五大老の一人。関ヶ原の戦いでは西軍の総大将格となり、戦後は周防・長門の2国に減封された。



（毛利博物館蔵）

（どうやら千代の申す通り、この人物に従いておれば、間違いなく出世出来そうである）

と心から感嘆するのである。事実、この翌十二年には、かつて秀吉が築城し、居城とした長浜城に、五〇〇〇石をもって移されているのだ。

同年、小牧・長久手の戦いがあったが、交戦した徳川家康との講和が成立し、その晩秋に秀吉は権大納言に昇進、翌十三年（一五八五）には関白に就任している。長久手戦での徳川軍の采配を見て以来、一豊の胸に、

（家康という人物、記憶に留めておいてよさそうである）

という思いが刻まれた。おのれが戦功が取柄の人間だけに、実戦は家康が勝ち、外交で秀吉が勝利したと知っているからだった。

悲劇の季節

関白秀吉が好機嫌なのに対し、長浜城主となった一豊は、次々と訪れる不幸に呻吟していた。十三年、江北地方を襲った大地震で、一粒種の愛娘与禰が圧死したのである。

与禰は可愛い盛りの六歳。夫婦の悲歎は深く、これを機に法華宗から禅宗に改宗、参禅して心気の立て直しをはからねばならぬほどであった。しかも追い討ちをかけるように一豊の母法秀院が死去し、夫婦を呆然とさせた。

この頃である。山内家京都屋敷の門前に捨て子をひろったのは。

与禰を失った夫婦は、これを養育してみると、驚くほど利発だったので、一豊は養子にしようとしたが、千代は「素性も定かならざる者を相続者にしては、のちのち山内家のためになりませぬ」と言って強く反対した。確かに正論である。家臣誰もが捨て子と知っているのだ。のちに一豊の跡を継いで当主となった場合、果たして、家中を平穏に統率できるかどうか疑問といわざるを得ない。

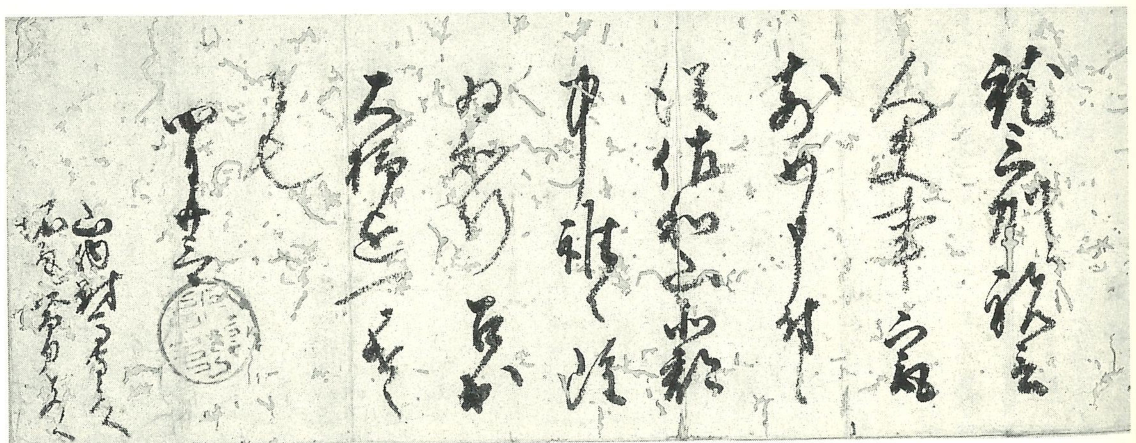
しかし、一豊は珍しく養子説を固持して譲らぬ。故に、実はこの捨て子、一豊が外の女に産ませたもの、との説があり、それを千代は女の鋭い勘で察知したのであろうか。

彼女は、捨て子が十歳になった時、「そなたは、この山内家にいてはなりませぬ。いずれかへ行って僧になりなされ」と言い含め、黄金百両と守の刀を与えて屋敷から出したといわれる。この少年、後日、京都妙心寺の南化国師の弟子となり、高徳の僧と称された湘南禅師となる運命を持つ。が、これらは後年のこと。

一豊にはなお合戦がつづき、越中富山城に佐々成政を攻め、その戦功により越前高浜城を一時居城としていた。その後ふたたび近江長浜城へ戻ったところで、秀吉の養子羽柴秀次の補佐を命じられた。

関白秀吉は九州平定を果たすと、ただちに関東へ目を向け、小田原の北条氏討伐を企てた。秀吉の再三にわたる上洛督促を拒否し、北条氏直は小田原城に籠もって動かないのだ。

ついに秀吉は、天正十八年（一五九〇）三



山内一豊・堀尾吉晴宛豊臣秀吉朱印状（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。天正14年（1586）、長浜時代の一豊に、旭姫の輿入れに伴う人夫徴発を命じたもの。

前田利家（まえだとしいえ）
天文7〜慶長4（1538〜1599）
前田利昌の四男。信長に仕え、天正9年（1581）、能登一国を与えられ七尾城主。本能寺の変後、柴田勝家が滅亡すると、加増されて尾山城に移る。秀吉治下で加賀百万石の礎を築く。秀吉没後は五大老の一人として秀頼を後見し、家康と反家康派の間にあって協調を図る。慶長4年（1599）、病死。



（個人蔵）

北条氏直（ほうじょううじなお）
永禄5〜天正19（1562〜1591）
北条氏政の長男。後北条氏第5代。天正8年（1580）、家督を相続。本能寺の変以後、上野・信濃に進出。武田氏の旧領をめぐって家康と対立するが和睦。上野・下野・上総などに勢力を拡大する。同18年（1590）、秀吉の小田原攻めを受け、3か月に及ぶ籠城の末に降伏。高野山に追放され、翌年に病死。



（小田原城天守閣蔵）



黒糸威七十六間小星兜(土佐山内家宝物資料館蔵)。掛川時代の一豊が、正月恒例の馭初(のりぞめ)の儀式の際、家臣祖父江勘時に与えたもの。

月、直属の軍勢三万二〇〇〇を率いて聚楽第を進発、東海道を東へ下った。これに先発の徳川率いる大軍が合流、その数およそ二二万をもって、大包囲網を構築した。時に一豊は、羽柴秀次とともに、小田原の最前線の支城山中城を攻撃陥落させ、韮山城を包囲していた。

　七月、氏直が降って小田原城も落城、早雲以来の北条氏は滅亡した。秀吉は徳川家康を関東へ移封させるとともに、遠州掛川城五万石に山内一豊を据えた。戦功者の一豊ならば、よしんば、万が一にも天下一変して、徳川軍が攻め上らんとしても、暫時は制止してくれるだろうとの計算からである。さしもの秀吉も誤算であったことを知らぬまま、逝くことになる。

　小田原討伐、さらには奥州平定を成しとげた秀吉は、関白職を養子の羽柴秀次に譲り、おのれ自身は太閤となったが、朝鮮出兵という途方もない夢想にとりつかれた。全国から三〇万余の将兵を集め、うち一〇万を留守部隊として肥前名護屋城(唐津市鎮西町)に常駐させるという壮大さである。

　その名護屋に秀吉が出陣中、かねて懐妊中の側室淀殿が男子を生んだという飛報がもたらされた。狂喜した秀吉は、俗諺によって男子に「拾」と名づけた。これが後の秀頼で、彼の出生した瞬間から、関白秀次の運命に狂いが生じた。

　実子を得た太閤秀吉は、養子の秀次をうとんじるようになったのだ。それでも最初のうちは、名護屋出陣中、京都聚楽第にあって国内の政治に当った関白秀次に賞辞を与えるなど、両者の間はいたって滑らかであった。

が、次第に太閤の関白に対する仕打ちは、疎外の色を濃くし、それに反応して関白秀次も急速に反抗的な態度に傾くなど、両者の関係は修復しがたいまでに深刻化した。

　先に秀次に付けられた老臣たち——中村一氏、堀尾吉晴、一柳直末、山内一豊らは困惑したが、どうすることも出来ず、はらはらして見守るばかりである。一豊などは、あまりに関白秀次に心入れ過ぎるとして、太閤秀吉の機嫌を損じ、危うく朝鮮の前線へ飛ばされかけたほどであった。

　ついに自棄的になった関白秀次は、不可解な行動に走るようになっていく。すると悪いことに、「殺生関白」などという風評が洛中に囁かれた揚句、「関白御謀叛」の噂まで飛び交って、一時、洛中が騒然となったほどである。

北の戦雲

　ここに一豊ら老臣は、太閤の命を受けて聚楽第に赴き、関係修復のため伏見城の太閤の前に参上するよう、関白秀次を説得した。秀次は説得を受け入れたものの、結果的に秀吉との対面は許されず、高野山に追われ、自決せしめられた。

(何たることぞ!)

　一豊は、額を叩いて痛嘆した。意図したわけではないが、結局、関白秀次の騙し討ちに加担したような後味の悪さがあった。

　太閤秀吉は、姉ともの長男で、おのれの養子である関白秀次を抹殺してまで、実子秀頼の成長に望みをかけたが、慶長三年(一五九八)八月十八日、

　　つゆと落ち露と消へにしわが身かな
　　　難波のことも夢のまた夢

を辞世に、六十二歳の生涯を閉じた。

　太閤亡き後、朝鮮からの将兵の引揚げなど、終戦処理に当ったのは、徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝ら五大老と、前田玄以、浅野長政、石田三成、増田長盛、長束正家ら五奉行だが、大老筆頭の家康の存在感が急速に重味を加えていく。

　家康は意識的に、太閤の遺命を踏みにじるかに思われた。諸大名間の婚姻は許可なくして勝手に結ぶべからずとあるのに、家康は伊達政宗の長女いろは姫を子息にめあわす縁談をすすめる一方、養女を福島正則の子正之、蜂須賀家政の子至鎮に嫁がせる約束をしていて、「文句があるなら、言うてみよ」と言わんばかりなのである。

　こうした情勢を見て、一豊は、

(家康が動き出したとなると、これからの天下は大きく変るぞ!)

と胸を躍らせるのであった。すでに彼は、

「今日、智・仁・勇の三徳を兼備した名将は、家康以外にはない」

と心中ひそかに断じており、妻女の千代も同感していたのである。天下の動向を窺い見た夫妻は、早くも豊臣政権から徳川へと軸足を移しており、

「一豊公掛川へ御入部已来、家康様秀忠様江戸より上方へ御往来の節、掛川に於て御饗応なされ、且又、御譜代衆上下のとき、人馬の用、宿次の飛脚などお達しなされるにより、家康様より御内緒頂戴……」

という有様だったのだ。これはすでに、家康の家臣同様ではないか。恐らく、時勢に鋭く賢い千代は、次の天下人は家康と見ていたに違いない。

　慶長五年(一六〇〇)に入る早々、にわかに天下が騒がしくなった。「会津の上杉景勝に叛意あり」との風評が立ったのだ。新城を築城し、道路を整備し、牢人をどしどし召し抱えているというのである。

　直ちに家康は、豊臣政権の筆頭大老として、会津の上杉家へ詰問使を派遣、築城の真意を質したところ、家康の顔を逆撫でするような、挑戦的な長文の返辞が返ってきた。返書の作成者は、上杉家にその人ありと知られた謀将直江山城守兼続である。

「来るなら、来い!」

という彼の顔が見えるようであった。

　直江兼続は上杉家の筆頭家老だが、一陪臣の身にして、秀吉の格別なるはからいにより、会津上杉家一二〇万石の四分の一にあたる三〇万石を与えられ、米沢の城をあずかる天下に名だたる利け者なのである。

「おのれ、直江山城め!」

　激怒した家康は、ここに会津上杉家討伐の軍を起こし、福島正則、細川忠興ら諸将に先発を命じ、みずから陣頭に立って北上を開始した。前後して浅野幸長、池田輝政をはじめ黒田長政、蜂須賀家政らも、奥州へ向かって進発した。

　伏見からは、酒井、榊原、井伊、本多ら徳川家の旗本が、家康の身辺に寄りそった。家康が伏見城千畳敷の大広間に立って、独りにこにこしていたというエピソードはこの時のことである。家康は自分が会津討伐に北上している間に、

「必ず、石田三成は起つ!」

と睨んでいるのだ。「必ず、起つ」と。

(ながおかけいのすけ・作家)



関白秀次の首塚(「瑞泉寺縁起」より、京都瑞泉寺蔵)。一豊が補佐を務めてきた秀次は、実子秀頼を溺愛する秀吉の命で高野山に追われて切腹、子や妻妾の多くも三条河原で斬殺された。

浅野長政(あさのながまさ)
天文16〜慶長16(1547〜1611)
安井重継の子。浅野長勝の養子。信長、秀吉に仕えて各地を転戦。天正10年(1582)、京都奉行。同15年(1587)、若狭小浜城主。同18年(1590)、五奉行の筆頭となる。文禄の役では軍監として渡海。文禄2年(1593)、甲斐22万石。関ヶ原の戦いでは徳川方に属し、子幸長に紀伊和歌山37万石が与えられた。



(東京大学史料編纂所蔵)

宇喜多秀家(うきたひでいえ)
元亀3〜明暦元(1572〜1655)
宇喜多直家の嫡男。父の死後、備前・美作を領し、秀吉麾下で全国統一戦や朝鮮出兵に活躍。慶長3年(1598)、五大老の一人となり、秀吉没後は家康らと政務を担う。同5年(1600)の関ヶ原の戦いでは西軍の将帥となり敗退。同11年(1606)、八丈島に流罪となり、明暦元年(1655)、同地で没した。



(岡山城蔵)

蜂須賀家政(はちすかいえまさ)
永禄元〜寛永15(1558〜1638)
蜂須賀正勝の長男。はじめ信長に仕え、のち秀吉に属す。天正13年(1585)、四国征伐で軍功を立て、阿波一国を領し徳島城主となる。九州征伐、小田原攻めに従い、朝鮮出兵では二度にわたり渡海。関ヶ原の戦いでは西軍に属すも病気と称して出陣せず、子至鎮は東軍に味方したため、本領を安堵された。



伊達政宗(だてまさむね)
永禄10〜寛永13(1567〜1636)
伊達輝宗の長男。天正12年(1584)、家督を相続。畠山氏・蘆名氏を討ち、奥州南部に一大勢力を築く。同18年(1590)、小田原攻めに参陣して秀吉に服属。関ヶ原の戦いでは徳川方に属して上杉景勝と戦う。戦後62万石に加封され、慶長8年(1603)、仙台に移る。家康、秀忠、家光3代にわたり信任を得た。



朝倉攻めから
関ヶ原まで戦いの歩み

一豊戦歴ダイジェスト

武張ったイメージのない一豊だが、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人の天下人に仕え、歴史上名高い戦に数多く参陣している。ここでは朝倉討伐の初陣から関ヶ原に至る三十年にわたる彼の戦績をみていきたい。

文=清水 昇
Shimizu Noboru

天正元年(1573) 織田信長vs朝倉義景 越前刀根坂の戦い (一豊29歳)

一豊が織田信長に仕えた時期は、一説に二十三歳の永禄十年(一五六七)の頃という。一豊は父盛豊と兄十郎を殺した仇敵信長に将来を託したのである。

元亀元年(一五七〇)四月に信長が起こした、越前の朝倉義景討伐の軍勢に加わり、次いで六月の姉川合戦にも出陣し、武功をあげている。

天正元年八月、信長は宿敵、近江の浅井長政を討つべく兵を起こし、小谷城に向け岐阜を発った。このとき、浅井氏の救援に駆けつけた朝倉義景を激戦のはてに退け、追撃して近江と越前にまたがる国境の難所、刀根坂(福井県敦賀市)で捕捉し白兵戦を展開した。

この戦いに、一豊は羽柴(豊臣)秀吉の麾下として出陣する。このとき、すでに秀吉直属の部将に出世していた一豊は、刀根坂の追撃戦では、敗走する朝倉勢の殿軍で猛将の聞こえ高い三段崎勘右衛門と一騎討ちにおよんだ。勘右衛門は手だれの射手で、槍をふるって挑んでくる一豊に得意の強弓を放った。矢は一豊の左の眦に突き刺さり、右の奥歯まで貫通した。

重症を負った一豊は怯まず勘右衛門に組みつき、味方の加勢もあって首をあげた。頬深く食い込んだ鏃は一豊譜代の家臣五藤為浄が草鞋のまま顔面を踏みつけて引き抜いた。この大手柄に、信長は一豊に疵薬を与え称賛したという。

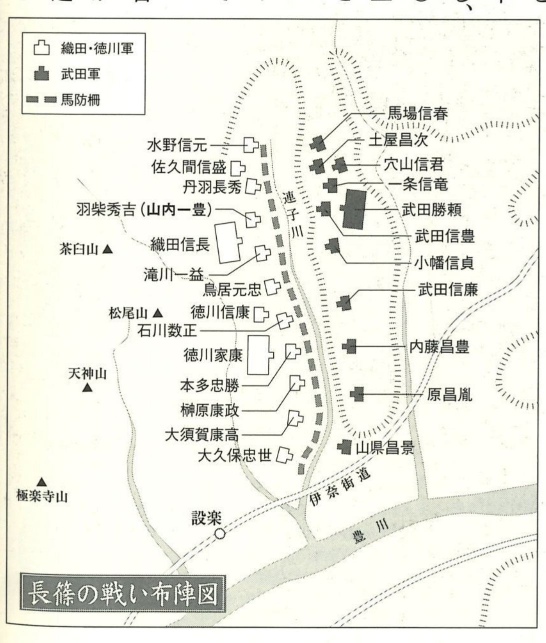
天正二年、浅井・朝倉両氏を滅ぼした戦後の論功行賞で、一豊は秀吉から近江唐国(滋賀県虎姫町)に四〇〇石を与えられ領主となり、出世街道を歩み始めた。

天正3年(1575) 織田信長vs武田勝頼 長篠の戦い (一豊31歳)

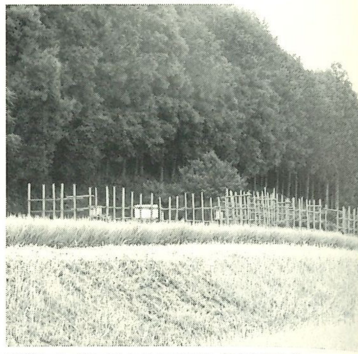
「天下布武」の印判を使い、統一をめざし戦いに明け暮れる信長。天正三年五月、信玄の跡を継いだ武田勝頼が、徳川方の拠点三河長篠城を包囲した。この救援に徳川・織田の連合軍が駆けつけ、城の西方、設楽原(愛知県新城市)に布陣を整えた。

一豊はこの戦いに、秀吉麾下として一八〇人を率いて出陣し、中ほどの突撃隊に組み込まれた(「長篠役秀吉軍備之図」)。二十一日早朝、設楽原を決戦場に武田軍と徳川・織田軍が激突。このため、設楽原の戦いとも呼ばれる。戦いは狭い丘陵地帯を選び、馬防柵を巡らして騎馬軍団の突入を封じ、そこへ鉄砲三〇〇〇挺による三段撃ちを浴びせたといわれる、徳川・織田軍の圧倒的な勝利であった。

一豊らの秀吉軍は、武田軍が本陣に迫る至近戦におよんだとき、柴田勝家軍らとともに武田軍の側面に攻撃を加え、結果的に武田方の名だたる武将、真田信綱・真田昌輝・土屋昌次らを討ち取った。一豊の働きは伝えられていないが、縦横無尽の活躍は想像に難くない。



長篠の戦い布陣図


設楽原に復原された馬防柵(愛知県新城市)。

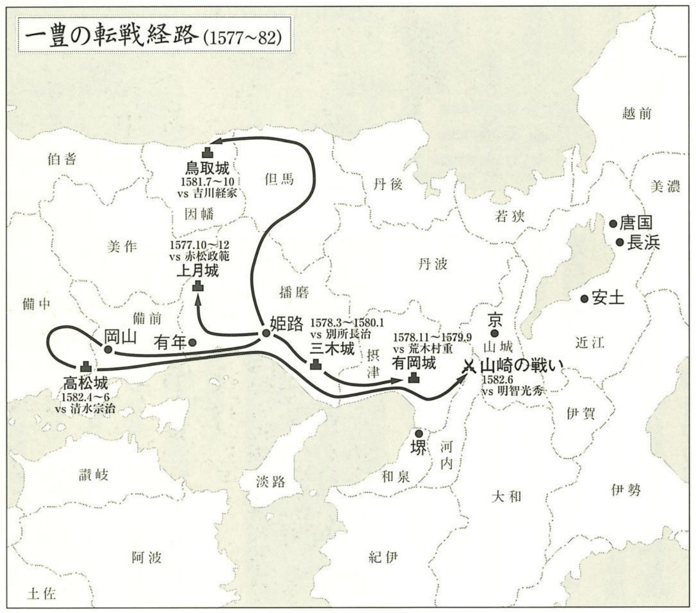
天正5〜10年(1577〜82) 羽柴秀吉vs毛利輝元ほか 山陰・山陽道転戦 (一豊33〜38歳)

天正五年十月、秀吉は毛利氏征討の総大将として播磨に出陣、姫路城に入った。目的は毛利方の上月城(兵庫県佐用町上月)の攻略で、一豊も秀吉に従っている。翌月、秀吉は初戦での軍事力を毛利方に見せつけるために自ら軍勢を率いて出兵、十二月初旬に難なく上月城を落とした。

秀吉はこの戦いでの、一豊の鉄砲隊の指揮ぶりを見ていたく満足し、若い部将たちに一豊の采配をよく見ておけといい、「見かけに違いたる男」と、感心したという(『一豊公御武功記』)。つまり、勇猛果敢なばかりではなく、明晰な判断力を持ち統率力にも秀れていることを、秀吉は言っているのである。

戦後、一豊は播磨有年(兵庫県赤穂市)で七〇〇石を給され、近江唐国から転封となる。これ以後、秀吉の播磨侵攻戦に従い各地を転戦。播磨三木城攻撃では、二三〇人を率いて出陣し、結局、長い包囲の末に落城に追い込んだ。摂津有岡城主荒木村重謀叛による討伐戦では、備えの砦の修築に才能を発揮、また先陣の手柄をあげたともいう。

天正九年十月、因幡鳥取城を攻略。翌天正十年五月には、備中高松城を包囲した。陣中の一豊は、水攻めの堤防構築を任され、毛利氏の救援軍に備える任務を帯びた。しかし、水攻め続行中の六月二日、本能寺の変が起こり、信長が自害した。



天正10年(1582) 羽柴秀吉vs明智光秀 山崎の戦い (一豊38歳)

天正十年六月四日、秀吉は高松城主清水宗治の切腹を条件に毛利氏と和睦すると、六日に高松を発ち、山陽道をひた走り十二日には富田(大阪府高槻市)に着陣。ただちに仇敵明智光秀討伐の軍議を開いた。

翌十三日、秀吉は三万の軍勢を三隊と予備隊とにわけ、山崎(京都府大山崎町)に軍を進め、明智軍と対峙した。山崎の戦いは雨中の夕刻に始まり、三倍の兵力を擁する秀吉軍の圧勝に終わった。

山崎に出陣した一豊は、秀吉本陣予備隊の一翼を統率する任務にあったため、この完勝した戦いでは明智軍と槍を交えることもなく、従って戦功は伝えられていない。

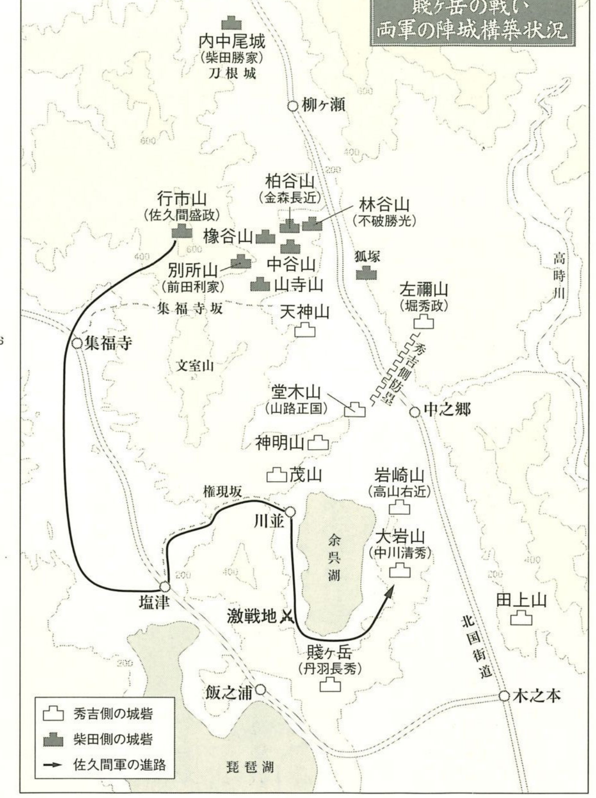
山崎戦後の天正十年九月二十五日、一豊は中国路転戦の功により、播磨の印南郡(兵庫県加古川市)で五〇〇石を加増された。すでに有年で七〇〇石の所領のほか、次いで二〇〇〇石の加増があり、これで都合三二〇〇石を知行するまでになった。

天正11年(1583) 羽柴秀吉vs柴田勝家 賤ヶ岳の戦い (一豊39歳)

宿敵明智光秀を討った秀吉は、織田家中での発言が強くなり、信長の孫で三歳の三法師を信長の跡継ぎに決め、信長の葬儀を取り仕切った。

これに敵対する面々は、遺児の織田信孝や重臣柴田勝家、さらに山崎戦

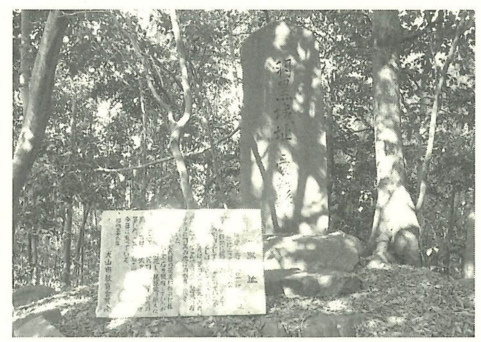
に加わらず織田家宿老の地位を遂われた滝川一益らである。
天正十一年二月、秀吉は反旗を翻した一益に対し、その属城、伊勢亀山城を攻撃し陥落させた。とはいえ、亀山戦は熾烈を極め、一豊は城内突入の乱戦中に股肱の臣五藤為浄を討死させてしまった。
この直後、今度は越前の柴田勝家が兵を挙げた。秀吉は三月十一日に近江佐和山城に諸将を集結させ、攻撃部署を決めた。一豊は五番隊となり右翼を任されたが、直後に秀吉の書状により、岐阜城の抑えとして美濃への移動を命じられている。



秀吉が大垣城に入り、織田信孝の岐阜城攻撃を決めた時、江北の柴田軍が戦端を開いた。四月二十日にこの一報を聞いた秀吉は、ただちに江北に向け進撃、一豊も遅れじとひた走った。二十一日開戦の賤ヶ岳の戦いは、「賤ヶ岳七本槍」の手柄話を後世に残して秀吉の大勝に終わる。だが、功名心に燃えて臨んだ一豊の行賞は、奮戦したものの亀山戦と合わせた、河内交野郡禁野（大阪府枚方市禁野）での三六一石二斗の加増で、『山内一豊武功記』はただ一行、「此節御勇力に属せらるるなり」と、記すにとどめている。
ともあれ、これで一豊の所領は三五六一石二斗となり、翌天正十二年の春頃には有年から近江長浜五〇〇〇石へ転封となった。

天正12年（1584）
徳川家康VS羽柴秀吉
小牧・長久手の戦い
（一豊40歳）

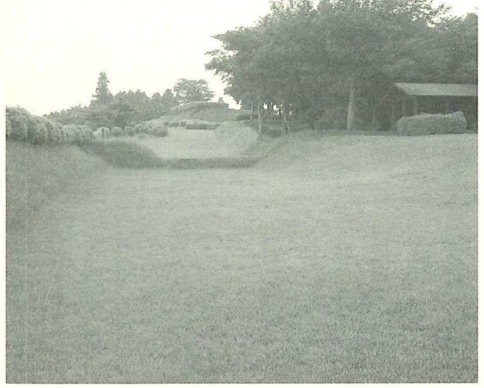
次第に秀吉の勢力が強くなるにつれ、これを不快に思ったのが信長の次男信雄である。信雄は徳川家康に支援を求め、ついに秀吉と家康の両雄が対決することになった。
天正十二年三月十三日、秀吉に加担した池田恒興は、尾張犬山城を攻略。これに対し家康は信雄とともに出兵、犬山城の南方約九キロの小牧山に布陣し、森長可を敗走させた。秀吉が小牧山北東の楽田に駆けつけ、本営としたのは二十九日であった。
両軍は小牧山の裾に対峙したが、決定的な合戦はない。そこで恒興らは、家康の拠点三河への侵攻を計画。四月七日、三好（豊臣）秀次が大将となり進軍したが、作戦は家康に見破られ急襲されて潰滅、秀次は長久手（愛知県長久手町）に落ちた。


一豊が修復を行った羽黒城。羽黒は母法秀院の出生地でもあった（愛知県犬山市）。

九日、家康軍の追撃戦となった長久手の戦いは池田恒興・元助父子と森長可が戦死し、秀次は楽田に潰走、家康軍らの勝利に終わった。
長久手戦前日の八日、一豊は秀吉からの書状で柏井の森川屋敷の防備を命じられ、任務についた。また五月には、小牧の戦いでの緒戦の地、羽黒の旧塁の修築普請役を仰せつかり、見事に成し遂げている。
天正十三年六月二日、一豊は若狭西懸郡（福井県大飯郡）の地に一万九八七〇石余を与えられた。しかし三か月後の閏八月二十一日には、近江湖北の長浜に、秀吉の甥豊臣秀次を補佐する宿老に抜擢され、二万石をもって再び封じられた。

天正18年（1590）
豊臣秀吉VS北条氏政
小田原征伐
（一豊46歳）

天正十八年二月、秀吉はついに天下を統一すべく小田原の北条氏討伐の軍を発した。上野名胡桃城（群馬県みなかみ町月夜野）を巡る秀吉の裁定に、沼田城代が背いたのが口実である。秀吉の麾下から離れた一豊も秀次に従軍。三月三日、沼津に着陣した。まず小田原の支城、韮山・山中の両城を落とす必要があった。山中城攻撃には秀次を総大将に六万七〇〇〇人が向かい、一豊は秀次を補佐して中央隊にあった。
二十九日、一豊の秀次隊は山中城岱崎の出丸に接近。守備兵の薄さを見定めて突入し、切り崩した。城攻めでは同僚の一柳直末が戦死するなど激しさを増したが、徳川隊も本丸を落とし、あっけなくも血しぶきのなかで城は落ちた。一豊の家臣五藤為重などの戦功が伝えられている。


一豊隊が奮戦した山中城の岱崎出丸跡（静岡県三島市）。

四月六日、秀吉は湯本の早雲寺を本陣に、小田原城を包囲した。その頃、前田利家らの北陸軍が関東の支城を陥落させ、小田原に迫った。北条氏の策は尽きた。七月五日、降伏。北条氏政と弟の氏照が城下の医師宅で自刃し、北条氏は滅んだ。
九月二十日、一豊は戦功により遠江掛川（静岡県掛川市）五万石の大名になった。この栄進は、万一の場合、関東に封じられた家康の西上を阻止するのが目的だった。
だが、宿老として仕える豊臣秀次が文禄四年（一五九五）に謀叛の罪で切腹させられてからは、急速に家康に接近してゆく。慶長二年（一五九七）四月には、江戸へ戻る家康を掛川でもてなしている。

慶長5年（1600）
徳川家康VS石田三成
関ヶ原の戦い
（一豊56歳）

慶長三年八月、秀吉が没すると、次の政権を掌握しようとする徳川家康と、あくまで豊臣政権を助けようとする石田三成の間で対立が深まっていった。この天下分け目の覇権争いが関ヶ原の合戦である。
慶長五年六月、家康が会津の上杉景勝討伐のため伏見を発つと、一豊は領内小夜の中山で待ち受け、昼食の接待をした。もはや家康のご機嫌をうかがい従うことに、一豊は微塵の迷いもないことが見える。二十四日、家康が下野小山に着陣すると、一豊も家康の在陣地にほど近い、諸川を宿営地として移った。この夜、一豊は妻千代からの「笠の緒の密書」を封を切らず家康に差し出し、また「小山評定」では、石田三成討伐の出兵時には掛川城を明け渡し、兵糧を提供すると申し出て、家康を大いに喜ばせた。一方、石田三成は七月十八日に伏見城を攻撃し、家康打倒の烽火をあげていた。
石田三成率いる西軍の前線基地であった岐阜城攻撃は、八月二十三日行われ、徳川先鋒諸隊は難なく陥落させている。この戦いでの一豊軍は二十二日早朝、木曽川上流の河田の渡しを渡河し、待機していた敵兵と交戦、首二五〇をあげた。翌朝城下に突入、一豊も浄土寺口から攻め込み、本丸に討ち入った。
さらに上方に向け進撃する東軍。この軍勢を石田三成らの西軍は美濃・近江の国境に近い関ヶ原で迎え撃った。
九月十五日に火蓋を切った関ヶ原の戦いでの一豊は、南宮山に布陣した西軍の毛利秀元・吉川広家・長宗我部盛親らの動静に備える一方、大垣城の抑えに回るという大役で、郊外の垂井周辺に総勢二〇五八人の軍勢を展開していた。


中山道沿いにある山内一豊陣跡の案内板（岐阜県関ヶ原町）。

だが、南宮山の毛利らは傍観して動かず、結局、一豊らに合戦の機会はなかった。『山内一豊武功記』も「御家の士、関ヶ原の働きなし」と、記している。しかし家康は、下野小山在陣での千代の機知と一豊の発言を最大の手柄と称え、傍観者長宗我部盛親の土佐一国二〇万石を一豊に与えたのである。（しみずのぼる・作家）

一豊が買った黄金十両の馬とは?

かつては知らぬ者のなかった山内一豊夫妻と名馬のエピソード。その高価な名馬とはどのような馬だったのか？武士にとっての名馬の条件と価値を探る。

文=早坂昇治
Hayasaka Shōji

かつて誰もが知っていた一豊と名馬の逸話

いま街で「あなたは山内一豊という名前を聞いたことがありますか?」という質問をしたらどういう答えが返ってくるだろうか。年配者からは「信長や秀吉のテレビドラマにでてきた土佐の殿様」という返事があるかも知れないが、若い人たちの返事には、あまり期待できないのではないだろうか。

もし、この質問を五〇年以上前にしたら、ほとんどの人から「黄金一〇両の馬を買った信長の家臣で後に出世した」という答えが返ってくるであろう。それは、山内一豊と妻の有名な逸話が、戦前の『小学国語読本』巻九に「馬ぞろへ」という題で紹介されていたからである。そこでこの本文を進める前に、簡単にその内容をご紹介しておこう。

山内一豊は、そのころ猪右衛門といい織田信長に仕える貧しい武士だった。ある日、安土城下に東国一の名馬という馬を売りにきた者がいた。それは、近く京都で、武将たちを集めた馬揃えが行われることを知っていた信長家臣たちにとっても、大変興味あることだった。行って見るとたしかに素晴らしい馬だが、黄金一〇両という価格はあまりにも高すぎて手が出ない。一豊は家に帰って妻にその話をして、慨嘆するより仕方がなかった。すると、妻が鏡台の底から黄金一〇両を取り出し、「それほどの名馬ならこれで買って下さい」と差し出した。一豊は妻に感謝し、その馬を買って馬揃えに参加する。もちろん、この名馬が信長の目にとまらないはずはない。信長は一豊から理由を聞き、「もし、この馬を織田の家中で誰も買うことができず、他家の者が入手でもしたら物笑いの種になったであろう。織田の恥を未然に防ぎ、よくぞこの名馬を手に入れた」と誉めたたえ、それから一豊は次第に重く用いられるようになったという。

黄金一〇両の馬とはどれほどの馬なのか

一豊の時代、普通の馬は一両、よほど良い馬でも五両程度だったというから、彼はたいへん高価な馬を買ったことになる。

ところで、この時代の黄金一〇両というのはどのくらいの値打ちがあるのだろうか。現在と比較するもっとも単純な方法として、当時と現在の米の価格で比べる方法がある。ただ封建時代の当時と宇宙時代の現在とでは、単なる米価だけではなく、生活様式や物の価値感が全く違っている。それらを踏まえたうえで比べてみよう。

『大日本貨幣史』には「昔ハ銀一枚ヲ黄金一両ト為シ、銀十枚ヲ黄金十両トイヒ」と記されており、一豊が名馬を買った天正時代には、銀一枚で米が一〇石*四斗買えたという記録がある。この容積量を重量（白米）に換算すると約一八二〇キロとなり、現在の銘柄米六〇キロを約四万円とすると、黄金一〇両は約一二〇〇万円となる。貧しいとされた一豊の禄高が五〇〇石の頃としても、その中で家を構え家族・家臣らを養っていたのだから、清水の舞台から飛び下りる気持ちで買ったのであろう。

この高価な馬はどこの馬であろうか。信長の所領地から考えても、従来の家臣の馬は木曽馬が主流ではなかったろうか。一豊が買った馬は、東国一という文字から推測すると、南部（現在の岩手県）馬をはるばる安土まで曳いて売りにきたのではないか、という推測もできる。南部馬は、源平時代から西洋式競馬がはじまった明治初期まで、日本在来馬では優秀な馬であったことが知られている。

武将にとっての名馬とは?

最近は、馬を見るためには競馬場か乗馬クラブに行かなければならなくなってしまった。もし競馬場で、「あなたにとって名馬とは」という質問をすると、ほとんどの人がサラブレッドのような外来種の競走馬の名をあげることであろう。名馬の判定も時代と共に大きく変化しているのである。

では戦国時代の武士にとって、名馬とはどんな馬だったのだろうか。考えてみる必要がある。毛色が美しい馬なのか、それとも格好（体型）がよい馬のことなのだろうか、気性が素直で主人に従順な馬のことなのだろうか、あるいは、武将と共に戦場で手柄をたてた馬のことなのだろうか、名馬といってもいろいろな尺度がある。

流鏑馬の伝統を現在も古式どおりに受け継いでいる武田流弓馬司家の先代金子有鄰氏に、生前何回かお目にかかり、昔の馬についていろいろご教授いただいたことがあった。そのとき「戦国時代の馬は悍の強い（猛々しい・気が荒い）馬でなければならない」という一説を伺った。

一般的に、西洋馬は足元に異物があると跨ぐ習性があるが、戦国時代の武士の馬は、邪魔な物があれば平気で踏みつぶしたり噛みついたりして、走り続けることができる。倒れている敵兵も平気で踏みつけたという。敵陣に突入するや、今度は敵の馬の胴にぶつかって行き、相手の武将を落としてしまう。これが本来の騎馬戦で、昔はそのように馬を調教した。そのため何事も恐れない、悍の強い馬が戦国武将にとって名馬といわれた、というのである。初めてこの話を聞いたとき、馬は体は大きいが従順な動物、とばかり思いこんでいた私は驚いてしまった。ところが、昔のいろいろな文献を調べているうちに、そうしたことを裏付ける記述が次々と出てきたのである。

その一例として、宇治川の先陣争いで佐々木四郎高綱が源頼朝からもらった生食について、『平家物語』には「馬をも人をもあたりを払って食らいければ生食とは名付けられたり」、つまり、馬でも人でも手当たり次第に噛みついたので生食と名づけられた、と命名の由来まで記されている。そのため同訓だが「生唼（動物が餌を食う、の意）」と書いた文献もある。この生食と梶原源太景季の乗った磨墨は『源平盛衰記』には、陸奥七戸の産とされている。つまり優秀な南部馬だった。

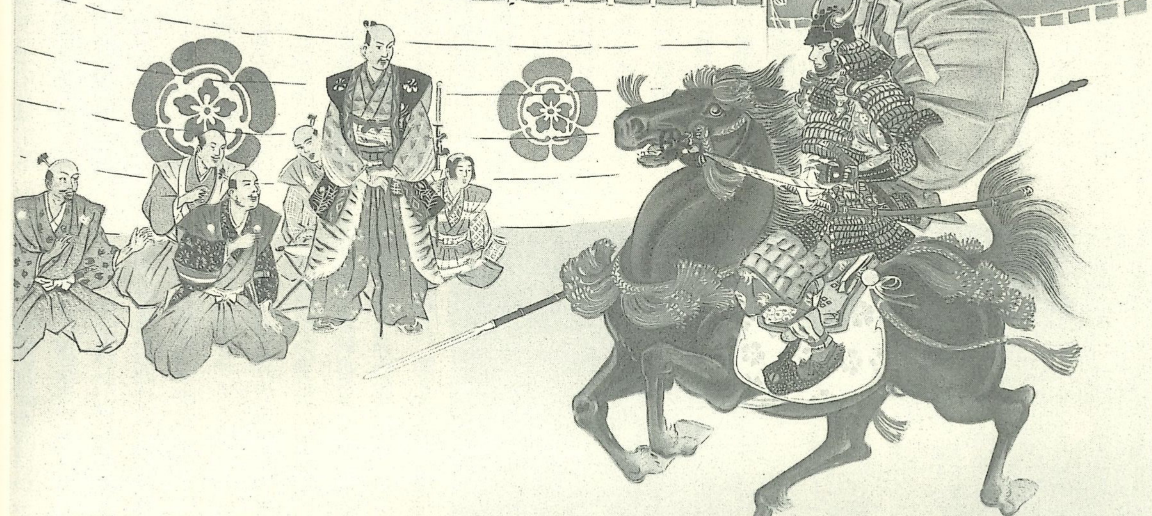
また、信長の愛馬は鬼月毛といわれているが、「形相、世の馬よりはるかに優れて、骨上がり筋太く、眼は朱をさしたる如く、常に怒り、歯噛みをなし、人や馬にも食いつくを以て、鬼月毛と呼ぶ（中略）両方の曳きわけ都合十人にて曳きたり」と、これまた荒々しい馬である。

月毛というのは、黄色がかった白い毛色のことをいう。気性の激しい信長だけに、馬も多少誇張して書かれている節がないともいえないが、この悍馬を小笠原大学兵衛が、信長の面前で乗りこなしたというのである。そのほかにも、古典には武将の名馬の逸話が出てくる。

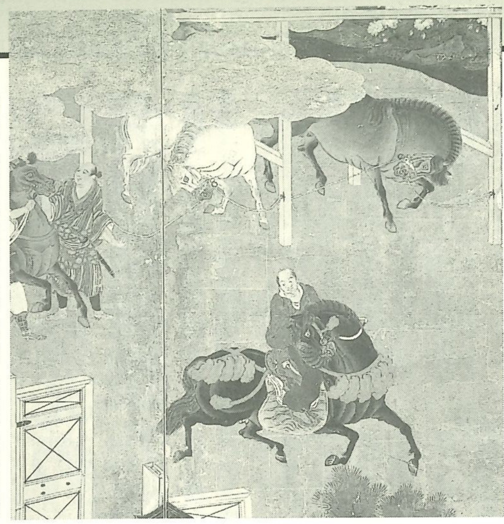
こうしたことから考えて見ると、一豊が黄金一〇両で買った馬は木曽馬ではなく、奥州の南部馬をはるばる曳いてきたらしいということ、当時の武士が一見していい馬と見たのであるから、毛色はともかくとして、博労の曳いている姿が、専門的に言う鶴首（馬が首を下げて鶴の首のようにしているやや興奮したような状態で、悍馬がよく見せる特徴。ただ博労の曳き綱によってもこのように見せることができる）にして、がっちりした体型の馬ではなかったかと想像してよいのではないだろうか。

（はやさかしょうじ・評論家）

*10石＝1石は10斗、1斗は10升。精白米1升は約1.75キロで換算。



「山内一豊名馬の誉れ」（『國史画帖大和櫻』より／個人蔵）。貧乏ゆえに馬揃えの仮病欠場を噂された一豊が駿馬に乗って現れたので驚く信長と近臣たち。信長は数多くの褒美を与え、輝く馬を鏡栗毛と名付けた、と絵の解説は記している。



『調馬・厩馬図屏風』部分（桃山時代。多賀大社蔵）に描かれた一豊の時代の武士と馬。右上の馬の様子が「鶴首」。

「無実」ゆえの「切腹」により免れた老臣たちの連座処分

豊臣秀次が突然、切腹を命じられ、彼に繋がる人々が連座して責任を取らされた。だが、山内一豊は秀次の後見役という重責にありながら咎められず。その理由は？

文＝宮本義己
Miyamoto Yoshimi

豊臣氏二世関白の秀次が、叔父で養父の太閤秀吉から文禄四年（一五九五）七月、突如として官位を剝奪されたうえに高野山に追放され、切腹を命じられた事件は、単にかれ一人にとどまらず子女妻妾のことごとく、それに関わりの深い大・小名や公家・文人らまでもが連座するという、史上空前の規模に膨らんだ。世にいう〝秀次事件〟だが、この歴史的事件の裏には、一般にはもちろん学説上でも見落されてきた人々、すなわち、秀次の後見役という最も重い役務を背負いながら、一切のお咎めなしという、何とも不思議な面々の存在があった。

本題にあげた山内一豊と、その同僚である中村一氏・堀尾吉晴・一柳直末らである。一体どのような背景や理由があったのであろうか。次に拙稿「関白秀次事件と一豊」（『別冊歴史読本』三〇巻二〇号）の所説を活かし、かつ事実関係を確認しながらその深層を探ってみることとしたい。

中村・堀尾・一柳と共に秀次の老臣に抜擢される

織田家中の士として木下（羽柴＝豊臣）秀吉のもとに配属され、常に秀吉の陣所にあった一豊が、それまでの働きを認められ、晴れて若狭（大飯郡）高浜城一万九八七〇石余の大名身分に取り立てられたのは、主筋の秀吉が関白に任官する前月の天正十三年（一五八五）六月二日であった。そして、その二か月後の八月には、同僚の中村一氏・堀尾吉晴・一柳直末らと共に、当時関白に任官（七月）しながら実子のなかった秀吉の甥で、養子でもあった羽柴秀次（三好孫七郎信吉）の老臣としての任務（いわば補佐役）を与えられたのだった。

が、それればかりではない。その翌月の閏八月二十二日には、秀次が近江（滋賀県）八幡山城四三万石に封じられたのにともない、まだ就封三か月で経営もままならない高浜から、近江（北郡）の長浜城二万石に移されたのである。石高こそ微増だが、長浜といえば三か月余前、高浜に栄転するまでの一豊が預かっていた城であり、何よりも秀吉自らが築いた所縁の地である。戦略上の要衝でもあったから、その重みは知行高の比ではない。

このことに触れて『秀吉事記』には、「中村式部少輔（一氏）・堀尾茂助（吉直＝吉晴）・山内猪右衛門（一豊）、殿下（秀吉）股肱の臣たりといえども、秀次家の年寄となしてこれ（新知）を与う」と記されている。一豊ら四名を——秀吉の股肱の臣なのだが（あえて）秀次家中の年寄（家老）とする——とある文言には、秀吉の後継者に数えられながら、総大将として臨んだ前年の長久手の戦いに敗れ、多くの有望な将士を失ったことに象徴されるごとく、その指揮能力に未熟さと不足をきたしていた秀次に対し、将来を考えて指南をさせようとの秀吉の決意が察せられる。見方を変えれば、それだけ一豊らが、秀吉の強い信頼を得ていたということになろう。

一豊ら四名のこの立場は、秀次が関東・奥羽平定後（天正十八年＝一五九〇）、除封とされた織田信雄の旧領尾張と伊勢に転封された後も、変わらなかった。一豊の場合、関東に転封となった徳川家康の旧領のうち、遠江の掛川五万石余に栄転し、秀次の与力として引き続き、これを補佐することとなったのである。秀吉の嫡子鶴松が夭折したこの翌十九年末、秀次が関白職を世襲し、さらにその翌春に文禄の役が起こると、一豊は国内統治の関白（秀次）軍の中核として京都の治安を担うなど、役務通り、秀次と一体で働いている。

関白と太閤の意思疎通を図る役割を堅実に実行

こうした関白秀次家の老臣としての一豊の忠勤ぶりは、主筋の秀次が、文禄二年（一五九三）八月に太閤秀吉と淀殿との間に二男拾（秀頼）が生まれて後、すっかり体調を崩し、秀吉との間に隙を生じた後も、一貫して変わることがなかった。この年九月、心身ともに病んだ秀次が、それまでの京都近在の温泉ではなく、伊豆の熱海温泉への湯治を決行すると、家臣の野中主計宛の九月十八日書状に、

一、（上略）台所入りの米は、川尻（掛川）へ取り寄せ候て、置くべく候。定めて関白様御扶持方に遣わされ候儀も、これあるべく候。または我々より皆々へ、兵粮、馬の飼をも遣わすべく候間、いずれも代官中へ前廉より申し触れ、その意を得、仕るべきこと。

などとあることから知られるように、準備を怠らなかった。自領内の川尻に賓館を新築したばかりか、通路の普請や飯米、畳の用意などを細々と指示し、回復して帰洛途次の秀次を饗応したのである。加えて特に重要とみられたこの年十月の太閤秀吉の聚楽第御成（秀次との対面）に備え、入念な準備を進めたのであった。

なおこの一方で秀吉への忠勤にも励み、この年閏九月二十七日の昼に、自邸に秀吉の御成を実現させたほか、翌三年（一五九四）二月三日には秀次に扈従して大坂城に祗候し、城内の山里の茶亭で秀吉から点茶の振舞いを受けている（『駒井日記』）。

関白の秀次を補佐し、太閤と関白の意思疎通を図る役割を堅実に果していたとみられるのだが、こうした関白秀次への変わらぬ忠勤ぶりが、秀吉の癇にさわったのであろう。『駒井日記』文禄三年二月十七日条によると、

山内対馬（一豊）、太閤様（秀吉）御折檻なされ、高麗へ遣わさるべき由、石田治部（三成）・増田右衛門尉（長盛）・山中山城守（長俊）御使い（として）参る。

とある。一豊が秀吉から折檻され、太閤奉行衆を通して「高麗（朝鮮）」行きを通告されたというのだが、即日、折り返しこれを取り消され、かろうじて不測の事態を免れるという危機にも瀕していた。

子細は定かでないが、一豊の忠勤が、秀吉の命じた〝付家老〟的任務を逸脱するものでないことを秀吉自身が察した結果の折檻の撤回ではなかったろうか。

したがって、秀次事件が勃発すると、一豊は同僚の一氏と吉晴、それに宮部継潤や前田玄以らと共に、秀次の居城の聚楽第に派遣され、秀次の説得役を担わされることとなったのである。

一豊らの秀次説得の役割というのは、秀次をして伏見城の秀吉のもとへの祗候を働きかけるという任務、すなわち〝籠城〟などされないよう、堅固な要塞である聚楽第から秀次を誘い出すことである。

御謀叛にも構い申されず候や。恙なく候

結局、この説得は功を奏し、秀吉は面会を求めて伏見に参向した秀次を処罰し、その関係者をも裁いた。結果論的に一豊の行動は、騙し討ちの手引きに等しいが、おそらく、子細を事前に知らされていなかったのであろう。

一豊は同僚の一氏や吉晴ともども連座を免れたばかりか、秀次の蔵入地（直轄領）のうち八〇〇〇石の加増を受けた。すでに事件の直後から『伊達日記』下巻に、「御謀叛にも構い申されず候や。恙なく候」とあるように、一豊らに対する処遇をいぶかる声があがっている。むろん、今もって不思議だが、拙稿「豊臣政権における太閤と関白」（『國學院雑誌』八九巻一一号）で明らかにしてきたごとく、秀次は「無実」ゆえの「切腹」であったから、それを老臣として身近に認識していたとみられる一豊らの秀次付け老臣を、あえて処罰の対象から外すことで、事件に対する不信を封じ込め、処分に対する疑念を払拭しようとする思惑が秀吉にあったがゆえの措置と察せられる。

一豊からすると、上命による役務を忠実に履行し、その沙汰を甘受したということであろう。

（みやもとよしみ・國學院大学講師）



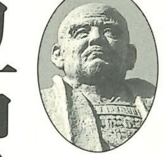
豊臣秀次像（瑞泉寺蔵）。非道行為を繰り返し〝殺生関白〟の異名をとったが、実情は不明である。

事件に連座した主な大名

大名	居城	石高	処分
木村重茲	山城・淀	180000	除封
三好吉房	尾張・清洲	112200	除封
前野長康	但馬・出石	53200	除封
羽田正親	大和・小泉	48000	除封
木下吉隆	豊後・大野	35300	除封
服部一忠	伊勢・松坂	35000	除封
渡瀬繁詮	遠江・横須賀	35000	除封
明石則実	但馬・城崎	22000	除封

三好吉房は秀次の実父、所領没収のうえ讃岐に追放された。木村重茲は大坂の陣の重成の父ともいう。

覇王家康も認めた忠節 土佐二〇余万石の国主に



千代の機転で献じた未開封の文筥と、小山軍議での一豊の颯爽たる発言。関ヶ原決戦を前に徳川家康に示した一豊の忠義の行いは、土佐一国という破格の大封をもたらした。念願の土佐建設に乗り出す一豊と千代にようやく安寧の時が訪れた。

文＝永岡慶之助
Nagaoka Keinosuke

大坂山内屋敷

佐和山城に隠居の石田三成は、上杉景勝の挙兵、家康の討伐軍北上の情報をつかむや、直ちに行動を開始した。

城門が開かれると、密使が四方へ散り、たちまち熱い気運が大坂城に巻き起こった。三成の檄に応じて、毛利輝元、宇喜多秀家はじめ島津義弘、長宗我部盛親、立花宗茂、九鬼嘉隆、鍋島勝茂、真田昌幸、佐竹義宣ら有力大名がにわかに動きだした。

さらに三成は、挙兵と同時に、家康指揮下に入った諸大名の大坂屋敷をきびしい監視下においた。これで諸将の妻子は、人質として軟禁されたわけである。

一豊の妻の守る山内屋敷とて、その例外ではない。大名小路のそこかしこに監視の武装兵が屯していて、外出もままならず、外部の情報がまったく入らなかった。

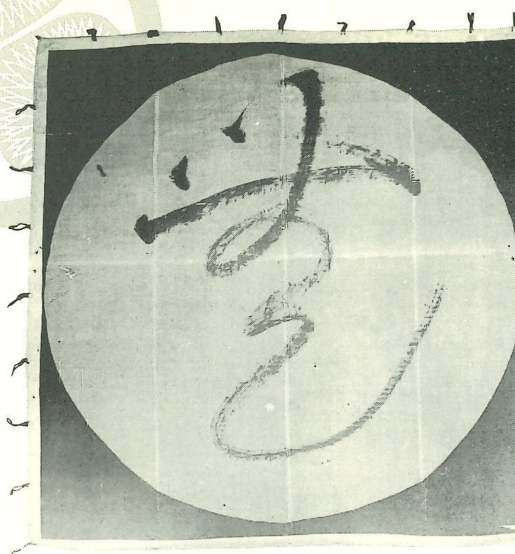
そこに大坂城内から、増田長盛、長束正家連署による家康討伐の檄文がもたらされた。これは、大坂城にある秀頼のもとへの結集を求める勧誘状であった。むろん、家康指揮下にある諸大名諸将らの大坂残留の妻子を城内へ入れて人質となし、諸将の行動を制約する作戦と見られ、強制収容も辞さぬ不穏な空気が感じられた。

然し、檄文を一読した途端、千代の頭脳が目まぐるしく回転した。彼女は眸を宙に据えて、しばし思案する風であったが、たちまち一計を案じたか、にこと微笑している。書机に向かい、一豊への書状をしたためると、檄文に添えて文筥に納め、家臣の田中孫作に託す一方、これとは別に、おのれの思慮を述べた密書を作成した。

千代は能書家である。微細な文字で苦もなく密文を書き終えるや、これを観世縒りとして孫作の編笠の緒に編み込むと、「捕まらぬよう、お行き」といい、「きっと殿に渡して頼もれ」といって送り出したのだ。この厳しい監視下にある大坂から、孫作がどう脱出するかは、神に祈るよりない、と彼女は賭けているのである。



高知城に建つ山内一豊公銅像（提供＝高知市観光課）。



「無」一字旗（土佐山内家宝物資料館蔵）。会津征伐に向けて掛川を出陣する際、真如寺の住職在川和尚が一豊に授けたもの。

そうした一日、熱田神宮の禰宜と自称する神主姿の人物が、御幣を手に屋敷小路を辿っていたが、山内屋敷の裏口に差しかかるや、それまでの悠揚たる態度からは想像もつかぬ素早さで、さっと邸内に滑り込んだ。これが実は、一豊のつかわした家臣市川山城なる者であった。

この頃の千代が精神的にもかなり切迫した状態にあったことは、彼女が山城の顔を見た途端、

「夫人曰く、もし敵来たり狼藉を加うれば、潔く自害せん。山城介錯せよ」

と言ったという『土佐偉人伝』の伝えるエピソードでも推察されよう。今にも自害しかねぬ千代を、市川山城は必死に宥めたとあるが、激した彼女の姿は珍しい。

細川屋敷で悲劇が突発した。主の細川忠興は、一豊と同様、家康指揮下にあって北上中である。挙兵した三成方から、ちょうごんなる尼が訪れ、忠興の妻玉子――キリシタンの受洗をして洗礼名をガラシャという――に大坂城へ移るよう伝えたが、ガラシャは拒否。されば強制収容の軍兵が屋敷を包囲したところ、ガラシャは祭壇のキリスト像に最後の祈りを捧げ終えると、すうっと立ち上った。同時に家老小笠原小斎の長刀が彼女の繊く白い頸を一颯した。キリシタンは自殺を厳しく禁じているから、かねて小斎に依頼してあったのだ。

細川ガラシャの死は、大坂城中に強い衝撃をあたえた。三成ら首脳部は慌てたといってよい。家康指揮下の諸将を刺激、かえって敵方に追いやる結果になるのではないか、と案ぜられたからであった。彼女の死によって、人質作戦は断念され、代りに親族を城内へ差し出すよう触れた。

これで夫人らの危機は一応去ったわけであり、千代は、奥小姓坪内十左衛門の弟仁王十一歳を彼女の甥に仕立て、侍臣岡文左衛門、後藤介九郎を差添として城内へ出した。

「お家のためじゃ、御苦労だが、では仁王頼んだぞい」

送り出す千代の言葉は優しかったが、その眸は冷徹であった。

笠の緒の文

密命をおびた田中孫作が主君山内一豊の前に出たのは、慶長五年（一六〇〇）七月二十四日深更であったという。大坂を出立、東海道を急ぎ下り、家康の会津上杉討伐軍の後を追い、尋ねたずねてようやく辿り着いたのは、野州（栃木県）小山宿の家康陣所に近い一豊の宿所。途中、追い剝ぎに襲われるなど辛苦の道中だったが、とにかく主君を尋ね当てたわけである。『御家伝記』に、

「時に一豊公御紙帳の内に御寝被成、御次に御小姓谷川庄五郎臥し居候間、否、庄五郎を以て一豊公、孫作を被召出る」

とあり、深夜ながら、一豊が千代からの密使と聞いて飛び起きたことが知られる。

孫作は密書を納めた文筥を差し出し、一豊に手渡すとともに、編笠の紐に編み込んだ千代の密文を解きほぐして、

「この文は、必ず穏密のうちに進ぜよ、との奥方様のお言葉で御座いました」

と告げた。

一豊は頷き、一読後、火に投じ焼却するとともに、文筥の紐を解かず、そのまま家康のもとへ届け出た。文筥を開封した家康の顔がぱっと明るんだ。待ちに待った石田三成挙兵の檄文とともに、千代から一豊に宛てた未開

豊臣秀頼（とよとみひでより）
文禄2〜慶長20（1593〜1615）
豊臣秀吉の次男。母は淀殿。文禄4年（1595）、世嗣となる。関ヶ原の戦いで西軍が敗退すると65万余石の一大名に転落。慶長8年(1603)、徳川秀忠の娘千姫と結婚。同19年(1614)の大坂冬の陣、同20年(1615)の大坂夏の陣で徳川軍と戦うが大坂城は落城。淀殿とともに自刃し、豊臣氏は滅亡した。



（養源院蔵）

石田三成（いしだみつなり）
永禄3〜慶長5（1560〜1600）
石田正継の子。秀吉の近侍を務め、全国制覇の戦いに従う。太閤検地実施の中心となり、堺奉行も兼ねた。内政や吏務に優れ、五奉行の筆頭として枢機に参画。文禄4年(1595)、近江佐和山城主19万石。秀吉没後、家康と対立。関ヶ原の戦いに敗退して捕らえられ、慶長5年(1600)、京都で斬首された。



（個人蔵）

封の書状には、
「老中奉行達、俄に反逆を企て、人数催促の廻文来り候程に、田中孫作に持たせ差し下し候。常々の御志に候へば、申すもいかがに候へども、上様（家康）へ能々忠節遊ばされ候へ。構へて構へて我身（千代）の事、御心苦敷思召さ間敷候。叶はぬせんには自害を遂げ、人手には懸り候まじ」
千代は、わたしの事は心配せず、家康公に忠節を尽くせと言っているのだ。一読、感激した家康が、
「夫と云ひ、妻と云ひ、相叶ひたる心中よ」
と嘆賞したという。が、家康ほどの者、恐らく「未開封の密書」呈出の、千代の魂胆などは見通していたに違いない。然し、この場合、一豊・千代夫婦の機転は得難いものであったことは事実である。
三成挙兵を知った家康は、直ちに翌日、小山宿本営に軍議を開いたが、いかにも彼らしい老獪さと、深い読みを駆使して、
「諸公の妻子は大坂にあって、石田治部少輔の人質にされたと聞く。妻子が気がかりとあらば、この家康に遠慮なく大坂へ馳せ戻って、治部少に味方されるがよい。このこと、決して家康恨みには思い申さぬ」
と諸将を前にして断言した。


見性院画像（土佐山内家宝物資料館蔵）。千代は機知に富んだ行動で徳川家康に取り入り、一豊の土佐22万石領主への出世に貢献した。

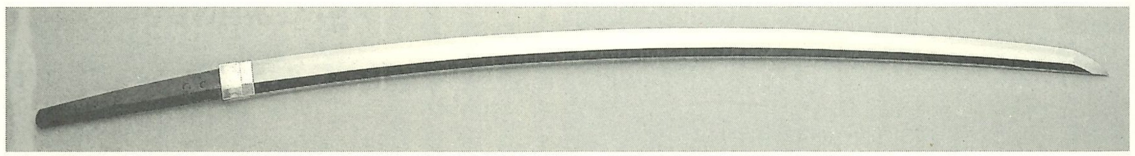
すると、福島正則がさっと立って
「これはまた、思いもよらぬことを……。このたびの治部少の挙兵は、彼一身の野望から発したこと、断じて秀頼様お身をおもうてのことでは御座らぬ。徳川殿が秀頼様に敵意あられぬと申されるならば、妻のことなど顧みるものではない。この福島正則、徳川殿の先鋒となって治部少を討滅つかまつろう」
と言い切った。馬鹿なことである。自分は生えぬきの豊家の家臣、秀吉子飼いを自負していた漢が、この関ヶ原大戦を目前にした今、徳川方の先鋒となって参戦すると宣言したのだ。彼は、徳川氏対豊臣氏の対戦とは見なさず、あくまで石田治部少輔三成個人の、家康への挑戦蜂起ととらえていたのである。
この正則の先鋒発言に続いて、進み出た山内一豊が、
「……御出馬に於て、道筋御心もとなく可被思召間、まず某が居城掛川を、御譜代衆へ相渡し、その上、人質を差上ぐべし……」
と言ったと『御家伝記』にある。
一豊は、家康に全面協力を表明したのだ。掛川六万石の城を明け、宿営、兵粮その他、軍陣に必要な物のすべてを提供するとともに、人質まで出すと表明したのである。福島正則に続くこのタイミングが、その場の空気を決定した。それまで、さすがに躊躇逡巡していた太閤恩顧の諸将も、正則や一豊の熱気に煽られたように、競って家康への味方を誓ったのである。

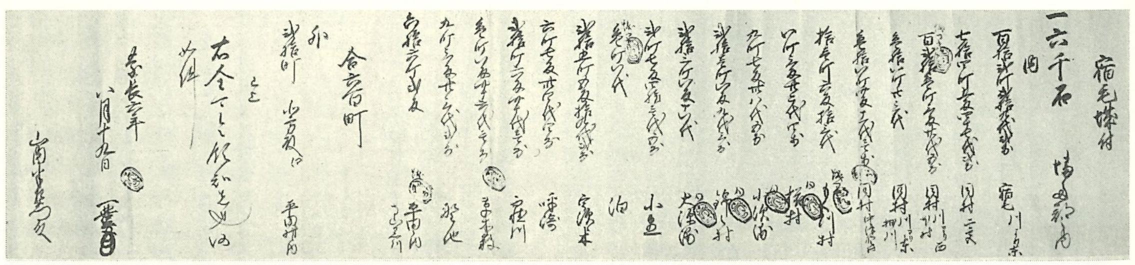
先の石田三成の挙兵を告げた未開封の文筥の件といい、この小山軍議での発言といい、家康の胸深くに、山内一豊の名が強く、好感をもって刻まれたことは確かだ。そして密使田中孫作の笠の緒に編み込まれた密文――世に「笠の緒の文」で知られる紙片には、じつは千代の、
「文筥は開封することなく、家康公へ差し出されよ。それが御身のため」
という指図が、細字でしたためてあり、一豊は、指図のままに行動しただけだった。

乱世浮沈

然し、軍議での颯爽たる一豊の発言には、さすがに千代の才覚は混っていない。珍しく一豊独自の創案になるものかというと、これには異論があり、『藩翰譜』によれば、これは日頃、深交のあった遠州浜松城主堀尾忠氏の考えの受売りだったとある。
故に室鳩巣などは、手厳しく、
「人の分別を取って、自分の功に成さる事とて、恨み申されけり」
の一文を書き残しているほどだ。今でいうアイデア盗用というべきか。このあたり、一豊の人物評価は、あまり香しくはない。が、現実に軍議の席上、進み出て、家康への全面協力を表明したのは、山内一豊であって、堀尾忠氏では、無い。思うだけなら、誰にでも出来る。ここは一豊の決断と実行に、軍配を上げるべきではなかろうか。

ちなみに、堀尾忠氏は、武勇で世に聞えた武将堀尾茂助吉晴の嫡男で、この七月、浜松城主におさまったばかりであった。ボヤキたくなる気もわからなくはない。しかし、一豊には一豊の覚悟があった。彼とても、あの名馬買いの一件以来、自分に対して、「気働きの結構な女房殿のお陰で出世する男」とか、「おのれ独りでは何も出来ぬ奴」などという、妬っかみ混りの陰口が叩かれているのも、知らずにいるわけではない。
そうした陰口に一豊を耐えさせるのは、少年の日、黒田城落城で兄十郎が、次いで父盛豊も討死して以来、母や弟ともども、縁類を頼って流浪転々とした際の辛苦や心細さ、敗れし者の悲哀が脳裏深く刻まれているからであった。彼は過去の日々を思うたびに、
（世間の噂など、どうでもよい。二度とあのような悲しい暮しには戻りたくない。必ず功名手柄を立てずにおくものか）
という思いを濃くし、なりふり構わず貪欲なのである。石田三成挙兵と同時に、千代の機転で「未開封の文筥」を家康に献じ、さらに堀尾忠氏との会話からヒントを得て居城の掛川城の明け渡しを宣言したのも、彼にしてみれば当然の行為であったのだ。
そして九月、関ヶ原合戦では尾張犬山城や大垣城攻略戦などに参戦したものの、一豊はさしたる功名手柄を立て得ずに終ってしまっている。が、家康は戦後、嫡男秀忠と参戦諸将の功績を論じた際、庭前の樹木を指しながら、


刀銘「兼常」（土佐山内家宝物資料館蔵）。一豊以来、歴代藩主に相伝した刀。兼常は室町中期の美濃国関の刀匠。


一豊領地判物（個人蔵／提供＝宿毛市立宿毛歴史館）。慶長6年（1601）、土佐藩主となった一豊が甥の山内可氏に宛てたもの。

島津義弘（しまづよしひろ）
天文4～元和5（1535～1619）
島津貴久の次男。島津家18代当主。兄義久とともに九州をほぼ平定。天正15年(1587)、秀吉に降伏するが、大隅国を安堵される。義久の跡を継ぎ家督を相続。文禄・慶長の役では朝鮮に出陣。関ヶ原の戦いでは西軍に属し、敵中突破の大脱走の逸話を残す。慶長7年(1602)、家督を子家久に譲り隠居。


（尚古集成館蔵）

上杉景勝（うえすぎかげかつ）
弘治元～元和9（1555～1623）
長尾政景の子。上杉謙信の養子となり、景虎と家督を争って勝利。秀吉に従い、五大老の一人となる。慶長3年（1598)、会津に移り120万石を領す。同5年(1600)、家康と対立して挙兵。関ヶ原の戦いで西軍が敗退したため家康に降伏。翌年、米沢30万石に減封された。大坂の陣には徳川方として参戦。


（上杉神社蔵）

真田昌幸（さなだまさゆき）
天文16～慶長16（1547～1611）
真田幸隆の三男。真田信之・幸村の父。はじめ武田氏に属し、武田氏滅亡後は信長に従う。信長没後は家康、のち秀吉に従う。関ヶ原の戦いでは幸村とともに西軍に属して上田城を死守。徳川秀忠軍の西上を阻止した。信之が東軍に属した功により所領没収のみで許され、高野山に流された。


（個人蔵）

鍋島勝茂（なべしまかつしげ）
天正8～明暦3（1580～1657）
鍋島直茂の長男。佐賀藩初代藩主。慶長の役では父とともに朝鮮へ渡航して転戦。秀吉没後はいち早く家康に接近。関ヶ原の戦いでははじめ西軍に属したが、東軍に変わって鍋島家は本領を安堵された。同15年（1610)、家督を相続する。寛永14年(1637）の島原の乱の鎮圧にも参加した。



高知城天守（提供＝高知城管理事務所）。掛川城と同様、一豊の好みにより、天守には回縁・高欄をめぐらせる様式が採用された。

「山内一豊の忠節は木の本、その他の衆中は枝葉の如し」

と断じたといわれ、論功行賞では、土佐二十万石という破格の大封を与えた。家康は、天下分け目の大戦直前の切所で一豊の果たした役割りの重要さを、高く評価したのだ。言うなれば、千代の「笠の緒の文」が、一豊に二十万石を摑み取らせたというべきか。

「あの、女房殿に頭の上がらぬ男が、土佐の国主とは!?」

諸将の間におどろきの声が放たれたが、当然、一豊・千代夫妻にも、深い感慨があった。俎板も無く、枡の底を使って青葉を刻んだ往時をおもうとき、土佐一国の大封は、空恐ろしいばかりであった。

その一豊夫妻が浮かぬ表情になるまで、あまり時間を要さなかった。新封土が難治の国と気づいたからである。関ヶ原合戦に参戦した諸将は、東軍徳川方、西軍石田方を問わず、それぞれ決断に至るまで波瀾のドラマを背負っているが、土佐の国主長宗我部盛親の場合など、その最たるものと言ってよい。

大戦で石田方に味方した盛親は、敗戦とともに領国土佐の浦戸城へ逃げ帰ったが、井伊直政を頼り、家康に執り成して貰おうと上洛した。ところが家康は、これは好都合とばかり、ただちに盛親から所領を没収してしまった。領国土佐を離れた身には、どうするすべもない。髪を剃り、大岩祐夢を名乗った盛親は、主従六人で京の下立売栖ヶ辻子に蟄居した。むろん自由気儘な牢人ではなく、町内預りの放し囚人、つまり監視付きの牢人である。

思わぬ主君盛親の身の変転に、国もとの家臣は騒然となり、せめて半国なりと与えて欲しい、さもなくば、新国主に反抗するといい、浦戸城に籠もって、盛んに気勢をあげているとの情報が入ったのだ。一豊夫妻が困惑したのも無理はない。

（何うする、……どうする……）

一豊は、眉をよせて思案した。土佐国には、田を二、三町ほど持った「一領具足」と称する勇猛で知られる郷士集団が存在する。彼らの必死の抵抗により、万一にも領国支配に失敗すれば、せっかくの出世も水泡に帰しかねないのである。

新封土・土佐

一豊も新封土の土佐への入国にあたり、慎重にならざるを得ない。思案の末、まず彼は、自分の代りに弟の康豊を派遣することにした。これまできて負傷や討死をしてなるものか、と彼は臆病なまでに慎重であった。

先発の康豊は、よく兄一豊の期待に応え、浦戸城に籠もる長宗我部の遺臣たち二七〇余人を捕えて斬首するなど、兄入国の地ならしをした。一豊は、こうした弟の土佐鎮定作戦、民心掌握状況を、大坂屋敷にあって報告を受け、あるいは指示を与えたが、自身はなかなか新封地へ入国しようとしなかった。千代が審しんで、「いつ、おい出なされまするか」と質ねても、「そのうちに」と答えるばかりである。

確かに土佐は、今にも爆発せんばかりに、一領具足の衆が蠢いていた。自分らの主君が突如城を召し上げられ、牢人の境涯に転落させられたのだから、憤懣がつのるのも無理からぬことではあった。



福島正則（ふくしままさのり）
永禄４～寛永元（1561～1624）
福島正信の長男。秀吉子飼いの臣。全国制覇の戦いや朝鮮出兵に従う。賤ヶ岳七本槍の一人で武功派の代表格。文禄４年(1595)、清洲城主24万石。関ヶ原の戦いでは徳川方に属し、広島城主49万8000石となる。元和５年(1619)、広島城修築をとがめられ所領は没収。信濃高井野に蟄居し、同地で病没。

（岩松院蔵）



細川忠興（ほそかわただおき）
永禄６～正保２（1563～1645）
細川幽斎の長男。ガラシャの夫。父とともに信長に重んじられ、信長没後は秀吉に従った。秀吉没後は家康に接近。慶長５年(1600)、関ヶ原の合戦を前に妻ガラシャは壮絶な最期を遂げたが、忠興は東軍に属して戦い、戦後、豊前中津39万9000石を与えられた。元和６年(1620)、子忠利に家督を譲り隠居。

（永青文庫蔵）

一豊が重い腰を上げ、ようやく土佐に入国したのは、年が改まった翌慶長六年（一六〇一）一月のことだが、それでもなお、国内のそこかしこで叛乱騒ぎが続発していた。せっかく入国したものの、危険で城外へ出られぬほどである。

それで一計を案じた彼は、長宗我部遺臣との融和をはかるための相撲興行と称し、土俵を造り幔幕を張りめぐらして会場となし、遺臣たちを招待した。新国主に深謀ありと知らぬ遺臣たちが相撲見物に参集したところ、にわかに現われた武装兵が取り囲み、一網打尽に逮捕した上で、かねて目星をつけていた過激の徒七〇余名を磔刑に処した。これまでの山内一豊という人間からは、想像もつかぬ残酷非情な刑罰をやってのけたのだ。

だから以来、一豊は一領具足の報復を恐れて、城門の外へ出るのを極度に控えたが、この浦戸城が手狭なため、国のほぼ中央になる大高坂の地に新城を築くことにした。そのため、止むなく検分に出掛ける際は、巡見笠、面頰、袖無し羽織から脚絆、草鞋はもとより、おのれと背丈、格好まで酷似した影武者五人と行動を共にした。

築城の工事人足たちは、一行を見かけると、言い合わせたように、

「それ、六人衆が来たぞい」

と囁き合ったというが、むろん、この囁きは、新国主の臆病を揶揄したものにほかならぬ。

人間、功成り、名遂げると、途端にそれまで攻勢に徹した信条も、がらりと守勢に豹変したりするものだ。一豊も極端なまで慎重細心になり、念願の新封土・土佐国建設のためには、時に妻の千代ですら眉をひそめるほど残忍酷薄の人となった。事実、新国主に対する旧国主長宗我部の遺臣の抵抗は、いつ止むともなく断続的、執拗に続けられ、一豊の心気の休まるときは無かったのである。

そのような夫・一豊の苛立った姿を見ると、時には千代も、心から、

（むかしの方が、心安らかな日々であった）

と、しみじみ思うことがあった。

二年後の慶長八年（一六〇三）八月、新城の本丸と二の丸が完成したので、一豊と千代は浦戸城から移り住んだが、城郭とともに城下町も次第に整備形成されていった。本丸にそびえる天守閣は四層六階、最上階には高欄をめぐらしてあり、

「一城に一国をしめしたるよそほひ、威勢ことはりにこそ」

といわれるほどの威容である。

「千代、これが、われらの城ぞ」

これまで、長宗我部遺臣との抗争で険しかった一豊の表情も、心なしか和らいだかに見られて、

「はい、立派な貴方様のお城が出来上りました。おめでとう存じまする」

と答える千代も、夫の微妙な心情の変化に気づき、微笑は暖く煙るようなのであった。

一豊は、土佐入国以来の心労がこたえたか、二年後の慶長十年（一六〇五）九月二十日、おのれの築いた城、高知城で病没した。享年六十一歳。跡は弟康豊の子忠義が継いで二代城主となった。

千代は、一豊の死後、落飾して見性院と号し、亡夫の一周忌を待って土佐を離れ、京都の桑原町（中京区丸田町通）に移り住み、元和三年（一六一七）、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した二年後に、夫と同じ六十一歳で生涯を閉じた。

やはり、赤い糸で結ばれた夫婦であったようだ。

（ながおかけいのすけ・作家）



高知市の筆山にある一豊の墓（提供＝土佐山内家宝物資料館蔵）。15代豊信を除く山内家歴代藩主の墓もこの地に並んでいる。



井伊直政（いいなおまさ）
永禄４～慶長７（1561～1602）
井伊直親の子。天正３年（1575)、家康の小姓となり、旗本軍の有力武将として諸戦で活躍。政務にも重要な役割を果たし、徳川四天王の一人と称された。関ヶ原の戦いでは東軍先鋒として大功を上げ、慶長６年(1601)、近江佐和山城主18万石となる。同７年（1602)、関ヶ原の戦傷がもとで死去した。

（龍潭寺蔵）



徳川秀忠（とくがわひでただ）
天正７～寛永９（1579～1632）
徳川家康の三男。関ヶ原の戦いでは一軍を率いて中山道を西上したが、上田城攻略に手間どって遅参し、家康の怒りを買う。慶長10年(1605)、将軍職を譲られるが、実権は駿府城の大御所家康が握った。家康没後は幕藩体制の基礎を固める。元和９年（1623)、将軍職を子家光に譲り、江戸城西丸に隠居。

（松平西福寺蔵）

一豊、土佐統治の苦悩

一領具足の抵抗と苛烈な一揆弾圧

長宗我部氏の土佐支配、そして四国統一の原動力ともなった半農半兵の地侍・一領具足。その運命は、長宗我部盛親の土佐追放によって大きく暗転した。独自の風土を持つこの地に、新領主として赴いた一豊は、彼らの反抗に直面する。

文＝広谷喜十郎
Hirotani Kijûrô

〝一豊〟以前の土佐

戦国時代において、長宗我部元親が土佐を統一し、やがてけわしい四国山地を越え、四国を平定したという活躍ぶりはよく知られている。それを支えていたのは「一領具足」と呼ばれる土着武士団であった。

一領具足については、元親一代記の『土佐物語』に、

〈僅の田地を領して（略）自ら耕し耘り（略）田に出づるにも、鎗の柄に草鞋兵粮を括り付け、田の畦に立ち置き、すはといへば鎌鍬を投捨て走り行き、鎧一領にて差替の領もなく、馬一疋にて乗替もなく、自身走り廻りければ、一領具足と名付けたり〉

と、記述されている。

彼らは、半分は農民で半分は武士のような存在であった。だから、普段から暇をみては軍事訓練に励み、〈死生知らずの野武士なり〉という勇猛な武士団をつくりあげていた。

天正十四年（一五八六）十二月、豊臣秀吉の命令で、元親は長男の信親と共に九州に出兵した。そして薩摩島津の軍隊と豊後戸次川で戦ったが、島津の部将新納大膳亮らの率いる五〇〇〇の大軍に囲まれた長宗我部軍の先陣にいた信親は、部下の将兵七〇〇人余りと共に、一歩も退かず壮烈な戦死を遂げている。

慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原合戦で西軍側に属した元親の四男・盛親は、約一六〇〇人を率いて東軍側の背後を突くべく、石田三成の本陣からやや離れた南宮山のふもとに長束正家らと共に布陣した。

それに対して、東軍側の後陣の守りとして山内一豊が約二〇〇〇人を率いて池田輝政らと共に中山道の街道沿いに陣を固めていた。両軍は街道をはさんで比較的近くでにらみ合っていたことになる。

この合戦で西軍が敗れたことを知ると、長宗我部軍は、すぐさま東軍の追手を振りはらいながら、伊賀・大和を経て大坂の天満から海路土佐へ帰ることができた。

土佐へ落ちのびてきた盛親は、すぐに使者を派遣して、徳川家康への降伏を言上したものの、うまく行かず、少人数の家臣を連れて大坂に赴き、家康に直接頭を下げた。

だが、その直前に盛親は、大きなミスを犯していた。香美郡岩村に幽閉されていた実兄の津野親忠を殺害するという不実なことを仕出かしたのである。

親忠は、家康の信頼厚い藤堂高虎と親しい間柄であったため、盛親敗走を機に、土佐国の半分が親忠に分け与えられるかもしれないとの憶測が広まっていた。そこで、盛親の側近・久武親直らが、盛親の命令と称して、部下を派遣して親忠に詰め腹を切らせてしまった。

やがて、この殺害時件を家康が知り、「元親が子にさようの不義の者ありけるような」と怒り、盛親を追放して遠州掛川城主・山内一豊に土佐国を与えることにしたのである。

一豊入国と浦戸一揆

山内一豊の入国に先立ち、長宗我部氏の居城である浦戸城の受け取りには、井伊直政の家臣である鈴木平兵衛・松井武太夫が、一豊の弟康豊らを伴い派遣された。慶長五年（一六〇〇）十一月十九日のことである。

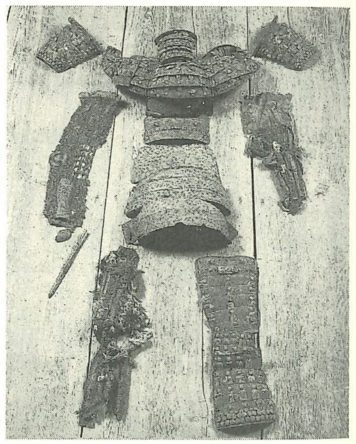
彼らは、長宗我部氏の旧家臣の強い抵抗を受けたので、月峯和尚の仲介によって近くの元親の菩提所・雪蹊寺へひとまず入った。

長宗我部元親



天文8年（1539）～慶長4年（1599）

土佐の戦国大名・長宗我部国親の子として、岡豊城（現・高知県南国市）に生まれる。永禄3年（1560）、父の死で家督を相続すると、本山氏・安芸氏などを滅ぼし勢力をのばした。そして、天正2年（1574）、土佐国司・一条兼定を豊後に追放して土佐を統一、さらに、同13年（1585）までに四国統一を成し遂げた。しかし同年、豊臣秀吉の四国遠征を受け降伏、土佐一国のみを安堵されるにとどまった。その後、秀吉配下として朝鮮出兵にも参加している。分国法の「長宗我部元親百箇条」を作成したことでも知られる（秦神社蔵）。



一領具足の鎧（高岡神社蔵）。土佐国仁井田郷の地侍が着用していたものと伝えられる。

この動きに対して、各地から一領具足たちが集まり、寺を包囲してしまった。首領の竹内惣左衛門らは、「せめて土佐半国だけでも盛親公に下され、長宗我部家の存続をお願いしたい。さもなくば、城を渡すことはできない」と嘆願し、浦戸城での籠城を続けた。

これが、一領具足たちが主体となっておこなった浦戸一揆である。

これに対して、井伊直政は鈴木らに「決死の覚悟をもってすみやかに城明け渡しの処理を計るべきである」と、十二月一日付の書状を送り、次いで十二月五日付の書状では、四国の三国の諸軍の出兵手配ができているので、早く解決せよと厳命している。

浦戸城内にいた一領具足たちは、土佐西部の中村から長宗我部氏の重臣桑名弥次兵衛を招き、鈴木や味方に加わらない者たちに対抗しようとした。だが、弥次兵衛はそれを裏切り、重臣たちと謀って、秘かに鈴木平兵衛らを城内に入れることにした。

それを知った一領具足側は、

〈家老物頭の面々が、腰をぬかし城を渡す覚悟とみえたり、主君の敵外になし一々踏み潰さん（略）猶落着せずんば鈴木に腹をきらせ、そのいきおひに家老以下を討取ん〉（『土佐物語』）

と怒り、城門まで押しかけた。

一方、重臣側は不意を討つべしと夜襲をかけ、一揆軍を宇賀神社の糠塚あたりまで追撃して撃ち破った。さらに、雪蹊寺周辺や各地に居た一領具足たちをも討ち取っている。

この動きを『土佐物語』では、

〈竹内惣左衛門を始め、究竟の兵ども「何の為に惜むべき命ぞ」と蒐出々々（そろって）一所にて皆討れけり。一揆の人数都合一万七千とぞ聞えし、討取所の首二百七十三、大将八人の首も此内なり〉

と伝えている。

その二七三人の首は、塩漬けにして大坂の井伊直政のもとへ送られている。胴体だけ残された二七三の死体を地元民が憐れみ、ひそかに城跡近くの山中に葬って塚とした。これは、後代になって浜辺に移され、今、石丸神社として、その霊が祀られている。

そこには、一領具足の碑や六体地蔵があって、いまでもたくさんの人々が参拝に訪れる。

浦戸一揆にみられるように、長宗我部旧家臣たちの反抗と動揺は根強いものがあり、それが在地の人々を動揺させ、土地から逃げ出すという「走り者」という現象を生み出すことになった。

浦戸城を受け取った山内康豊は、兄一豊の入国に備え、山中などに逃げ込んだ土豪や農民に対して「安堵令」を布告し、還住を促して民心安堵に努めている。

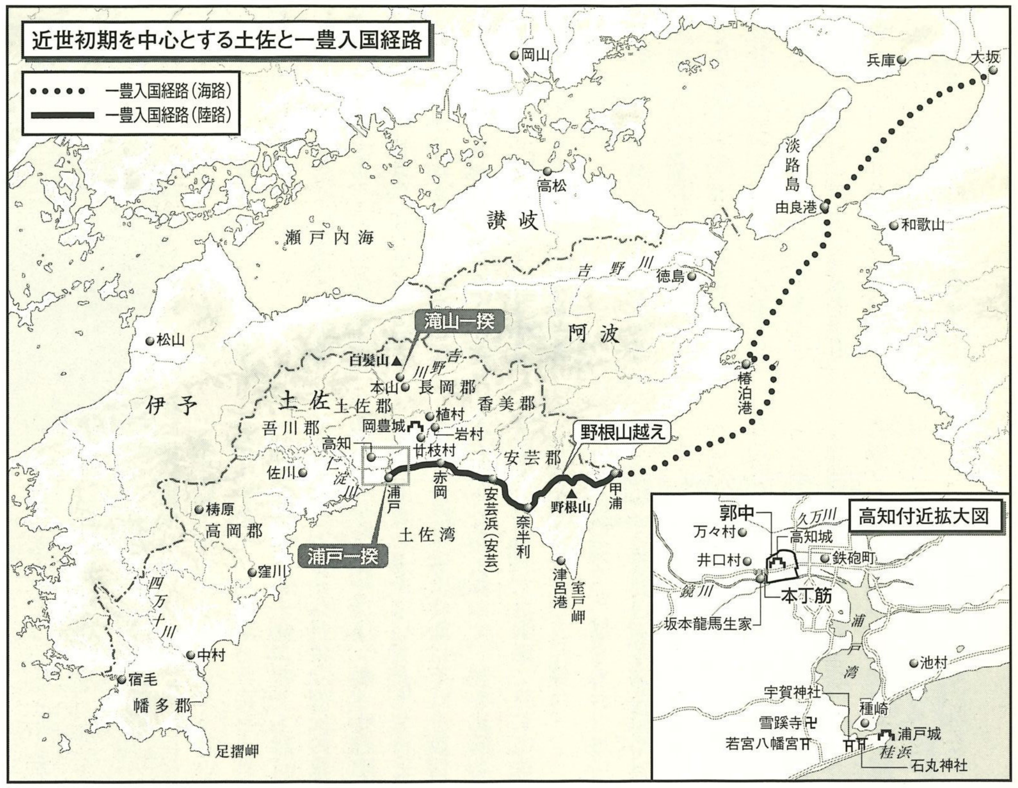
桂浜の相撲興行

慶長五年（一六〇〇）十二月二十五日に、山内一豊は新領主として土佐国へ入国すべく、大坂を出立する。一行は、淡路島の由良港で越年したとも、阿波の椿泊港で越年したともいわれる。

山内一豊が甲浦の地に到着したのは翌慶長六年正月二日で、弟の康豊は、室戸の津呂港から船で甲浦まで行き、一豊の一行を出迎えている。

だが、すぐには出発せず浦戸までの道筋を地元民に尋ね、検討している。五日になり、甲浦を出発する。起

伏のはげしい野根山越えでは、『白湾藻』によると、〈其時シゲミ或ハ谷々宮林抔気ヲ付候〉のように、長宗我部氏の遺臣の襲撃に備えての緊張した道行であった。それは、『御家伝記』にも記録されている。一豊自身は、腕に鷹をおいて馬を進めたという。



その日は、奈半利の正覚寺で一泊している。六日は、安芸浜で宿泊。次の七日には、赤岡の浜五郎兵衛宅に泊まっている。浜家の『家記』には、

〈慶長五年康豊様御入国浦戸城へ御入城被為遊候所一領具足ノ輩一揆ヲ催シ騒動仕御退治ノ節右残党山林へ籠徒党ヲ結ビ申ニ付右五郎兵衛ニ取鎮メ申様御書被成遺候而一揆ノ輩取治メ申由〉

と一領具足の一揆鎮圧に関する記述があるところから、五郎兵衛が康豊の意向を受けて活動していた人物であることがわかる。一豊から浜家に対して「大義料」として、屋敷一反二八代と御紋付上下を与えている。

正月八日、一豊一行は、浦戸城に入城したが、落着く間なく、すぐさま軍船に乗り、浦戸湾内を巡視している。

このことにより、山内家の年頭行事の一つ「御船乗初式」が行われるようになった。後に、徳川将軍家の忌日を避け、正月十六日に、変更されている。さらに、十八日には、近くの若宮八幡宮の馬場での御馭初の式が挙行されているが、これも後には、高知城下の年頭行事となって続けられた。

このような一豊の行動をみていくと、一領具足たちの不穏な動きに大きな圧力をかけるためのデモンストレーションであり、緊急事態にいつでも対応できるような態勢づくりをおこなったといえる。

政治的安定をはかるために、場合によって一大決断を迫られる事態も想定しての軍事的訓練だったようである。

慶長六年（一六〇一）三月一日に、浦戸城下の桂浜において沢山の見物人を集めて、相撲興行がおこなわれた。実は、この興行は、「土佐人の相撲好き」という心理を利用する仕掛けが巧みにしくまれていた。

一豊の『御武功記』に、

〈桂浜被催角力国中之上下を集め給ふ、見物の内一揆徒党之者七十三人を捕へ種崎の渚に磔に掛らる〉

とある。

かねてより、浦戸一揆に参加していた長宗我部家臣の有力者を一堂に集めて処罰する機会をねらっていたのであった。

相撲興行に集まったところを利用して捕らえ、浦戸の対岸にある種崎浜で七三人を磔にしてしまったというのである。さらに、これに来なかった反乱分子も、次々と捕らえ処刑している。この磔刑は、大いに効果があったようで、〈此外悪党ども御刑罰御国中平均也〉（『御武功記』）と、その処置が平等であった旨、述べられている。

河中山城築城と滝山一揆

山内一豊は、土佐中央部で浦戸一揆の残党狩りをおこなうと共に、山奥などに逃亡している土豪や村民らの還住策を積極的にすすめている。そして各地にある神社や寺院に朱印状を与え保護している。

相撲興行の翌月、弟康豊や百々越前、野中益継らの老臣を従え、国内の視察に出かけている。

その成果をふまえて、六月になって、康豊に土佐西部の要所である中村に二万石を与えている。八月には、佐川（一万石）に深尾重良を、宿毛（七〇〇〇石）に山内可氏を、窪川（五〇〇〇石）に山内一吉を、本山（一三〇〇石）に山内一照を、安芸（一五〇〇石）に五藤為重をと、国内の要所に各々配置した。これらの施策により、一豊による支配体制の基礎が固まったといえる。

さらに、より強固な体制にするために浦戸城の放棄を決意し、浦戸湾の最北部にある二つの河川にはさまれた大高坂山に居城を築きはじめた。

直接、工事を督励するために、一豊も度々視察に訪れたが、政情不安の折から、五人の影武者に一豊と同じ装束をさせ随行させたので、六人衆とよばれていた。緊急かつ大工事である築城のために、武士・農民や老若男女を問わず徴用した突貫工事であった。

慶長八年（一六〇三）八月に、本丸・二の丸の工事が完成して入城式が挙行され、この地を河中（後の高知）山と名付けている。

ところが、同年十一月に土佐北部に勢力を振っていた長宗我部氏旧家臣の高石左馬之助が、配下の土豪や農民と共に山内家に抵抗するという滝山一揆をおこしている。

家老職にあった山内一照が本山方面の知行地の農民から年貢を徴集しようとしたところ、左馬之助は従来よりの「得分」が失われると応じなかった。そこで一照は三六人の人質をみせしめに浦戸の牢屋に入れて、年貢の納付を促した。

一照の強圧的な行動に怒った左馬之助は、弟の吉之助と配下の農民一〇〇人余りを滝山の岩屋に集めて戦いに備えた。

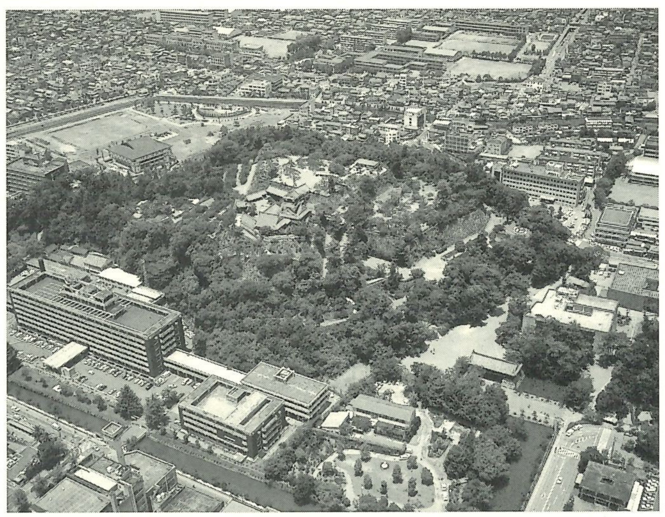
直ちに、一照は追討の兵を進めたが、山の上から射撃されたり、石や木材を落されたりで、退却せざるを得なかった。

この事態はすぐに浦戸城に連絡され、重臣会議の結果、野々村因幡、山内掃部の兵が派遣された。援軍と共に一照は再び滝山へ攻撃をしかけたものの、

〈元来山河を家として鹿猿に馴て弓鉄砲の上手なれば、岩峪の嫌なく平地の如く掛廻り、見すましては丁と打、ねらひすましてははたと射る、あだ矢は一つもなかりけり、寄手若干打れて引退く〉（『土佐物語』）

というように、一揆側のゲリラ戦法に手を焼く状態であった。

そこで滝山の東にある蜂の窪山に大筒を引上げ、攻撃したところ、一揆側に動揺がおこり、戦意を失った農民たちは四散してしまった。


現在の高知城。一豊は手狭な浦戸ではなく、その北方に新しい城を設けた。新城下町は、鏡川と江の口川に囲まれた平地を開拓して建設している。

左馬之助兄弟は各地に身を潜め、翌九年二月に讃岐方面へ逃亡したといわれている。

この滝山一揆を最後に、長宗我部氏旧家臣による武力の抵抗は終結する。

しかし、一領具足などの処遇の問題は、次の時代に受け継がれることになるのである。

（ひろたにきじゅうろう・土佐史研究家）

貧しき山国を潤した木〝財〟

「耕して天に至る」——中世までの土佐は、わずかな耕地しかない貧しい土地であった。近世中期に鰹節の製造法が伝来するまで土佐の産業を支えたもの、それは豊富な雨量に裏打ちされた林業である。

文=谷 是
Tani Tadashi

山内一豊、土佐国主を拝命

慶長五年（一六〇〇）十一月、山内一豊は徳川家康の側近、榊原康政より口頭で、土佐一国二〇万二六〇〇石を賜る旨、申し付けられた。

これには一豊自身、少々仰天させられたことではなかったか。遠州掛川には在居一〇年間、営営努力して築いた治世に未練があった。

しかし、家康にとっては軍事的、政治的、経済的に重要な拠点は直臣で固めることと、豊臣政権下から家康に臣従した諸大名は、加増という名目で遠隔地に配することは当然というべき措置であった。

しかも、土佐はかつて四国を統一した長宗我部元親が本拠地とした国だ。息子・盛親の代になっていたとはいえ、勇猛果敢で有名な〝一領具足〟といわれる半農半兵の軍団が、四国の険しい山膚の谷間谷間に潜居し、しかもそれが今般全員改易され、家臣たちはすべて浪人となるわけであるから、掛川六万石の大名としては、それを統御するだけでも至難の業といえた。

一豊の胸には、喜びというより一種悲壮な思いがこみ上げたと思われる。

土佐という国はどういう国か？

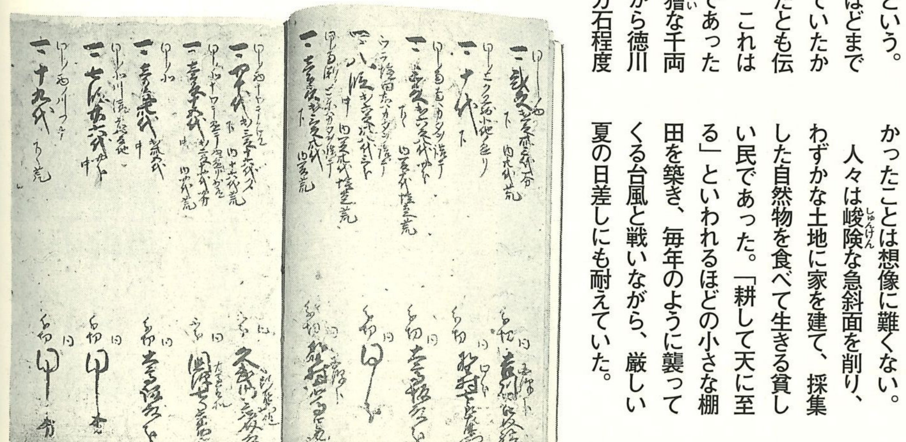
従来土佐は、長宗我部時代の表高九万八〇〇〇石とされ、元親は豊臣政権下ではその割の賦役負担を負ってきた。天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉は西日本の検地を命じた。土佐でも同年九月二十六日には万々村（現・高知市）から実施され、慶長三年（一五九八）一月九日には、長岡郡池村新田で終わる本格的な検地を行った。それには、歩、代、反、町の単位が用いられ、二四万八〇〇〇石という数値を得た。

しかしこれは、石高は本来収穫高で計算すべきであるにもかかわらず、土佐ではこの面で未発達であったため、便宜的に一反を一石の割で算定したのである。つまり計算方法によって石高に大きな差異が生じた。慶長期の盛親の石高は二二万二〇〇〇石であったともいわれるが、上述の計算方法による差異ともいわれている。

一豊は土佐守就任後の慶長七年（一六〇二）二月、家康に謁するため伏見城に行ったことがあった。その時、家康は一豊に、「ところで土佐はどれほどの石高か」と問うた。一豊は「二〇万二六〇〇石です」と答えると、「わずかそれ程であったか。わしは長宗我部元親の代に、太閤とともに彼の大坂屋敷に出入りし、その時の接待ぶりに一〇〇万石もあろうかと思ったことがあったが、それ程少ないとは思わなかった」と言ったという。これには一豊も、それほどまでに自分を評価してくれていたかと感銘恐懼して退席したとも伝えられるが（『藩翰譜』）、これは家康一流の人心掌握術であったのだろう。さすがは老獪な千両役者ぶりで、要は当初から徳川新政権は、土佐を二〇万石程度と踏んでいたと思われる。

一豊に与えられた土佐という国はどういう国か。長い海岸線を持ち、その国土は四国全土の三八パーセントを占め、西日本諸国の中では広い部類に入るが、今日でも八三パーセントは山林であるといわれている。一豊入国当時は、高知平野の開発は進んでおらず、現在の高知市中心部付近は芦などが生い茂る茫漠とした水郷に過ぎなかった。

高知県の耕地面積は今日でも県面積の四パーセントほどであるが、当時はさらに平地が少なかったことは想像に難くない。人々は峻険な急斜面を削り、わずかな土地に家を建て、採集した自然物を食べて生きる貧しい民であった。「耕して天に至る」といわれるほどの小さな棚田を築き、毎年のように襲ってくる台風と戦いながら、厳しい夏の日差しにも耐えていた。



長宗我部元親時代の土佐国検地帳（高知県立図書館蔵）。主に元親家臣への給地の部分である。

山岳部では米を食べることができず、稗、粟、黍、芋などを主食とした。しかも、干魃の時にはそのわずかな食糧さえなくなり、一揆や逃散がしばしばおこり、時には暴徒化して山を越え、隣の伊予国の集落を襲うというような恵まれない国土であった。それだけに人々には、一種独特の精神が横溢し、豊かな生活が望めないなら生きていても仕方がないとする命知らずの若者たちが山襞の隅々に潜居していたのである。こうした精神を背景に生まれてきたのが〝一領具足〟という戦闘集団で、その貧しさ故に戦時の敢闘精神には恐るべきものがあった。

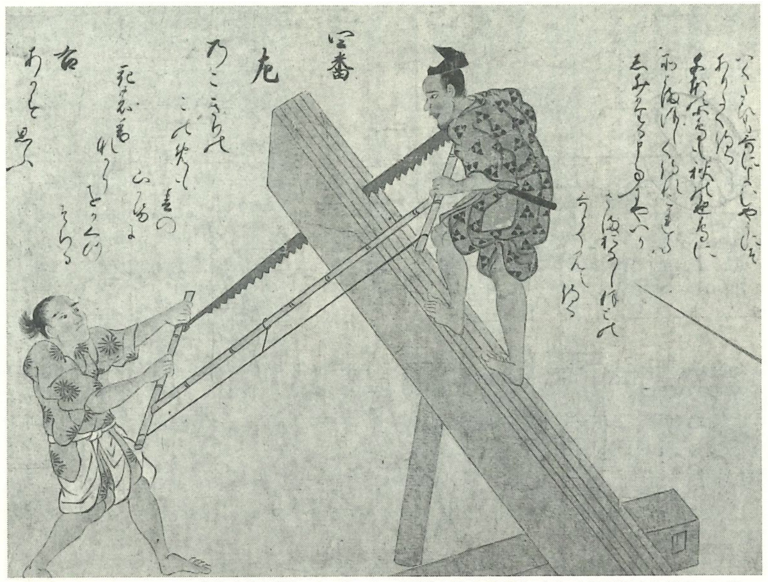
木材産業が支えた中世末期の土佐

一豊入国当時の土佐の産業としては、稲作や米の売買もあったものの、特に山間部では芋、茶、豆、楮、漆、柚、柿などの生産が中心であった。これら山地の産品を加工・保存できる方法で処理し、さらに油、胡麻、檜皮、葛、紙、綿、炭なども生産・販売していた。しかし、何と言っても当時の主力産品は木材である。

木材は室町時代ごろより、一条氏が支配する幡多庄の庄屋から上方へも送り出されているといわれ、元親も秀吉の命を受け再三にわたり京大坂へ出荷している。四国山地の南側は雨が多く、杉、檜などの育ちが早く、良木が多く育つ環境にある。伐採、運搬、輸送の方法さえ整えば、これこそ唯一といって過言ではない地場産業であった。

そのため土佐では、林業関係の手工業技術が発達し、大鋸引、檜物師、鍛冶、檜皮師、大工などの職人が多くなり、加えて銀屋、研師、塗師、革細工、紺屋、壁塗、具足細工、畳刺しなどの職人が加わった。

また、長い海岸線を有しているのでもとより鮮魚の漁獲は豊富であったが、当時は加工保存技術がなく、せいぜい干物にして出荷する程度であったと考えられている。後年、鰹節の製造法が開発されて土佐の経済は大いに潤うことになるが、当時はそのような技術もなく、上記の一次産品くらいしか地場産業はない時代であった。



土佐派絵師の祖とされる土佐光信が描いた「三十二番職人歌合絵巻」より大鋸引の図（サントリー美術館蔵）。大鋸引は板材や角材を切り出すためのノコギリで、中世後期に実用化された。製材能力を高めるのに大いに役立った大工道具である。

築城の名手、一豊による高知築城と土佐支配の第一歩

一豊の最大の難事は、勇猛果敢な長宗我部の家臣団を屈服させて無事浦戸城に入城し、その後、土佐をどのように統治するかという点にあった。

実際、浦戸城接収と前後して、後世〝浦戸一揆〟と称されることになる大抵抗に遭遇する。結局、一揆は鎮圧されるが、その過程で大きな犠牲者を出した。

一豊は、慶長六年（一六〇一）九月から高知城の築城に取りかかり、二年の歳月を経て本丸・二の丸を完成させ、また城下町の都市計画を進めた。

しかし、その実施に際しては多額の借金を背負うこととなった。それが後年、一豊の養嗣子で土佐山内家二代目を継いだ山内忠義が、家老の野中直継や福岡丹波に命じて藩政改革を進める原因となった。この改革の主力となったのは、長岡郡本山にある白髪山の檜を伐採して吉野川に流し、大坂市場に送って大量に売却を始めたことであった。

これはかなりの成功を収めたが、要するに当時上方に送ってまとまった現金収入となるのは木材しかなかったということでもある。

ところで、一豊は築城や治水、護岸、石垣工事にはすぐれた技術と知識を持つ、当時でもその面では第一級の大名であった。

若い頃から長浜城はじめ聚楽第、伏見城、そして掛川城と多くの城の工事に携わり、身につけた経験は多大なものがあった。久万川と鏡川にはさまれた三角州の沼地を、高知の城下町に変えた端緒は、彼の土木技術の堪能さと自信、将来への見通しの良さではなかったか。

山林ばかりで経済力の乏しい国とされてきた「土佐」。それを背負って、新しい近世的な城下町を創り、その治安安定に情熱を注いだ一豊という人物は、今日もう少し評価されねばならないと考えるのである。

（たにただし・土佐史談会副会長）

【第2章】



長屋重名『かゞみ草』より

一豊をめぐる人々

家族・家臣・同僚・上司・敵・そして女性…

窮乏する藩の救世主として 精神的な原点回帰を藩祖に託す

江戸時代、大名家はこぞって宗教的権威を希求した。山内家も例外ではなく、一豊を神として、その功績を讃えることで、藩政立て直しのカンフル剤とした。

文=鍋本由徳
Nabemoto Yoshinori

十代藩主豊策が崇敬の念で回顧した一豊や忠義の治世

時は流れ、土佐藩十代藩主豊策の時、文化二年（一八〇五）閏八月六日、高知城に神が鎮座した。この神が山内一豊である。古代から祭祀を担った京都の吉田家（卜部家）へ毛利源六らを迎えに遣わしたのである。

土佐藩が勧請を依頼した吉田家は、全国諸神社に位階を授与し、神号を認可する立場にあった。戦乱の世、大名は何かしらの権威を求め、政治面では将軍家や天皇家に、宗教面では吉田家に権威を求めた。

江戸時代、『諸社禰宜神主法度』が出され、一部の神社を除き、多くの社家位階は吉田家の執奏に拠った。江戸後期は白川家が吉田家に対抗したが、とても吉田家には及ばなかった。山内家もこの流れに乗って、吉田家に勧請を依頼したのであろう。

当初、高知城三の丸に安置された神は、藤並神社と命名され、翌年に、新築の社殿に移された。一豊・見性院・忠義が祭神となったのである。

江戸時代に藩主を祀った神社には、加賀藩の卯辰八幡宮（二代利長期創建、明治六年・一八七三に移転）、会津藩の土津神社（延宝三年・一六七五創建）、広島藩の位牌堂（宝永三年・一七〇六創建、天保六年・一八三五に移転。饒津神社前身）などがある。いずれも藩祖の功績を讃えるための神社である。

藩祖を祀る神社で、江戸時代後期のものは、当時の藩情勢が背景にあったと考えられる。数度の改革にもかかわらず、状況が好転しないことから、藩政確立に努めた藩祖を神として祀ることで、精神的な原点回帰をはかり、藩政立て直しをめざしたと思われるからである。

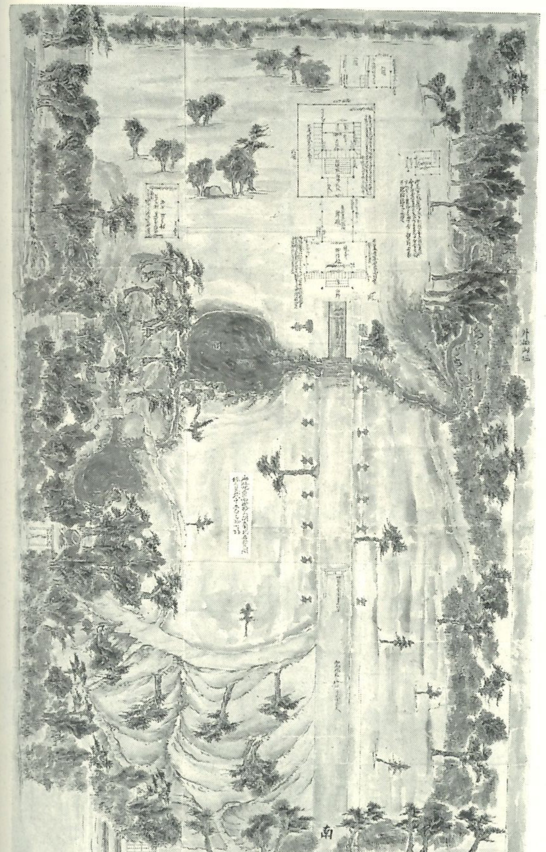
そのようにみると、土佐藩も例外ではない。十八世紀以来、藩財政は窮乏の一途を辿り、藩士の知行借上、倹約令を頻繁に出すが効果が得られない。天明飢饉でさらに打撃を受けた藩は、九代豊雍の時に藩政改革を強力に進め、十代豊策もそれを受け継ぎ、財政緊縮を推進していたのである。豊策が一豊や忠義の治世を回顧しても不自然ではないのである。

それは社殿の場所からもうかがえる。藤並神社は、野中兼山旧宅跡にある。野中兼山は、二代忠義のもとで藩政改革を推進し実績を上げた人物であることで有名である。祭神・立地ともに、藩政確立に努めた者と所縁があり、さらに一豊の妻・見性院の神体「米枡」も、藩祖の出世と所縁あるものなのである。

一豊は、天保六年（一八三五）に「大明神」となる。そして翌年、山内家の祖・藤原氏につながる春日神社を合祀した藤並神社は、明治時代に入ると、郷社、ついで県社の社格を受け、一豊・忠義には大正八年（一九一九）、その功績を讃えて従三位が贈られた。

歴代藩主を祀る神社の多くが、明治十年代に建立されていることを鑑みれば、江戸時代における、一豊・見性院・忠義に対する崇敬の念の強さを感じざるをえない。

（なべもとよしのり・日本大学非常勤講師）



「藤並明神御宮絵図」（土佐山内家宝物資料館蔵）。藤並明神は神号。一豊・見性院・忠義を神として祀る藤並神社は太平洋戦争中に焼失したが、昭和52年、山内神社に合祀された。

家族

功名の礎を築いた山内一族

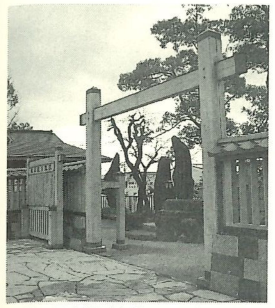
突然訪れた父兄の死、総領となった一豊は、母、弟、妹たちを連れて、さすらいの旅路を歩む。辛く厳しい苦難の道程。逆境は親族の結束を固め、生涯に亘る親族愛を産んだ。

文＝角田吉紀
Kakuta Yoshinori

父・山内盛豊と兄・十郎

伝承はさて置き、一豊の系譜の山内一族が史料で明らかになるのは一豊の祖父久豊の代からである。山内家は織田家に属していた。織田家といってもあの信長の織田家とは同じ一族ながらも系統の違う岩倉織田家であった。

一豊の父盛豊は、小城ながらも黒田城主として一〇〇〇石を得ていた。



一豊の兄十郎が奮戦のすえ命を失った黒田城跡（提供＝一宮市立歴史博物館）。現在は小学校の敷地内に石碑が建つ。

黒田城は盛豊の父久豊以来の城である。盛豊には三男三女がいた。妻は尾張羽黒城主梶原元座衛門の娘、最初の子が女子、長男が十郎、次男がのちの一豊、次が女子、三男がのちの康豊、末子が女子である。

盛豊が属する織田家の当主信安は、岩倉城を中心に尾張の北四郡を支配し、南の四郡を支配する清洲城の織田信長と対立していた。信長と対立していた近隣の者がどのような末路を辿るかは容易に想像がつくだろう。

弘治二年（一五五六）、信長は弟の信勝（信行として知られる）、庶兄の信広を相次いで撃破、尾張統一へ着々と歩を進めた。信長に打ちのめされた信勝が岩倉織田家の信安と組んだために、山内家の運命も暗転する。

翌弘治三年（一五五七）、盛豊の黒田城は信長軍の夜襲を受けた。盛豊の嫡子十郎は数人を切り伏せるなど奮戦するも所詮は多勢に無勢、山内家の嫡男としての意地を存分に見せつけつつ壮絶な討死を遂げたという。

山内一族は抜け道を通って岩倉城に落ち延びた。後の伊右衛門一豊十三歳の時である。しかし、まもなく岩倉城も信長に包囲された。城主の信安は逐電したため、盛豊が主に代わって切腹し城を明け渡した。

再び母と一豊ら四人兄弟姉妹は岩倉城を脱出して、盛豊の従弟である尾張刈安賀城の浅井正高を頼った。

しかし、そこも安住の地ではなかった。浅井正高は信長の支配下に甘んじざるを得なくなったため、一豊らは刈安賀城を離れさすらうこととなった。一豊ら山内家がもっとも苦しい時期であったのはこの頃である。父、兄を失いはからずも一家の総領となった一豊の前途は見えなかった。しかし、若くして雄々しく死に挑んだ兄十郎の勇姿を一豊は片時も忘れなかったに違いない。

妻の「内助の功」が有名になってしまっている一豊のイメージはどこか優しく穏やかな人物像として描かれていることが多いが、実像は全くといっていいほど違っており、剽悍で逞しく、戦場働きが秀でた勇敢な荒々しい武将である。戦場では憑かれたように動く一豊の脳裏には、常に兄十郎の姿が描かれていたと思われる。

母・梶原氏の女（法秀院）

前掲したが、一豊の母（のちの法秀院）は、尾張羽黒城主梶原元座衛門の娘とも二宮長門守の娘ともいわれており、定かではない。生年も未詳である。没年も天正十四年（一五八六）説と翌年説があり、没地も長浜や近江宇賀野の両説があり、はっきりとはわからない。どこの藩にも見られる動きではあるが、江戸期になって土佐藩による「初代顕彰」が始まった際、一豊の母についての調査が行われたようだが、記録に残っていない。

弟・康豊

跡継ぎが誕生しなかった一豊は弟の康豊に家督を譲るつもりでいたらしい。変遷の末、信長に仕えることとなった一豊に従って康豊も織田家に仕え、信長の嫡男信忠に近侍した。

康豊は天正十二年（一五八四）に一豊が長浜城主になった際に共に長浜に移った。康豊はよく兄を助けた。関ヶ原合戦における功によって一豊が土佐を与えられた際、兄一豊に先行して土佐に入国し政情不安定な新封地で人心鎮撫に務めている。

一豊は土佐山内家の初代として名高いが、実は土佐入封後四年ほどしか存命していないのである。一豊死後、康豊の嫡子忠義が二代目藩主に襲封したが、忠義はその時十四歳であったため、実父の康豊が二〇年ほど後見役として働いた。旧領主の長宗我部家遺臣による一揆など不安定な初期情勢を差配した康豊の功績はもっと評価されてよいであろう。



山内康豊肖像画（要法寺蔵）。兄である初代土佐藩主一豊の片腕として、また息子である二代目藩主忠義の後見役として、初期土佐山内家を支えた。

姉と二人の妹

一豊には姉と二人の妹がいた。姉は一豊が生まれた年に、十三歳で美濃国北方城主安藤守就の弟郷氏に嫁いでいる。守就といえば「美濃三人衆」の一人に数えられた有力な豪族であった。のちに織田家に仕えた安藤家であったが、咎により改易となった。

郷氏の死後、尼となり「法雲院」となった一豊の姉は、一豊が長浜城主となると子供四人（男子一人、女子三人）を連れて長浜に移った。嫡男の可氏は山内の苗字を許され、一豊の土佐入封後宿毛城六二〇〇石を与えられた。他の女子三人もそれぞれ山内家の有力家臣に嫁いだという。

一豊のすぐ下の妹（剃髪後は覚性院）は、美濃の有力豪族である長井利直に嫁ぎ、利直没後は松田政行に嫁ぐも子供に恵まれなかったらしいが、末妹（剃髪後は慈仙院）の男子を養子に迎えた。



山内一豊の妹・慈仙院肖像画（要法寺蔵）。九十三歳の長寿で没した、一豊の妹。彼女が嫁いだ野中兄弟からは山内家代々の奉行が輩出された。

一豊の末妹は、美濃の野中良平に嫁ぎ三人の子を産む。良平死後は弟の益継に再嫁し五人の子をもうけた。益継死後は孫で土佐藩の名執政野中兼山の屋敷で静かな日々を過ごし、死後は遺言により兄一豊と同じ真如寺山に埋葬された。

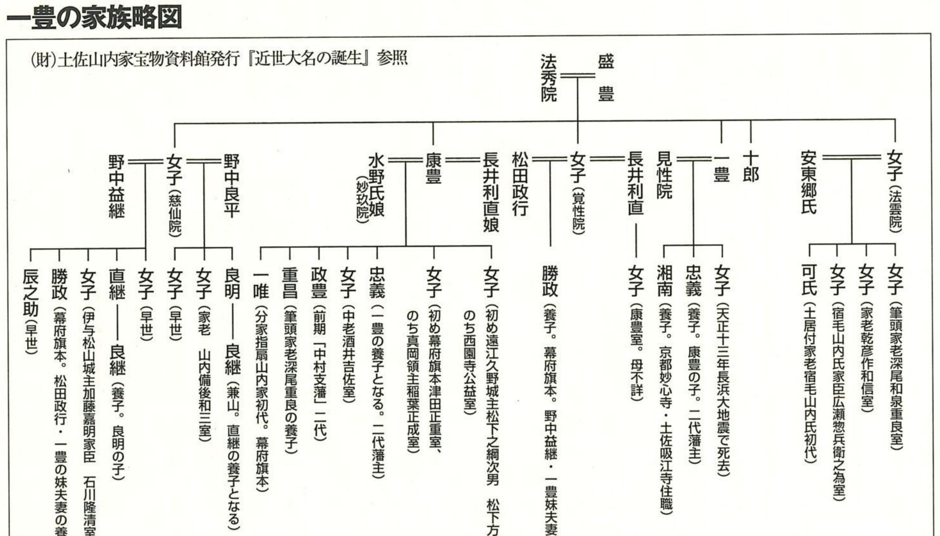
＊　＊　＊

一概に山内一族は皆仲睦まじい。一豊がおそらく何の躊躇もなく弟の家系に家督を譲ったのも、末妹が兄一豊の眠る真如寺山に墓を立てて欲しいと遺言したのも、幼き頃父兄をなくし共に保護してくれる豪族を訪ね歩き流離ったという共通体験からくるのだろう。

一豊という人物を象ったものの根源は十三歳にして父と兄を失い、母、兄弟、姉妹を背負って有力豪族を訪ね歩いた苦しい体験であろう。その体験が兄として、いや総領としての責任感、あくなき地道な出世階段へと繋がっていったのだ。「名馬購入」などの「内助の功」話は一豊の人物像をすっかり歪めてしまった観がある。

（かくたよしのり・歴史研究家）

一豊の家族略図



家臣団

一豊を支えた木強な部下たち

尾張、長浜、掛川、土佐と辛酸を嘗めながらも、一豊は部下を思い、家臣は一豊を支えた。土佐一国の功名を掴んだ麗しき主従愛は、山内家の家風でもあった。

文＝角田吉紀
Kakuta Yoshinori

祖父江道印・勘時

一豊十三歳の時に父盛豊と兄十郎が討たれ、一豊一家が黒田城から命からがら逃げ落ちたことは家族編で記述した。一豊は母と弟、妹二人らを連れて岩倉城へ向かうのであるが、その際に支えとなったのが家臣の祖父江道印であった。道印は黒田城の堀際にあった竹を切り倒して橋を掛けるなど、必死の思いで一豊らを道案内した。道印は一豊らを黒田城から岩倉城に落去させた直後の岩倉城落城で奮戦の末討死。山内家に捧げた道印の忠心を一豊は生涯忘れなかったという。

祖父江家はそもそも尾張祖父江村の出身で、道印は一豊の母の縁者であったとの説もある。以後、祖父江家は代々山内家への忠勤を励んだ。

道印には跡継ぎもいなかったようであるが女子がいた。一豊は土屋新右衛門なる若者に道印の女子を嫁がせ祖父江家の名跡を継がせた。後に土佐で一三〇〇石を与えられた祖父江勘時である。


祖父江勘時が一豊から拝領した、黒糸威七十六間小星兜（土佐山内家宝物資料館蔵）。大正時代に祖父江家から山内家に返還された。

勘時は天正十九年（一五九一）正月、山内家恒例の馭初式（現代でいう観閲式）で、一豊から黒糸威七十六間小星兜を授与されるという栄誉を受けている。また、上覧する当主の櫓は勘時の屋敷内に造られるのが慣例であった。山内家がいかに祖父江家を厚遇していたかがわかる。

五藤為浄・為重

愛知県の『木曽川町史』によると、郷戸の渡し（長良川の渡し）の渡船の中で、五藤浄基という岩倉織田家の家臣であった者が、一豊の父盛豊の人物に惚れ込んで臣従したという。岩倉城落城の折には、一豊ら一族を獅子奮迅の働きで落ち延びさせた。その浄基の子が為浄である。

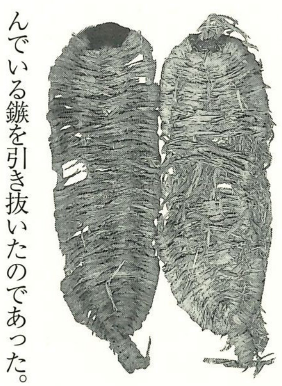
為浄は常に一豊の身辺にあり、一豊と戦場では一心同体で働いた。年もほぼ同じだったと思われる。

天正元年（一五七三）の信長による越前朝倉追撃戦で、朝倉方の猛将三段崎勘右衛門を一豊が激闘の末討ち取った際、一豊の左の眦から右の奥歯まで矢が貫通したことがあった。この時一豊は力を込めて矢を引き抜いたが矢柄が砕け、矢の根が残ってしまった。矢の根がはみ出ているのを見た為浄は噛んで抜こうとしたがなかなか抜けない。そこで為浄は一豊の厳命で顔面を踏みつけて食い込んでいる鏃を引き抜いたのであった。読んでいるだけでその激痛ぶりが伝わってくる。さらに為浄は一豊を介抱しつつ退却、都合よく味方の将より馬を奪い取って一豊を陣屋まで運んだ。

信長は自ら為浄を引見して褒め称え、為浄に一豊の看病を命じつつ、傷薬を与えたという。

為浄は常に一豊と戦場駆けをした。一豊にとってかけがえのない戦友であった。

しかし、為浄は討死する。天正十一年（一五八三）の秀吉による、滝川一益の伊勢亀山城攻めにおいてであった。先駆けをした為浄は敵に囲まれ、多勢に無勢の中、槍を振るうも一豊の眼前で討たれた。一豊は泣きに泣いた、号泣したという。苦難の道程を共に過ごした間柄だけに一豊の落胆振りは察するに余りある。


五藤家家宝の草鞋（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。三段崎勘右衛門との戦闘で一豊の顔面に刺さった鏃を、五藤為浄はこの草鞋を履いたまま顔面を踏みつけ抜き取ったという。

家督は実弟の為重が継いだ。五藤家は為浄の武功もあって代々家老職を務め明治維新を迎えたのである。

江田文四郎

戦場働きが主であった一豊の初期家臣団には当然のように荒くれ武士が多い。ここで紹介する江田文四郎などは、最たる荒くれ武士である。長浜城時代の一豊に仕官した文四郎の経歴は不詳である。

数々の戦で勇猛な働きを見せていた文四郎であったが、天正十八年（一五九〇）の秀吉による小田原北条攻めにおける激戦「山中城攻略戦」で首級二つを挙げるも腕に深手を負ってしまった。腐りかけの傷を心配した一豊の厳命によって掛川へ送還されるが、戦場を離れることを口惜しく思った文四郎は、三島まで戻った所で塩を購入、傷口に塩を塗して陣営に戻ってきた。そのまま奉公を続けた文四郎、まさに豪傑であるが、えてして豪傑は失敗が多い。

小田原北条氏を滅亡させた秀吉は、政情不安定な奥州を鎮撫するため引き続いて奥州遠征を敢行する。山内家も当然それに従軍するのであるが、そこで文四郎はとんでもない失態を犯してしまう。

秀吉の甥で翌年には関白となる秀次の、補佐役である渡瀬繁詮の家臣団と船中で口論となり、三人を船から突き落とすという暴挙である。繁詮のとりなしによってその場は収まったが、到底ただでは済むまいと周囲は見ていた。しかし、当の文四郎は全く悪びれた様子もなく振舞っていた。その豪放磊落な性格を一豊は愛していたのであろう。お咎めはなかった。

その後も文四郎は戦場で活躍する。しかし、慶長七年（一六〇二）、山内家中の辻清兵衛と口論になり、相手を撲殺してしまった。これは山内家中を二分する抗争に発展しそうになったため一豊自ら仲裁に入った。文四郎は切腹。享年三十五であった。

跡を継いだ文四郎の嫡男も父の血気を受け継いだのか、父と同じく喧嘩の末に切腹させられた。

乾和信・和三

乾氏は、もともと美濃池田郡東野の出身である。稲葉山城の北西（乾）に邸があったため、乾が姓となったらしい。幕末に現れ、討幕運動、自由民権運動などで有名な乾（板垣）退助は、この乾氏の末裔といわれる。

天正五年（一五七七）、乾和信は旧知であった一豊が播磨へ出陣中、一豊を訪ねて仕官したとされる。一豊の姪（姉の次女）を娶っている。

天正十三年（一五八五）、一豊が近江国長浜を与えられた際、一三〇〇石を与えられたが、天正大地震によって死亡した。享年四十二であった。家督は弟の和三が継いだ。和三は土佐入国後、山内姓を下賜されて家老に列した。

野々村迅政

迅政の父幸政は織田信長の馬廻りであった。本能寺の変時では信忠に供奉しており、二条御所で討死している。

迅政は一豊が掛川領主の時から仕えた。関ヶ原合戦の前哨戦であった岐阜城攻めでは先陣を受け持ち、木曽川の瀬踏みを行って先駆けをし戦功を挙げた。土佐入国後は四五〇〇石を与えられ、山内姓を下賜され山内内記と名乗った。

山内家が土佐に入国してから頻発した、長宗我部遺臣による一揆には、迅政がよく鎮圧にあたりその任務を果たしている。

伯父にあたる雅春は、かつて秀吉の黄母衣衆で大坂の陣で豊臣家に殉じた。迅政の兄幸成もその子幸次も大坂陣で豊臣方として討死している。

野中益継

野中益継は長浜時代から一豊に仕官し、一豊の末妹を娶った。もともと末妹は益継の兄良平に嫁いでいたが、良平が天正七年（一五七九）に没すると益継に再嫁している。初期山内家を支えた名執政野中兼山こと良継は、益継の兄良平の孫で、のちに益継の子直継の養子となっている（八三頁参照）。

益継は一豊の甥にあたり、かつ堅実な事務方として信頼されていたようで、築城、移転、町割など山内家が直面した数々のターニングポイントにおいて実直な働きを示した。

田中孫作

田中孫作は、近江国坂田郡高溝村出身の豪族である。一豊が長浜城に

いたところ、その臣下となった。以来一豊夫妻の信任が厚かったという。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦の契機となった、家康による上杉討伐軍に一豊は従軍した。このとき、大坂にいた一豊の妻は石田三成の挙兵を知らせる書状を一豊に送った。この書状を一豊に届けたのが、田中孫作である。大坂では石田三成ら豊臣方が、大坂に残る武将の妻子を人質とする計画に出たのだ。

豊臣方の増田長盛・長束正家連署の書状が山内家にも届けられた。

一豊の妻はこれを信頼できる田中孫作に託し、一豊に届けさせた。彼女はその時二通の文をしたためたという。一通は文箱に増田長盛・長束正家連署の書状と一緒に収め、もう一通は観世紙縒にして孫作の編笠の緒に編み込んだ。

孫作は大坂から関東へ下った。下ったといえば簡単だが、これ程難しい任務はない。豊臣方は大坂にある諸侯の留守邸と関東に従軍中の諸侯との間に通信が行われることを阻止すべく、近江国の大津に巨大な関所を設け、さらに同国の長束正家の所領である水口、石田三成の所領である佐和山にも関所を設けて、東西の交通を完全遮断していたのである。


茶臼山（大阪府天王寺区）。大坂夏の陣における最終決戦で、毛利勝永はこの付近に陣を敷いた。雲霞のごとき徳川軍を相手に勝永は獅子奮迅の働きで敵の心胆を寒からしめた。

孫作は近江出身であったので、なんとか近江での関所は切り抜けた。近江言葉が出来たので適当に言いくるめたのであろう。美濃あたりでは追い剝ぎに襲われたが、文箱と密書は守りきって一豊が宿陣する常陸諸川まで辿りついた。

文箱を受け取った一豊は先に編笠の紙縒を開き、妻よりの書状を読んですぐさま焼却したらしい。内容は不明である。

そして、一豊は増田長盛・長束正家連署の書状と、大坂の状況・人質騒動・時によっては自害を覚悟とするという内容の千代の文を、開封する事無く文箱ごと家康に差し出した。

全てを家康の判断に託すという行動に出たのである。どんな内容が書かれているかわからないものを確認せぬまま家康に託す事で信頼を勝ち得たのである。おそらく一豊の妻は文箱を開けぬまま家康に渡すよう、紙縒にしたためたのであろう。

土佐一国の大名に抜擢される一端を作った孫作は、以後も山内家に重用されつつも、いつしか京に隠居し、寛永五年（一六二八）京で没したと伝わる。

ちなみに関ヶ原合戦における、小早川秀秋への徳川方勧誘の密使者もこの田中孫作であるという説もある。

毛利勝信・勝永・吉近

最後に厳密には山内家の家臣とは言えないかもしれないが、戦国ファンには根強い人気を誇る人物を紹介したい。

毛利勝永（吉政）。大坂の陣にて大坂五人衆（長宗我部盛親、真田幸村、後藤又兵衛、毛利勝永、明石全登）に数えられた浪人大名の一人である。タイトルには毛利勝信・勝永・吉近とあるが、正式には毛利吉成・吉政・吉近が正しい（吉は秀吉よりの偏諱である）。しかし、戦国ファンに馴染み深い名前で書き進めたい。

勝永の父、勝信は尾張の出身であり、元々は森氏であった。勝信は豊臣家の譜代の家臣で、天正十五年（一五八七）、秀吉による九州平定後に、豊前小倉六万石を与えられた（勝永も豊前にて一万石を与えられる）。

また、秀吉は勝信・勝永父子に、中国の大名毛利家の許可を得て、森姓から毛利姓へ改姓させた。

豊臣恩顧の勝信・勝永父子は、関ヶ原合戦時には西軍に属す。勝永の弟である吉近もそれに従った。

伏見城攻撃に従軍した勝永・吉近兄弟（父勝信は国許に残留）は戦功を挙げるも結局関ヶ原合戦で西軍が敗北。戦後、所領を没収される。

勝信・勝永・吉近父子は、肥後の加藤清正にお預けの身となった。

ここで山内一豊が登場する。一豊はこの毛利父子とは非常に懇意だったのである。勝信の生年は不詳であるが、一豊と同じ世代であろう。同じ尾張出身の同郷でもある。

翌年、一豊は毛利父子を迎えたいと幕府に懇願。許可が下りて毛利父子は土佐に移ることとなった。政情不安定な新領地土佐への入国まもない一豊にとっては、同郷の親友勝信

を迎えたことはさぞや嬉しい事であったに違いない。

一豊は毛利父子を手厚く遇した。勝信は高知城西の丸に邸を与えられた。勝永には一〇〇〇石の捨封地を与え、城下の久万村に邸を与えた。弟の吉近についてはなんと二〇〇〇石を与えただけではなく、山内姓を下賜し、さらには家老職に抜擢したのである。

しかし、慶長十年（一六〇五）、一豊が死去し、二代目忠義の代になって六年後の慶長十六年（一六一一）には勝信が死去、翌々年には吉近が山内家を退去して浅野長晟に仕えた。

徳川と豊臣の手切れが迫る頃、勝永は妻へ豊臣家に味方したいという思いを漏らす。以下『常山紀談』から引用する。

勝永「我罪有りて斯かる所に居住し、汝にも斯く憂き事を見する事ぞとよ。されども我志あり、詞に表し難し」――（関ヶ原で負け）罪人となりこのような所に住み、お前にも辛い目をあわせている。しかし、私には志がある、言い辛いことだが――。

妻「世の変は如何なる人も測るべからず。かく成りはてたりとも更に悲しむべきに非ず。妻は夫に従ふを道とこそ聞き候へ。其の御志を承らばや」――世の変転はどんな人にもわかりません。このようになっても悲しんではいけません。妻は夫に従うのが道です。あなたの志をお聞かせ下さい」――。

勝永「我武名を伝へて数世に及びぬるに、斯く沈み果てなん事口惜しき事なり。命を秀頼公に奉りてんと思へども、我爰を忍び出でなば憂が上にも猶憂き事や御身の上に添ふらん」――わが家は武名を伝えて数代経つが、このように落ちぶれていて口惜しい。（近々起こるであろう徳川と豊臣の手切れの際には）私の命を秀頼公に捧げようと思うのだが、私がここを出ればお前達の身の上に災難が及ぶであろう――。勝永の妻の返答は以下の通りであった。

「弓箭取の妻となりていかでか斯かる事を恐れなんや。早や此の暁船に乗りて武名を潔くし給へ。主君のため家の悦び何事かこれに如かん。妾が事な思ひ給ひそ。如何にもなり給ひなば、此の島の波に沈み候べし。又運命目出度くば頓て逢ひ奉らん。とにかくに急ぎ給へ」――武士の妻となってなぜにこのようなことを恐れるでしょう。早く暁の船に乗って武名を挙げてください。主君のために働くこと、家の喜びはこれに勝るものはありません。私のことなど思い煩わないで下さい。いざあなたが死んだときには私も海に身を投げます。もし、勝利したならまたお会いできるでしょう。急いでください」。

小才が利いたという一豊の妻とは違った、毛利勝永の妻こそを誠の賢妻というのではなかろうか。

勝永と長男勝家は海路土佐を脱出。大坂城に入城した。秀頼の信頼厚かった勝永は五〇〇〇の兵を預けられ、真田幸村を上回るほどの縦横無尽の活躍をしたことは周知の通りである。

さて、勝永が恐れたとおり、妻と次男は捕縛された。しかし、「勇士たる者の志感賞すべき事なり。豊前（勝永）が妻罪する事有る可からず」（『常山紀談』）との家康の命により妻と次男は高知城内で厚遇された。

しかし、豊臣家の滅亡、勝永と長男勝家の死を伝え聞いた妻は約束通り自害した。

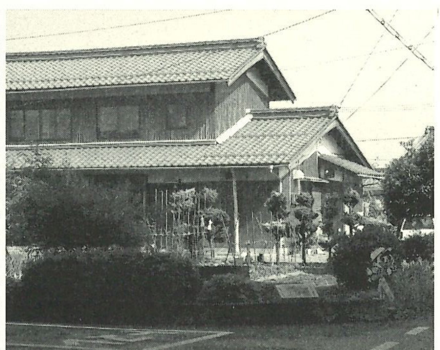
見事な武士としての死に花を咲かせた毛利勝永と、武士の妻としての本分を果たしたその妻であった。

＊　＊　＊

最後に紹介した毛利夫妻は誠に見事な夫婦愛の結実を見せた。だからこそ罪人となった毛利一家を温かく迎え厚遇した、一豊の優しい人間性がことさら味わいのあるものになっている。

一豊は優しい主君であったのだろう。優しいといっては語弊があるかもしれない。部下思いの主君であったのだろう。管見の限りでは誰も一豊を裏切ったり、見限ったりしていない。けっして一豊も理不尽な罰を家臣に与えてはいない。ほのぼのとしつつ戦場では力を合わせる、そんな山内家中が思い浮かぶようである。

（かくたよしのり・歴史研究家）


田中孫作屋敷跡（滋賀県近江町）。一豊に妻の密書を届けた孫作であるが、石田三成らの挙兵が七月十七日、一豊の宿陣地常陸諸川に届けたのは二十三日夜である。大坂から常陸までは約六〇〇キロ。実に一日一〇〇キロ弱移動したことになる。

一豊をめぐる人々

同僚

一豊が協力し合った競争仲間たち

実直で律義者で知られた秀次の宿老たち。秀吉が評価した五人の武将は、密に連絡を取り合い協力し合って着実に出世を重ねた。

文＝角田吉紀
Kakuta Yoshinori

堀尾吉晴

堀尾吉晴は天文十三年（一五四四）生まれで、一豊とは一歳違い（一豊が一つ年下）である。

堀尾氏は吉晴の数代前から尾張国丹羽郡供御所村を領していたといわれる。吉晴は若い頃茂助と名乗っていた。さらに幼名を仁王丸といった。女子のような優しげな容貌ながらかなか勇猛な少年であったらしい。

ある時、信長が仁王丸の住む里で巻狩りをした。信長の巻狩りは激しく、ハプニングが付物である。むしろそのハプニングを楽しむかのような風すらあった。その時は信長の眼前へ大猪が現れ、傷に狂いながら大暴れし、信長へ突進して来た。すると村で勢子として徴発されていた仁王丸が大猪に小刀を突き立て大格闘の末ついに仕止めた。

信長は勇敢な少年が大好きである。すぐさま仁王丸を取り立て、さらに仁王丸を家来として欲しがった秀吉に預けた。つまり吉晴は藤吉郎時代からの秀吉に仕えていた股肱の臣の一人なのである。

吉晴と一豊は秀吉の家臣として良き同僚として、着実に立身を遂げていった。

吉晴は、秀吉が長浜城主となった天正元年（一五七三）頃には、長浜のうちで一〇〇石を与えられて以降、同五年（一五七八）には播磨国姫路のうちで一五〇〇石、丹波国黒江で三五〇〇石、同十年（一五八三）丹波国氷上郡内で六二〇〇石、翌年は若狭国高浜一万七〇〇〇石、翌年、若狭国坂本で二万石、翌年、近江国佐和山四万石と加増された。同年代の一豊よりも石高がいずれの時期も高く出世も早いのは、戦場働きのみの一豊に比べ、吉晴は采配ぶりも巧かったからであろう。

吉晴の戦上手振りは評判であった。人物も実直で知られ、ために秀吉の信頼が格別に厚かった。

天正十八年（一五九〇）関東の雄小田原北条氏を滅ぼした秀吉は、徳川家康を関東二五〇万石に移封した。秀吉のねらいは実力者家康を関東に閉じ込めることであった。

さらに家康が反旗を翻し、上洛戦を敢行した場合に備え、東海道筋の主要な地に股肱の臣を立て並べた。吉晴は浜松の地に一二万石を与えられた。また、吉晴は一豊や中村一氏、一柳直末、田中吉政らとともに秀吉の甥で関白秀次の宿老を務めている。

しかし秀次事件の際には、吉晴はじめ宿老たちには何の咎めもなかった。その理由は定かではない。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦が起きた際、吉晴は徳川方に与力し嫡男忠氏を従軍させた。秀吉の思惑は崩れ、東海道筋に配置した秀吉股肱の臣たちはみな徳川方についたのである。



堀尾吉晴邸址（提供＝愛知県大口町役場）。愛知県丹羽郡大口町の八剱（やつるぎ）神社一帯は堀尾家代々の邸があった場所である。現在は石碑が建つのみである。

ちなみに従軍しなかった吉晴はじっとしてはいなかった。血が騒いだともいうべきか、彼は合戦に先立って周辺諸国の動向を探ろうとした。が、三河国池鯉鮒で加賀井重望と三河国刈谷城主水野忠重と酒宴を催した際、大乱闘を繰り広げている。

飲酒し、大酔の末口論となったその場では忠重が重望に斬殺され、吉晴も斬りつけられた。しかし、そこは武辺者の吉晴である。すぐさま逆襲に転じ重望を返り討ちにした。さらに吉晴は、重望と共謀して忠重を討ったと誤解されて水野家の面々にも切りつけられた。吉晴は数人と切り結びながら塀を飛び越え難を逃れた。吉晴五十八歳。凄まじい勇猛ぶりである。

この事件を単なる口論の末の乱闘と見ていないのが『徳川実紀』である。その記録には加賀井重望を豊臣

方の重鎮大谷吉継が放った刺客であると記述している。吉晴は忠氏に家督を譲った際に家康の差配によって越前府中に五万石の隠居領を貰っている。吉継の所領は同国敦賀にあり、彼は北陸における徳川与同勢力の駆逐に腐心していた。吉晴は吉継に狙われたのであろう。

さて三成が大坂で挙兵したとのことで各大名の去就を諮る「小山会議」が家康主導で行われた。豊臣恩顧の福島正則が徳川与同を表明したために、各大名は雪崩をうって徳川方へ味方についたのは有名であるが、一豊がその最中に「自領を徳川方に預け、掛川城も自由に使っていただきたい」旨発言し、その一言こそが土佐一国を得る契機となったこともまた一豊の事跡を語る上では欠かせない。

しかし、一豊が述べたその内容はそっくり忠氏の案であり、事前に一豊に居城明け渡し案を語った忠氏が、発言内容を横取りされたことが『寛政重修諸家譜』の堀尾忠氏の項に記述されている。つまり忠氏は名案を一豊に盗まれたということらしい。

案を盗んだ山内家は土佐一国の太守として明治まで存続したが、案を盗まれた堀尾家は関ヶ原以後出雲・隠岐二四万石を与えられるも、忠氏は五年後に病死した。吉晴はその死を悲嘆しつつも、忠氏の嫡男忠晴を盛り立てて国政を預かったが、慶長十六年（一六一一）に死去。そして忠晴も寛永十年（一六三三）に三十五歳で病死。堀尾家は嗣子がなく断絶した。まるで運に見放されたかのような「御家滅亡」であった。

中村一氏

中村一氏は父一政とともに永禄二年（一五五九）に織田信長に仕えた。一氏は当初信長の小姓組に入ったが、永禄九年（一五六六）に秀吉付となった。天正三年（一五七三）から同五年（一五七五）までの間に近江長浜内で二〇〇石を与えられている。

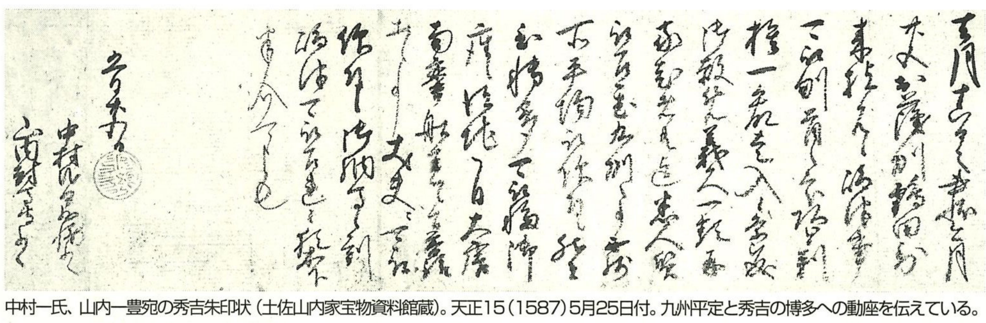
天正年間、織田勢は一揆軍との戦いが多かった。一氏は戦上手として知られ、様々な戦功を打ち立てた。戦功といっても一豊のような泥臭い戦場働きで敵の首級を何個とったかの類ではなく、少ないながらも自らの部隊を巧みに指揮し、敵勢の弱点を襲うといったような働きである。特に、相手が専業の武士ではなく勢いで押し寄せる一揆勢であった場合などには、一氏のやり方は有効であった。

秀吉の覚え目出度かった一氏は、天正十二年（一五八四）和泉岸和田城主となる。紀伊周辺に蟠居していた根来衆・雑賀衆に対する押さえであった。

翌年には一氏は要衝近江水口城六万石を与えられた。さらには堀尾吉晴・一柳直末・田中吉政・山内一豊らとともに関白秀次の宿老ともなった。

天正十八年（一五九〇）、一氏は駿河府中に一七万五〇〇〇石で封ぜられた。小田原北条氏を滅ぼした秀吉は家康を関東に移封させたため、一氏の駿河入国はその押さえであった。秀次の宿老である他の四人も同じく東海道筋に家康の押さえとして配置されたが、特に一氏は関東の家康領に隣接している。しかも駿河は関東移封前の家康本領である。家康を慕う領民土豪等が多数いたことも予想される。もし家康が上洛戦を敢行せんとしたならば、まず手始めに行うことは旧領の領民による蜂起の筈である。それだけに一氏に寄せる秀吉の信頼の高さが察せられよう。

文禄四年（一五九五）関白秀次が秀吉の命により、関白職を取り上げられた挙句に自刃させられた。翌々年には秀吉も病死し、豊臣政権は五



中村一氏、山内一豊宛の秀吉朱印状（土佐山内家宝物資料館蔵）。天正15（1587）5月25日付。九州平定と秀吉の博多への動座を伝えている。

大老五奉行の合議制に移行した。一氏は堀尾吉晴・生駒正成とともに「三中老」として政務に携わった。この頃より病気がちであった一氏は、中村家の行く末を思って家康に接近するようになっていた。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦のきっかけとなった上杉征伐には嫡男一忠（後見人として一氏弟の一栄）を代理として派遣している。石田三成らによる挙兵が伝えられ、諸侯の向背を決める「小山会議」が開かれていた七月十七日に、一氏は病死した。

徳川方として働いた一忠には伯耆米子一七万五〇〇〇石が与えられたが、三年後の慶長八年（一六〇三）に重臣横田村詮を手討ちにするという事件を起こした。殺害された村詮の嫡男主馬助が反旗を翻したために中村家は「米子騒動」と呼ばれる内戦となった。これをからくも鎮圧した一忠であったが、その六年後の慶長十四年（一六〇九）二十歳で謎の死を遂げた。一忠には嗣子がなく、中村家は断絶した。

ちなみに米子城引渡しの際に検分で立ち会ったのは、秀次の宿老としてかつての「同僚」であった一柳直末の弟で後継者の直盛であった。

一柳直末

生え抜きの秀吉の家臣として知られる一柳直末は、永禄七年（一五六四）頃美濃の内で二五貫を与えられた。姉川合戦、播磨三木城攻めにて戦功を打ちたて、天正元年（一五七二）に近江長浜の内二五〇石を得た。また、秀吉の母衣武者として抜擢されている。母衣武者とは選りすぐりの精鋭団であり、戦国武士ならば誰もが選ばれることを願うものである。

天正五年（一五七七）、播磨姫路の内で二五〇〇石、その後も着々と加増された。一豊とは親しく、出世の足並みも似たり寄ったりである。関白豊臣秀次の宿老として近江勢多城で近江八幡城の秀次を補佐した。

直末は最終的には天正十七年（一五八九）に美濃国浮見城五万石に封ぜられた。

しかし、翌年の秀吉による小田原北条攻めにおける最大激戦「山中城攻略戦」において先陣を受け持ち、流れ弾に当たって戦死する。享年三十八。直末戦死の報を聞いた秀吉は、ちょうど食事中であったが、「関八州にも換えがたい男を失ってしまった」と涙を流したという。

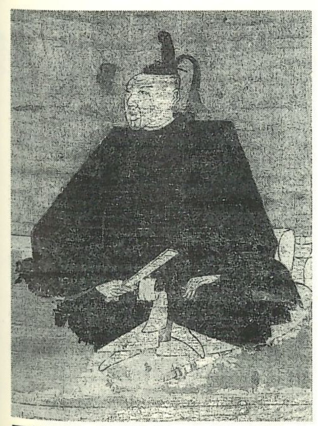
直末の後継は弟の直盛であった。秀吉から、一豊の祖父や父の居城であった尾張黒田城にて三万石を与えられた。翌々年には五〇〇〇石が加増された。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦では徳川方に属し、敵方である石田三成の本城佐和山城と西軍拠点大垣城との間の美濃長松に陣を敷きその連絡を遮断する重要な役目を果たした。戦後伊勢神戸五万石に加増。以後明治まで一族で所領を細分しつつも存続した。

田中吉政

田中吉政は天文十七年（一五八四）近江高島郡田中村で農民の子として生まれた。その出自や巧みな処世術、果ては筑後柳川三三万石の大名となった躍進ぶりは、あたかも秀吉の縮小版を見るようである。

吉政は最初に秀吉の家臣である宮部継潤に仕えた。秀吉が長浜城主となると宮部は三一〇〇石を与えられ、吉政は足軽ながら七石を与えられた。わずか七石からの出発であった。


田中吉政像（真勝寺蔵）。吉政は面長だったらしくその特徴が窺える。吉政の嫡男の画像という説もある。

天正十一年（一五八三）、秀吉の命により三好秀次（のちの関白秀次）の家臣となり、めきめきと出世し始める。翌々年に秀次が近江八幡城を任されると三万石を給した。

吉政は一豊とは二歳違い（一豊が年上）であった。戦場での活躍を出世の糸口とした一豊や堀尾吉晴・中村一氏・一柳直末らとは違って、吉政は戦場では後方担当、得意としたのは工事普請などの行政面、上司への巧みな取り入りであった。

秀吉にその才覚を愛された吉政は、天正十八年（一五九〇）三河岡崎城五万七〇〇〇石に加増され、かつ隠居料四万石、豊臣家直料三万石の代官に任じられるなど、豊臣家中でなくてはならない存在となった。この厚遇には石田三成の差配があったと伝えられる。

しかし、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦では吉政は徳川方に属している。合戦当日も大恩ある石田三成の部隊に果敢に攻めかかった。翌日行われた石田三成の居城である佐和山城攻めでは、三成の兄正澄が自分の切腹を条件に開城降伏に応じる交渉を行っている最中に、吉政が自隊に抜け駆けを命じて城内に乱入させたため結局開戦となり、石田一族・家臣はもとより城中にいた女子供も全員自害するという悲惨な事態を招いた。

さらには合戦後に居場所がわからなくなっていた三成を伊吹山中において捕らえるという戦功までが、吉政に転がり込んできた。三成は吉政のことを「田兵」と呼んでいたが、罪人として捕らえられた状況においても毅然として平素と変わらず、「田兵」と呼び捨てにした。

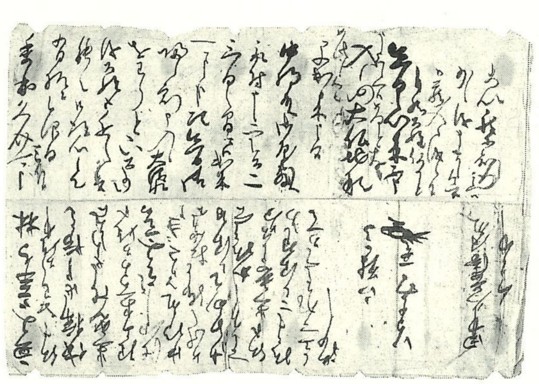
戦後、吉政は筑後柳川城主となり、三三万石を与えられた。領内整備等の内政は吉政の得意とするところである。吉政による柳川の都市開発のモデルはイタリアのベネチアであったと伝えられている。

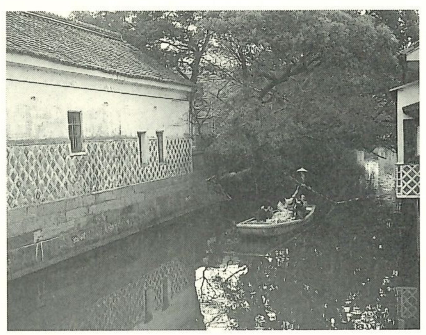
＊　＊　＊

一豊の同僚として四人を挙げたが、一豊を含めたこの五人の共通点は、関白豊臣秀次の宿老であったということである。一度は秀吉が己の後継者として定めた秀次。一豊ら宿老は秀次の死によって実現しなかった次期豊臣政権の中枢を担うはずの五人であった。彼らは秀吉からの信任がことさら強かった武将であり、それゆえに出世のスピードも似通っている。また、幾度か述べたが、秀吉は家康を終生恐れ、関東に封じた。さらに関東の家康が反旗を翻した時に備え、東海道筋の主要な地に股肱の臣を立て並べた。駿府城に中村一氏、掛川城には山内一豊、浜松城には堀尾吉晴、豊橋城には池田輝政、岡崎城には田中吉政、清洲城には福島正則、大垣城には一柳直末というように。

この項に挙げた五人は相互に密に連絡を取り合い、協力し合って着実に出世を重ねていった。なによりも実直で律義者であるという評価から秀吉に信認された五人であったが、関ヶ原合戦では全て徳川方に靡き、むしろ率先して家康の水先案内人のような役割を果たして西軍の石田三成らを滅ぼすに至った。秀吉の思惑は全く外れたのである。

（かくたよしのり・歴史研究家）


田中吉政宛の一豊書状（市立長浜城歴史博物館蔵）。平成六年に新発見されたこの書状は長浜城主時代の一豊が、吉政へ宛てたもの。内容は「方広寺大仏殿の敷地地固めが早く終了したので京の秀次屋敷の造営に取りかかる」「山の領有権で争いになった村同士が訴訟にきたので適切な対応を行うよう」との旨である。秀次家臣団内の役割分担が窺える貴重な史料である。


柳川城下の水堀（福岡県柳川市）。柳川城は水の城として有名である。本丸及び二の丸跡には柳川高校、柳城中学校が建つ。

石高変遷表

	山内一豊	堀尾吉晴	中村一氏	一柳直末
1570後半	播磨有年700石 秀吉の腰母衣衆	播磨姫路1500石	近江長浜200石	播磨姫路2500石
1580~1584	播磨印南3200石	若狭高浜1万7000石	和泉岸和田城主（石高は不明）	秀吉大母衣衆
1585~1589	近江長浜3万石	近江佐和山4万石	近江水口6万石	美濃浮見5万石
1590	遠江掛川5万石 豊臣秀次宿老	遠江浜松12万石 豊臣秀次宿老	駿河府中17万5000石	豊臣秀次宿老
1600	土佐高知20万石	後継忠氏が出雲・隠岐24万石	後継一忠が伯耆米子17万5000石	後継直盛が伊勢神戸5万石
その後	土佐山内家として存続 雄藩として幕政に参画する	寛永10年（1633）忠氏の嫡男 忠晴が死去。堀尾家は断絶	慶長14年（1609）一忠 が死去。中村家は断絶	所領を一族3家で分け合い 存続した。

主君

一豊の飛躍を導いた主たち

信長、秀吉、家康など幾人もの主君に仕えた一豊。時代に翻弄され、様々な難局に直面しつつも、忠実に懸命に働いた彼は、いずれの主君にも信頼され、実直な働きを評価された。

文=角田吉紀
Kakuta Yoshinori

牧村政倫

一豊は十三歳のとき、織田信長の軍勢により父盛豊と兄十郎を一度に失った。一豊は山内一族の総領として母や幼い弟、妹二人を連れ、由縁を頼りながら有力豪族を訪ね彷徨った。最初は、父の従弟である浅井正高。しかし、信長の勢力下に入ることになった正高のもとを程なく出奔した。

次に訪ねたのは縁遠（一豊の叔母が長康の叔父に嫁いでいた）にあたる美濃国松倉城主の前野長康であった。

永禄三年（一五六〇）頃、一豊十六歳の時に美濃国牧村城主牧村政倫が長康を訪ねてきた際、一豊を一目見てその大器を見抜き、長康に譲り受けたいと懇願した。長康は了承して一豊を牧村家へ快く送り出した。元服を行った前野家を去るのは忍びなかったであろうが、政倫に求められて家臣となる一豊に否はなかったであろう。ちなみに前野長康は以後、順調に出世して播磨内にて五万三〇〇〇石の大名になっているが、「秀次事件」に連座して切腹となっている。その時秀次の宿老であったが咎めがなかった一豊は、かつての主君の不遇に直面し何を思ったであろうか。


牧村政倫の居城であった牧村城址（提供＝安八町役場）。「牧村城は若き一豊が政倫や西美濃の諸武将から人生を生き抜く貴重な才知を学び、出世の足掛かりとした場所である」（石碑より）。

さて、牧村政倫は美濃の斎藤龍興の家臣である。

一豊が牧村家に抱えられてすぐのこと。政倫が一豊を伴って城外に出たとたんに五、六騎の敵が不意に襲ってきた。一豊は敵に勝負を挑んだため、政倫は助太刀をし敵を退散させたという。また、同じ頃、政倫の家臣の萩原市助が不穏な動きを示したため、羽田、遠山なる者を討手として差し向けたが、両人は市助をなかなか斬ることが出来ない。そこへ政倫の命を受けて様子を見に来た一豊がただちに助太刀をして市助の首を取った。そして政倫のもとへ駆け戻り、「羽田、遠山が奮闘して首を取った」旨報告した。やがて、首級を持った両人が立ち戻り政倫へ事の次第を報告したので政倫は一豊に感嘆した。一豊十六歳。己をはじめて認めてくれた主君に対する真摯な働き振りが窺え、かつのちに一豊が戦場で活躍する際に現れる勇敢な一面が遺憾なく発揮されている。

永禄十年（一五六七）頃、政倫は信長の家臣となった。

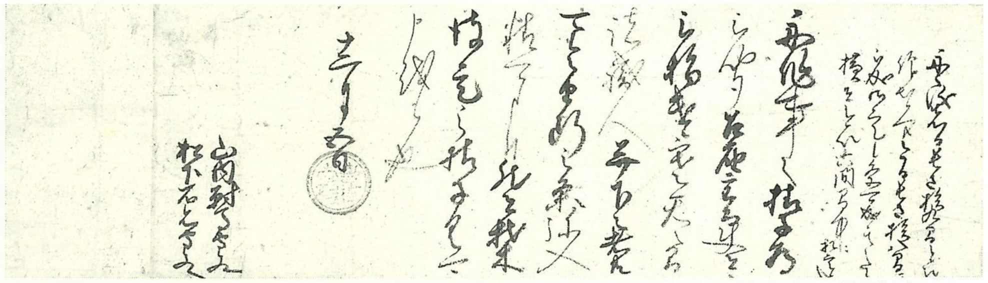
一豊はおそらく政倫の勧めに従ってのことであろう。織田家に仕官した。そのあたりの経緯については定かではない。というのも永禄四年（一五六一）頃から天正元年（一五七三）頃までのおよそ十年間の一豊の事跡は不明なのである。政倫に仕えてのちにすぐ信長に仕えたのかもわからない。一説には近江勢多城主である山岡景隆に近習として抱えられたともいう。

景隆は永禄十二年（一五六九）頃より信長に属していたため、一豊は景隆から信長への仕官を勧められたのかもしれない。

織田信長

既述したように一豊が信長に仕えるようになった経緯は定かではない。おそらく当初は信長と対面すらかなわないほどの身分であったのであろう。

以後戦場働きで武功を顕してゆく一豊であるが、最初の武功話は有名な「三段崎勘右衛門討ち取り」である。


豊臣秀次朱印状（土佐山内家宝物資料館蔵）。一豊と遠江久野城主松下之綱に宛てられた秀次の書状。内容は朝鮮出兵用の軍船建造を命じたもの。

天正元年（一五七三）の朝倉家追撃戦で三段崎を激闘の末討ち取った一豊は、三段崎の放った矢によって左の眦から右の奥歯まで矢が貫通するという重傷を負った。三段崎の首級を秀吉に届けた家臣の五藤為浄は、秀吉より直接信長へ披露するよう命じられたため、信長の本陣へ伺候し、宮部継潤の義弟である宮部肥前守を通じて首実検に供した。信長は絶賛し、為浄は拝謁を許され、一豊への傷薬を下賜された。

一豊と信長の交流を示す記録はない。身分が隔絶していたため言葉を交わすことすらなかったのではあるまいか。しかし、かつて信長の敵方に属していたが故に父と兄を失い、一族放浪を味わった一豊は、奔流の如き信長の上昇に伴う己の境遇の変化を身に感じ、つくづく主君選びの重要性を痛感したのではなかろうか。主君を間違えれば地獄。若年時に味わった苦難の思いが強かったればこそ、以後の一豊の主君選びに間違いはなかった。

豊臣秀吉

天正十年（一五八二）、六月二日驚天動地の事件が起こる。「本能寺の変」である。信長亡き後の天下争覇戦は一豊に息つく暇を与えなかった。秀吉の麾下で働いていた一豊は、数数の戦に従軍する。明智光秀との山崎合戦、滝川一益との伊勢国亀山城攻略戦、柴田勝家との賤ヶ岳合戦、徳川家康との小牧・長久手合戦、紀州征討等々。

天正十三年（一五八五）、秀吉は甥である秀次を近江八幡四三万石に封じたのに伴って、一豊を秀次の補佐役である宿老に任じた。他の宿老としてはもともと秀次つきであった田中吉政をはじめとして、中村一氏、堀尾吉晴、一柳直末である。

「中村式部小輔（一氏）、堀尾茂助（吉晴）、一柳市介（直末）、山内猪右衛門（一豊）、殿下（秀吉）股肱の臣たりといえども、秀次家の年寄りとなして。これ（領土）を与ふ」（『秀吉事紀』）。

実子のいなかった秀吉は姉の子である甥の秀次を後継者にと考えていた。

天正十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦いでは、秀次は拙い采配から大敗を招き秀吉から大叱責を蒙ったが、翌年の四国征討などで戦功を挙げ、秀吉の後継者としての実績を積み上げつつあった。そんな中で秀次は近江八幡山城に入り、四三万石を与えられたのである。秀次による第二次豊臣政権誕生を大いに予感させる移封である。

宿老に任じられた者たちへは、それぞれ近江の要衝に領土が与えられた。堀尾吉晴は佐和山、中村一氏は水口、一柳直末は近江近郊の美濃大垣、そして一豊は秀吉より、かつて秀吉自身が初めて信長に国持ち大名として領土を与えられた近江長浜に封ぜられた。秀吉自身が思い入れを持っていたこの地を一豊に与えたことからも秀吉の一豊への期待が窺える。

天正十八年（一五九〇）、北条氏征討が秀吉によって行われた。宿老らは秀次に付き従って関東へ下った。

秀次軍一万八〇〇〇は要害として知られる伊豆山中城攻めを敢行した。ここでの手柄が将来を左右する。つまり秀吉は秀次や宿老らに山中城撃破の手柄を立てさせ、秀次後継への布石とさせるつもりであった。

先鋒右翼は中村一氏、先鋒左翼は一柳直末であった。第二陣として堀尾吉晴や一豊が続いた。

早朝より始まった戦いは大激戦となった。直末は流れ弾に当たって戦死した。一豊の弟康豊も顔面を負傷

するなど攻め手側にも多くの死傷者が出た。

結果的には数に勝った（北条方は五〇〇〇弱の守兵）秀次軍が力押しで山中城を落城させた。

秀吉の目論み通り、秀次にとっては小牧・長久手での不手際を完全に払拭する名誉挽回の合戦となった。

山中城の陥落は北条方の士気を大いに下げた。小田原城以外の支城の不戦開城が続出した。以後三ヶ月ほどの小田原攻囲戦が行われたが、北条氏直が降伏し小田原城は開城、北条家は滅亡した。

秀吉は徳川家康に、広大な関東の北条遺領を与えた。石高二五〇万石。これには秀吉の深謀があった。それは家康を東海道から関東へ封じ込めることであった。

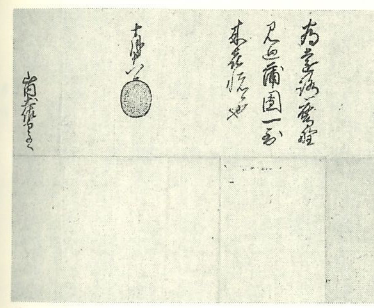
さらに秀吉は家康の脅威を恐れ、上方までの東海道筋に数珠繋ぎのように信頼する将を配置した。一豊は掛川の地に五万石を与えられた。順を追って見てみよう。駿府城に中村一氏、掛川城には山内一豊、浜松城には堀尾吉晴、豊橋城には池田輝政、岡崎城には田中吉政、清洲城には福島正則、大垣城には一柳直末。そして尾張・伊勢五郡は秀次に与えられた。もし家康が反旗を翻して秀吉に挑むとしても箱根を越えれば、東海道筋に並ぶこれらの防御壁を一つ一つ打ち破っていかねばならない。

しかし秀吉が企図した目算は関ヶ原合戦において裏目に出る。一豊をはじめとする宿老たちは全て徳川方に走ってしまうのである。

さて、掛川を与えられた一豊は、初めて腰を落ち着けて領国経営を行った。それまで近江・播磨・若狭のうちに転々と所領を得て、ついには近江長浜に封ぜられた一豊であったが、いずれも在国期間が短く、かつ戦続きで自領に戻ることもままならない日々であったろう。しかし、秀吉による天下統治が定まった掛川時代において一豊は領内統治術を学んでいくのである。

文禄元年（一五九二）秀吉は朝鮮出兵を敢行する。関白となっていた秀次は京の留守を任された。一豊ら秀次の宿老たちも当然国内に留まることとなる。

翌々年戦役は講和の運びとなるも、一豊は引き続き京に留まった。が、そこで事件が起こった。詳細は明らかではないのだが、一豊は秀吉の怒りを受け折檻されるのである。しかもいったんは朝鮮渡海の命まで受けた。結局は撤回される（『駒井日記』）のであるが、この頃からであろう、一豊は家康に接近し始める。独裁者の態をなし始めた秀吉に疑問を感じることも多々あったのであろう。一豊の見るところ家康は国内第二の実力者であり、常識家にも映ったことであろう。



徳川家康御内書（土佐山内家宝物資料館蔵）。一豊に宛てられた家康よりの書状。内容は一豊から献上された布団の返礼。家康と一豊の親密ぶりが窺える。

やがて秀次事件が起こる。文禄四年（一五九五）、かねてから秀吉の不興を買っていた関白秀次が、関白左大臣を剝奪されたうえ高野山に追放された挙句、切腹させられた有名なこの事件は、秀次一人の死に留まらず、彼の妻子三〇余人がことごとく斬首される（側室として迎えられる予定であった、未だ秀次に会った事のない最上家の娘も）という酷い結末となった。秀吉の命により秀次を伏見へ出頭させる役目には一豊ら宿老たちが選ばれた。一豊は何を思ったであろう。名目的には秀吉への陳謝を促すための使者であったが、秀次のその後の結末を予想できなかった一豊ではあるまい。結果的には秀次を騙した形になった。もっともこの説得工作が、宿老たちが事件連座を免れた最大の手柄となった。

「一豊公大切の御用を御勧め候。以後、秀吉公御感悦あるとなり」（『御武功記』）とある。

秀次とつながりの深い木村重茲・前野長康らの切腹をはじめ、少なからずの武将が嫌疑を受けたが、最も秀次に近い宿老たちには一切咎めがなかったのは不思議である。

一豊などは、秀吉と秀次の関係が悪化する中においても秀次への忠勤ぶりを変えてはいない。体調を崩した秀次が熱海温泉へ湯治へ出かける際には、自領に新邸を建造し、沿道の普請なども怠りなく、秀次を饗応して大いに喜ばれている。

『伊達日記』にも「秀次へ相付けられ候衆の内、田中兵部、山内対馬、中村式部は御謀叛にもかまひ申されず候哉、恙なく候」と不思議がって

いる。

さらには一豊は秀次の死後、その蔵入地（直轄領）のうち八〇〇〇石を加増されているほどである。

以後、家康の備えとして掛川に加増転封されたことは既述したが、秀吉の晩年は一豊にとって、もはやついていけない主君であったのではなかろうか。一豊の眼は既に次代の君主徳川家康に向いていた。

徳川家康

一豊は主君に恵まれた人物である。そんな一豊にとってもっとも気が合ったのは家康なのではなかろうか。一家を背負って有力豪族を訪ね歩いたさすらいの浪人時代を経験している一豊にとっては、幼少時代に人質生活を送っていた稀代の苦労人徳川家康は、辛酸を嘗めた者同士の肝胆相照らす何かがあったとしても不思議ではない。

しかも秀吉の命によって掛川に配置された一豊をはじめとする東海道筋の人物らは、家康にとっては籠絡すべき人物であり、かつ一豊らにとっても秀吉の都合で家康を仮想敵と見るよう差し向けられているのであって、自家の安全を考えれば仲良くしておくに越したことはない。

家康と一豊との親密ぶりを示す書状が残っている。慶長二年（一五九七）四月二十八日付の『御手許文書』には「先度下向之節、其許御馳走、祝着謝し難く候。此表所用之子細、隔たり意無く承るべく候。聊かも疎意有るべからず候。恐々謹言　卯月八日　家康（花押）山内対馬守殿」

大坂より居城である江戸への往路の途中で、一豊の居城掛川で受けた歓待を謝した書状である。

この書状より程なく天下分け目の関ヶ原合戦が行われる。「小山会議」における、一豊が家康に自領の掛川を自侭に使って欲しい旨言上する件はあまりにも有名なので他頁へ譲るとして、家康が一豊を信頼していたことは土佐一国を与えたことだけで充分語りきれているのではないか。

のちに土佐加封の御礼に参上した一豊に家康は土佐の石高を訊ね、二〇万石ほどとの一豊の答えに、そんなに少なかったのかと家康が謝ったので一豊は感涙に咽んだ、との話が『藩翰譜』にある。温かな心根の交情が伝わる話ではないか。

一豊は多くの主君に仕えてきたが最後にして初めて徳川家康という気の合う主君にめぐり合ったのではなかろうか。

織田信安

最後に挙げるのは、一豊直接の主君ではないが、父盛豊が仕えた主君織田信安である。

尾張国上四郡を領する岩倉織田家の当主であった信安は、従兄弟であり敵対する信長に敗れた。その一連の戦いの中に山内家の黒田城落城があった。信長に攻められ一豊の父盛豊は自害、兄十郎は戦死するが、信安は逃亡し、美濃国の斎藤龍興を頼って信長に対抗し続けた（嫡子信賢によって尾張を追放されたという説もある）。

永禄十年（一五六七）に斎藤家が滅亡すると、京都に隠遁。しかし、かつての家臣盛豊の後継である一豊の活躍を聞き、掛川へ赴き寄寓した。一豊は旧主信安を厚遇し、宴席においては当主一豊に次ぐ上席を与えたという。

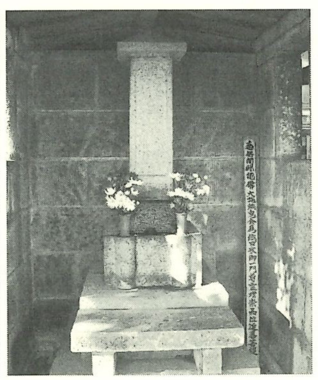
信安は土佐一国を与えられた一豊に付き従って、土佐の内高岡郡戸波村で二〇〇石を与えられるも翌年の慶長六年（一六〇一）に死去した。

ちなみに信安は天正十九年（一五九一）に美濃で没し、一豊を頼って土佐で厚遇されたのは、かつて父信安を追放した嫡子信賢であったという異説もある。

＊　＊　＊

一豊の主君運は良い。勝ち馬に乗る天性の勘を持ち合わせていたといっても良い。また、いずれの主君にも忠実かつ懸命に働いている。けっして派手さは無いが、その実直な働きぶりは評価された。一豊はいずれの主君の不興を買う事もなく（秀吉に譴責されたことはあるが）、出世街道を一歩一歩と登っていった。また、旧主織田信安に対する厚遇は一豊の温厚な人柄を物語っている。

（かくたよしのり・歴史研究家）



織田信安墓（提供＝誓願寺）。信安は美濃国で死去したという説もある。墓碑銘文正面には、信安の法名「松岳院殿大渓玉甫大居士」と刻まれている。

敵

一豊に立ち塞がった猛者たち

「一豊に政敵はいなかった」と言ってもよいだろう。恨みを買うような地位にいたこともなく、温厚さは敵を作ることもなかった。が、土佐国主の地位を得、統治を行えば、敵は現れた。

文=角田吉紀
Kakuta Yoshinori

三段崎勘右衛門

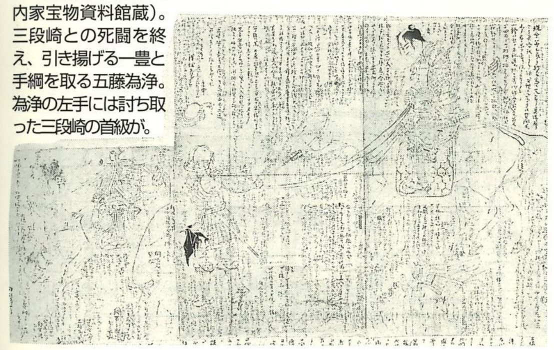
織田信長による朝倉攻めが激しさを増す中で、金ケ崎城には三段崎勘右衛門という越前朝倉家きっての強者がいることは、功名を願う織田軍の騎馬の者は誰しも聞いていた。

朝倉方の猛将として知られた三段崎は越前の名門朝倉家第三代氏景の弟の末裔で一族衆として重用されていたらしい。「らしい」というのも、三段崎勘右衛門の名は山内家の家伝書以外では見受けられないのである。『信長公記』では討死した武将で「三段崎六郎」なる人物が登場するが、同一人物であろうか。

さて、朝倉追撃戦における一豊と三段崎との死闘は有名である。

この追撃戦について『信長公記』では「廿五日越前の内敦賀表へ御人数を出だされ、信長公懸けまはし御覧じ、則ち手筒山へ御取り懸け候。彼の城、高山にて、東南峨々と聳えたり。然りと雖も、頻に攻め入るべきの旨、御下知の間、既に一命を軽んじ粉骨の御忠勤を励まれ、程なく攻め入り、頸数千参百七十討ち捕り、並びに金ヶ崎の城に、朝倉中務大輔楯籠り候。翌日、又、取り懸け、攻め干さるべきのところ、色々降参致し、退出候」と記述している。はたして一豊が三段崎を討ち取ったのは、文中にある「頸数千参百七十討ち捕り」の中に入っているのだろうか。

顔面に重傷を受けながらも三段崎の首級を挙げた一豊の武功は鳴り響き、一豊の出世階段の華々しい第一歩となるのであるが、つくづく思わされるのは一豊の運の良さである。戦場働きという膂力だけでは如何ともしがたい不確定状況の中で名のある武将の首を取り、かつ生きて帰るというのは並みのことではない。首一つ取ることすら難しい事は言うまでも無い。しかし、武士はそこをクリアしないと上へ上がっていけないのである。功名への飢えた狼となって鬩ぎ合う戦場において一豊は、まずは出世への切符を手にしたのである。このとき一豊二十九歳。当時としては遅い功名のスタートであった。


一豊奮戦絵図（土佐山内家宝物資料館蔵）。三段崎との死闘を終え、引き揚げる一豊と手綱を取る五藤為浄。為浄の左手には討ち取った三段崎の首級が。

長宗我部遺臣

関ヶ原合戦の戦功により、一豊は土佐一国に加封された。ご存知の通り土佐は四国の雄長宗我部元親の根拠地であり、次代の盛親が関ヶ原合戦において西軍に加勢したために領地没収となった。「なった」というだけで土佐を鎮撫する仕事は一豊にそっくり残されていたのである。

それもその筈である。関ヶ原合戦後、浦戸城に戻り、籠城の用意を始めていた盛親であったが、家康が井伊直政を通して、謝罪すれば許す旨伝えたため、急ぎ上坂したところ、土佐没収を伝えられたのである。盛親は浪人となって京に隠遁した。

収まらないのは長宗我部家中の面面である。盛親が謝れば、事は全て丸く収まると考えて盛親の帰りを待っていたのである。

加えて、盛親は謝罪工作を行っていた一方で浦戸城での籠城作戦も企図していた。「急度申し候。爰元普請も先づ大方申し付け候て、明日中相澄み候条、其上年中給人一人も残らず妻子召し連れ当城へ来り、五日頃小屋懸仕り候様に堅く申付けらるべく候」「人々妻子は先づ在所に置き、兵糧浦戸へ相付け、其外ばく（麦）作をも仕付け、一左右次第に即時浦戸へ参るべき事」（『土佐国蠹簡集』）。

盛親の帰国を待ちつつも、長宗我部家では戦闘態勢が整っていたのである。

もともと長宗我部家は、信長亡き後秀吉によって天下が定まりつつある中においても屈服せず、天正十三年（一五八五）の四国征討を招いたほどに独立の意識が強い。それが、関ヶ原では南宮山麓において不戦のまま国許に帰国することとなり、籠城の用意までしているので、戦意が高まりに高まっていたのである。そんな中で決定した一豊の土佐入国である。特に一領具足の面々はいきまいた。

「一領具足」とは甲冑一式という意味で、平均二、三町歩（約二、三ヘクタール）の田畑をもって平時は耕作に励み、いざ戦という際には家人を従えて戦場に赴くという半兵半農の武士達のことである。勇猛で知られた一領具足の一揆は頻発した。

浦戸城接収に抵抗した大規模な「浦戸一揆」は、旧長宗我部家老達の計略によってようやく鎮圧された。

しかし、一揆は収まらない。一豊の代理として先に入国した弟の康豊は、長宗我部の政策を踏襲することを表明したり、一領具足の登用なども約して人心の鎮撫を心がけた。

浦戸一揆の鎮圧を受けてようやく慶長六年（一六〇一）、一豊は土佐に入国した。長宗我部遺臣らの襲撃を恐れた一豊は五人の家臣に自らと同様の服装をさせ、影武者の役割を果たさせたため、土佐人らは「六人衆」と嘲りを込めて呼称した。

入国後も遺臣らによる一揆が頻発する。一豊は新国主入城の祝賀行事として、土佐で盛んな相撲を桂浜で開催した。大勢の見物人がつめかけたが、一豊はかねて叛乱の兆候が見える人物を調査していたので、見物人の中から探し出して七三人を捕えて処刑した。相撲をだしにしてこのような残虐な仕打ちをする新国主を多くの人間は侮蔑したという。

慶長八年（一六〇三）から翌年にかけて、土佐北部で起きた「滝山一揆」は大規模であった。長宗我部遺臣の高石左馬之助を中心に参集した一領具足は、頑強な抵抗を続けたが、武力鎮圧された。以降、長宗我部遺臣による武力蜂起は治まったが、人心は必ずしも一豊に忠実ではなかった。一豊が土佐で人気が無いのはこのような経緯があるのかもしれない。

一豊が制定し、幕末まで禍根を残した身分制度は、上士（上格）と下士（軽格）の身分差別、下士の中心となる郷士の存在だった。

上士とは一豊の土佐入国に従ってきた家臣団のこと、これに対して長宗我部遺臣は侍とはいえ身分の低い下士（郷士、用人、徒士、足軽、小者）とされ、どんなに有能であっても身分は超えられなかったのである。

このような身分制度に対する不満は江戸二六〇年を通じて鬱積され、坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめとする幕末の志士や明治期の自由民権運動家たちを産む土壌となったのである。

一豊は土佐において近世的な幕藩体制への移行をかなり強引に行った。掛川などでの領内統治政策とは全く違う武断的で独善的な政治である。

一豊は土佐に入国して四年後の慶長十年（一六〇五）に死去する。己の死期を悟った焦りだったのだろうか。それとも土佐という国は一豊の能力を超え大き過ぎたのであろうか。

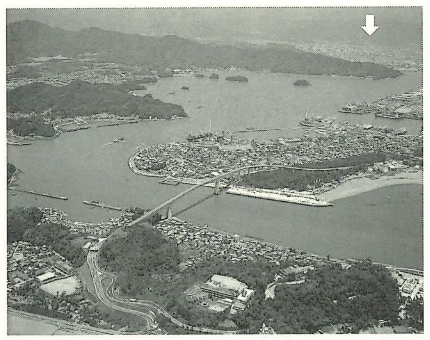
いずれにしても長宗我部遺臣らが一豊を慕うことはなかったのである。

＊　＊　＊

一豊の敵の項であるが、一豊には敵という敵が見当たらないのである。一豊の温厚な性格もあろうが、戦国時代には大名格ではなかったという環境もあろう。土佐を与えられたのも近世における幕藩体制下であり敵勢力は基本的にいない。

しかし、土佐国内での苛烈な統治政策は時代を超えた敵を作っていた。過酷な身分制度に悩まされた長宗我部遺臣らを中心とする郷士たちは、抑圧の象徴となった高知城を怨嗟のまなざしで見つめていた。そして、山内家代々によって神格化されていった山内家初代一豊に対する怒りは、土佐の抑圧された民衆の心に鬱積され、怨嗟の的になっていったのである。

（かくたよしのり・歴史研究家）


高知市街を上空より眺める。下部の山々が浦戸城跡。右上矢印が指し示す辺りが高知平野。一豊は狭隘を理由に、中世城郭浦戸城を居城とはせず、近世城郭高知城を築いた。

千代の時代を生きた女たち

ある者は強靭な意志をもって、ある者は諦念をもって生きた生涯

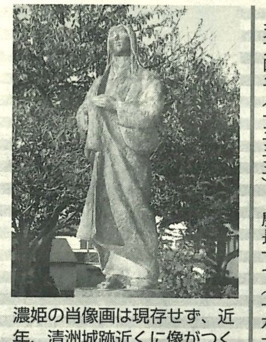
幕末まで生き残った山内家とは異なり、戦国動乱のなかで姿を消していった武門の家は多い。実家の滅亡や政略結婚などで運命に翻弄されながらも、激動の時代を生きた戦国武将の妻たちの生涯を見る。

文=石丸晶子
Ishimaru Akiko

帰蝶 濃姫

天文四年（一五三五）～慶長十七（一六一二）

夫の愛を受けられず、ひっそりと織田家衰退を見つめる


濃姫の肖像画は現存せず、近年、清洲城跡近くに像がつくられた（提供＝清須市役所）。

京の油売りから成り上がり、やがて仕えた美濃の守護大名・土岐頼芸を殺して、その愛妾・深芳野を側室にした斎藤道三の娘である。名を帰蝶（奇蝶）という。

彼女は織田・斎藤同盟の証として十四歳で十五歳の織田信長と結婚した（別説もある）。

当時、信長はすでに家督を継いでいたが、その異様な衣装と振る舞いによって、「大たわけ」「大うつけ」との噂が近隣に響いていた。しかし、資料によると、娘を信長に嫁がせた数年後、美濃と尾張の国境の寺で婿と対面した道三は、道中の異様な衣装から正装に着がえて一分の隙もない信長を見て、「将来、わが子らは、このたわけに膝を屈することになろう」と苦い顔をしたという。

この対面からさらに数年後、道三とその子らは長男・義龍に殺されている。義龍は、道三が土岐氏を討った時、深芳野がすでに胎内に宿していた土岐氏の子で、義龍は父の仇として道三を殺したともいう。この義龍の死後、後を継いだ息子・龍興が信長に敗れ斎藤家は美濃を失った。しかも、濃姫は子を生まなかった。

信長には吉乃という最愛の女性があり、吉乃との間に信忠、信雄、徳姫という三人の子をもうけていた。側室も多く、二二人の子女がいた。正室とはいえ、実家を失い、子どものない濃姫のことを記す資料は殆んどない。

子のない濃姫。

夫の愛がもっぱら吉乃に注がれていた濃姫は、実家の滅亡後、新しい歴史を切り開いていく信長の蔭で、忘れられて生きていったのだろう。

しかも、濃姫の母は本能寺で信長を討った明智光秀の伯母であったともいう。

信長討ち死に後、濃姫は信雄の扶持を受けていたとの記録がある。晩年は、信長の旧臣たちが大大名に栄達し、時代が徳川の世へと収束していくさまを遠く見ながら、歴史から姿を消していった。墓は織田家墓所大徳寺総見院にある。

お市 小谷の方

天文十六（一五四七）～天正十一（一五八三）

実家の政略結婚に翻弄された生涯


父・信秀に「尾張の最大の武力」と言わしめた美貌で政略結婚をした（高野山持明院蔵）。

織田信長の妹で、絶世の美女であった。名は市。二十一歳の頃、信長の政略によって近江の国小谷城の城主・浅井長政に嫁し、一男三女を生む。信長の越前攻めの時、長政は長年の盟友・朝倉氏と呼応して、妻の兄、信長を挟撃した。このとき、お市は小豆の袋の前後を堅く結んで信長の陣に届け、浅井・朝倉方の包囲を知らせて、間一髪で兄の危機を救った。


お市の夫、浅井長政。信長に反旗を翻し滅ぼされた（高野山持明院蔵）

ところで、妹お市を政略結婚させて味方にしようとしたにもかかわらず、朝倉側に付き、信長軍を危機に追いやった浅井氏を、以来信長は激しく憎んだ。そして遂に三年後、浅井・朝倉氏を滅ぼした信長は、翌年の正月の祝に、浅井父子の髑髏に金箔を貼り、それを盃にして織田方諸将に振舞っている。

一方、小谷城の落城に際し、夫長政の説得を入れたお市は茶々、於初、於江の三人の娘を連れて信長領の清洲城に引き取られた。

そして、小谷落城から九年後、本能寺の変が起こる。

こののち、お市は織田家の筆頭家老・柴田勝家と、三人の娘を連れて再婚し、母子は勝家の居城北の庄城に移っていった。

しかし、それも束の間、翌年四月に、勝家は秀吉に攻められて城は落ちてしまう。

もはや帰る実家のない市は書簡を記して三人の娘を秀吉に託し、自らは勝家とともに炎上する北の庄城と運命を共にした。

戦国武将の妻は実家の特命全権大使・利益代表として婚家に送られるのであったという。

夫への愛と実家の利益と。

戦国の女性は常に厳しい選択と判断の下に置かれていた。

お市が両端をきつく紐で結んだ小豆の袋を信長に届けていなかったら、日本の歴史は変わっていたに違いない。

ねね 高台院

天文十七（一五四八）～寛永元（一六二四）

秀吉没後、本心を表し、徳川政権誕生に導く


ねねは豊臣家創業と滅亡に大きなかかわりを持った（高臺寺蔵）。

秀吉の生涯がサクセス・ストーリーなら、正室・ねねの生涯も、あれよあれよのサクセス・ストーリーだった。

秀吉は大坂城の主となって以後、多くの側室を置いたが、内助の功大きかった糟糠の妻・ねねに対しては、常に第一番に大切な妻・正室としての態度を崩さなかったといわれている。

だが、ねねの本心は——。

彼女の本心が明らかになったのは、秀吉の死後である。

関ヶ原の合戦で、ねねは秀吉が信長に仕えていた頃から台所飯を食べさせて育てた加藤清正らに、徳川方に付くように勧告し、彼女の甥で秀吉の養子になっていた小早川秀秋には、西軍を途中で裏切り徳川方に付くように、と諭したといわれている。この秀秋の裏切りによって、徳川方は勝利した。

やがて時代は大坂の陣を迎え、豊臣家は滅びるわけだが、関ヶ原以後、一貫して徳川家康に好意的であったねねは家康に厚遇され、化粧料一万三〇〇〇余石を貰って、京都の東山に豊麗な高台院を建て、そこに移り住んでいた。天下が徳川氏に雪崩れを打って靡いていき、孤立していく大坂城を、ねねはどんな心で京都から眺めていたのだろう。

また、大坂夏の陣で、秀吉が総力を挙げて造らせた大坂城が炎上し、豊臣家が滅亡するさまを、どんな心で見ていたのだろう。

子どもがなかった分、子への愛情に引きずられることなく、ねねには時代の趨勢を見抜くことができたというべきか、それとも、淀殿母子への愛に溺れた夫への、女の復讐を果しえた、というべきなのだろうか。

天下びとにまでなりえた秀吉の幸運は、ねねと結婚できたことにあり、また死後とはいえ、豊臣家を滅ぼすことになった秀吉の不運は、ねねと結婚したことにあった。

旭姫 南明院

天文十二（一五四三）～天正十八（一五九〇）

秀吉の天下取りのために、家康と政略結婚させられる


家康に嫁いだ時、旭姫は43歳。離縁された元夫は恥じて切腹したという（南明院蔵）。

幼時から青年時代にかけて今川義元の人質として駿府で過ごした徳川家康は、十六歳の時、義元の姪・築

山殿と結婚。信康、亀姫の父となった。だが、義元は桶狭間で織田信長に討たれて戦死。ここに今川家は崩壊して、家康は岡崎城に帰り、信長と同盟した。そして真相は不明だが、やがて家康は正室・築山殿と嫡子・信康を家臣に命じて殺害している。桶狭間から十九年後の天正七年（一五七九）、築山殿三十八歳、信康二十一歳であった。

これに懲りたのか、その後、家康は沢山の側室は置いたが、正室は迎えなかった。そして、ここに目をつけたのが豊臣秀吉である。

本能寺の変で信長が自害した後、殆どの大名は秀吉に服従したが、小牧・長久手の戦の講和後も、家康は秀吉に臣従しようとはしなかった。そこで業を煮やした秀吉は、異父妹ですでに佐治某なる武士に嫁していた妹を無理やり離縁させ、旭姫の称号を与えて、家康の正室にすることを申し込んだのである。やむなく家康は旭姫を迎えた。だが全く形式的な正室で、ついこの間まで田畑で働いていた旭姫にとって、家康正室の座は居心地の悪い、恥ずかしいものであったに違いない。

旭姫はその後、実母・大政所の見舞いに京都へ帰り、そのまま聚楽第で死去した。秀吉の天下取りに翻弄された四十八年の生涯であった。

加賀百万石の創業と存続に奔走した

まつ 芳春院

天文十六（一五四七）～元和三（一六一七）



加賀百万石をつくりあげたが、実子に家を継がせることはできなかった（大本山総持寺蔵）。

加賀百万石の祖、前田利家の正室である。

まつは四歳にして父を亡くし、母が再婚したため、母の姉の嫁ぎ先の前田利昌に引き取られて成人した。そして利昌の四男・利家と十二歳で結婚。従兄妹同士であった。

利家は早くから信長に仕え、そこで利家とまつ夫妻は、秀吉・ねね夫妻とも極めて親しい仲になった。度重なる合戦で軍功を上げた利家は本能寺の変当時、能登一国の城主にまでなっていたが、その後は柴田勝家、そして秀吉へと従い、秀吉のもとでは戦功をあげて加賀百万石に至る道を拓くのである。

秀吉・ねね夫妻と彼らがいかに親しかったかは、多産であったまつの娘のうち、まあを秀吉の側室に、豪を養女にしていることからも伺えよう。

信長・秀吉の下で、加賀百万石を得るに至るまでのまつの内助はよく知られているけれども、百万石大名、前田家存続の上でまつが果した最大の功績は、関ヶ原前夜、前田家を取り潰そうと企む家康から謀反の嫌疑を受けた時のことである。

この時、利家既に亡く、跡を継いだ前田利長は家康軍を迎え撃つ準備を加賀で始めようとしていた。

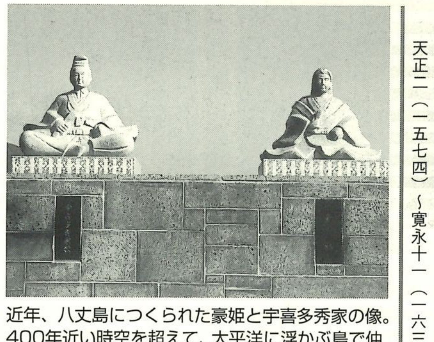
これを京都の前田屋敷で聞いたまつは、一瞬思わず立ち上がり、「今、徳川殿に立ち向かえる大名は一人もいない。徳川殿と戦うなどとんでもない。武士の家は家の存続が大切。謀反の意思などないことを示すために私が人質になって江戸へ行きます」といって、すぐ江戸に下った。これにより、利長の前田家は関ヶ原、大坂の陣、ともに東軍側として事なきを得たのである。

まつの江戸での人質生活は十五年。金沢に帰ってきた時は、城中の侍総出で、金沢藩存続の恩人として、涙と共にまつを迎えたという。

流罪となった夫と息子たちを案じた生涯

豪姫

天正二（一五七四）～寛永十一（一六三四）



近年、八丈島につくられた豪姫と宇喜多秀家の像。400年近い時空を超えて、太平洋に浮かぶ島で仲睦まじく並んでいる（提供＝八丈町役場）。

前田利家の第四女。母は正室・まつ。幼少の時から秀吉の養女となり、ねねに育てられた。秀吉は豪姫を溺愛し、彼女が幼いときから剛毅にして同年輩の子女たちを統率し信頼を得ているのを見て、この子が男子ならば、と嘆いたという。

豪姫の名は、溺愛する秀吉が、豪華絢爛に育てたいという願いと、彼女の持って生まれた剛毅の気質に因っている。

年頃になった豪姫は、やはり秀吉の深い愛情を受けて養子になっていた大名、宇喜多秀家と結婚。今、画像を見ると、秀家は実に眉目秀麗な青年武将である。豪姫はこの秀家との間に二男一女を儲け、その結婚生活は幸せに満ちたものであった。

だが、そこに起こったのが秀吉の死と関ヶ原の合戦である。秀家は西軍の総師に擁されて奮戦したが敗北。妻との再会を求めて大坂の宇喜多屋敷に辿り着いた秀家は、数日ここに隠れて妻との別れを惜しんだ後、島津氏を頼って二人の男子を連れ、薩摩に落ちていった。

やがて、秀家を差し出せという家康からの厳しい命令が薩摩に届くが、島津家と前田家の嘆願によって彼は死罪を免れ、秀家父子は八丈島に流された。

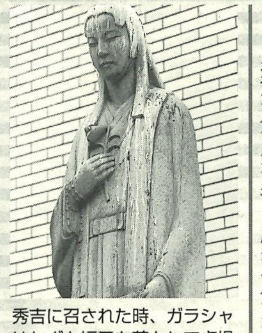
死罪を免れた蔭には、もちろん、実家に対する豪姫の身を投げ出しての嘆願があった。

その後、娘を連れて金沢に帰った豪姫は、再婚の勧めも断り、遠く八丈島で流人生活を送る夫と息子達の無事を念じつつ、六十一歳の生涯を閉じた。

明智家の生き残りとして細川忠興のために死す

玉子 細川ガラシャ

永禄六（一五六三）～慶長五（一六〇〇）



秀吉に召された時、ガラシャはわざと短刀を落として貞操を守った（提供＝玉造教会）。

小谷の方・お市と並んで絶世の美女であったという。

ガラシャは本能寺に主君信長を討った明智光秀の娘であるが、光秀は当代きっての教養人であったと伝えられ、当時描かれた彼の画像を見ても、まことに優雅な容姿をした武将である。光秀には数人の子女がいたが、そのいずれもが教養深く美しかったと、キリシタン宣教師の祖国への手紙は記している。

娘の一人玉子は、光秀一家と親しかった丹後宮津城主の細川家の嫡男、忠興と結婚した。二人とも十六歳であった。

本能寺の変が起こったのはその四年後である。光秀は細川家はじめ、親類縁者に自分に従うよう依頼の手紙を送ったが、どの大名家も動かなかった。逆に、細川家では光秀不利と見るや、いち早く秀吉に服従する書簡を送り、玉子を丹後三戸野に幽閉。離縁の形式をとって謹慎の意を秀吉に表した。

この大異変に際して、玉子の一族はことごとく殺され、明智家は滅びた。だがただ一人、幽閉はされたものの、玉子だけは夫・忠興の深い愛情によって生き延びたのである。深い人生の悲しみに遭遇した玉子が、キリシタンの教えを聞き、ガラシャ（神の恵みの意）の洗礼名をもらってキリシタンになったのは、この幽閉時代であったともいう。

幽閉されて二年後、今はガラシャ玉子となった彼女は、許されて夫の許に帰ったが、忠興が信仰を公にすることを許さないなか、ガラシャの心は日々デウスへの信仰を深めていった。そして十有余年。秀吉が死に、関ヶ原の合戦が起こる。

西軍の石田三成は家康に従って関東に赴いた諸将の妻を人質に取り、彼らが家康に従う意欲を削ごうとして、真っ先に細川屋敷に家臣たちを赴かせた。

人質になって夫の気持ちを動揺させてはいけない。だがキリシタンには自殺は堅く禁じられている。

そこでガラシャは留守居家老に命じて槍で自分の胸を突かせて死に、家老は火を放って細川屋敷は炎上した。

ガラシャは本能寺の変の時、光秀の娘として殺されて当然であったところを、ひとえに忠興の愛によって救われた。関ヶ原の合戦に際してのガラシャの死は、それに対する感謝と報恩の選択であったと思う。

政略結婚にもかかわらず、武田氏滅亡に殉じる

武田勝頼の妻 北条氏

永禄七（一五六四）～天正十（一五八二）

甲斐の武田氏は名家であり、信玄の時代には本国甲斐のほか、多数の領国を擁する大大名になっていた。この信玄の死後、跡を継いだのは四



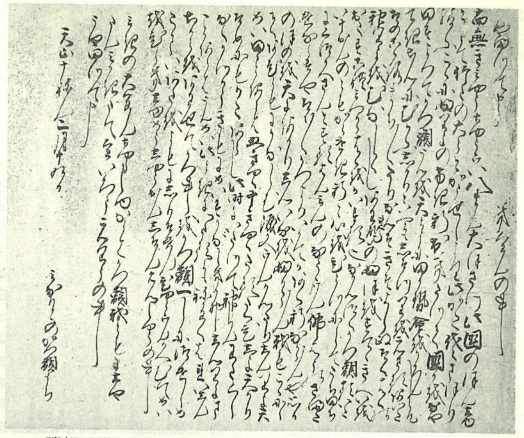
武田勝頼とは政略結婚だったが、夫と運命を共にした（高野山持明院蔵）。

【第3章】



長屋重名『かゞみ草』より

戦国から近世へ
時代の大転換期と一豊



勝頼が織田軍に追われて天目山に逃れる直前に書かれた北条氏による願文。絶望的な状況を伝える文面である（武田神社蔵・武田八幡宮提供）。

男の勝頼である。だが、跡を継いで二年、織田・徳川連合軍と戦った長篠の合戦に勝頼は大敗し、重臣と兵力の多くを失ってしまった。

ここに取り上げる勝頼夫人・北条氏は、長篠の合戦によって衰退し始めた武田氏が、その立て直しのために小田原の北条氏と連携しようとして申し込み、嫁いできた北条氏康の娘である。満十三歳の少女であった。

だが、この政略結婚によっても、勝頼率いる武田氏は急坂を転げ落ちるように衰退していった。若い勝頼には失政が続き、重臣たちの織田方への寝返りが続いて、家臣団は分裂していったのだ。そんな甲斐の情勢を見てとったのが信長で、天正十年三月、甲斐に攻め込み、武田氏は滅亡したのである。

十三歳で嫁いできた妻は十八歳になっていた。政略結婚ではあったが、勝頼夫妻の仲は極めて睦まじかった。この十八歳の妻は実家に帰るようにという勝頼の勧めを断り、最後まで夫と運命を共にしている。

甲斐の武田神社には今、夫人・北条氏が天目山に落ちてゆく直前に勝頼の武運を祈願した願文が残っているが、落城を目前にした戦国武将の妻の激しい歔欷が伝わってくるような、凄惨極まる文字の乱れと文面である。

浅井三姉妹

大坂城と運命を共にした長女と二代将軍の正室となった三女

茶々 永禄十（一五六七・異説あり）〜元和元（一六一五）
於初 永禄十二（一五六九・異説あり）〜寛永十（一六三三）
於江 天正元（一五七三）〜寛永三（一六二六）

浅井三姉妹とは、浅井長政と小谷の方・お市の間に生まれた長女で秀吉の側室・茶々（淀殿）、次女で京極高次の正室・於初（常高院）、三女で二代将軍・徳川秀忠の正室・於江（崇源院）を指す。

この三姉妹が辿った女の人生は、炎上する大坂城と運命を共にした淀殿から、秀吉の政略の道具に使われた挙句、遂にはこれも命令で三度目の結婚をさせられ、その結果、一世一代の女の栄達を摑んだ於江まで、極から極への人生を生きた姉妹たちとして名高い。

三姉妹はそろって幼少時代に小谷城、北の庄城と二度の落城を経験し、父及び両親をその落城の度に失って孤児となった。そして、その都度、三姉妹は燃え盛る炎の中から脱出して生き延びてきたのである。

孤児となった三姉妹を引き取ったのは新しく天下びとになった秀吉であった。そして、茶々は淀殿と呼ばれて秀吉の側室に、於初は親類の大名・京極高次の正室になった。秀吉は茶々を側室にするとともに、三女の於江に利用価値を認めたらしい。初め、従兄の小城主に嫁していた於江を離縁させ、自分の養子・秀勝の妻にするが、秀勝がほどなく死ぬと、今度は徳川家康を取り込もうと、於江を家康の三男、秀忠の正室に送り込んだのである。

秀忠は満十六歳。於江は六歳上の姉さん女房であった。

やがて、そこに襲ってきたのが秀吉の死と関ヶ原の合戦である。秀吉の縁組作戦は何の役にも立たなかったのだ。於初と於江は徳川方へ。茶々は秀頼とともに大坂城で戦いを見守った。しかし、関ヶ原後、豊臣家は六九万石の一大名に家康によって格下げされる。しかし、茶々はあくまで徳川に膝を屈することを拒否。大坂夏の陣で、父母と同じく炎上する城と運命を共にしていくが、姉のこのような人生選択と最期を、江戸城本丸の於江はどんな気持ちで見詰めていたのだろう。

一方、於江には秀頼と死別した千姫の悲劇こそあったが、千姫、家光、東福門院等、二男五女をもうけて、年下の夫・秀忠が側室を持つことを許さなかった。美しく気の強い女性だったようである。

（いしまるあきこ・作家）







伝淀殿（右上、奈良県立博物館蔵）、於初（右下、常高寺蔵）、於江（上、養源院蔵）の三姉妹。淀殿と於江は敵味方に分かれることになった。於初は大城の陣で使者になった。

功名とは何か？

戦働きだけではない！ 時代の要請に応えた機転と特技

武将にとって功名とは、刀や槍によって挙げる武勲や武功ばかりではない。山内一豊がたいした活躍もなしに関ヶ原合戦後に、土佐二〇万石の大名に出世したのも、確かな功名があったからである。では、一介の兵から大名にまで出世するためのポイントとは何か？

文＝上之郷利昭
Kaminogô Toshiaki

戦国時代の武士たちは「功名」を立てて出世の階段を昇るわけだが、功名の中身は武士それぞれの資質、立場、時代や環境の要求によって変わる。ここでは、山内一豊をはじめ、藤堂高虎や加藤清正、福島正則などの戦国武将を例に挙げながら、武士にとって功名とは何だったのかということや、功名の中身について考えていきたい。

武士にとっての功名は、だいたいにおいて戦場における「戦功・武勲・武功」である。敵の首を幾つ取ったとか、名だたる武将の首を挙げたということが、話題にされる。加藤清正や福島正則はそうした武将の筆頭に挙げられる武士だったろう。

二人とも「賤ヶ岳の七本槍」と謳われた猛将だった。

織田信長が京都本能寺で明智光秀の謀叛によって自決し、古参の筆頭家老だった柴田勝家と豊臣秀吉（豊臣姓を名乗るのは後だが、煩瑣を避けるため豊臣秀吉で通す）が跡目を争って戦い、秀吉が圧勝した戦いを「賤ヶ岳の合戦」という。この時、加藤清正と福島正則は秀吉配下の猛将として赫々たる戦功を挙げ「賤ヶ岳の七本槍」とその働きを讃えられた。特に福島正則は勇猛をもって聞こえた敵将・拝郷家嘉を討ち取るという大功を立てたため、賤ヶ岳の七本槍の中でも筆頭として賞された。

加藤清正は秀吉が行った文禄、慶長二回にわたる朝鮮出兵に参戦中、虎退治をしたという逸話が有名である。文禄の役では朝鮮の王子を生け捕りにするとか、現在の中国東北部（満州）へ危険を冒して偵察に赴くとか、慶長の役では先鋒として全羅道を攻略、蔚山城の戦いでは明の将軍楊鎬の大軍を防ぐなど、朝鮮の民衆から「鬼将軍」と恐れられる猛将ぶりを発揮した。

福島正則も加藤清正も、豊臣秀吉子飼いの武士でありながら、関ヶ原の戦い（慶長五年／一六〇〇）では徳川家康につき、大活躍をして、家康の勝利に大きな貢献をした。こうして福島正則は関ヶ原後の論功行賞で安芸国広島藩四九万石の大大名に、加藤清正は肥後熊本五二万石の大大名となった。

二人はともに秀吉の縁戚で、子供の頃から秀吉の近くで育ち、秀吉の出世と共に秀吉に引き立てられて出世をしていった。関ヶ原では一見、秀吉を裏切ったように見えるが、そうではない。秀吉の晩年、内務官僚・石田三成が急浮上して、秀吉・ねね夫妻恩顧の武将たちは冷遇された。実質上、三成×家康の戦いである関ヶ原で、加藤清正や福島正則ら古くからの武将たちは石田三成を見限っていたのである。

このように当然の背景があるとしても、しかし家康にしてみれば、秀吉恩顧、しかも縁戚で、豊臣切っての猛将たちが徳川に味方するということは、願ってもないことだった。彼らと同じ境遇の秀吉恩顧の武将たちが雪崩を打って家康支持に回るからである。

家康が勝ったとはいえ、秀吉の勢力が全国に隠然として存在した関ヶ原直後、福島正則や加藤清正を大大名に抜擢して、信賞必罰を明確にしておくことは、隠然と残る豊臣勢力を切り崩し、徳川安定政権の基盤をつくるために重要な意味があったといえる。そういう政治状勢を読んで、関ヶ原で家康を支持し、得意の戦功を持って家康の評価を得るべく奮迅した二人は、やはり「武功を挙げた」ということになる。

山内一豊は浪人から身を起こして、土佐二〇万石の大大名に出世したのだが、彼は、武力よりも知恵者としての能力のほうが高かったのではないだろうか。加藤清正や福島正則のような武勇伝らしい武勇伝が詳細、具体的に記録として伝えられているのは一つだけである。

織田信長が越前朝倉義景を討伐するために攻めた越前金ヶ崎の戦いで、目尻から奥歯に貫通する敵の矢を受けながら勇敢に戦い、朝倉一門の剛の者三段崎勘右衛門の首を戦友の助太刀を得て取った。これを信長から高く評価されて、一連の戦いで秀吉の功績に与えられた領国のうち、近江長浜唐国四〇〇石が報奨として与えられ、一豊は初めて扶持持ち侍となったという。それ以外は戦功・武功・武勲の類ではなく、若い頃から次第に知恵者として味方に貢献し、上司を助けて評価されたのではないかという雰囲気が感じられる。

知恵者として出世

豊臣秀吉も同じように「戦功・武勲・武功」よりはむしろ知恵者としてキャリアアップしていった。戦国時代でも、刀や槍での武勲でなくとも、キャリアアップが出来ることを物語る典型的な例である。

対馬守に何の武功が……

時代、環境によって「功名」の中身がどう違って来るか、を象徴的に物語る逸話がある。

関ヶ原の合戦を前にして「小山会議」なるものが開かれた。徳川家康は有力大名・会津の上杉景勝を討伐するために大軍を率いて関東に下向した。家康が留守になれば、その虚を突いて石田三成が挙兵するだろうと読んだ家康の陽動作戦といわれる。読みどおり、三成挙兵の早馬が到着したのが、家康の軍勢が小山（栃木県）で陣を張っている時だった。

家康は急遽、上杉討伐に参加している豊臣恩顧の諸将を集め、石田三成と家康、いずれにつくかの態度表明を求めた。この軍議で、当時掛川城主だった山内一豊は一同を前に、「お味方つかまつる上は、居城掛川城を兵糧ごと内府（家康）に差し上げ、拙者は人数ことごとく引き連れて戦場に臨む所存でござる」と、発言したという。

山内一豊のこの発言が流れを決めた。関ヶ原への進路にあたる東海道に城をもつ豊臣恩顧の諸大名は家康に味方せざるをえなくなった。そしてこれが関ヶ原における家康勝利に大きく貢献することとなった。

徳川方が勝利をおさめた後、家康は論功行賞の評定を行った。そして、山内一豊は外様大名ながら掛川六万石弱から一挙に土佐二〇万石の大大名に大抜擢をされたのである。この措置にたいして家康の重臣の中には、「かの、対馬守（一豊）になんの武功がござるや」と、反対する意見も強く出たそうである。しかし家康は、「山内対馬守の忠節は木の本、其他の衆中は枝葉の如し」と、取り合わなかったという。

実は、関ヶ原の合戦では、山内一豊の部隊は予備隊として後方に配備されていたのだった。家康の家臣はこの点を突いたのだが、さすが家康は目のつけどころが違っていた。山内一豊が、合戦が上手でないこと、戦死するかもしれない合戦は福島正則や黒田長政のような剛の者にまかせて、知恵者として他に使い道のある山内一豊は温存するほうが徳川にとって得策であると判断していたのである。武士にとっての功名は戦功・武勲・武功、つまり刀や槍の働きだけではないことを象徴的に物語っている。

秀吉に嘱望された一豊の才

山内一豊は実は築城と都市計画についても大変な能力があり、その能力によっても「功名」を現していた。彼が何故、掛川城主だったか、という理由でもある。

今日の静岡県掛川市は、江戸時代

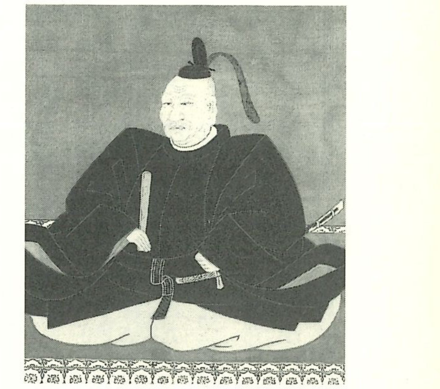


加藤清正画像（勧持院蔵）。武功派の筆頭だが、築城術にも秀でた才能があった。

には（それ以前にも）、東西交通の要衝大井川に臨む戦略拠点として重要な位置を占めていた。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川、といわれ、東西交通を制する位置にあったことを物語る。

この拠点掛川へ、藩主として山内一豊を配したのは豊臣秀吉だった。九州攻めで島津氏らを配下に置いた豊臣秀吉は全国支配の最後の仕上げとして、関東最大の敵対勢力小田原の北条氏を攻め滅ぼした。天正十八年（一五九〇）七月のことである。それまで秀吉の言うことをきかなかった独眼竜伊達政宗が劣勢を悟って小田原に駆けつけ、「遅い」と秀吉に一喝されたのも、この時のこと。これで秀吉は関東から東北まで押さえ、全国を統一したとされる。

小田原攻めの後、秀吉は論功行賞と大名の再配備を行った。全国統一を果たした秀吉にとって、今後、最大の心配は徳川家康だった。秀吉は家康を、論功行賞で領地を与えるとともに関東に封じ込めた。必然的に、関東との境界大井川の守りが重要になる。秀吉は山内一豊を、この大井川を守備する掛川城主に任命した。



藤堂高虎画像（個人蔵）。浅井から織田へ、豊臣から徳川へ、主を選ぶ目も優れた。

最初五万石、やがて六万石が与えられた。

掛川城は、五～六万石にしては抜きんでて立派な天守閣を持ち、城も豪華堅牢に築城された。街も職業身分別に整然と区画され、城を囲む総堀、街のはずれを流れる大井川の氾濫を防ぐ大規模な改修工事などが行われている。大井川の改修は「天正の瀬替え」の名で歴史に語られているほどである。秀吉が家康を如何に恐れ、警戒していたかを物語る。同時に、山内一豊が如何に秀吉から嘱望されていたかをも物語る。山内一豊はこうした能力を売り物にして、出世の階段を昇っていったのである。

話しは戻るが、「小山会議」で豊臣恩顧の山内一豊が、秀吉の命令で造り上げたこれだけの城と城下町を兵糧もろとも徳川家康に差し出すと公言したのだから、豊臣との天下分け目の一戦を控えた家康が一豊の働きを高く評価したのも無理のないことであった。

戦功・武功から「築城」へ

最後に、山内一豊と似た境遇にあった藤堂高虎の「功名」を紹介しよう。

足軽だった高虎はひときわ身体が大きく、刀・槍によって階段を上った。彼が他の足軽たちと違ったのは、戦場での働きを上司が評価する「感状」を売り物として自分を売り込み、評価してくれる主君を求めて次々職場を変えたことである。「風見鶏」など揶揄する向きもあったが、実力主義の時代を生き抜く武士の一つの選択肢であった。誰が自分を評価してくれるか、どの武将が激変の戦乱に勝ち抜いていけるか――上司を選ぶ目を、高虎は持っていた、そして、その目を磨いたということであろう。

近江に生まれた彼は、最初は近江の名門浅井家一門の部将の何人かのもとを渡り歩き、次に浅井のライバル織田信長一門の部将に仕え、さらに秀吉の弟秀長へ……こうして高虎は遂に天下人・豊臣秀吉本人から請われて仕えるまでに出世する。

しかし、秀吉の周囲には「賤ヶ岳の七本槍筆頭」と謳われた福島正則ら剛の者がずらりといて、武勲だけでは出世がかなわないと見て取った高虎は築城技術を習得し、築城の名手と言われるまでになる。鉄砲による戦いから味方を防御する堅牢な砦が必要とされる――と、高虎は判断したからである。自分にしかない特技、上司から高く評価される特技を身につけることによって、たゆまぬ自己変革を行い、自分を高く評価させ、出世の階段を昇ろうとしたのである。

しかし、豊臣の時代は終わり、徳川の時代に変わろうとしていた。状勢を読んだ高虎は、次の時代は豊臣秀頼や石田三成ではなく、徳川家康が実権を掌握すると判断し、関ヶ原の戦いでいち早く徳川家康支持を表明、仲間の武将を家康支持に回らせることに成功して、家康の勝利に貢献した。

しかし、風見鶏のように主君を変えてきた自分が、厳しい家康の信頼を勝ち取るにはまだ不十分だと考えた高虎は、家康が豊臣を滅ぼす最後の戦い・大坂夏の陣で、自軍から多大な犠牲が出ることを覚悟で、家康

の命を狙う長宗我部盛親軍から家康を守り、外様ながら家康をして「国に大事が起こったときは藤堂を一番手とせよ」と言わしめた。そして、伊勢の津・伊賀上野合わせて三二万石の大大名に抜擢され、家康臨終の床に侍ることも許されて、明治維新まで藤堂家は安泰を保ったのである。

実は、虎退治の伝説が有名なほど腕の立つ猛将・加藤清正にも、築城の名手という「もう一つの顔」がある。彼の築いた熊本城は今日も、「名城」としてその名をとどめている。熊本城といえば一般に細川家というイメージがある。細川家は徳川時代、長く熊本城主の地位にあり、明治維新の折りも、さらに今日でも「熊本の殿様は細川」ということになっている。熊本県知事や首相をつとめた細川護熙も熊本の殿様だったから選挙に通ったようなところがある。



熊本城。西南戦争で天守は焼失したが（後に再建）、石垣は清正築城時のものである。

しかし、石垣のそりが美しいことで評判のあの名城を築城したのは加藤清正である。清正は築城の名手として知られ、特に大きな反りを持たせた石垣の積み方が美しいといわれた。熊本城や、蔚山倭城、江戸城、名古屋城など数々の城の築城に携わった。大きな反りを持つ石垣は美しく優雅でもあるが、同時に敵が簡単によじのぼって来ることが出来ない構造であることは、想像できるであろう。

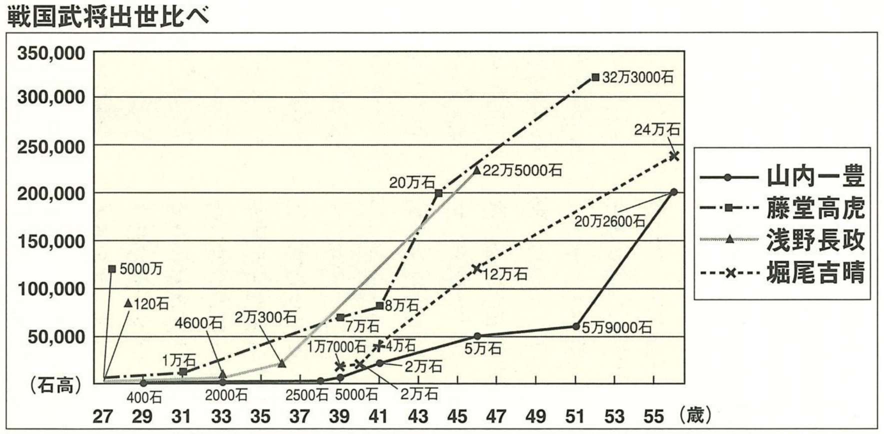
戦国末期から江戸時代初期にかけては、築城が戦略的にも重要な意味を持った。鉄砲が多用されるようになって堅牢な防壁を持った砦が必要となったこと、和戦両面の配慮を必要としたこの時代、敵に隙を見せない堅牢で安定した都市作りの中心としての城の果たす役割は今日想像するよりはるかに大きい。熊本にせよ江戸にせよ、砦としての城の堅牢さとともに、敵を精神的にも「攻めがたい」と圧倒する豊かで堅牢な街づくりが行われていることに注目する必要がある。そういう時代の要請に応えて「築城の名手」の評価を高め、「功名」とした加藤清正の着眼と手腕は、「猛将」の評価と同じくらい、注目しておく必要があるだろう。

掛川城主の山内一豊、熊本城の加藤清正、そして築城学を習得して名手としての特技を売り込んでいった藤堂高虎、城持ち大名となった三人はともに、「戦功・武功・武勲」から「築城」へと、「功名」を立てる手法や技術を、時代の要請とともに変化させ、たえず自己革新を行っていった。

武勲であろうと、アイデアであろうと、そのとき何が求められているかを敏感に察知するとともに、次に時代をリードするのは誰かという、人を見抜く目を持ち、さらに、時代や社会はどのように動いていくのかという大局観を持っていないと、単に刀や槍使いが上手いというだけでは、キャリアアップをしていくことは難しい。今の時代のビジネスマンにも共通して言えることではないだろうか。

（かみのごうとしあき・作家）

戦国武将出世比べ



上のグラフは、同じような経歴の武将４人が豊臣秀吉と徳川家康から受けた石高を年齢を追って示したものである。４人とも40歳代後半～50歳代前半の時に関ヶ原の戦いで東軍に付いたため、戦後に石高が倍増している。山内一豊の場合、29歳の時に近江唐国で400石を拝領したのを皮切りに、秀吉の中国攻めなどに従軍して徐々に加増され、41歳の時に近江長浜城主2万石に、46歳で遠江掛川城主５万石に栄転し、関ヶ原合戦後に土佐20万2600石の国主となった。だが、一説によると山内氏入国前の土佐の領知高は、長宗我部元親時代の9万8000石を引き継いだものに過ぎないため、“大出世”とはいえないともいう。

「一国一城の主」の変質

近世大名出現で浮き彫りにされた戦国大名〝統治〟の限界

山内一豊は、学説上では近世大名とされている。時代の過渡期に際し、多くの戦国大名が淘汰され、近世大名の治世となっていくなか、一豊もまた土佐二〇万石を任された。旧長宗我部領を統治するという難題は、はからずも両体制の特質とその違いを浮き彫りにし、〝作合〟否定の是非という核心に迫ることになる。

文＝宮本義己
Miyamoto Yoshimi

一豊の土佐一国拝命

山内一豊が活躍した永禄末年から慶長年間にかけての時代は、織豊（安土・桃山）期から徳川（江戸）期の始まりという、天下一統と再統一の重なる、戦国争乱の総仕上げに当たっていた。したがって〝切り取り〟次第に領域を増やし、戦国大名に躍進するといったような、乱世たけなわの下剋上の風潮はおさまっていた。

もっとも、この時代ならではのもう一つの特徴である〝槍（鑓）一筋〟で〝一国一城の主〟へという傾向は、夜討ち朝駆けの軍功から役割分担を堅持しての忠勤へと変質しながら、なおも息づいていた。一豊がまさにそうであって、一介の士から、忠勤一辺倒で国持大名へという発展を遂げた典型的な例とされる。

ところで、一豊の場合は、その時勢を反映して学説上では近世大名と称され、これまでの戦国大名とは区別される。一体どこがどう違うのか、彼の一国襲封の場面から、具体的に述べていくこととしたい。

関ヶ原の合戦後の慶長五年（一六〇〇）十一月上旬、一豊は、徳川家康の老臣榊原康政を通して従前の遠江掛川城六万余石に替え、改めて土佐一国を与えられ、国主（国持）大名に成り上がった。このときの墨付が伝存しないため、断定はできないが、後世に新井白石によって著された『藩翰譜』によると、二〇万二六〇〇石の知行とされる。

追って述べる前土佐国主・長宗我部氏の検地では、二四万八三〇〇石の石高が得られている。これが一豊に継承され、山内家の本田高とされたことから考えると、おそらく家康の定めた知行高は、表高であろうから、事前にこれを低く見積もることで一豊の課役負担を抑えようとする、家康の彼に対する優遇策かもしれない。

一豊と家康の睦まじい関係を彷彿させるが、こうした評価の拠り所は、やはり、直前の関ヶ原の合戦にちなむ一豊の働きであろう。もっとも、主戦場の関ヶ原から東方に離れた垂井山に陣し、南宮山の敵方に備えた一豊に、目立った戦功はなかった。だが、ここに至るまでに彼の果たした役割が、家康の心証を捉え、評価されたのであろう。

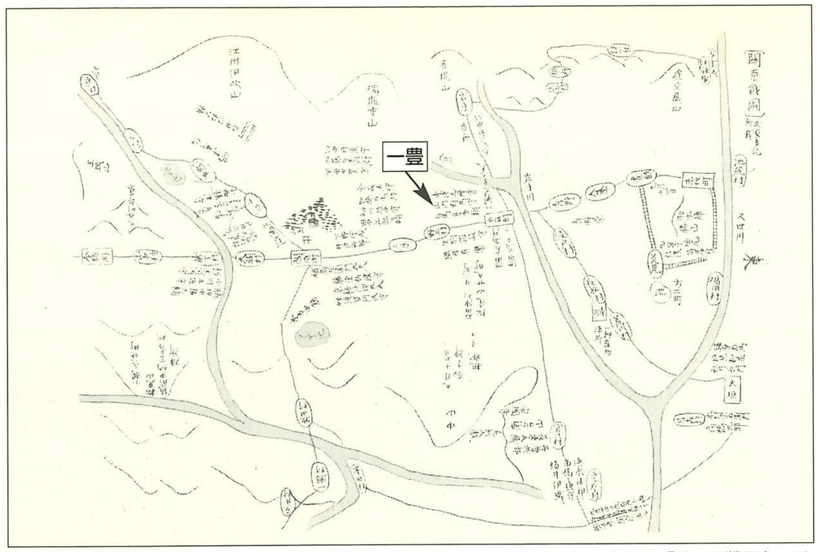
通説でも明らかなように、関ヶ原の合戦は家康の誘降作戦が功を奏し、両軍の激突前にほぼ大勢が決していた。しかし、家康をしてそうした戦術を実に効果的に駆使させえた理由の一つが、ほかならぬ一豊の密書の提出と居城掛川の明け渡しと見られるからである。

このことを契機に開戦直前まで、家康が生涯を通じて空前絶後の書状を発給し続け、ついには石田三成方（西軍）の総大将に担がれた毛利輝元の誘降にも成功したことは、周知のところであろう。

遵守された秀吉の国替規定

ところで、国持（国主）大名というと、室町幕府体制下で大名化した守護、いわゆる守護大名を嚆矢とする一国単位の領主を指す。守護大名の場合、鎌倉幕府の守護職の系譜をひき、管轄する国内の軍事指揮権や守護使の遵行権、苅田狼藉の検断（裁判）権、*半済の施行権ほかの一国統治の公権を幕府から委任された。

戦国期に台頭した戦国大名の場合は、これとは対照的に、一族衆や一門衆を中心としながらも、傘連判の契状による兄弟契約により、非血縁の国人・土豪（在地領主）層をも取り込んだ擬制的な家中組織、および独自の分国法によって、在地支配の徹底を図るという、下からの一円的支配であった。自らを公儀と称しての一国統治である。



関ヶ原の合戦は、山内家にとって重要な意味を持った。山内対馬守（一豊）は、この「関ヶ原戦図」では垂井付近に陣している（『山内家史料　一豊公紀』より）。

しかしこれも、豊臣政権や徳川政権といった全国統一政権のもとで変質し、江戸幕府のもとでは、将軍家より一国以上を与えられた大名（本国持）や、これに準じる大身の大名が国持（国主）大名と位置づけられた。いわゆる近世大名であるが、この場合、一豊の例のように、信任や転封といった国替をともなうところに、戦国大名との根本的な相違点があった。

一豊の転封は、家康の下知によるものだが、豊臣政権の枠組みのもと、その法、つまり全国平定後の秀吉の国替規定に基づいていた。

この豊臣大名（近世大名）の国替規定というのは、慶長三年（一五九八）正月十日付で「羽柴越後中納言（上杉景勝）」充てに発給された秀吉朱印状によると、次のようである（『上杉家文書』）。

> 今度会津へ国替について、その方家中侍のことは申すに及ばず、中間・小者に至るまで、奉公人たるもの、一人も残らず召し連れるべく候。自然、罷り越さざる族これあるにおいては、速やかに成敗を加えらるべく候。ただし、当時田畠を相拘え、年貢の沙汰せしめ、検地帳面の百姓に相究まるものは、一切、召し連れまじく候なり。

すなわち秀吉により、越後の春日山から陸奥の会津に国替を命じられた景勝は、任国に赴くに際し、家中の侍衆ばかりか、中間・小者をも含む全ての奉公人を一人残らず連れていくこと、もしもこれに従わず越後にとどまるような者がいたなら、速やかにこれを処罰すること、しかし、田畑を所有して年貢を負担するための検地帳に登録されている者は一人として連れていってはならない、などという厳命を受けたのであった。

この規定は、他の大名の国替や転封にもまったく同様に適用されており、豊臣政権の原則的な大名統制策とされる。その意味するところは、兵農分離を進めて身分制社会の構築を図るばかりか、大名自身はもちろん、その被官らをも在地から切り離し、中央政府が直に百姓を掌握することにあった。結果的に近世大名とその被官人らによる百姓の譜代化は消滅し、大名領の隅々までもが豊臣政権の支配に帰することとなったのである。

加えて全国規模の太閤検地により、事前に任国や所領の石高（生産高）と年貢高も定められていたゆえ、その領国統治の権限は大幅に縮小され、戦国大名の比ではなくなった。戦国大名と違って経営上の安定性は得られたものの、戦国大名が具有していた自立性は逆に失われたのである。

もっとも、一豊の任国土佐の場合は、次に述べるように事情がかなり異なっていた。

入国を阻む土佐の特殊事情

一豊にとっての土佐は、直接の縁もゆかりもない未知の国に等しかった。関ヶ原の合戦に勝利し、それまでの豊臣政権の代行者から、実質的な施政権（統治権）者となった家康の鶴の一声で決せられた国主の地位であったところに加え、任国の土佐は、一代の戦国大名としてその名を

*半済＝軍費調達のため、守護が一国内の荘園や公領の年貢の半分を徴発すること。

全国に轟かせた長宗我部元親の分国である。元親が関ヶ原の合戦を俟つことなく、この前年五月に病没した後、嗣子の盛親が石田方（西軍）に与して敗れ、除封とされたのであった。

したがって一豊は、太閤秀吉の墨付を得た豊臣大名すなわち近世大名でありながら、体質的にはほぼ戦国大名に等しい長宗我部氏の旧臣らから、家康の指示通り、城地を明け渡させ、そのうえでの入国を予定したが、家康の老臣井伊直政の城領請取後、鈴木平兵衛直好らが〝一領具足（在郷給人）〟の抵抗に遭遇し、浦戸城に入れない事態となった。いわゆる浦戸一揆である。

全国統一の前ならいざ知らず、元親在世時の慶長三年（一五九八）正月の段階ですでに太閤検地を完了していた土佐の国にあって、何ゆえこのような一揆が起こったのであろうか。まさしく比類のない例だが、これには上記の〝一領具足（兵農未分離の侍身分）〟に象徴されるような、土佐ならではの特殊事情と、元親の保護農政が影響していた。

後者を最も具体的に示す政令として、同年七月四日付で元親が、畑上山庄屋充てに発給した嗣子・盛親との連署状に、

当作（本年の作柄）少々相違うように聞き候わば、来作は百姓好み次第に、上毛見遣わすべく候間、在所に堪忍仕り候ように、いよいよ申し聞かすべきものなり。

と見える。つまり、今年の検見（作柄の査定）を少し誤ったので、来年は農民の望み通りの検見に改めるつもりであるから、堪忍してほしいという、庄屋を通しての高持農民（検地帳登録人）に対する約束と詫びである。文面から、戦国大名を前身とする長宗我部氏ならではの、農民との絆の強さがうかがえよう。

このような土佐の国情を知った一豊は、浦戸一揆を鎮圧する一方で、事前に入国させていた実弟の康豊を通じ、民心掌握のための手当てを優先的に行わせた。

まず郷民らに規律を守らせ、長宗我部家臣らの転居にともなう侍屋敷の保全や、修築のための建材および米穀などの確保を図り、慶長三年十一月十八日付で士民（土着の一領具足や郷民ら）の非法を禁じる五か条の条目を発令させたのである。

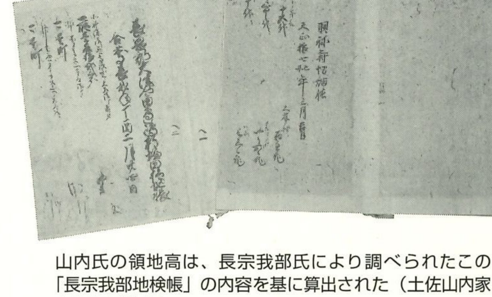
そのうえで同月二十七日付では、士民の一揆を慮って、国内各村の庄屋ら指導者層に対し、改めて「当国法度の事は、衛門太郎殿（盛親）の御置目のごとく申し付くべく候間、またまた在所へ立ち還り尤もに候」と、旧主長宗我部氏（盛親）の置目（掟）に基づいて国政を執行すること、ついては百姓らも在所に還住すべきことなどを触れさせたのであった（『山内文書』）。

一豊自身の土佐入国は、ひと通りの事がすんだ慶長六年正月二日（大坂より船で甲浦に着岸）であって、浦戸への入城は八日であった。以後、領国経営と家康への出仕を両立させ、慶長八年には、三月二十五日に従四位下・土佐守に任官し、八月二十一日に浦戸城から大高坂城（高知城）の新築なった本丸に移って、支配体制の確立を図ったのだった。

だが、この二か月余り後の十一月には、帰順したはずの長宗我部氏の旧臣、高石左馬助らが滝山に拠って一揆を起こしたのである（滝山一揆、あるいは本山一揆と称される）。

一豊のもと左馬助は「庄屋」身分で土着していたが、前国主のもとでは八〇石（一説に七七石）を領したばかりか、北山（本山郷内の五か村）五〇〇石の地に勢力を張った土豪であった。このことが、三〇〇〇石の知行のうち一〇〇〇石を本山郷に与えられ、当地の土居に赴任となった一豊の家老、山内（永原）刑部一照の年貢賦課に対し、利害の衝突を惹き起こしたらしい。

つまり、これまで得られていた本山郷一帯の得分が、一照の新税賦課にともなって水泡に帰してしまうという、何とも前時代的な危機意識を強めた結果にほかならない。一豊にとっては幸いというべきか、この一揆は大事に至らず、一照の武力によって鎮圧されたのだった。



山内氏の領地高は、長宗我部氏により調べられたこの「長宗我部地検帳」の内容を基に算出された（土佐山内家宝物資料館蔵）。

ここにようやく戦国大名（長宗我部氏）家中の残滓ともいうべき、〝一領具足〟の系譜をひく郷士の反抗が止むこととなったのである。

近世大名と戦国大名の違い

ところで、一豊の新任国土佐での一揆は、前国主の置目（法令）の踏襲を約束したにもかかわらず、なぜ再発したのであろうか。実は右記の村落における得分こそ、戦国大名の系譜をひく長宗我部氏と、新生の近世大名たる山内氏の支配の根本的に異なる概念であった。

戦国大名の特色は、分国支配の拠り所を幕府の公権に委ねていた守護大名と違い、実力（武力）によって国人や土豪を被官化し、自らを公儀として幕府から自立したうえ、自前の分国法をもとに土地・人民を一元的に支配したことに求められる。だが、近世大名のように家臣団統制や領民支配を純粋に一元化できなかったところに、その限界があった。

つまり、近世大名が豊臣政権や徳川幕府から自在に転封される反面、これを苦にせず対応でき、一方で直臣の知行の移動をも臨機応変に行いえたのに対し、戦国大名の場合、傘連判に象徴されるごとく国人・土豪らとの主従関係は脆弱であった。このことは年貢の賦課にも反映され、〝加地子得分〟や〝作職〟などの作合（得分）を認めたり、黙認したりするという立場をとらざるをえなかったのである。

この点で近世大名は、太閤検地を経て出現しただけに、一元的支配の貫徹を前提とした。すなわち竿入れ検地による田畑・居屋敷の実測（境界に四至の榜示を立てて縄打ちをし、曲尺六尺三寸四方を一歩、三十歩を一畝、十畝を一段、十段を一町として面積を割り出す）によって、上田・中田・下田・下々田の四等級に分類し、それぞれの標準段（反）当り収穫量を一石五斗、一石三斗、一石一斗、見計らいと算定（畠や屋敷地は別基準）して、石高表示した。

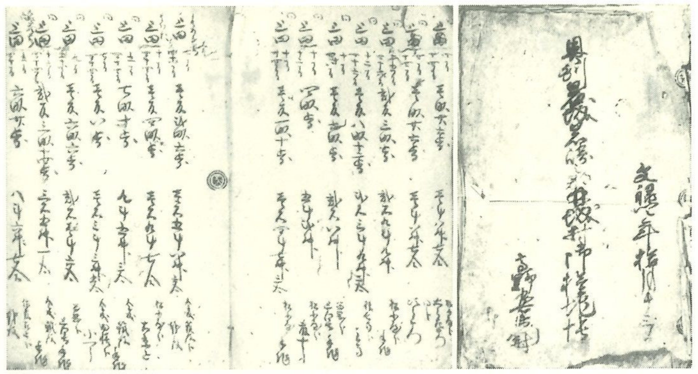
この際の石盛には〝京枡〟を用いることとし、結果を一筆ごとの耕地にその耕作者を定めて検地帳に記載し、耕作権を保証する一方で年貢の上納を義務づけたのである。

これを基とした近世大名の支配も、当然ながら〝一地一作人〟と〝作合〟否定の原則を貫きつつ自作農民を創出し、一方で夫役労働の賦課や中間搾取を厳禁したことに、その特色があった。

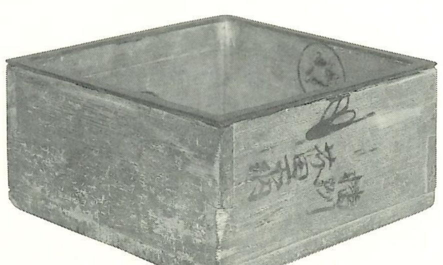
ところが一豊の領国となった土佐の場合、長宗我部氏の支配下で例外的に戦国大名的体質が温存され、前世の地頭職に付随する給（土地所有権）、名主職に付随する扣（持地の保有権）、作職に相当する作（耕作権）といった諸権利（得分）、いわゆる作合（中間搾取）が名残りをとどめ、これに依拠して田地を保有する士身分の〝一領具足〟までもが健在であった。彼らが一豊の土佐入国と支配に抵抗し、一揆を起こした理由も、こうした既得権としての得分を維持することにあったとみられる。

近世大名一豊の国主としての土佐入国は、前国主支配の特殊事情から、戦国大名支配の克服という難題をともなったが、期せずして戦国大名と近世大名という両体制とその支配の違いを浮き彫りにした。これを一言で表すなら、〝作合〟否定の是非とされよう。戦国大名は〝作合〟を否定できなかったところに領主権の限界を来して淘汰され、近世大名への移行を余儀なくされたのである。

（みやもとよしみ・國學院大学講師）



文禄４年、岩崎郡林城村における検地帳。「上田」の文字が見える（『いわき市史』資料）。



それまでバラバラであった検地は、天正10年（1582）の秀吉の山城検地以降、統一基準が全国に拡大し、全国平定後の文禄３年（1594）、改めて６尺３寸（＝１間）の検地竿とこの京枡に統一するなどの検地条目が定められ、検地奉行を送って全国に実施された（芥田家蔵）。

家臣形成の経緯

“敵遺臣”の取り込みと“現地採用”により譜代不在の弱点を克服

守護代の家老の家に生まれながら一豊には子飼いの部下というものがほとんどいなかった。出世の階梯を駆け上るなかで、それにふさわしいだけの家臣をリクルートする。

文=小和田哲男
Owada Tetsuo

ほとんどいなかった父の遺臣

　山内一豊は、尾張国上四郡守護代岩倉織田氏の家老だった山内盛豊の子であり、兄たちの死によって家督をついでいる。したがって、ふつうならば、父盛豊に何人もの家臣がいたので、その譜代家臣にあたる遺臣たちをそのまま継承できる立場にあった。

　事実、盛豊の居城だった黒田城の周辺には「奥屋敷」という地名があり、城のまわりに家臣団屋敷が形成されていたことがうかがわれる。ところが、盛豊の主人だった岩倉織田氏の当主織田信賢が、下四郡守護代清須織田氏のやはり家老だった織田信秀の子信長に攻め滅ぼされたため、盛豊の家臣団は四散してしまったのである。

　盛豊は岩倉落城の責任を負って自刃したといわれており、そこに山内氏の家臣団は解体する形となり、記録に残る限りでは、祖父江次郎兵衛と五藤吉兵衛の二人だけが、若い一豊のもとに踏みとどまったといわれている。つまり、一豊家臣団は、スタート時、たった二人だけだったというわけである。尾張守護代の家老の息子にしてみれば、あまりにも少ない家臣だったといわざるをえない。

　以来、一豊は、二人の家臣に伴われる形で仕官の先を求めて転々とすることになるが、ようやく、永禄十年（一五六七）ないし翌十一年ごろ、織田信長への仕官がかない、織田軍団の一員として、以後、浅井・朝倉との戦いで少しずつ武功をあらわしていくことになる。

近江唐国四〇〇石時代の家臣

　信長の家臣だった時代、一豊は秀吉の与力となっていた。与力というのは、寄騎とも書かれるし、寄子といわれることもある。信長の家臣ではあるが、軍事行動は秀吉の指揮下に入るといった形である。そのため、組下などともよばれる。

　ところが、信長が、天正元年（一五七三）に浅井長政の小谷城を攻め、浅井氏を滅亡に追いこんだあと、浅井攻めの軍功第一ということで、秀吉が浅井氏の遺領北近江三郡（伊香・浅井・坂田）を与えられたことで、一豊の運命も大きく変わることになったのである。信長から秀吉に、それまで与力としてつけられていた何人かが、秀吉の家臣に組みこまれたからである。一豊もその一人だったことで、以後、一豊は秀吉の家臣となる。

　そして、秀吉から近江国唐国において四〇〇石の知行を与えられている。四〇〇石ともなれば、それにみあった数の家臣が必要になる。それは、当時の御恩と奉公の関係ということになるが、御恩としての四〇〇石の石高にみあった奉公、すなわち軍役をつとめなければならなかったからである。はっきりした人数は伝えられていないが、一〇人から一四、五人の家臣は抱えていたのではないかと思われる。

　『一豊公紀』所収の「御家中名誉」によると、このころ、上野惣右衛門正光が一豊の家臣に加わっていることがわかる。上野正治はもと浅井氏の家臣、小八木正光はもと六角氏の家臣だったという。一豊は、近江において、信長によって滅ぼされた浅井氏および六角氏の遺臣を積極的に採用していったものと思われる。

　なお、一説に、『一豊公紀』所収の長篠・設楽原の戦いのときの秀吉軍の陣立図に、「山内伊右衛門　百八十」とあるのを根拠に、天正三年（一五七五）の長篠・設楽原の戦いの時点で、一豊の家臣はすでに一八〇を数えたといわれるが、その時点では一豊はまだ四〇〇石のままなので、一八〇ということはありえない。一〇人から、多くても二〇人ほどであろう。

播磨で抱えた家臣たち

　一豊の家臣の出身地を追ってみると、近江だけでなく、播磨の出身者も意外と多い。それは、秀吉が天正五年（一五七七）からいわゆる「中国方面軍司令官」として播磨に乗り込み、一豊もそれに従って、主な戦いの場が播磨、さらにその西の備前・備中へ移っていったことと関係している。

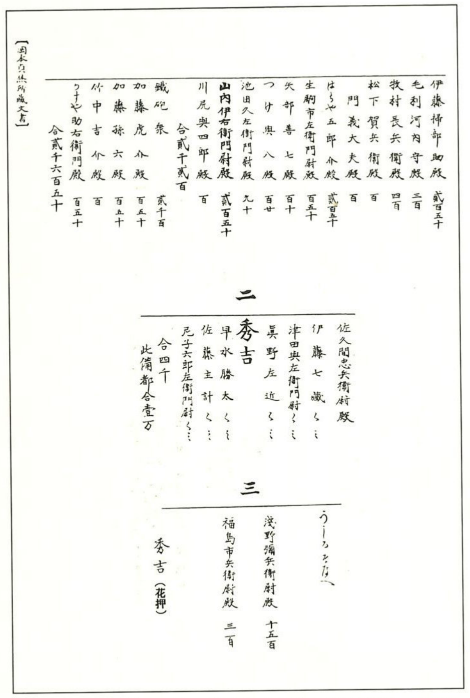
　播磨平定が成ったとき、一豊は播磨の有年（赤穂市）で、七〇〇石へと加増されているのである。つまり、七〇〇石の石高にみあった数の家臣にふやす必要が生じ、播磨の地侍、すなわち土豪クラスの武士を多数採用している。こののち、秀吉の急成長にあわせ、一豊の石高も増加の一途をたどり、中国遠征中に二〇〇〇石となり、天正十年（一五八二）六月の本能寺の変・山崎の戦いがおこる直前には二五〇〇石ないし二七〇〇石となっており、家臣の数も一〇〇人から二〇〇人ほどにふくれあがっているのである。その多くは現地採用と思われる。

　一豊家臣団の場合、「一豊公御入国御供并御一生之内抱被遊侍附」という珍しい史料があり、家臣一人ひとりについて、どこの出身かということがわかる。たとえば、柏原新之丞の場合、同書史料には、

於播州高原抱
一五百石　　柏原新之丞

とあり、播磨の高原というところで召し抱えられたことがわかる。ほかに、「於播州抱」と書かれた者は、前川新左衛門などかなりの人数におよんでいる。ちなみに、柏原新之丞の「五百石」というのは、一豊が土佐二〇万石の大名になってからの数字である。

　天正十年六月二日の本能寺の変は、秀吉の家臣だった一豊にとっても大事件だったわけであるが、その後の信長後継者レースに秀吉が勝ちあがっていくにつれ、当然のことながら、一豊自身のキャリア・アップにつながっていき、翌天正十一年の賤ケ岳の戦いのあとにはついに五〇〇〇石となり、家臣の数も二五〇人ほどにふくれあがっている。『一豊公紀』所収の「小牧山秀吉軍備之図」は表題の通り、天正十二年にくりひろげられた秀吉と徳川家康・織田信雄連合軍が戦った小牧・長久手の戦いの陣立を描いたものであるが、そこに「山内伊右衛門尉殿　貳百五十」とみえる。このころなら二五〇人はありうる数字で、これは信用できると思われる。


【岡本良然所蔵文書】
伊藤掃部助殿　貳百五十
毛利河内守殿　三百
牧村長兵衛殿　四百
松下賀兵衛殿　百
門義大夫殿　百
はちや五郎介殿　貳百五十
生駒市左衛門尉殿　百五十
矢部善七殿　百十
つけ與八殿　百廿
池田久左衛門尉殿　九十
山内伊右衛門尉殿　貳百五十
川尻與四郎殿　百
合貳千貳百
鐵砲衆　貳千百
加藤虎介殿　百五十
加藤孫六殿　百五十
竹中吉介殿　百
つナや助右衛門殿　百五十
合貳千六百五十

二
佐久間忠兵衛尉殿
伊藤七蔵〻〻
津田與左衛門尉〻〻
眞野左近〻〻
秀吉
早水勝太〻〻
佐藤主計〻〻
尼子六郎左衛門尉〻〻
合四千
此備都合壹万

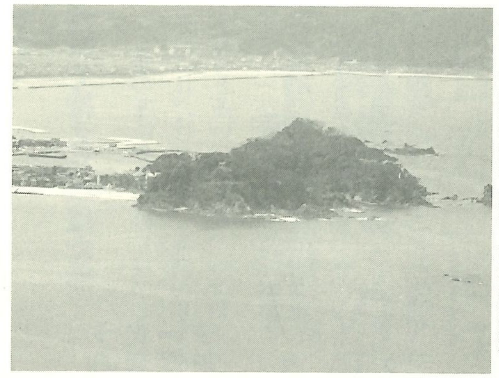
三
うしろそなへ
淺野彌兵衛尉殿　千五百
福島市兵衛尉殿　三百
秀吉（花押）

「小牧山秀吉軍備之図」。前列中央が山内伊右衛門。その左には加藤虎介（清正）、加藤孫六（嘉明）の名が見える。2人は当時、3000石だったが、150人で参戦している（『一豊公紀』より転載）。

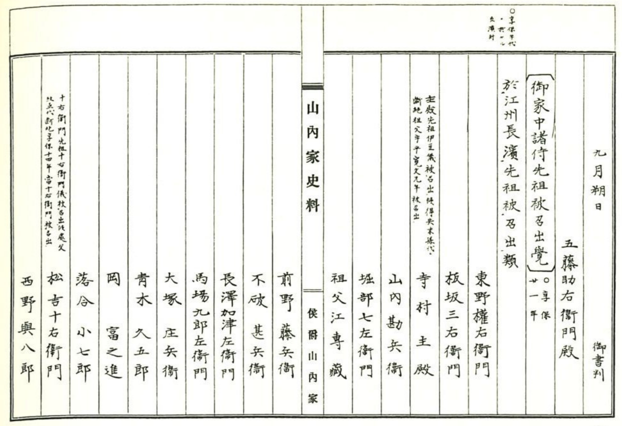
長浜城二万石で大量採用

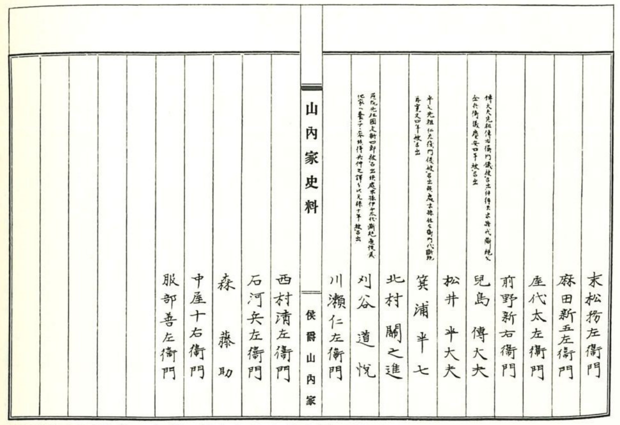
　一豊はその後も石高を順調にふやし、とうとう天正十三年（一五八五）六月には、若狭国で一万九八〇〇石を与えられ、高浜城主となった。一万石以上を大名とよんでいるので、ここで一豊は大名の仲間入りをし、文字通りの一国一城の主となったのである。

　しかし、若狭高浜城主の時代はたった二か月で、早くもその年八月には、近江長浜城に移り、石高も二万



空から見た若狭高浜城（提供＝高浜町観光課）。


九月朔日　御書判
五藤助右衛門殿
御家中諸侍先祖被召出覚　○享保廿一年
於江州長濱先祖被召出類
東野權右衛門
板坂三右衛門
寺村主殿
山内勘兵衛
堀部七左衛門
祖父江專藏
山内家史料　侯爵山内家
前野藤兵衛
不破甚兵衛
長澤加津左衛門
馬場九郎左衛門
大塚庄兵衛
青木久五郎
岡富之進
落合小七郎
松吉十右衛門
西野與八郎
91


末松揔左衛門
麻田新五左衛門
座代太左衛門
前野新右衛門
児島傳大夫
松井半大夫
箕浦半七
北村闢之進
刈谷道悦
川瀬仁左衛門
山内家史料　侯爵山内家
西村清左衛門
石河兵左衛門
森藤助
中屋十右衛門
服部善左衛門

長浜採用の31名の名前。苗字からも出身地が推測できる（『一豊公紀』より転載）。

石となっている。もっとも、たった二か月ではあるが、高浜において召し抱えられた家臣もいた。前述「御家中名誉」や、やはり『一豊公紀』に所収されている「御家中先祖書及分限記」によると、桐間兵庫利卓、馬淵留丞、同伝七、時岡武助、同孫助らが高浜において採用された由緒が記されている。

『一豊公紀』に所収されている「御家中諸侍先祖被召出覚」に、長浜で召し出された者をみると、東野権右衛門以下三一人を数えている。中には、祖父江専蔵のように、譜代家臣だった祖父江氏の一族と思われる者も含まれているので、すべてが長浜近辺の武士だったというわけにはいかない。が、筆頭に名の出た東野氏はもちろん、堀部氏とか、箕浦氏など、明らかに北近江の出身と思われる苗字も多数みられる。

この「御家中諸侍先祖被召出覚」は、三一人であるが、「御武功記」は、「天正十三乙酉年より同十八庚寅年迄於江州長浜被召抱侍」として、深尾与右衛門ら五一人の名前を列記している。天正十三年から同十八年の、一豊の長浜在城時代に、かなりの数の家臣が新規採用されていたことがわかる。

ちなみに、深尾与右衛門は、湯右衛門ともいって深尾重良のことであ

出身地別家臣表

一豊の領地	石高	領地を受領した年	その土地出身の家臣数	家臣の推定総数	主要な人物など
尾張流浪時代	0石		2人	2人	祖父江次郎兵衛、五藤吉兵衛
近江唐国 播磨有年	400石 700～2700石	天正元年（1573） 天正5年（1577）	13人	10～15人 100～200人	信長が浅井長政を滅ぼした後なので、元浅井氏の家臣・上野惣右衛門などを採用。秀吉に従い播磨方面を転戦したため、在地の土豪クラスの武士も召抱えた。
若狭高浜	1万9800石	天正13年（1585）	4人	500人	高浜時代は、わずか2か月だったが、それでもそこを出身とする家臣を4人採用している。
近江長浜	5000石 2万石	天正12年（1584） 天正13年（1585）	65人	250人 500人	後の土佐藩家老深尾与右衛門は長浜時代に一豊の客分として仕えはじめた。東野氏、堀部氏、箕浦氏など北近江系の苗字がみられる。
遠州掛川	5万石	天正18年（1590）	106人	1250人	由比氏、朝比奈氏、岡部氏などの戦国大名今川氏の重臣の名が多い。3代藩主忠豊の傅役孕石元成は掛川出身。
土佐一国	20万石	慶長5年（1600）	22人	5000人	上方出身者。土佐に移る前に採用された。
			16人		出身地不詳の者。
		慶長6年（1601）	48人		土佐で採用。
		慶長7年（1602）	19人		土佐で採用。
		慶長8年（1603）	4人		土佐で採用。
		慶長9年（1604）	5人		土佐で採用。
		慶長10年（1605）	10人		土佐で採用。

『近世大名の誕生』（編集発行・土佐山内家宝物資料館）などを参考に編集部が作成。史料からもれている人物もいるので、もちろんこれが一豊家臣のすべてではない。

るが、一豊が土佐に入国したときには一万石を与えられ、佐川城を預けられる大身の一人になっている。のちの土佐藩を支える家臣団の骨格がこの長浜時代に形づくられていた様子がうかがわれる。

掛川城五万石でさらにふえる

天正十八年（一五九〇）の小田原攻めの論功行賞で、一豊は遠江掛川城五万石となった。栄転にあたり、家臣の数も倍以上が必要になるわけで、移る前に、長浜においても新規採用を行っているが、新領地である遠江の掛川においてもかなりの数の家臣を召し抱えている。

前述の「御家中先祖書及分限記」に、

一知行三百石　弘瀬惣兵衛
曾祖弘瀬惣兵衛儀、懸川に於て一豊様へ召し出され、御入国後、与力に仰せ出さる。

とか、

一同百五十石　田所八兵衛
祖父田所何右衛門儀、遠州懸川に於て右衛門代召し置く。

などという例が何人もみられる。この石高は土佐に移ってからの石高であり、掛川時代は多分、その四分の一くらいと思われる。ちなみに、懸川は掛川のことである。

そうして掛川で採用された者の苗字をみると、由比氏とか、朝比奈氏、さらには岡部氏といった戦国大名今川氏の重臣の名が多いことに気がつく。もちろん、由比氏・朝比奈氏・岡部氏の当主というわけではないが、今川氏重臣の一族の者たちが一豊の家臣に組みこまれていったことはまちがいないところである。

高知には、「土佐国蠹簡集残篇」という中世文書の写しを多数収録する古文書集があるが、その中に、かなりの数の駿河・遠江関係の文書が含まれている。今川義元やその子氏真に仕えていた家臣が、今川氏の滅亡後、それら今川氏から与えられた文書をもって土佐に移っていったからである。これによっても、いかに多くの掛川周辺の今川遺臣が一豊に召し抱えられたかがわかる。

土佐への転封と家臣団

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで、一豊は東軍徳川家康についた。九月十五日の決戦の日は、一豊は南宮山の毛利秀元および吉川広家の動きを監視するとともにその動きを封ずる部署にあったため、これといった働きはなかった。山内家編纂の家譜などにも、「トカク差タル武功ハ終ニ之無ク候ヘトモ」などと書かれていることからも明らかなように、当日は何もしていなかったといってよい。にもかかわらず、それまでの遠州掛川五万九〇〇〇石から、土佐一国二〇万二六〇〇石へと栄転しているのである。

家康が、一豊の妻千代からの密書を高く評価したことと、小山評定で、一豊が「居城の掛川城を自由にお使い下さい」と発言したことを重くみた結果であろう。

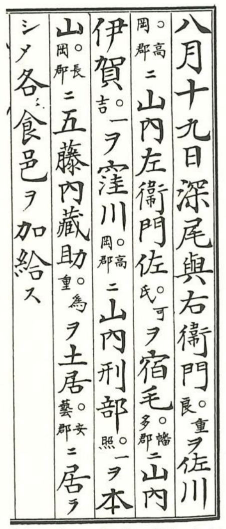
ところで、一豊は、土佐への入国にあたり、長宗我部盛親の遺臣たちによる抵抗をうけていた。浦戸一揆とよばれるのがそれである。したがって、一豊は、土佐において、はじめのうち、長宗我部氏の遺臣を採用していない。掛川近辺で新しく採用したり、また、上方において採用しているのである。

なお、入国後の家臣団統制として注目されるのが、重臣たちを主要拠点に配置したことである。「土居付家老」の体制が、初期土佐藩政をスムースに展開させる要因になったと考えられる。

『一豊公紀』は、慶長六年（一六〇一）のこととして、「八月十九日、深尾与右衛門重良ヲ佐川高岡郡ニ、山内左衛門佐可氏ヲ宿毛幡多郡ニ、山内伊賀一吉ヲ窪川高岡郡ニ、山内刑部一照ヲ本山長岡郡ニ、五藤内蔵助為重ヲ土居安芸郡ニ居ラシメ、各ニ食邑ヲ加給ス」という綱文をたて、それぞれの家臣について詳細に記している。

このうち、山内可氏は安東氏のことで七〇〇〇石、山内一吉は林氏のことで五〇〇〇石、山内一照は永原氏のことで一三〇〇石、五藤為重は一一〇〇石を領する大身であり、筆頭家老の深尾重良が一万石という陣容であった。この五人が、高知城の支城にあたる「土居」を守り、領域支配にあたっていたのである。

（おわだてつお・静岡大学教授）


八月十九日深尾與右衛門○重良ヲ佐川○高岡郡ニ山内左衛門佐○可氏ヲ宿毛○幡多郡ニ山内伊賀○一吉ヲ窪川○高岡郡ニ山内刑部○一照ヲ本山○長岡郡ニ五藤内蔵助○為重ヲ土居○安芸郡ニ居ラシメ各ニ食邑ヲ加給ス

「土居」とは領内要衝にある古城のこと（『一豊公紀』より転載）。

関ヶ原 東軍武将のその後

明暗を分けた豊臣系大名の改易

関ヶ原合戦において徳川家康の勝利に貢献したことは、東軍についた豊臣系大名の実力を改めて示すことにもなった。功を賞しながらも警戒を強めた幕府は、豊臣系の有力武将を次々と除封・減封して行く。土佐一国を得た山内家も身近に迫る改易の荒波を乗り越えねばならなかった。

文=中野 等
Nakano Hitoshi

豊臣系大名改易のプロセス


『関ヶ原合戦図屏風』（部分。関ヶ原町歴史民俗資料館蔵）。東軍の豊臣系大名の布陣するあたり。画面真ん中よりやや左下、3本の左三つ巴紋の旗指物が見えるのが田中吉政軍。

徳川幕府による大名統制策の代表的なものに転封・改易がある。転封は大名の領知換えのことであり、国替あるいは移封とも言われる。一方の改易は「改め替えること」であって本来は職務の交代を言ったが、次第にその意味を変え、近世には封建的な主従関係の断絶を指すようになる。特に大名の場合は、幕府から領知を取り上げられることをいう。この場合、除封して完全に廃絶することもあるが、領知高を削減して小規模の大名や旗本に落とし（減封）、家名の存続のみを認めるようなこともある。ここでは「改易」の意味を、こうした大幅な領知削減を含めたものとして考えていきたい。

大名家の廃絶や大幅な減封に至る原因は無嗣断絶によるもの、幕法違犯、乱心その他の疾病によるものなどがある。これらを理由とする大名家の廃絶や減封は幕政前期にしばしば見られたが、これは豊臣系大名の整理や徳川一門内の反宗家分子の削除を通して、幕府の権威を揺るぎないものにするという目論見に拠る。

関ヶ原合戦の後、西軍に与したものたちを中心に九〇前後の大名家が除封され、また毛利・上杉・佐竹といった大大名が大幅な減封を受ける。除封・削地された領知は当時の石高で六五〇万石に及ぶが、これらは家康の裁量の下、徳川家の直轄地に編入されたり、また徳川一門大名やいわゆる譜代大名の創出に充てられ、さらに論功行賞として東軍に従った諸大名へ与えられることになった。

秀忠の率いる徳川軍の主力が遅参したことから、関ヶ原の本戦で東軍は豊臣系大名の力に頼らざるを得なかった。従って、論功行賞の結果大きく加封された諸大名の中には豊臣系大名を多く含むことになる。

しかし、東軍に従ったすべての豊臣系大名が安寧な存続を約束されたわけではない。むしろ彼らは極めて短期間のうちに、種々の名目に従って廃絶・減封の対象となっていく。

大坂の陣以前の事例に限っても、慶長七年（一六〇二）十月に備前岡山の小早川家が、当主秀秋が無嗣のまま没したため廃絶され、十三年六月には伊賀上野の筒井定次（順慶養嗣子）が内訌*の結果として改易となっている。また、十四年（一六〇九）五月に伯耆米子の中村家が無嗣廃絶となる。最後の当主は一氏の子一忠であるが、中村一氏は山内一豊とともに早くから豊臣秀次に付せられ、関ヶ原合戦までは駿府を領していた人物として知られる。

翌十五年閏八月には越後福島の堀家がやはり内訌によって廃絶となっている。堀家は信長の家臣であった秀政から秀治へ続いて、上杉景勝移封後の越後春日山を領する。秀治は関ヶ原合戦に際して旧主上杉氏に呼応する越後遺民一揆を平定した。秀治の子忠俊のとき、老臣であった堀直寄と直次の争いによって改易となるが、秀政の次男である親良（秀治弟）の系統は近世を通して存続する。

さらに、大坂の陣直前には安房の里見家が改易される。小田原北条氏と対抗し豊臣大名となった里見義康は関ヶ原合戦で東軍に与し、結城秀康に従って会津の上杉景勝と対陣した。義康の子忠義は大久保忠隣の孫娘（一説には娘）を迎えて室としたが、これによって大久保忠隣事件*に連座することとなり、慶長十九年（一六一四）九月所領一二万石を没収され、伯耆倉吉三万石に減転封となる。実際には所領もほとんど与えられず、配流同然であったという。

大坂の陣によって豊臣家が滅亡し、程なく大御所家康が没すると、名実ともに秀忠の時代となる。秀忠の治下、徳川幕府の覇権がいよいよ確立するが、その後も旧東軍の豊臣系諸大名の廃絶・減封は続く。以下では元和期の事例として安芸広島の福島正則の改易、また山内一豊とともに秀次付の豊臣大名であった田中吉政の筑後柳川田中家の事例について細かく見ていくことにしたい。

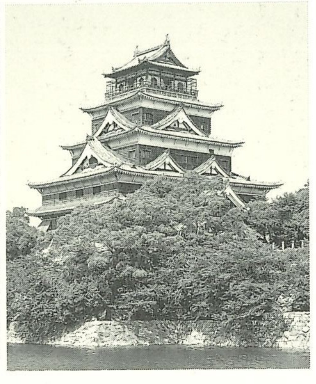
福島正則の改易

関ヶ原本戦における東軍勝利の立役者であった福島正則は元和五年（一六一九）六月、安芸一国と備後の一部四九万余石を没収され、信濃川中島四万五〇〇〇石へ減転封のうえ逼塞を命じられる。この経緯については、従来次のように説明されてきた。

広島城の破損修築に際し、正則は武家諸法度に従って本多正純に届け出、了承を得た上で修築を実行したつもりであったが、突如幕府から無断修築の咎をうけ改易された。従って事件の評価としても、幕府にとって潜在的な脅威である豊臣系大名の雄たる正則を除くことが本来の目的であって、城郭の無断修築云々は表面的な理由に過ぎないと考えられてきた。ところが、関係する一次史料を駆使した高木昭作や笠谷和比古ら*の研究によって従前の定説的な見解は否定されつつある。

すなわち、広島城については元和四年（一六一八）秋の風雨被害に伴う修築の他、同じ年の四月頃から正則は幕府には無断で石垣工事を含む比較的大規模な普請を実施していた可能性が指摘されている。この件について当初幕府は城の破却を条件に正則の宥免*を考えたようである。これは厳罰を下した場合、豊臣系大名が徒党を組んで幕府に反旗を翻す懼れがあると本多正純が判断し、秀忠に穏便な解決を勧めたためと言われる。幕府の提示した条件は本丸のみを残して、二の丸以下を悉く破却するというものであったとみられる。

ところが福島家の対応はこの破却条件を満たすものではなかった。これに加えて、福島家では忠勝（正則の子）ないしは忠勝の子を質として提出すべしという幕府の要求をも拒んだようである。こうした福島家の対応は秀忠の怒りを買うこととなり、幕府の威信を保つ意味からも結果的に正則の改易に至ったという。


広島城天守。天守周辺以外は不自然な土塁となっている。修築を咎められた際、正則が修築部分とは別の本丸上段石垣を破却したためである。


七本槍筆頭として活躍した秀吉子飼いの猛将・福島正則の賤ヶ岳での奮戦場面（『國史画帖大和櫻』より。個人蔵）。

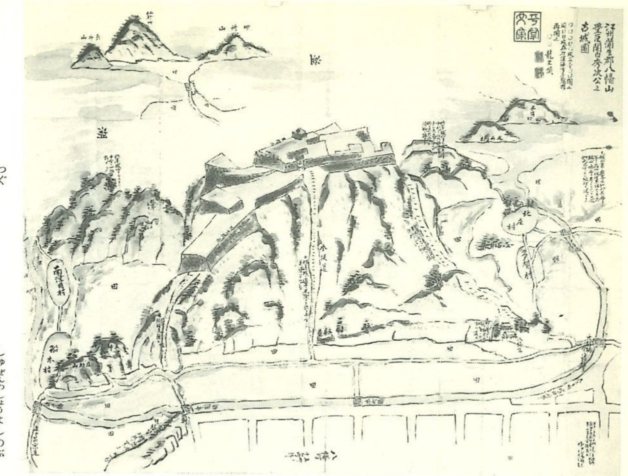
筑後田中家の改易

石田三成捕縛などの功によって、筑後一国を与えられたのが田中吉政である。既述のように吉政は池田輝政や山内一豊らとともに豊臣秀次を支えた人物としても知られている。

入部後しばらくの段階から吉政と家老らの関係はぎくしゃくしたものになっていたが、吉政は慶長十四年（一六〇九）二月伏見で客死する。吉政の跡を継ぐのは、四男隼人正忠政である。忠政には廃嫡された長兄吉

*内訌＝「訌」は「乱れる」の意。うちわもめ。内紛。

*大久保忠隣事件＝将軍継嗣秀忠の側近として政権中枢にあり、権勢を振るった小田原藩主大久保忠隣が、家康の側近本多正信・正純父子との政争に敗れて失脚、牛久藩主山口重政との私婚問題や配下の元金山奉行大久保長安不正蓄財事件への関与などの幕法違反を理由に所領を没収された事件。 *高木昭作や笠谷和比古らの研究＝高木昭作「出頭人本多正純の改易」『栃木県史研究』第8号。笠谷和比古「徳川幕府の大名改易政策を巡る一考察」『日本研究』第3巻・第4巻。 *宥免＝罪やあやまちを許すこと。



江陽八幡山古城絵図（近江八幡市蔵）。城主豊臣秀次に従い、田中吉政が宿老として居住した八幡城を描いた古図。

次のほかに次兄の主膳正吉信、三兄の久兵衛吉興（康政とも）があった。『田中興廃記』によれば、主膳正はすでに無息のまま没している。久兵衛は生来病弱で言語も不明瞭であったというが、父吉政がまだ兵部大輔を称していた頃上洛を果たしているようであり、また久留米城にいた主膳正が没すると福島城からそちらへ異動した形跡もあるので、後継者として不適格であったとも考えられない。

一方の隼人正は幼い頃から江戸に質として出され、*手伝普請の代行や上洛供奉などの経歴を持っていた。細かな事情は明らかではないが、結果的には隼人正忠政が兄久兵衛を措いて継嗣に立てられたのである。

田中家改易の顚末は、これまで語られたことが少ないので、ここでその経緯について触れておく。

『田中興廃記』などは、忠政が大坂の陣に遅滞するという失態を演じ、これが後の田中家改易の伏線になるという見解を示している。確かに夏の陣の場合、忠政の到着は大坂落城後の五月二十九日である。『駿府記』には同日条に、「田中筑後守国本より参る、遠国たるに依り遅引と云々」とある。

しかし、『当代記』などには「島津まかり上る以前は、長岡越中守・田中筑後守・加藤肥後守出陣無用の由、貴命に依り、この三人衆今に参陣無し」としている。『寛政重修諸家譜』にも「のち大坂両度の御陣に島津家久が勢出張すといへども、渡海順風を得ずして遅滞せしにより仰せをかうぶり、その押として封地にあり」と同様の記述がある。

冬の陣でも島津勢は出陣が遅れており、その去就にはさまざまな噂が付きまとった。夏の陣の場合も落城の翌日九日に、戦いが終了したので軍勢を伴わずに上洛するようにと秀忠が家久に命じている。従って忠政の遅引も全くの故なしとしない。

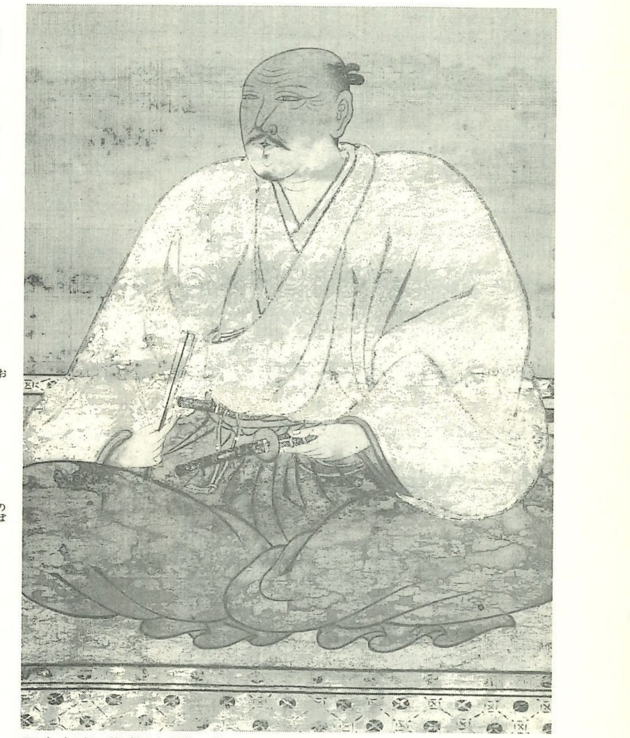
『駿府記』の七月十八日条には、他の諸大名に暇が出される中、「田中筑後守・稲葉修理両人御暇下されず、諸人不審の思いを成すと云々」とあって、原因は不明ながら忠政と稲葉通孝のみが留めおかれたとしている。



徳川秀忠判物（柳川古文書館蔵）。慶長十四年六月四日付、田中筑後守忠政宛。吉政死去を受けて忠政の相続を認めたもの。

この表現に従うとすれば、忠政への措置は「遅陣」と結びつけられるべき性格のものではなかったと考えるべきであろう。

ただし、これに先だつ閏六月二十五日豊前小倉の細川忠興は江戸の息忠利に対して「田中筑後事、其後別ニ替儀無之候哉之事」と諮問するような内容の書状を送っており、この時点以前に忠政には何らかの支障が生じていたようである。しかしその後、家康への「御目見」（『駿府記』七月二十八日条）などはなされたようで、八月十六日付のやはり忠興書状には「田中筑後今日当地（小倉）をとをり（通）候、御前済たる由候」とみえている。大坂落城後もしばらく京都にあった家康も八月四日には駿府へ発っており、この前後に忠政も帰国を許されたと見るべきであろう。



田中吉政画像（個人蔵）。左目の下から鼻にかけてと唇に見える線は秀次家臣時代に賊と格闘して負った傷。秀吉からは、温厚な顔つきだったが傷ができて勇猛さが出たな、と評されたという。

*手伝普請＝幕命を受けて諸大名が他領の工事負担を行うもの。有力外様大名の経済力を減ずるため命じられることが多かった。

ところが翌年にはいると、忠政の周囲がざわつく。すなわち、元和二年（一六一六）六月十五日の細川忠興書状に「一、田中の事、内之者祈（訴）状を上げ申し候由に候、左様ニ之在るべき儀共多く候、有様ニさへ御耳ニ入り候はば、身上果て申すべく候、筑後の国も身上果て候とて、以外さハぎ（騒）申し候由に相聞え候事」とあり、田中家中で争論がおき、このままでは田中忠政は改易と大騒ぎになっている、と忠興は述べている。

この時期*『本光国師日記』にも「田筑州家中公事云々」という記事が見受けられ、田中家中において「公事」沙汰が発生していたことは事実と考えられる。

『田中興廃記』には兄久兵衛が忠政を告発した訴状が載っている。告発の内容は忠政が大坂方へ内通していた疑いがあるというものであった。今その真偽は確かめようもないが、「田筑州家中公事」が久兵衛と忠政との対立に拠ったものである可能性は高かろう。

この公事の裁定はなかなか下らなかったようで、八月十日と二十四日の両書状で忠興はその訝しさを述べている。こうした経緯によって忠政は元和二年を在江戸のまま終えたようである。

残念ながら、忠政についてはその後の動静も定かではない。かろうじて元和四年六月二日付の細川忠興書状に「田中事定而別成事も候ましく（じ）候」とあるぐらいである。恐らくこのころまでに公事も落着したものとみるべきであろう。しかし、さらに先の史料にはなるが、翌五年十月十五日の忠興書状に「田中筑後又東へ被下之由」とある。ここでは「又」という表現が非常に気にかかるが、この間領国と江戸とを頻々と行き来していたのであろう。この段階に至っても、幕府との間に微妙な緊張関係が継続していたのであろうか。

こうした中、忠政は元和六年（一六二〇）八月七日無嗣のまま没してしまう。既述のように元和五年十月頃には東上したようであり、そのまま江戸に留まっていたのであろうか。忠政は江戸で罹病し、死去する。『梅津政景日記』の八月二十九日条には「嶋田次兵衛殿より御状被進候、田中筑後殿、江戸ニ而御煩、御果被成候、御息様無御座候て、御名代立不申由」とみえる。『寛政重修諸家譜』によれば行年三十六とある。

遺骸は神田吉祥寺に葬られるが、甲冑を着して埋葬されたという。正室は松平成重（大給松平氏、三河西尾城主二万石、元和七年以降は丹波亀山城主二万二二〇〇石）に再嫁している。『梅津政景日記』も伝えるように忠政の死によって田中家は断絶、筑後は欠国となる。

家中統制に成功した山内家

田中家の改易から二年のちの元和八年八月には羽州山形の*最上義俊が家中騒動の結果改易となるが、紙数も尽きたのでこの顚末について具体的に述べることはしない。簡単にその梗概を述べておくと、家親（義光の子）のあとをついだ義俊は若年である上に器量が及ばず、幕府は義俊の相続に当たって、いわば直接指導体制で臨んだが、結局は重臣たちを統制することは叶わなかった。

最後に、土佐山内家に少しく関説して擱筆する。山内一豊は慶長十年（一六〇五）九月に没するが周知のように実子が無く、家督は弟康豊の子で養子としていた忠義が継ぐ。忠義のもと山内家は大坂の陣に従い、元和五年の福島家改易に伴って広島出兵を行い、翌六年からは大坂城普請の助役を命ぜられている。

これらの出費により山内家の財政は大きく窮迫し、危機的な事態に立ち至るが、その対応をめぐって重臣層は必ずしも一枚岩ではなかった。換言すれば、山内家にも内訌・廃絶の危機があったということである。

こうした存亡の危機を脱し、山内家が農政の立て直しを含め元和の改革に成功するのは、故一豊の弟で忠義の実父康豊の力量に負うところが大きい。幕閣の支持を受けた康豊は後見として忠義を支え、重臣層を統率していく。歴史の帰趨を一人の個人の功に帰することには慎重にならざるをえないが、山内家が幕政初期における危機を乗り越える上で彼の存在を忘れることはできない。

豊臣系でありながら、徳川将軍家を頂点とする新たな政治秩序を受け入れ、家中の統制と領国の安定経営に一応の成功を見せた大名が幕藩体制をしぶとく生き抜いたといえよう。

（なかのひとし・九州大学大学院助教授）

*本光国師＝徳川家康の政治ブレーンとして「黒衣の宰相」とも呼ばれた金地院崇伝（こんちいんすうでん）の尊称。幕府より国師号を受け、円照本光国師と称した。　*最上義俊が～改易＝最上氏改易の詳細については福田千鶴「最上氏の改易について」（『日本史研究』361号）を参照。

【第4章】



長屋重名『かゞみ草』より

戦国女性の諸相

乱世における女の生き方

あの有名武将と一豊はどちらが年上？

一豊世代武将年齢比較表

作成=編集部

参考文献　『戦国人名事典』（新人物往来社）、『一豊公紀』（山内家史料刊行委員会）ほか

23
㉖→主要な戦のときの年令
㉝→没年

西暦	和暦	出来事	武田信玄	武田勝頼	上杉謙信	上杉景勝	今川義元	朝倉義景	浅井長政	織田信長	豊臣秀吉	豊臣秀頼	徳川家康	明智光秀	豊臣秀次	北条氏政	伊達政宗	前田利家	長宗我部元親	真田昌幸	真田幸村	長宗我部盛親	毛利輝元	黒田長政	小早川秀秋	島津義弘	藤堂高虎	石田三成	福島正則	加藤清正	田中吉政	一柳直末	堀尾吉晴	山内一豊
1534	天文 3																																	
1535	4																																	
1536	5																																	
1537	6																																	
1538	7																																	
1539	8																																	
1540	9																																	
1541	10																																	
1542	11																																	
1543	12	鉄砲伝来	23		14		25	11		10	8		2	16		6		6	5							9								
1544	13																																	
1545	14																																	
1546	15	河越合戦	26	1	17		28	14	2	13	11		5	19		9		9	8							12						1	3	2
1547	16																																	
1548	17																																	
1549	18																																	
1550	19																																	
1551	20																																	
1552	21																																	
1553	22	第1回川中島	33	8	24		35	21	9	20	18		12	26		16		16	15	7			1			19					6	8	10	9
1554	23																																	
1555	弘治 1	厳島合戦	35	10	26	1	37	23	11	22	20		14	28		18		18	17	9			3			21					8	10	12	11
1556	2																																	
1557	3																																	
1558	永禄 1																																	
1559	2																																	
1560	3	桶狭間合戦	40	15	31	6	42	28	16	27	25		19	33		23		23	22	14			8			26	5	1			13	15	17	16
1561	4	第4回川中島	41	16	32	7		29	17	28	26		20	34		24		24	23	15			9			27	6	2	1		14	16	18	17
1562	5																																	
1563	6																																	
1564	7																																	
1565	8																																	
1566	9																																	
1567	10																																	
1568	11	信長上洛	48	23	39	14		36	24	35	33		27	41	1	31	2	31	30	22	2		16	1		34	13	9	8	7	21	23	25	24
1569	12																																	
1570	元亀 1	姉川合戦	50	25	41	16		38	26	37	35		29	43	3	33	4	33	32	24	4		18	3		36	15	11	10	9	23	25	27	26
1571	2																																	
1572	3	三方ヶ原合戦	52	27	43	18		40	28	39	37		31	45	5	35	6	35	34	26	6		20	5		38	17	13	12	11	25	27	29	28
1573	天正 1		53					41	29																									
1574	2																																	
1575	3	長篠合戦		30	46	21				42	40		34	48	8	38	9	38	37	29	9	1	23	8		41	20	16	15	14	28	30	32	31
1576	4	第1回木津川		31	47	22				43	41		35	49	9	39	10	39	38	30	10	2	24	9		42	21	17	16	15	29	31	33	32
1577	5																																	
1578	6	第2回木津川		33	49	24				45	43		37	51	11	41	12	41	40	32	12	4	26	11		44	23	19	18	17	31	33	35	34
1579	7																																	
1580	8																																	
1581	9																																	
1582	10	本能寺の変		37		28				49	47		41	55	15	45	16	45	44	36	16	8	30	15	1	48	27	23	22	21	35	37	39	38
1583	11	賤ヶ岳合戦				29					48		42		16	46	17	46	45	37	17	9	31	16	2	49	28	24	23	22	36	38	40	39
1584	12	小牧長久手				30					49		43		17	47	18	47	46	38	18	10	32	17	3	50	29	25	24	23	37	39	41	40
1585	13																																	
1586	14																																	
1587	15																																	
1588	16																																	
1589	17																																	
1590	18	小田原合戦				36					55		49		23	53	24	53	52	44	24	16	38	23	9	56	35	31	30	29	43	45	47	46
1591	19																																	
1592	文禄 1	文禄の役				38					57		51		25		26	55	54	46	26	18	40	25	11	58	37	33	32	31	45		49	48
1593	2																																	
1594	3																																	
1595	4														28																			
1596	慶長 1																																	
1597	2	慶長の役				43					62	5	56				31	60	59	51	31	23	45	30	16	63	42	38	37	36	50		54	53
1598	3										63																							
1599	4																	62	61															
1600	5	関ヶ原合戦				46						8	59				34			54	34	26	48	33	19	66	45	41	40	39	53		57	56
1601	6																																	
1602	7																								21									
1603	8																																	
1604	9																																	
1605	10																																	61
1606	11																																	
1607	12																																	
1608	13																																	
1609	14																														62			
1610	15																																	
1611	16																			65										50			68	
1612	17																																	
1613	18																																	
1614	19	大坂冬の陣				60						22	73				48				48	40	62	47		80	59		54					
1615	元和1	大坂夏の陣				61						23	74				49				49	41	63	48		81	60		55					
1616	2												75																					

＊生没年は、『戦国人名事典』に準拠した。
山内一豊の生年は二説あるが、『一豊公紀』の説に準拠した。

【ケーススタディ】

「戦国武将」妻たちの波瀾万丈な生き方と身の処し方

戦国乱世の時代、そこは男たちばかりではなく、当然女の世界もあった。政略結婚や人質として苛酷な運命に身を任せざるを得なかった女性も多く、戦国武将の妻たちはどのように生きていったのだろうか？

文=安西篤子
Anzai Atsuko

妻同士の交際

友情が終生変わらなかった ねねとまつ

木下藤吉郎（きのしたとうきちろう）のちの豊臣秀吉（とよとみひでよし）が、正室ねねをめとったのは、永禄（えいろく）四年（一五六一）のこととされる。織田信長（おだのぶなが）に仕えて数年、まだ軽輩（けいはい）の身で、清洲（きよす）城下の足軽長屋に住んでいた。いまでいう社宅である。藤吉郎が二十五歳、ねねは十四歳。

当時、隣に住んでいたのが、前田（まえだ）又左衛門（またざえもん）のちの利家（としいえ）とまつの夫婦だった。二人の結婚は永禄元年ごろといわれるから、結婚生活においては、前田夫婦がやや先輩に当る。すでに娘が一人、生まれていた。

双方の妻の年齢も、まつが天文（てんぶん）十六年（一五四七）生まれ、ねねがその翌年の生まれなので、一つ違いとなる。

一説には、前田夫婦が木下夫婦の仲人をしたともいわれる。

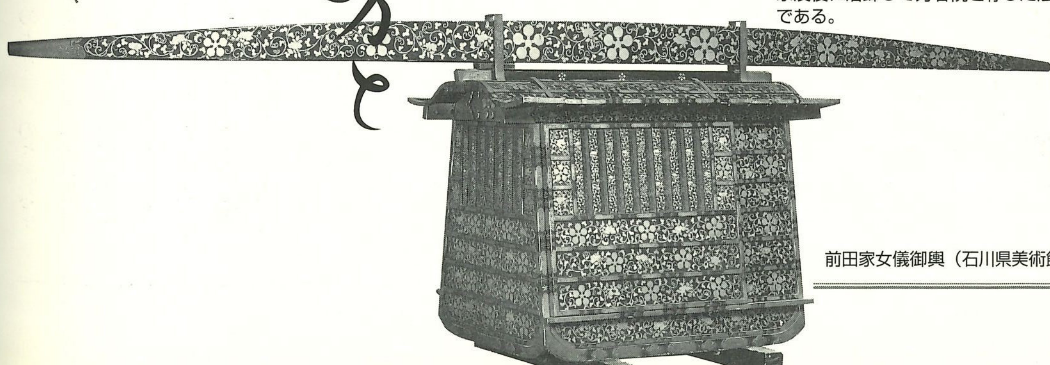
年齢が近い上に、両家の身分も給料も似たようなもので、親密な交際が始まった。

両家を隔てるのは、木槿（むくげ）の垣根一重で、二人の若妻は垣根越しにおしゃべりをしたり、味噌（みそ）や惣菜（そうざい）のやりとりをしたという。ごく庶民的な、ほほ笑ましいつきあいが続いた。人生の先輩として、ねねはまつを頼りにしていたにちがいない。

ここまでは、古今を問わず、ざらに見かける光景だが、珍しいのは、二人の友情が、終生、変わらなかった点である。



前田利家正室・まつ画像（大本山總持寺蔵）。利家没後に落飾して芳春院と称した法体姿の肖像画である。



前田家女儀御輿（石川県美術館蔵）。

戦国乱世当時のこと、二人の運命も転変した。それぞれの夫は、揃（そろ）って優秀で、めざましい立身を遂げたが、時には敵味方に分かれた。本能寺で織田信長が亡（な）くなると、前田利家は柴田勝家（しばたかついえ）の側についた。だが後に、羽柴秀吉が利家を説（と）いて、味方にしたのである。

その為、天下は秀吉のものとなり、前田利家はその麾下（きか）に入った。身分に上下関係が生じた。

こうした様々な変化の中でも、ねねとまつの仲のよさは変わらなかった。



豊臣秀吉正室・高台院（ねね）画像（高臺院蔵）。秀吉没後は京都・高台院を建て、隠棲して余生を送った。

双方の夫の地位や、両家の経済状態が同等であれば、気持よくつきあえるが、一方が異例の出世をしてしまうと、たがいに疎遠（そえん）になる例が、世間には多い。人間の常として、羨望（せんぼう）や嫉妬（しっと）もきざすであろうし、遠慮も生まれる。環境の変化を乗り越えて、ねねとまつの間に親密な関係が続いたのは、ひとえに二人が、人並すぐれて賢い女性であったためと思われる。

もう一つ、両家の間には、強力な絆（きずな）があった。

前田利家夫人のまつが、次々と男児・女児を生むのに比べて、ねねは一向に、懐妊（かいにん）しなかった。まつが二人目の女児を生んだとき、祝いに訪れたねねの羨（うらや）ましそうな顔つきを見て、まつは言った。

「この子をあなたに進ぜましょうか」

ねねは喜んでこれを受け、この子は羽柴家の猶子（ゆうし）となった。のちに宇喜多秀家（うきたひでいえ）に嫁（か）した豪姫（ごうひめ）である。こうして両家は親族となった。

つつましい生活の中でこそ友情が生まれた

芝居やテレビドラマでは、男も女も華やかな衣裳を身につけるが、当時の武家の暮しは、まことに質素なものだった。

よく知られる『おあむ物語』は、石田三成（いしだみつなり）に仕えて知行三〇〇石を頂戴する山田去暦の娘おあむの回想談だが、それによれば、衣類といっては手作りの花染（露草の花で染める薄い藍（あい））の帷子（かたびら）（裏をつけない単物（ひとえもの））一枚しかなく、それを十三歳から十七歳まで着た。背丈が伸びるにつれて、脛（すね）が出て恥ずかしく、「せめてすねのかくれるほどの帷子ひとつほしやとおもふた」と言う。

朝夕の食事は雑水（ぞうすい）で、たまに菜飯（なめし）が食べられるときは、「うれしうてならなんだ」とある。

おそらく、ねねやまつの暮しも、同程度であったろう。つつましい生活の中で助け合ってこそ、真の友情が生まれたと思われる。

ねねとまつのように、のちのちまで語り伝えられはしなかったにせよ、似たような武家の妻同士の交際は、むろん少なくなかったと思われる。

戦乱も治まり、生活も安定したあと、どういう交流があったか。現代ならば電話やメールのやりとりだろうが、当時は手紙で消息を尋ね合った。また、土地の名物や珍しい果物などを贈った。

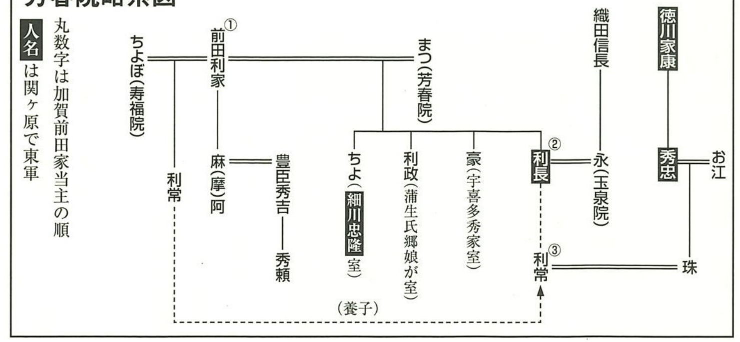
たとえば、山内一豊の妻が息子（養子）の忠義（ただよし）に宛てて、「今年はたいへん暑いが、子たちはどうしていますか」と問う手紙を送っている。

また、前田利家夫人まつが、台風のあと、娘のちよに送った手紙、細川忠興（ほそかわただおき）夫人ガラシャが知人から瓜（うり）をもらったときの礼状などが見られ、その時代の女性たちの交際の一端がうかがわれる。

正室と側室

正室は主人、側室は使用人の関係

武家の家庭内の、正室と側室の差は大きい。一言でいえば、正室は主



人であり、側室は使用人に過ぎない。

幕末の英傑勝海舟は妻妾同居で知られる。

海舟は女性に優しい男で、たとえば長崎にいたころ、身の廻りの世話をしてくれる現地妻を置いたが、江戸へ戻るとき、連れてくる。そういう女性が複数、邸にいたが、朝、海舟夫婦が長火鉢を前にくつろいでいると、妾や小間使いが揃って廊下に手をつき、「お早うございます」と挨拶する。夫婦は鷹揚に、「お早う」と答えたという。妻と妾の地位には、それほどの懸隔があった。

正室に男児が無く、側室が男児を儲けても、それだけで双方の地位が逆転するわけではなかった。側室の生んだ男児は主人側に属し、側室はあいかわらず使用人のままである。したがって子どもは、生母を呼び棄てにする。「妙なものでした」と、維新後のある大名家の当主が、述懐している。

ただし、側室が正室を圧倒して権勢を握る例も、無くはない。そこには、様々な事情が絡んでくる。

大名家の間の縁組は、大方、政略による。なるべく条件のいい相手と縁戚になりたいのが人情で、対等もしくはそれ以上の家柄を求める。立派な大名の姫君ともなれば、大切に育てられたことはまちがいないが、それだけに虚弱であったり、性格的にも弱い場合がある。丈夫な子を生むのが難しく、また円満な夫婦生活を営むに至らない。

徳川将軍家を例にとれば、十五代のうち、正室の腹に生まれたのは、三代家光ただ一人である。

その家光は、二十二歳のとき、京都から関白左大臣鷹司信房の姫君孝子を正室に迎えた。しかしなぜか家光は孝子を近づけず、吹上の庭に邸を建ててそこに住まわせた。家庭内離婚である。むろん子は生まれない。

家光はのちに側室を置き、家綱・綱吉などを儲けたが、五代将軍となった綱吉の生母お玉こと桂昌院が、大きな権力を握ったことは、よく知られる。孝子がそれを見ずに亡くなったのは、せめてもの幸いだったというべきであろう。

六代家宣の正室もやはり京都から迎えられた。関白太政大臣近衛基熙の姫熙子である。女児と男児一人ずつを生んだが、二人とも早世した。家宣は何人か側室を持ち、男児も生まれたが、いずれも夭折、家宣の亡くなったとき、生存したのは、側室お喜世の生んだ鍋松ただ一人だった。この子が七代将軍家継となる。

家宣の薨去後、熙子もお喜世も剃髪出家して、それぞれ天英院・月光院と号する。大奥における二人の立場には、微妙なものがあったにちがいない。

一方は関白の姫君で前将軍正室、一方は江戸の町娘から成り上り、将軍生母である。ひそかに勢力争いがあったかも知れないが、世をさわがせた*絵島事件で、月光院の権威は失墜、翌々年には家継も世を去って、天英院に対抗できる勢力は無くなった。

側室の手柄で断絶をまぬがれた前田家

江戸期の将軍家・大名家の夫婦が、形骸化していったのに比べると、戦国期から成り上った大名夫婦の間には、まだ人間らしい情味が残っていた。

前田利家は従妹のまつと結婚し、二男四女を儲けたが、他方、幾人かの側室を擁して、そちらにも子を生ませていた。

多くの夫婦の場合、正室が年齢を重ねて出産に適さなくなったとみられて以後、側室が子を生むというケースがよく見られるが、前田家では、まつと側室が代る代る出産している。それで取り立てて家庭内に揉め事が起こらなかったのは、まつが寛容で、こうした状態を受け入れたためであろう。一方、利家もこの賢妻に頭が上らない面もあったかも知れない。

文禄元年（一五九二）というから、利家数えの五十五歳のとき、秀吉が朝鮮に出兵し、利家も肥前名護屋に赴いた。秀吉は愛妾淀殿を名護屋に呼び寄せ、諸大名にも、「妻を呼ぶように」とすすめた。そこで利家も、加賀金沢にいたまつに、名護屋へ来るようにと言ってやった。けれども、多くの子どもたちの面倒を見ながら留守を守っていたまつは、今更、九州まで行きたくなかった。当惑する奥方を見て、上木ちよぼという若い侍女が、「私が参りましょう」と申し出た。喜んだまつは、ちよぼを肥前へ送り出した。

名護屋でちよぼが利家の身の廻りの世話をするうちに、利家の手がつき、ちよぼは身ごもってしまった。さすがに初老の利家は、まつに対してきまり悪く思ったらしい。そこでちよぼを、家臣の前田長種に嫁している長女に預けた。ちよぼは無事、男児を生んだ。このあたりの利家の心境がおもしろい。

実はこれは、ちよぼの大手柄となった。利家の跡目は、まつの生んだ長男利長が継いだが、利長に子が無かったため、ちよぼの生んだ弟を養子として、家督を継がせた。これが利常である。前田家は危く断絶をまぬがれた。

妻たちの奮闘

主人不在の場合は表舞台へも出向く

建久三年（一一九二）、源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、武家政権が始まったが、それ以後、徳川氏の江戸開府まで、武家の夫婦のあり方は、だいたい頼朝と北条政子夫妻をモデルケースと考えてよさそうに思われる。

およそ武家は、男たちが執務する表と、妻子の暮す奥に分けられる。


伝淀殿画像（奈良県立美術館蔵）。秀吉の側室であったが、正室・ねねに子がないことから権勢を誇った。

主人は仕事を離れれば奥へ戻って休息するが、奥向きの権限を握っているのは、正室である。子どもは、正室の子はもちろん、側室の生んだ子も、正室の支配下にある。北条政子は、頼朝の愛人の生んだ子を幼いうちに京へ送って出家させた。

豊臣秀吉の正室ねねは男児を生まなかったが、側室淀殿腹の鶴松の嫡母になっている。こうすることで秀吉は、ねねの顔を立てる一方、鶴松の身分に箔をつけた。

当主が早く亡くなり、跡目を継ぐ子が未成年の場合、母に当る正室が後見役を勤める例が多い。源頼朝の死後、長男頼家が二代将軍となったが、母政子は頼家を将軍にふさわしくないと考えて伊豆に追放、次男実朝を三代将軍に据えた。幼弱の実朝の背後にあって権勢を握り、尼将軍と称されたことは、よく知られている。

一旦、戦乱の世ともなり、主人不在の場合は、女性といえども奥にばかり引っこんでいるわけにはいかなかった。

実朝が暗殺され、将軍が空位の承久三年（一二二一）、後鳥羽院によって幕府の執権北条義時追討の院宣が下された。朝敵の汚名を着ることを怕れて、鎌倉の御家人が動揺したとき、引き締めに当ったのが政子である。

——公家にこき使われた昔を忘れたのか。亡き頼朝公の御恩を忘れたのか。

声涙ともに下る政子の演説に、御家人たちは迷いから覚め、一致団結して幕府を危機から救った。

武器は持たなくとも、夫を操縦して大手柄

下って戦国時代には、更に女性が軍事にかかわる場面も出てくる。

関ヶ原の合戦直前、前田利長が東軍の徳川家康に加勢しようと、大軍

＊絵島事件＝月光院付きの大奥女中・絵島が江戸山村座の役者・生島新五郎との密通の罪で流刑となり、山村座は廃絶、連坐者1500人に及んだ事件。



北条政子坐像（安養院蔵）。主人が不在の場合は、表舞台に出て活躍した妻の典型である。

をひきいて金沢から小松まで進出してくると、小松城主丹羽長重の軍勢が、前田勢に攻めかかった。名高い〈浅井畷の戦い〉である。

丹羽長重の部将江口三郎右衛門の家来に、出口某という老武者がいた。若いころは戦場で鳴らした勇士だが、六十過ぎて気力の衰えは争えない。ようやく敵の首一つ取ったものの、あっという間に奪い返されてしまった。がっかりして田の畦道で休んでいると、向こうからひさごを手にした老女がやって来る。よく見ると自分の妻なので、さては酒を提げて陣中見舞に来てくれたかと喜んだ。

ところが妻は夫に眼もくれず、通り過ぎて行く。あわてて呼び留めると、「首一つ取ったぐらいで昼寝をしているような横着者に、この酒は呑ませられぬ」と憎まれ口を叩き、主人の江口はじめ居合わせた武士たちに、残らずふるまってしまった。

これで発奮した出口は、戦場へ駆け戻ってたちまち敵一人を斃したという。

妻自身が武器を持たなくとも、巧みに夫を操縦して手柄を立てさせた例は、多かったにちがいない。

ときには夫に負けないほど、勇ましく戦った妻もいた。

関ヶ原の合戦のとき、伊勢の安濃津城を守っていたのは、富田信高という若い武将だった。そこへ西軍の毛利秀元の軍勢三万余騎が押し寄せた。城方は三〇〇〇にも満たない。敵はたちまち城内へ攻め入り、総大将の信高もすでに危く見えた。

そのとき、色白の美しい若武者が駆けつけた。緋縅の鎧に半月を飾った兜をいただき、片鎌の槍を手に、馬を走らせてくると、見る間に敵数人を倒して、信高を救い出した。

これこそほかでもない、信高の正室で、強いのも道理、猛将宇喜多忠家の娘だった。

山内一豊の妻というと、黄金一〇両で夫のために名馬を買った話が名高いが、その後もよく夫の役に立っている。

大坂で石田三成が挙兵したとき、山内一豊は遠州掛川五万石の城主で、会津攻略に向かった徳川家康に従って、下野の小山まで進んでいた。一方、妻の千代は大坂で留守を守っている。

石田三成は、東軍すなわち家康に属する諸大名の夫人たちを人質にしようと考えた。石田の使者を拒んで細川ガラシャ夫人が死を選んだのも、このときである。

山内氏の大坂の屋敷にも、石田三成から、西軍に味方するようすすめる書状が来た。千代はこの書状を文箱に入れて、小山にいる夫のもとへ送った。同時に、大坂の情勢をこまかく手紙に書き、これを細く裂いてこよりにした上で、使者の笠の緒の中に隠した。

小山にいた諸大名は、石田三成の挙兵を聞いて、動揺した。豊臣恩顧の大名も多く、東軍につくべきか西軍に味方するべきか、迷ったのである。

千代の密書を受け取った山内一豊は、誰よりも先に大坂の様子を知り、秀頼を見限って家康につく決心をした。そこで諸大名にさきがけて家康に、掛川城と三成の書状を差し出して、異心のないことを明らかにした。これを見た他の大名も、続々と一豊に倣った。

関ヶ原の合戦が東軍方の勝利に終ると、家康は山内一豊の功績を第一と認め、土佐一国二〇万石の太守に

した。「戦場での働きは、大したこともないのに」と、驚く諸侯が多かったという。これはすべて、千代の手柄によるといってよかろう。

人質としての存在

戦が始まれば、まっ先に血祭りにされた

鎌倉の源頼朝が、木曽の義仲の心底を疑ったとき、義仲は嫡男の清水冠者義高を鎌倉に送った。実質は人質だが、一門の間柄で人質を取るのは不体裁と思ったか、頼朝は自分の娘大姫の婚約者とした。義高が十一歳ほど、大姫はそれより五歳ほど幼い。

ほどなく義仲は義経に討たれ、頼朝は義高を殺した。悲しみの余り大姫は精神を病み、早く亡くなる。人質の悲劇の一例であろう。

豊臣秀吉が徳川家康の次男を養子に迎えたのも、一種の人質であろう。けれどもまだ実子の亡かった秀吉は、この子を可愛がり、自分の一字を与えて、秀康と名乗らせた。

戦乱にあけくれた時代、敵対していた相手と一時、和睦するとき、その保証として人質を交換する。

また、弱小勢力が強者に対して、屈服の印として人質を差し出す。

相手の裏切や離反を防ぐのが第一の目的なので、受け取る側としては、相手の最も大切な人間を人質に取りたい。そこで人質として選ばれるのは、掛け替えのない嗣子・正室・実母といったところが多い。

両者の間に平和が続けば、人質も無事だが、一旦、戦が始まれば、まっ先に血祭にあげられる。

領主の城郭の中には、人質矢倉を設けて押しこめておく例があったらしい。天正十年（一五八二）三月三日、織田信長の軍勢に攻められた武田勝頼は、「新府の館に火を懸け、世上の人質余多これあり、焼籠にして罷退かる。人質潼と泣き悲しむ声・天にも響くばかりにて、哀れなる有様、申すは中々愚かなり」と、『信長公記』は記す。

母親を人質とした例としては明智光秀がいる。光秀が丹波の八上城を攻めたとき、母を人質として送ったので、敵将波多野秀治・秀尚兄弟は、光秀を信用して降伏した。光秀が波多野兄弟を安土の信長のもとへ送って、降伏の許可を得ようとしたところ、信長は二人を磔にかけて殺してしまった。これに憤った八上城兵は、光秀の母を殺して籠城・全滅した。明智光秀がのちに本能寺に信長を襲ったのは、その怨みからともいわれる。もっとも、母は実は伯母だったとの説もある。



勝龍寺城公園に建つ細川忠興・ガラシャ夫婦像（提供＝長岡京市商工観光課）。ガラシャは代表的なキリシタンで、本名は玉（玉子）といい、明智光秀の娘である。

あなたを刺し殺して私も死にます

ここに哀れをとどめたのは、奥平定昌の妻おふうである。

鎌倉時代から、奥三河には、菅沼・奥平などの群小領主が割拠していた。戦国時代が到来すると、彼らは風向きによって、駿河の今川氏に属したり、岡崎の松平氏の麾下に入ったりした。

元亀三年（一五七二）、甲斐の武田信玄が勢力を伸長、徳川家康・織田信長連合軍と三方ヶ原で戦い、大勝した。

奥平一族は、去就に迷った。隠居の入道道文は信玄に与するといい、当主貞能と嫡男定昌は心中ひそかに家康を評価していたが、父にさからえず、渋々、同意した。

やがて年が変わって天正元年（一五七三）、武田方から奥平氏に、人

質を求めてきた。人質は三人、貞能の次男で定昌の弟に当る仙丸十四歳、一族の勝次の子で仙丸より幼い虎之助、それに定昌の妻おふうである。
おふうは、奥平一門の貞友の娘で、定昌とは幼馴染だった。おふうが十五歳、定昌が十六歳のとき祝言し、仲睦じく暮した。
いまおふうは十七歳、まだ子どもはなく、初々しい若妻である。定昌とおふうは、身を切られる思いで別れた。おふうたち三人の人質は甲府へ送られ、人質矢倉に幽閉されたが、その後、鳳来寺に移された。
人質を差し出してわずか三か月後に、奥平貞能・定昌父子は、居城亀山城を棄てて、徳川家康のもとへ奔った。定昌はむろん、おふうの身を案じて胸が痛んだが、奥平家存続のためにはやむを得ないと、決断したのである。
武田信玄はすでに亡く、勝頼が跡目を継いでいたが、当然、奥平父子の離反に激怒した。おふうたち三人を、鳳来寺表参道昇り口に建つ金剛堂の前に曳き出し、磔にかけて殺した。夫に見棄てられたおふうの心中は、どうであったろうか。
徳川家康は、妻を犠牲にした奥平定昌の功績をみとめ、自分の長女亀姫を定昌の後添えにした。徳川家と縁続きになった奥平氏は、大いに繁栄した。
おふうに見るような哀れな妻がいた一方、降りかかりかけた非運をはねのけた女性もいた。
やはり関ヶ原前夜のこと、三河国吉田の城主池田輝政も、家康に従って東国に赴き、正室督姫は大坂に留っていた。督姫は家康の次女なので、特に三成から目をつけられたが、家臣の山崎家盛の機転で、病気療養を名目に無事に逃した。大坂方では重ねて、家盛に人質を要求してきた。
山崎家盛の正室は、猛将池田勝入の娘で、輝政の妹に当る。父や兄に似たとみえて、気性が激しく、武芸のたしなみもあった。夫から人質として大坂城へ行けと命じられたが、きっぱりとこれを拒絶した。
「あなたが側女とその子二人を、三左衛門（輝政）どのの奥方といっしょに逃がしたことを、私が知らぬとお思いか。側女を助けて私に人質になれとは、あまりに酷いなさり方。どうしてもとおっしゃるなら、あなたを刺し殺して私も死にます」
父勝入から贈られたという守り刀を握りしめてこう言ったから、家盛もぐうの音も出なかったという。その後、夫に愛想を尽かしたか妻は二、三人の侍女だけを供に、飄然と実家の池田家に去り、二度と夫のもとへは戻らなかった。



お市の方画像（高野山持明院蔵）。浅井長政との間に儲けた３人の娘は、それぞれ秀吉室（淀殿）・京極高次室（常高院）・徳川秀忠室（崇源院）となっており、その血は戦乱をくぐり抜け受け継がれていった。

政略結婚

戦国女性の生き難さを示したお市の運命

戦国乱世にあっては、名の知れた家同士の縁組は、大半が政略によるといってよかろう。
織田信長の妹お市は、とりわけよく知られている。
「天下無双の美女」と謳われたお市は、兄のはからいで、まず近江の小谷城主浅井長政のもとに輿入れした。いずれ京へ攻め上り、日本中を支配したいと、野望に燃えていた信長は、尾張から京への道筋を扼する浅井氏を、まず味方につけておかねばならなかった。
実はこの結婚に当っては、反対する者がいた。長政の父久政である。浅井氏は以前から、越前の朝倉氏と緊密な関係にあった。朝倉と織田は不仲である。将来、信長が朝倉を攻めるようなことがあれば、浅井氏は板挟みになる。そこで信長から、「朝倉を敵としない」との約束の一札を入れさせた。
浅井長政とお市はおよそ一〇年、仲よく暮し、二男三女を儲けた。ところが元亀元年（一五七〇）、信長は大軍をひきいて越前に侵入し、浅井氏はむかしからの友誼を重んじて、信長に叛旗をひるがえした。
天正元年八月、信長はついに朝倉氏をほろぼし、次いで小谷城の攻略にかかった。
城中のお市はどのような思いで、兄と夫の戦いを見ていたのだろうか。
先に信長が越前を攻めたとき、浅井長政は出兵してこれを挟み撃ちにしようとした。お市は、両端を縛った小豆の袋を兄のもとへ届けさせ、危険を知らせたといわれる。このエピソードが史実かどうかはわからないが、お市の立場の苦しさは、よく理解できる。
小谷落城に当って、長政は三人の娘と共にお市を信長の陣中に送った。嫡男の万福丸は、信長が殺した。
愛児を磔にした兄に対して、お市がどういう感情を抱いたかは不明だが、その後一〇年、お市は娘たちとともに兄の庇護下にいた。信長が本能寺で討たれると、三人の娘を連れて、柴田勝家に再嫁した。
こうしたお市の身の処し方から、戦国時代の女性の生き難さが、察せられる。父であれ兄弟であれ、あるいは夫など、強い庇護者がいなければ、女性にはどれほど苛酷な運命が待っていたことか。お市が長政や勝家を愛していたかどうかなど、全く問題にもならない。一〇年も連れ添った長政とは共に死なず、わずか半年の結婚生活を送ったに過ぎない勝家の死に殉じたのも、もし生き延びれば、大嫌いな羽柴秀吉の側女にされるほかないと、わかっていたためであろう。

政略結婚の実を挙げた伊達政宗の母・義姫

武田信玄の長女黄梅院も、不運な女性の一人といえよう。
天文二十三年（一五五四）、甲斐の武田、相模の北条、駿河の今川の間に、いわゆる甲相駿三国同盟ができると、条件の一つとして、十二歳の黄梅院が、十六歳の北条氏政のもとに輿入れした。信玄は愛する娘のために、人目を驚かす美々しい行列を組んで送り出した。娘の出産に当って信玄の捧げた願文が、浅間神社に伝えられている。
黄梅院は夫氏政との間に、六人の男児を儲けた。しかし、永禄十一年（一五六八）十二月、信玄は駿河に侵攻、氏政は妻を離別して甲斐に送り返した。子どもたちとも引き離され、黄梅院はどれほど悲しかったか、半年ほどのちに、二十七歳という若さで世を去った。娘を憐れんで、信玄は甲斐に黄梅院を建立、氏政ものちに箱根湯本の早雲寺に黄梅院を建てた。
奥州の雄伊達政宗の生母義姫は、戦国期にふさわしい豪毅の女性として知られる。
義姫は山形城主最上義光の妹で、政略のため伊達輝宗に嫁して政宗と小次郎を生んだ。なぜか義姫は長男政宗を嫌い、小次郎を偏愛した。
あるとき、伊達と最上が不和となり、それぞれ兵を出して睨み合った。そこへ輿に乗った義姫が駈けつけると、両軍の間に割って入り、そのまま八〇日余り動かなかった。両軍は根負けして、ついに兵を引いたという。政略結婚の実を挙げたというべきか。
夫輝宗の死後、政宗を毒殺しようとしたが果せず、義姫は山形へ去った。三〇年を故里で過ごしたが、晩年には政宗に引き取られ、仙台で没した。自分を殺そうとした母だが、政宗は孝行を尽くし、二人の間でやりとりした手紙も残っている。

（あんざいあつこ・作家）

戦国期における庶民の夫婦生活

夫婦喧嘩、嫁姑問題、子はかすがい…。

戦国期の庶民の女たちは、田植え・機織り・子育てなど、苛酷ともいえる労働をして家計を担った。哀愁と笑いの時々を過ごした女たちのなかに、千代をはじめ、ねねやまつもいたに違いない。

文・画像選定＝千 草子
Sen Souko

一、表で働く妻

室町ことばを最大限に生かして歴史小説を書く私が、室町（戦国時代までを含める）世界を歩きたいと思う時、必ず開くのが、洛中洛外図屏風――とりわけ、上杉本――である。そして、いつも感じる事は、庶民の男も女もよく働いているということである。

小刀を使って、竹を割いたり、木材を加工したりするのは男の仕事。高い所の屋根葺きも男の仕事。女はというと、扇を作ったり、餅をついたり、その販売も行なっている。現代のように駅ビルのテナントとして入りこんだ店で働いているのではないから、小さな長屋風の自宅の通りに面した一間を店にして、町通りの人々に作っている姿を見せつつ、売るのである。夫婦のうち、妻が表に立っているから、これをさして「表で働く妻」と称したい。

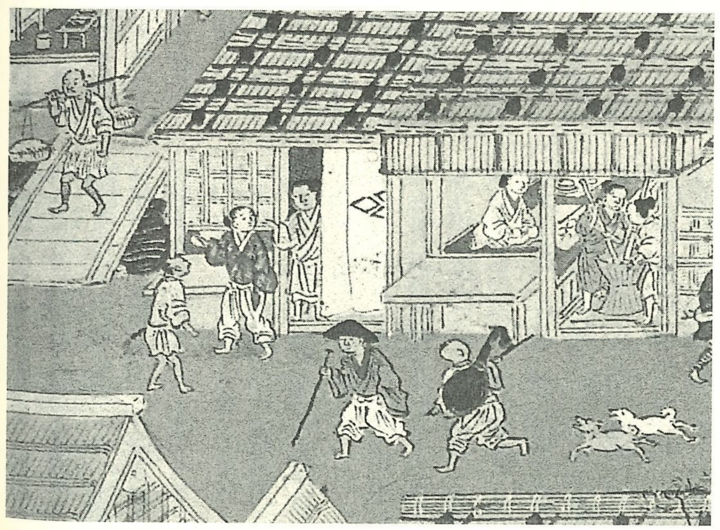
子の小さいうちは、奥にいる姑が見てくれていると思われる。

商いの主たるにない手になっていない、つまり、現代風に言えば専業主婦は、子をおぶり、あるいは胸元に入れこみ（これを〝ふところ子〟という）、共同井戸で洗濯をしたり、干したり、おしゃべりをしたり。一昔前の私たちの庶民生活と余りかわらない。

郊外の――たとえば、京都なら大原の里の女は、里山の雑木林から自然の恵みである薪をひろい、あるいは、樵の夫たちが枝打ちしたものをたばね、頭にのせ、町まで売りに来る。一人一人荷は頭にのせ、残りは牛の背に運ばせているが、その牛も女が追っている。

上杉本洛中洛外図屏風の大原女たちは、五人連れで、一人男の子を伴い、楽しげに語り合いつつ歩いている。労働がつらくとも楽しい一時であることを映し出している。

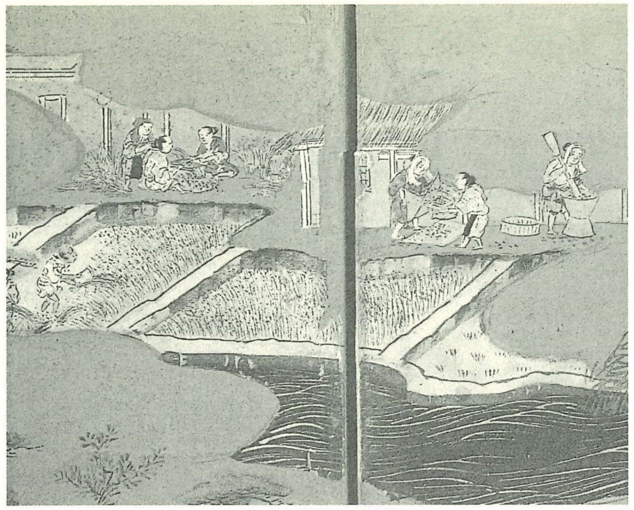
電気のない時代、夜あけとともにさしこむ朝日はありがたい照明。したがって、これを思う存分いただくには、早起きするに限る。ある程度生活のゆたかな町衆は、簡単な朝餉をすませ、それぞれの商いの準備に入る。そして、陽のかげる夕方まで店に、あるいは、家事にいそしみ、夕餉（一汁一菜～一汁三菜程度）をすませ、灯油や蝋燭も惜しんで早く寝ることになる。



上杉本『洛中洛外図屏風』に描かれた室町・戦国時代の洛中の庶民生活の様子。長屋風の家の一間を店にして女たちが商売（餅屋）をしている様子がよくわかる（米沢市上杉博物館蔵）。

昼食（昼餉）が固定するのは、かなり後で、小昼といって簡単な虫おさえ程度のものですませる場合が多い。

農村生活になると、朝食をたべずに夫婦で田畑に出、昼頃、姑が子の手をひき行器という弁当桶に入れた麦飯・漬け物などを届けることになる。その後、夕ぐれ過ぎまで仕事をして家に戻り、夕餉（「雑炊」が主。水が米や野菜具よりも多いところから、中世では「増水」と書かれ、これが語源である）をとり、月明かりを灯にして草鞋を編んだり、むしろを打ったりして時間をすごす。雨の日は、妻は、機織りである。織った布は、民話「鶴の恩返し」のように夫が市に売りに行く場合もあるが、職人尽絵などを見ていると、妻が売りに出ることの方が多かったと思われる。自分の織り（紋様）の工夫なども客にアピールできるし、売った銭で、欲しい物も買って帰れる、一種の社交場ではなかったか。



上杉本『洛中洛外図屏風』の洛外の農村地帯の風景。よく整備された水田の向こうでは、女たちが、臼で米をついたり、ふるいにかけている姿が見られる（米沢市上杉博物館蔵）。

なお、田植えや稲苅りは村の共同作業で行なわれた。田植えは神事をかね、早乙女と言われる未婚の娘たちがまずは行なう。そののち大勢が田に入って一気に植えつける。稲苅りは、男たちが鎌をもち苅りとり、女たちが干し、すでに干しおわった稲の穂をこぎとり、臼でついて脱穀をする。天気のよい日をのがさず、人手も心も集中させた労働であったと思われる。

現代と異なり、全てが手作業の稲づくりはきつい仕事の連続であった。年をとった女にとって腰をかがめての田植えは厳しいものがあった。それにくらべて稲苅りは、楽だし楽しい。年貢として収める米のほかに、とれたての米粒が口に入る。美味しく幸せな気分になる。このような心境を、姑が歌った流行歌がある。狂言「うつぼざる」に収録され、舞台では、猿引き（猿回し）の歌に合わせてかわいい小猿が舞うものを、ここに紹介したい。

〽ひんだの横田の若苗を、しょんぼりしょんぼりと植へたもの、今呼ぶ嫁が苅らふずよなふ、腹立ちや、ひんだの踊りをひとおどり、〱

声に出して読んでいただきたい。単なる嫁いびりではない。こうして、外に出すことにより、それを自ら茶化し、収穫祭に姑たちが嫁とまじって歌い踊ることによって、陰惨な**嫁姑の悲劇を回避**しようとしている。女たちの知恵なのである。

農村や漁村の労働条件が現代よりも格段に厳しかったので、秋の収穫や大漁の時期にはまさに〝お祭りさわぎ〟となる。風流踊りに一夜踊りつくすのである。そのような折には、女も酒をたしなむ。酒が栄養源であり百薬の長であった時代である。



狂言『うつぼざる』のラスト近くの場面。当初、猿を生きたまま「靭（うつぼ）」の皮にはぐと無理難題を言っていた大名（山本則直）も、のちには、小猿（山本凛太郎）のけなげな芸に、ついつい浮かれて真似をしだす。小猿の芸づくしのなかに、「ひんだの横田の若苗を…」の小歌が入っている。なお、猿引き（大蔵流山本家当主・山本東次郎）の猿にそそぐ暖かい眼差しに注目。
（撮影＝前島写真店）

このような風流踊りが、江戸時代～明治にかけて民謡・盆踊り歌となり、あるいは歌舞伎踊りとなって古典芸能として現在に伝わっている。

二、夫婦げんかと離婚

夫婦であれば、**夫婦げんか**はつきものと言ってよい。普通の場合は、夫が甲斐性なしのぐうたら亭主で、



上杉本『洛中洛外図屏風』に描かれた風流踊りに興じる人々。頭に笠をつけ、花の枝をさした風流な格好である（米沢市上杉博物館蔵）。

稼がないことに妻がキレて口げんかになるケースなのであるが、狂言「どもり」には、"家事放棄"妻、夫を"ぜびらかす"（口うるさく言い立てて心理的に追いつめる）妻が登場する。先の「うつぼざる」同様、最も古い狂言台本で、室町ことばを豊かに伝える『大蔵虎明本狂言』にそって、紹介しよう。山内一豊もその妻千代も、このようなことばを日常耳にし、下積み時代には、使っていたのであるから、当時の言語体験としても是非おつきあい願いたい。

妻が、夫を、「うち殺さう」と叫びつつ、夫を追いかけて舞台に登場。大変ぶっそうな現場である。夫婦げんかは、離婚に結びつくことが多いから、仲人をしたうちの亭主の方が、仲裁人として、まあまあまあと、中に入る。家庭裁判所の調停員のように、当時の仲裁人も、双方の意見を聞く所から始まる。

「そうじてあの男は、三界を家として、屋根の漏りをもとめず、私一人して今まで所帯いたひたれども、もはやさやうに罷ならぬ程に、あの男を生けておいてもいらぬ、打殺いて、私もくびをくくらふと思ふての事で御ざる」

妻の言い分である。夫が外ばっかりほっつき歩いて、家に金を入れるどころか、雨漏りさえなおしてくれないから、もう生活していけなくなった、ここで心中しようと言うのである。

それに対して、夫は、

「一向さやうで御ざらぬ。あれが所帯をいたさぬ」

と、まっこうから対立する。「所帯」は、現代では「所帯を持つ」などとしか使われないが、中世では、より意味が広く、「独立して生計を営む」「一家をきりもりする」「家族が生きていけるようやりくり上手にする」などの意味をもっていた。

妻が嘘を言っているのか、夫が嘘か。夫はさらに状況証拠を出してくる。ただし、妻の前ではびびって口ごもるから、謡節で言いわけを始める。ここが狂言らしいところ。

〽わ上郎の能には、朝寝・昼寝・夕惑、たまたま起きて物呪ひ、苧績みだてはすれども、筒麻や綜麻や苧桛を、酒手の質にとりやり、織る事さらになければ、着る事まして候はず、一年に一度立つ、大御堂の市場にて、布一尺も売らひで、さのみ人の聞くに物な言そ、わ女。



機を織る女。布を織るのも売り歩くのも、主に女性の仕事であった。布は主に麻で織った（『群書類従』正28所収「七十一番歌合」より。P.133の図も）。

最後の「わ女」は、妻をののしることば。冒頭の「わ上郎」も、「じょうろう」そのものは「上臈」に通じ"貴婦人"の意であるが、「わ」がつくと、あげてさげた皮肉たっぷりの、けんかことばとなる。

夫の述べ立てる妻の「能」（出来ること）とは、

①朝寝すること・昼寝すること・夕方から眠そうにうつらうつらすること。

②たまたま起きているなと思うと、家事や仕事をするにあたって、今日は日が悪くってこれはできないだの、この針はあたりが悪くって縫いにくいだの、自分のことは棚にあげて、道具に当たってぶつぶつ文句を言っている。（なお、『日本国語大辞典』第二版の「もののろい」の説明は誤りである）

③おれが育て刈りとった麻から、麻糸をつむぐことはつむぐのだが、やっと巻きとった筒麻・綜麻（これらは麻糸の巻き方による区別）や苧桛（桛わくにかけた麻糸）を、日頃こっそり飲んでいる酒の代金がわりに酒屋に渡すので、結局、麻布を織ることができない。

④麻布を織れないのだから、麻布で作った着物さえ、自分も家族も着ることができない。

⑤だから、河内の国（今の大阪府東部）の大御堂の市場——一年に一度の日本一の布市——で、布一尺も売ることができない。

となり、妻が外はおろか、内でも働くことのできない"能無し"であることを、訴えている。「そんなことは御近所の人も知っていることだ、聞かれたらお前自身の恥だろ。つべこべ、もう言うな」と、夫は決めつけている。

残念ながら、狂言「どもり」の奥さんには、このような傾向があったという設定になっている。しかし、これによって、私たちは、当時の里人の**理想的な妻像**を描くことができる。



織った布の尺（長さ）を計っている様子である。自家消費したもの以外は、市場に売りに行き銭に替えた。

一、早起きをして、常に身軽に動き、家事や機織りに精を出す。

二、織った布で、家族の衣類をまかない、春夏秋冬過ごしやすくする。

三、沢山織った布の余りは、布市場に出し、最上品と見定めてもらい、多くの銭を得て、家計を豊かにする。

四、酒は依存症になるほど飲まない。

さて、夫婦げんかに戻ると、嫁入りの際の支度金を返せという話題になる。

妻の言い分。

「私が嫁め入りをした時、十二単衣を着てまいりたるを、あの男が酒手の質にしはてて御ざる。それを返せ」「十二の手具足をおこせい」

夫の言い分。

十二単衣なんて、まっ赤な虚。たしかに十二単衣にありそうな高級織物の切れはしを十二種類ほど取り集めて小袖に作ってはいても、中途半端な安物で、しかも一枚の着たきり雀。冬は、裏綿がついていなくて、寒そうだったよな。

初々しい娘心で嫁いだ日のことを、あしざまに言われて、妻は、つい、棒で夫をたたこうとする。「十二の手具足」の方も同じ。「十二の手箱」とも言われ、女の生命である化粧品や化粧道具を入れるもの（詳細は、小著『室町を歩いた女たち』小学館を参照）。それさえ、十二色の小ぎれを集め縫った風呂敷包みに、安物の畳紙に白粉を少々、伊勢茶碗の欠けたものに紅を少々、さびた鏡だけを入れこんだと夫は言う。しかも、霜月師走（十一月末）に、畦道を一人、ぼろ小袖を寒そうにして、風に吹き飛ばされそうにして来たじゃないかと。

普通の嫁入りは、吉日の宵に、しかるべき女性に手を取られて、行列として、品々をもとりそろえて、夫の家にやって来る。それをこのように言われて、妻は、夫をつき倒す。

しかし、最後は、夫には添いたくないけれど「かな法師（わが息子）がかわゆふござる」と妻は告白して、泣きながら幕に消える。

昔も今も**"子はかすがい"**というところで、このエッセイをおひらきにしよう。

（せんそうこ・作家、東海大学文学部教授）

『おあむ物語』を読む

戦とは人の生死に直面する現場である。敵兵の首に囲まれて眠り、目の前で弟を失い、妹の誕生を見た戦国の少女は何を語り残したのか。

文=菊池真一
Kikuchi Shin'ichi

戦国女性が当時を語った『おあむ物語』とは

『おあむ物語』は、おあん*自身が書いたものではない。老後、土佐で「おあんさま」と呼ばれた女性の昔話を、八〜九歳の頃聞いていた者が、半世紀ほど後、老境に入ってから筆録したものである。ただし、おあんが語った口調が生かされているので、今から四〇〇年ほど前の武家女性の口語の実態をある程度うかがえるものとして、貴重な資料である。

語り手おあんは、石田三成に仕えた山田去暦の娘。「おあんさま」とは、「安」という名前の敬称なのか、老尼を意味する「御庵様」という尊称なのか、判然としない。版本の刊行者・朝川善庵は、跋文において、老尼の尊称であるとしている。

おあんは、十七歳の頃、関ヶ原合戦後の大垣城を脱出、父去暦に従って土佐に赴き、雨森氏と結婚、後死別して、甥の山田喜助清次（隠居名蛹也）に養われ、寛文年中（一六六一〜七三）に八十余歳で没した。

筆録者は、山田喜助清次の子供の一人であろうか。『おあむ物語』が記録されたのは、正徳（一七一一〜一六）から享保（一七一六〜三六）の初めの頃と考えられる。

『おあむ物語』は、関ヶ原合戦終了直後の大垣城籠城の時のこと、大垣城脱出の様子、及び幼少時・彦根時代の貧窮生活の話から成っている。

大垣城で体験した城攻め・死に化粧―第一図

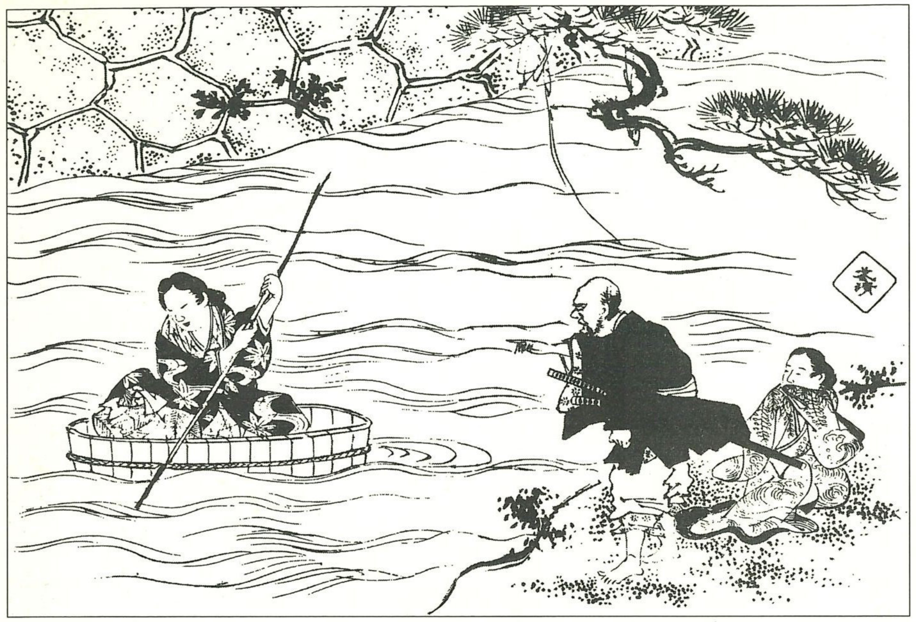
「おあん」の父親、山田去暦は、石田三成に仕えて彦根に住んでいた。慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原の戦の時には、大垣城にいた。関ヶ原で三成が敗れた後も、大垣城は西軍（石田三成方）の拠点として、七日の間籠城していた。



『おあむ物語』挿絵・第一図。大垣城内で敵兵の首に死に化粧する女性たち。右手前にお歯黒用の角盥（つのだらい）、左手前には女たちが弾丸鋳造を受け持った鉄砲が見える。

*おあん＝作品名は歴史的仮名遣いによるが、本文中の人名は現代仮名遣いを用いる。

大垣城攻めにおける石火矢（大砲）の攻撃は、雷のような轟音で、気の弱い婦人たちは失神したという。ある時などは、おあんの弟が、天守閣まで飛んできた鉄砲玉に当たり、おあんの目の前で死んでしまった。十四歳であった。



挿絵・第二図。盥（たらい）に乗って大垣城の堀を渡るおあんの母と指示する父、見守るおあん。

城中の女性たちは、天守閣で軍事労働に従事した。鉄砲玉の鋳造をしたり、敵方の兵士の首にお歯黒をつけたりした。第一図は死に化粧の場面である。戦国時代は、武功の証として、敵兵の首を切り取って持ち帰ることがおこなわれたが、雑兵よりも身分の高い武者の首の方が手柄は大きい。そのため、敵兵の死に首の白歯にお歯黒を塗って、身分の高い武者であるかのように見せかけたのである。

第一図は、手前に三人の女性と首三つ、遠方にたくさんの首が架けられている様が描かれている。敵兵の首には名札のようなものが付けられている。三人の女性のうち、一人はお歯黒付けの仕事をしているようであるが、他の二人は何もせずにただすわっているだけのようである。首を前にしてこわがっているのであろうか、それとも途方にくれているのであろうか。しかし、何事も慣れである。「慣れてしまえば、首もこわいものではない」とおあんは言っている。おあんたちは、死に首の血生臭い中に寝起きをしたという。

第一図右奥の女性の髪型は「兵庫髷」である。これは江戸時代の寛文年間にはやったものであり、時代が違う。この挿絵が描かれたのは、関ヶ原合戦（一六〇〇年）から二〇〇年以上も経った天保年間（一八三〇〜四三）のことであるから、時代考証が十分に行われなかったのである。第一図右手前の女性の髪型は「島田髷」である。これもやや不適切で、左端の女性のように「垂髪」とすべきである。当時の城中の女性はおおむね垂髪であったと考えられる。「島田髷」は江戸時代の庶民の風俗である。

九死に一生を得て大垣城を脱出―第二図

落城間近のある日、おあんの父親の所へ矢文が飛んできた。その内容は、「山田去暦は、家康公の手習いの師匠をしていたことがあるので、特別に城を脱出させてやる。見逃してやる」というものであった。父は天守閣にいた母親とおあんをこっそりと呼び出し、家来一人を連れ、北の塀に縄ばしごをかけて石垣を下り、盥に乗ってお堀を渡ったのであった。他の人々に気づかれないよう、細心の注意を払ったことであろう。

第二図には家来が描かれていないが、父親とおあんが先にお堀を渡り、母親が後から一人で盥を操ってお堀を渡ろうとしている所が描かれている。おあんは座り込んでいる。父親は指さしをしながら母親に何やら指示しているようである。

大垣市では、この『おあむ物語』の記述を基に、平成十五年度から「たらい舟川下り」が行われている。

慌しい脱出行の途次、母が産気づく―第三図

大垣城を脱出して、五〜六町ほど（五〜六〇〇メートル程度）北へ行った頃、母親が産気づき、おあんの妹を出産した。家来は、田んぼの水で産湯をつかわせ、着物の端にくるんで赤子を抱いた。父親は母を背負って行った。大垣城脱出はたいへん恐ろしいものであったと、おあんは回想している。妹が生まれたことについての感想などは記されていない。

第三図は、一番左が赤子を抱く家来、中央が父親の大刀を持ったおあん、一番右が母親を背負った父親である。家来が大小

P134〜136の挿絵は3点とも甲南女子大学図書館蔵。

【第5章】一豊・千代アラカルト





山内一豊・見性院肖像画（土佐山内家宝物資料館蔵）



挿絵・第三図。母の産後をいたわる間もなく、野中の道を落ち行くおあん一行。

二本差しなのはおかしいと思われる。家来が草履を履いてるのに、父親が裸足なのもおかしい。おあんの髪型が「島田髷」なのもおかしい。父親に背負われた母は、饅頭笠のような笠をかぶっている。これは「市女笠」にした方がよかったのではなかろうか。

第一図・第二図・第三図とも、あくまでも想像図に過ぎず、一六〇〇年頃の風俗を正確に描写したものとは考えられない。

彦根時代のおあん 食事と衣服、老いの繰り言

彦根では、おあんの父親は、三〇〇石の知行取りで相当の身分であったが、おあんの言によれば、子供の頃は軍が多く、何事につけて不自由なことが多かった。現在のように一日三食になったのは江戸時代のことで、戦国時代は朝夕二食が普通であったが、その食事もほとんどが雑炊であった。おあんの兄が山へ鉄砲撃ちに行く時だけは、菜飯を焚いて弁当に持たせた。その時にはおあんたちも菜飯の御相伴にあずかれたので、兄には狩りに行くように勧め、兄が鉄砲撃ちに行く時には、嬉しくて仕方なかった。

昼食を食べるという習慣はなく、夜が更けてから夜食を食べるなどということもなかつた。

おあんの子供の頃は、衣類にも不自由した。十三歳の時、手作りの花染の帷子を一枚作ってもらったが、着たきり雀であった。そのただ一枚の帷子を十三歳から十七歳まで着ていたのである。大きくなってからは脛が出てみっともなく、恥ずかしい思いをした。せめて、脛の隠れるくらいの帷子が欲しいと思ったことであった。

おあんは老年に至って、「今時の若い者は、衣類の物好きに贅沢をし、金をたくさん使う。また、食事にも色々と選り好みをする。これらはとんでもないことである。私の子供時代（彦根時代）のことを考えてもみなさい」と孫たちに説教するので、しまいには、「彦根ばば」というあだ名をつけられた。

江戸末期に出版された『おあむ物語』『おきく物語』

江戸時代から見ても戦国時代の生活は厳しく、三〇〇石取りの武家でもその生活は質素なものであった。戦乱に明け暮れ、検約家・三成の家中だったのだから、なおさらのことと言えよう。

『おあむ物語』は、『おきく物語』と共に、儒者・朝川善庵によって天保八年（一八三七）に出版された。朝川善庵は出版にあたり、版下の文字を書家・巻菱湖に依頼し、『おあむ物語』の挿絵は喜多武清に、『おきく物語』の挿絵は渡辺崋山に描かせている。どちらも当時一流の画家であったが、残念ながら時代考証が十分できていないようである。

『おきく物語』は、元和元年（一六一五）大坂夏の陣において大坂城が落城する直前に城を脱出したおきくという女性の話を実録風に綴ったものである。おきくは幼少より茶々（淀殿）に仕え、大坂落城時二十歳、後、松の丸殿に仕え、やがて田中意徳の祖父に嫁し、延宝六年八十三歳で没した。『おあむ物語』のおあんより十二歳ほど年下である。

『おきく物語』の記述は江戸時代に入ってからのものであるが、戦乱時の生々しい状況が描かれている。ここでも衣服や食料に執着する女性の姿を見てとることができる。

（きくちしんいち・甲南女子大学教授）

「内助の功」伝説の正体

一豊の妻はいかにして「賢婦の鑑」となったか

山内一豊の名を記憶に刻むものとして、「一豊の妻」の存在は欠かせない。それらは小説やドラマで例外なく描かれ、「内助の功」として知れわたっている。その逸話がどのようにして生まれ、伝わり、利用されたかを検証してみよう。

文=鍋本由徳
Nabemoto Yoshinori

「名馬購入」と「笠の緒の文」

山内一豊の妻の逸話は、黒髪の話、俎板の話などがあるが、何といっても「名馬購入」と「笠の緒の文」が有名である。

まず「名馬購入」は、織田信長が天正九年(一五八一)に京都で馬揃えをしたときの話とされる。『御湯殿上日記』二月二十八日条に「京都御所東門外にて信長の馬揃えがあり、正親町天皇が閲覧した」とある。また、『信長公記』の「八月朔日、五畿内隣国の衆、安土にあり候て、御前揃え」との記述から、同年八月一日にも安土で行われたことがわかる。

この逸話の概略は次のようなものである。

安土に名馬を売る者が来た。一豊はその馬を気に入ったが、高価過ぎて買えなかった。妻にその話をすると、

「これは家の一大事の時に使いなさい、と山内家に来る前、父が渡してくれたものです。馬揃えは天下の見物ですから、あなたさまには、ぜひ良馬に乗ってもらいたいのです」

と妻は言い、鏡箱の底から十両を取り出した。その金で馬を買うことができた一豊は、馬揃えで信長の目にとまり、以後、出世していった。



妻の黄金10両で東国一の駿馬を買った山内一豊(小林清親画「山内一豊」/早稲田大学演劇博物館蔵)。

この話の一次史料はない。掲載史料には、新井白石『藩翰譜』(元禄十五年・一七〇二)、室鳩巣『可観小説』(十八世紀半ば頃)、幕府編纂『藩鑑』(嘉永六年・一八五三)、岡谷繁実『名将言行録』(明治二年・一八六九)などがあり、それぞれ細部で微妙に違うが、『藩翰譜』が最も有名である。

次に「笠の緒の文」であるが、これは関ヶ原合戦直前、徳川家康が上杉景勝討伐のために会津へ出陣した時の話である。

慶長五年(一六〇〇)、石田三成らは諸将妻子の人質をとることを計画したが、不首尾に終わった。

一方、家康率いる上杉討伐軍は会津方面におり、その中に一豊もいた。三成らの挙兵を聞いた家康は、今後の動向を討議した。いわゆる「小山評定」である。

一豊の妻は、石田方の動向を記した書状と、奉行衆による石田方への勧誘状の二通を文箱に入れ、別途、密書を編笠の緒に仕立て、家臣・田



「内助の功」伝説は、新井白石(右肖像/新井太氏蔵)の『藩翰譜』によって有名になった。同書は白石が多くの文献から編集した大名家の系譜・伝記で、第六代将軍・徳川家宣への進講に使われた。

中孫作にそれらを預け、一豊のもとへ向かわせた。一豊は密書を読み、焼却後、未開封の文箱を家康へ提出した。家康が一豊宛ての妻の書状を見ると、次のようにあった。

「家康様への忠節を心がけてください。大坂にいる私のことを気にかけ、心を痛めないでください。もしもの時には、けっして石田方の手にかかることはしませんから」

家康は感動し、その手紙を一豊に渡して、

「お前の妻は女性ながら、大変奇特である」

と、危険極まりない大坂で思い切った行動をとった妻の行動を賞讃した。

以上は、『異本落穂集』の概略であるが、「名馬購入」の話と大きく異なる性格をもつ。それは、幕府編纂の家譜類、『寛永諸家系図伝』(寛永二十年・一六四三)、『貞享書上』(貞享元年・一六八四、のち『譜牒餘録』)、『寛政重修諸家譜』(文化九年・一八一二)に採り上げられたことである。

一豊と妻にまつわる話が、幕府・大名家にとり、いかなる意味をもち、伝えられたか。「笠の緒の文」を中心に検討してみよう。

逸話の利用とその伝播

「笠の緒の文」が掲載された幕府編纂家譜は、大名家の書上をもとにしている。それは徳川家と大名家の御恩と奉公に重点を置く。とくに家康の天下統一過程での武功が詳細で、そのなかでこの逸話が使われた。

そこで、江戸初期に作られた『寛永諸家系図伝』の内容を紹介しよう。

「大坂の奉行衆が、密かに一豊に宛てて手紙を送った。そこには妻の手紙が添えられていた。一豊は怒り、封を開けることなく、大坂方の書状を家康に提出した。家康は一豊の行為を褒め讃えた」

ここでは、石田方が一豊の妻の手紙を添えて自軍への勧誘状を送り、その行為に一豊が怒った、との筋書である。一豊の「妻の賢明さ」は現れない。一豊の妻の手紙は、一豊の家康への忠義を示す素材として利用されたのである。

江戸時代の大名家譜では、三成の逆臣ぶりを強調する傾向が強い。家康への忠誠ぶりの裏返しといえよう。山内家では、大坂方の「卑劣さ」を強調する好材料となったのである。

次に、江戸中期の『貞享書上』では、「妻が、大坂方の廻文と自分の手紙を添えて一豊へ送った」とある。十七世紀半ば、一豊の曾孫・豊昌の時には、一豊の妻の賢明さを載せた話が幕府に提出されたのである。しかし、『貞享書上』の写本といえる『譜牒餘録』を利用したとされる『寛政重修諸家譜』では、『寛永諸家系図伝』の内容が踏襲された。

幕府は何を意図したのか。『寛政重修諸家譜』は、武家としての自己認識と、徳川家への忠節を、武家に再確認させることを目的とした。よって『寛永諸家系図伝』と編纂目的は同じで、筋書の大幅な変更がないことは、けっして不思議なことではない。

続いて十九世紀半ば、幕府の正史『徳川実紀』(天保十四年・一八四三)の山内一豊卒伝に、妻の活躍が記される。その編纂過程で『寛政重修諸家譜』を参照しつつも、実際は「妻の賢明さ」を採用したのである。

さらに、幕末の『藩鑑』では『異本落穂集』が引用され、現在知られる話が伝わる。『藩鑑』は大名の善行や武勲を主として収録し、虚説も採録された点、逸話の時期が徳川創業〜寛保期である点で、やや特殊な官



夫への密書を編笠の緒に仕立て、使者の田中孫作(定重)に託す一豊の妻(新屋敷幸繁著『一豊とその妻』より/高知県立図書館蔵)。

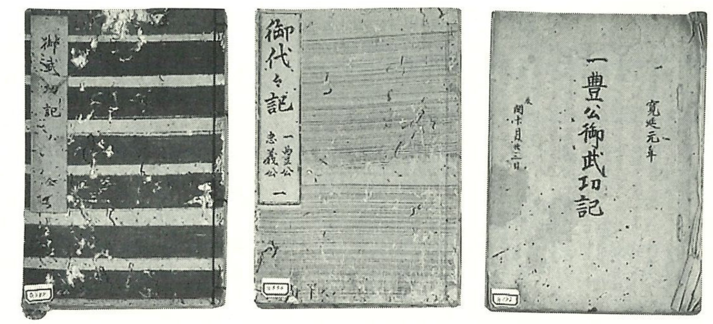
撰物である。幕末になると、妻の活躍で一豊・家康を助けたことが広がっていくのである。

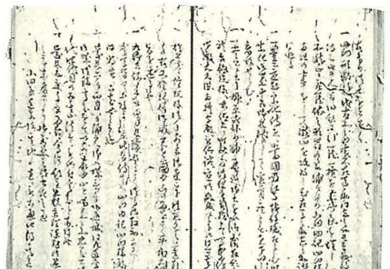
山内家における美談の意味

では、山内家ではどうだろうか。『山内家史料』は明治四十四年(一九一一)から太平洋戦争期にかけて編集されたが、すでに徳川家に気を遣う必要はない。また、編者は歴史学者で、形式も国家事業の『大日本史料』を模すなど、関連史料を普く掲載したことに意義がある。よって話が逆転した史料が併記されても、何ら問題はない。

『山内家史料　一豊公紀』には、『御家伝并御武功記』『御家中名誉』『寛永諸家系図伝』などが引用され、このうちの『御家中名誉』は家臣の先祖由緒書である。一豊の妻に関わる話として、大坂からの使者・田中孫作(定重)と家康への使者・山内(野野村)迅政の名が挙げられ、両者とも、いかに苦労して文箱を届けたかが書かれている。

田中定重の場合、途中で追い剝ぎに襲われても、文箱だけは死守したことが強調される。一方、野々村迅政は、一豊の命によって家康へ文箱を持参したところに力点が置かれる。





江戸時代に記された一豊に関する伝記。(上段左から)『御武功記』『御代々記』『一豊公御武功記』、下段は『御納戸記』(土佐山内家宝物資料館蔵)。

つまり、両家ともに、山内家への忠節を示すために、関ヶ原合戦の逸話を伝えたのである。由緒書には、ほぼ例外なく脚色が加えられる。しかし、そうすることで、先祖の活躍に光を与え、自家をアピールできたのである。

これらから、次のようなことがいえる。

①「笠の緒の文」には二つのポイントがある。一つめは、一豊の妻が大坂方の動向を一豊・家康へ伝えたという政治的な要素であり、二つめは、密書を笠の緒にしたという逸話の要素である。

②「幕府―山内」間では、一豊の家康への忠節と石田方の悪意を強調するために、山内家が「妻の手紙」を利用した。ここでは二つめの要素は無関係である。

③「山内―家臣」間では、家臣の山内家への忠節を強調した。家臣にとっては二つの要素が関係している。

以上のことから、武家では、伝える立場により、逸話に複数の意義が生まれ、複線的に流布・利用されたといえよう。しかも、幕府史料では、一豊の妻の活躍は表に出ず、時間の経過とともに話が広まる。領主レベルでは「笠の緒の文」、すなわち密書そのものは、さほど重要ではなかったのである。

しかし、巷間では、幕府や大名家の意図とは別のレベル、たとえば『異本落穂集』などの随筆類に逸話が記され、加えて口伝えによって流布していった。その過程の中で、「笠の緒の文」のような、一豊を支えた妻の賢明さや強さを示す話が強調されたのである。

ところで、一部の幕府関係者の記録にあるとはいえ、「名馬購入」が「笠の緒の文」ほど政治的に利用されないのはなぜか。これは武家にとって何が重要か、ということに解答が求められよう。山内家にとり重要な点は、徳川家への忠節である。「名馬購入」の話は、夫婦間の美談を伝えるものであっても、徳川家への忠節とは関係がないのである。

江戸初期から中期に書かれた史料の性格から、武家社会では「笠の緒の文」、巷間では「名馬購入」の話を中心に逸話が広まり、それが江戸後期から幕末にかけて融合し、近代を迎えるのではなかろうか。

「内助」のモデルとして

「内助」は、明治時代以後の用語である。「家庭内で妻が夫を支える」との意味をもつ「内助」は、近代における「家」のあり方と連動している。

近代日本での女性像は「性別役割分業」として現れ、戦前の女子教育では「良妻賢母」を教育された。文明開化期に男女の人格平等が説かれたが、この考え方は時期とともに変わり、明治十年代から二十年代にかけて、江戸時代的な女性の養成が求められていった。

たとえば、「教学聖旨」(明治十二年・一八七九)によって「仁義忠孝」の精神を育成する、いわゆる「徳育」を教育の基本とし、「忠臣・義士・孝子・節婦」の画像などで理解させようという方針がたてられた。公教育に対して政府が直接介入する方針である。



馬を買うよう黄金十両を差し出す一豊の妻(大正三年九月発行『尋常小學讀本　巻七』より)。『尋常小學讀本　巻七』(明治四十三年)を再掲載したもので、同様の話は『尋常小學修身書　巻之四』(明治二十五年)や『小學修身訓　巻之下』(明治二十六年)に、それぞれ「女訓」「夫婦のつとめ」という徳目のもとに取り上げられている(個人蔵)。

続いて元田永孚が編集した『幼学綱要』(明治十五年)、さらに「教育勅語」(同二十三年)、「民法　親族・相続編」(同三十一年)の中で、女性像は変化していった。

明治民法では、人は「家」に所属し、構成員は戸主に従うことが定められた。そして、夫権を認め、妻を無能力者とし、財産関係も夫の優位性を打ち出し、原則として男子が「家」において優位に立った。まさに、妻は夫を支える立場、すなわち「良妻賢母」型の女性が国家政策のなかで求められたのである。

一豊の妻は夫を助ける姿が強く印象づけられているが、見方を変えれば、戦国時代に生きた女性は、いざとなれば男性に代わって政務運営をするだけの力量をもち、家を守るためには死をも辞さない存在であった。

たとえば、今川氏輝・義元の母である寿桂尼は、氏輝の後見人であった。血縁ではないが、江戸幕府創設後も政治的に影響力をもった家康の側室・阿茶局、夫婦でいえば、細川忠興の室・ガラシアが関ヶ原合戦前の石田三成らによる人質作戦を拒絶して死去する話、故前田利家の妻・芳春院が前田家を死守するために人質として江戸へ赴く話など、挙げれば数多く出てくる。一豊の妻も、そのような時代の中に生きていた。

しかし、一豊の妻の姿は、男性を内から支える「内助」のモデルとして捉え直された。その背景の一つとして、『山内一豊夫人若宮氏伝』(明治二十五年)を著した土佐出身の文学博士・細川潤次郎の存在がある。貴族院議員、枢密院議長として明治天皇の詔勅起草に携わり、また女子高等師範学校長・華族女学校校長・学習院長心得などを歴任したように、女子教育にも深く関わった。

その著書や経歴から、細川が近代の女子教育に少なからず影響力を与えたことは、後年、小学教育のなかで、『尋常小學讀本』(大正年間)の挿絵に一豊の妻が描かれたことからも想像に難くない。

その後、『節婦の鑑　山内一豊夫人傳記』(著者・刊行年不明)、武田まつ『山内一豊公夫人』(昭和十二年・一九三七)、新屋敷幸繁『一豊とその妻』(同十八年)など、一豊の妻を題材とした書籍が次々と刊行され、国民はそれを読んで当時の女性の理想像を知り、女性は「良妻賢母」をめざしたのである。



立身出世を夢見て学問に励む夫の傍らで、枡の底を俎板代わりにして食材を刻む一豊の妻(『節婦の鑑　山内一豊夫人傳記』より／高知県立図書館蔵)。

「内助」としての一豊の妻のイメージは、近代の国家政策のなかで生み出され、ある時には道徳教育の一環として、またある時には文芸・絵画などによって国民の間に浸透していった。その姿が、夫婦間の美談として、語り継がれているのである。

戦後は、道徳の上で一豊の妻は扱われず、社会の流れは「女性の自立」となっていった。そして司馬遼太郎『功名が辻』で一豊の妻の「人間としての魅力」が描かれ、一豊と妻との二人三脚の生き方を示すものとして、逸話の新たなイメージが生まれたといえよう。

(なべもとよしのり・日本大学非常勤講師)

江戸期における山内家の土佐支配

開発の功労者から蔑みの対象へ 幕末に噴出した郷士の抵抗心

一豊時代の土佐郷士による抵抗運動は、藩政の安定とともに次第に止んでいった。だが、時に開拓の先鋒として利用され、時に「下士」として差別の対象となった彼らは山内支配に対する反抗心を脈々と受け継いでいた。そして、幕末を迎える——。

文＝広谷喜十郎
Hirotani Kijûrô

山内政権の基盤づくり

山内一豊は、慶長六年（一六〇一）に遠州掛川から土佐へ入国すると、すぐに高知城の築城や城下町づくりを始め、政権の基礎を固めるための諸政策を実施した。

そのなかでも旧政権の長宗我部氏を支えていた一領具足たちの扱いに最も苦慮したようである。

江戸幕府の強大な権力を背景にした武断政策で一応押さえ込んでいるものの、入国直前の浦戸一揆や慶長八年（一六〇三）の滝山一揆にみられるように、その抵抗には根強いものがあった。

一領具足のなかには、

〈二君不仕之意地かして、其侭山谷にて春は葛を掘り夏は蕨を掘り、野地を開き粟を作り、今日の暮方には葛布太布を着し、刀はさび候へば、自らとぎ、柄は藤かづらにて巻き、譬へ葛蕨を掘り候ても刀は帯び候〉（『郷士関係書類』）

とあるように、「二君にまみえず」との武士の意地から、奥山にこもって野武士となり、山野を開拓して自給自足の生活をしていたのである。

それに対して、山内政権はさらに、城下町建設にともない中心部に家臣団を集住させ、その周辺に、兵商分離を意味する商人町・職人町をつくり、高知城を中心とした半径五里以内にあった中世的な市町を七か所も城下へ吸収して、兵農及び兵商分離を徹底的に行なう。蔵入地を多く設定して、領主経済の基礎づくりを行なっている。

全藩的には、一豊の死後の慶長十七年（一六一二）に、七五か条にわたる長い「定法度条々」を布告して、一領具足の処遇を含め、農村の動揺を押さえるための詳細な扱いを指示している。

だが、山内政権は築城と城下町づくりのための経費や、江戸幕府からの相次ぐ課役負担や大量の材木献上に経費がかかり、上方商人から莫大な借金をせざるを得なかった。

元和七年（一六二一）に至り、

〈土佐の守殿借銀今の分にては御身上相果ツべく候〉（『藩志内編』）

といわれるほど、藩財政の窮乏化は極に達した。

そこで、家老の野中直継（玄蕃）らが中心となり、元和改革が実施された。この折、

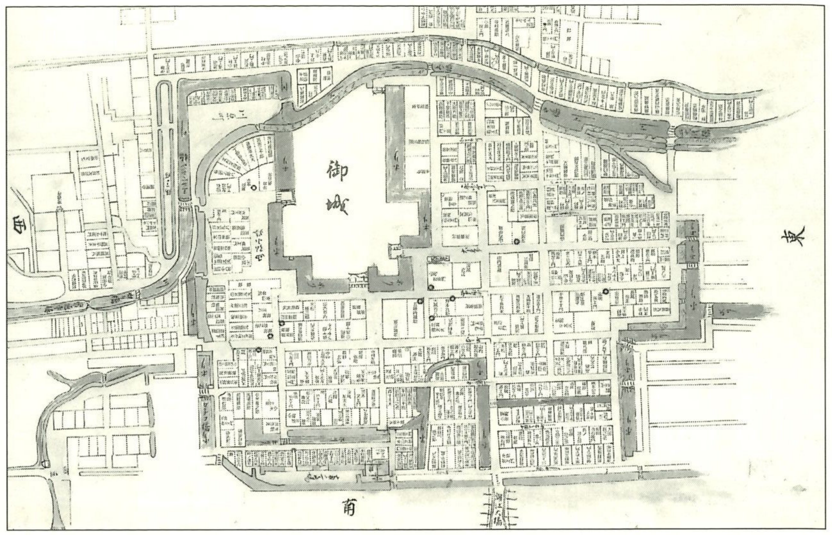
〈野中玄蕃ヲ奉テ鉄砲の者百人ヲ抱へ（略）白髪山ノ材木ヲシナシメ大坂ニ於テ売払ヒ御借銀ノ方へ悉ク償ノハセ三年ノ内ニ御余金ヲ御銀蔵ニ納ム〉（『藩志内編』）

とあるように、足軽を材木の伐り出しに利用して大きな効果をあげている。だが、足軽集団は、家臣団の住む郭中での居住は認められず、商人町のなかに鉄砲町を設けて居住させられている。

野中兼山の藩政改革

次に、野中直継らの元和改革の路線を受け継いで、全藩的な規模で強力な政治的・経済的諸政策を約三〇年間にわたり実施したのが、直継の養子の野中兼山であった。

まず、新田開発を効果的におこなうために、長宗我部氏の旧家臣である一領具足のなかで、新田三町以上を開拓した者を郷士職に取立てるなどの改革を組織的におこなったので著しい待遇改善があった。



高知御家中等麁図（安芸市立歴史民俗資料館蔵）。高知城の城下を描いた地図で、原図は享和元年（1801）のものである。この図の範囲内は、いわゆる「郭中」で上士の屋敷が建ち並んでおり、下士はこの外側に住んでいた。

この折、当初に登用された郷士を百人衆郷士と呼び、その後認められた者を百人衆並郷士と呼んでいる。その総数は、約一〇〇〇人と増加している。

従前に開発された土地の約二万四〇〇〇町歩を本田と呼び、寛永十一年（一六三四）から延宝六年（一六七八）までの約四〇年間に開発された新田が七万五〇三〇町歩であるから、如何に効果的に行なわれたか、容易に理解できるであろう。

その新田開発を大々的に行なうためには、大がかりな河川工事が必要とされる。それの財源確保も含めた、藩財政の主な収入源を土佐に豊富な林産資源に求めた。留山制、輪伐制などのきびしい林業統制を実施し、さらに、これら林産物を円滑に上方市場へ輸送するために港の開発や整備が緊急事となり、いくつかの港の開発が行なわれた。

また、漆・茶・紙・油草などの商品作物の耕作を督励して殖産興業政策を打ち出している。

これら、諸政策を効果的に進めるために、有能な郷士を諸役人に取立て各地に派遣していることを見逃すことはできない。郷士制度の創設は、政情不安の解消と地域開発に大きく貢献したといえる。

兼山は郷士組を組織し、万治元年（一六五八）以後の城下・郭中での馭*初式への参加を認めたりした。

しかし、このような動きは、保守的な重臣たちからの疑念と反感を招来し、兼山失脚の一大原因となった。郷士は、常は農村に住み、郭中へ入ることは認められていなかったので、華々しく催される武家の行事に参加させることに大きな抵抗があったのである。

また、兼山のあまりにも急速で厳しい政治改革に、領民の間からも苦しみの声があがり、奉行職を追放され、寛文三年（一六六三）十二月十五日、幽閉地で急死した。

兼山失脚後は、郷士の取立てが無くなり、従前の郷士は家老の配下ごとの別組織におかれ、統制されてしまった。以後、政治的には冬眠状態にはいってしまう。郷士は上士に対する抵抗心を深く潜行させつつ、これを強く育て続けていった。

野中兼山

土佐の礎を築いた〝悲劇の宰相〟



元和元年（1615）～寛文3年（1663）

山内良明の長男で、一族の野中直継の養嗣子となる。土佐山内家2代目藩主忠義に奉行・家老として仕え、27年間にわたって藩の実権を握った。儒学者としても知られ、谷時中からいわゆる土佐南学（海南学派）の教えを受けている。その政治手法も儒学の理想を政治に反映し実現しようとするものであった。しかし、その改革にかける情熱や、自身のみならず他者に対しても厳しい姿勢から多くの政敵をつくり、また庶民にも重い年貢・賦役を課したため反感が高まり、後にその職を免ぜられた（提供＝泉秀樹事務所）。

＊馭初式＝藩主・山内氏が高知城下で毎年正月に行う家臣団の閲兵式

郷士の抵抗事件

江戸時代中期から後期にかけて、農村の構造変化にともない、多くの初期郷士の没落が進んだ。郷士株の売買が認められるようになるが、譲受郷士は農民出身に限られていた。特例として宝暦十三年（一七六三）に幡多郷士が、文政五年（一八二二）に仁井田郷士、窪川郷士が、地域の開発や上納銀を納めることを条件に商人も郷士となることが認められて、少人数の郷士が誕生して城下町に居住できるようになった。

例えば、高知城下本丁筋に住む才谷屋も、明和七年（一七七〇）の財産分けの記録によると、長男の兼助が郷士を相続している。その子孫に坂本龍馬がいる。

坂本家は、家老・福岡家の*御預り郷士で、上級武士の居住する郭中に住むことは認められず、足軽などと共に下級武士に位置づけられて差別的な扱いを受けていた。

明和九年（一七七二）に、十二か条にわたる『郷士及御用人類已下御制服之事』の中に、〈帯、木綿可用事〉、〈絹紬之類一切不相成事〉、〈*差木履踏候儀一切停止之事〉など、郷士の衣服や履物を規制する法令を出している。その上、夏季であっても、郭中内では日笠の使用が禁止されていた。

他にも、一般庶民と同じような扱いで、上級武士ときびしい差別が為されていた記録が散見される。

このような差別に対して、やがて郷士たちは不満をつのらせ、抵抗する動きがみられるようになった。

寛政九年（一七九七）二月六日の夜のこと、長岡郡廿枝村に住む郷士・高村退吾が、高知城下の上士（馬廻）である井上左馬之進宅で斬殺される事件が起きた。

『高知県歴史事典』によれば、高村家は長宗我部氏家臣の一領具足の流れをくむ家柄で、元禄十六年（一七〇三）に郷士株を取得して郷士となる。退吾は文武を好み、気鋭の士であったと言う。

左馬之進が自宅で数人の知人と宴席を設けていて、退吾も同席していた。雑談しているうちに、左馬之進の佩刀について、退吾がケチをつけたとし、左馬之進が大いに怒り、すぐさま退吾を斬殺してしまった。

この事件について、藩庁は左馬之進を戒告の軽い処分にした。殺された退吾の方には、上士に無礼な態度をとった行為が許せないとして、高村家を断絶するという重い処分を行なった。

この「斬り捨て御免」という一方的な処置に、郷士たちの間から不平不満の声があがり始めた。その動きを察知した藩庁は、事態を放置できなくなった。井上左馬之進を馬廻の格式から小姓組に降格させ、知行二二〇石から五人扶持切符五〇石の処分とした。郷士たちは、それにも満足せずに、郷士一同の名による上書を六月に提出する。「禽獣にも劣り候　御扱之様に被相心得一同述惑至極　口惜し次第」と述べ、公平な扱いをして欲しいとの申し入れをしている。

平尾道雄氏は『土佐藩郷士記録』の中で、この事件が、〈各地の郷士は殺気をふくんで城下に集まるものが相次ぎ、長岡郡本山方面の郷士は江戸に出訴すべしと論ずるもの、香美郡植村では逆意を謀るものがあるとの風説さえ伝えられた〉というほど、郷士たちに大きな影響を与えたと述べている。

やがて、藩主まで巻き込み、藩庁の重役たちが相次いで更迭されている。そして、四年後の享和元年（一八〇一）九月になって、左馬之進は武士身分を除籍され、仁淀川以西に追放という三回目の処分を受けた。これによって、事件は一応の解決をみた。

平尾道雄氏は、先述の著書の中で、文政四年（一八二一）におきた「市川龍右衛門事件」や、天保十四年（一八四三）の郷士に対する「駁初式試乗禁令」を巡る紛争を取り上げて、郷士たちの抵抗の動きは止むことなく後代まで続いていったとしている。

南学が支えた郷士の思想

江戸時代初期に家老として活躍した野中兼山は思想的には、在地学者の谷時中を起用して、「南学」を興し、学問の振興に努めた。郷士のなかには、この学問に大きく影響を受けた者が数多くいた。

兼山が失脚した折には、学問の世界でも弾圧を受け「南学四散」という現象を生み出している。

やがて、江戸時代中期になると、土佐の学問中興の祖といわれる郷士出身の谷秦山が出てくる。宮地家、箕浦家と共に、在野の学問の世界で大きな活躍をしたことは、あまりにも有名である。

谷家の場合、他家への養子を禁じており、二男以下は別家召出しがない限り、医業で生計をたてるべしとの家訓があった。谷家の墓石はどれも小さな自然石で作られた質素なものである。

郷士出身の医家では、坂本龍馬の長姉が嫁いだ安芸郡安田町の高松順蔵の弟にあたる涛亭がいる。涛亭は、紀州の華岡青洲の高弟で、高知城下町で西洋医術の治療所を設けていた。その名声を聞いた藩主から、侍医として招かれたが、自由の身でありたいとの信念からこれを断っている。

また、坂本龍馬の剣友・甲藤馬太郎も郷士身分であったが、江戸の桃井春蔵道場で修業し剣の達人となり、藩校・致道館の剣術教授にまでなっている。郷士身分の馬太郎が、上級武士の子弟に剣術を教えることは異例と言えるかも知れない。



高知県高岡郡梼原町にある幕末志士の群像「維新の門」（提供＝梼原町教育委員会）。土佐西部の山中に位置するこの地は、土佐勤王党の吉村虎太郎らを輩出している。また、伊予（愛媛県）との重要な交通路である梼原街道が通り、坂本龍馬が脱藩時にこの道を抜けたことでも名高い。山内家支配下で虐げられた土佐郷士たちが、まさにこの地を起点として明治の世に向けて走り始めた記念のモニュメントといえる。像は、左から前田繁馬、那須信吾、吉村虎太郎、中平龍之介、掛橋和泉（中央）、澤村惣之丞、坂本龍馬、那須俊平である。

土佐勤王運動と郷士

幕末になるとこのような事例は増え、郷士層や庄屋層から、学問を好み、剣術の修業に打ち込んで活躍する有能な人物が輩出するようになった。そしてこれが、無視することのできない勢力となり、やがて勤王運動に結びついていくことになる。

文久元年（一八六一）三月四日夜、高知城下のすぐ西隣りの井口村（現・高知市）で、刃傷事件が起きた。上士の山田広衛と同伴の益永繁斎が永福寺門前を通行中、暗闇の中で広衛に接触した下士の中平忠次郎が、広衛によって無礼討ちにされてしまった。

そこで、忠次郎の連れの宇賀喜久馬が忠次郎の実兄・池田虎之進に急報した。すぐに現場に駆けつけた虎之進が広衛を切り伏せ、同時に繁斎をも討ち取った。

これに対して、上士の一団が集合し、下士側も虎之進宅に集まり、一触即発の危機を迎えた。そのうちに、下士側が虎之進と喜久馬を切腹させて終結させてしまう。

この事件が大きな引き金となって、同年八月に、土佐勤王党結成へと繋がっていく。まさに幕末の勤王運動の一つの発火点だったともいえる。

土佐勤王党に直接に加盟したのは、一九二名であったが、その後に勤王運動に参加した者を含めると数百人もの若者達がいた。そのほとんどが、身分的には郷士や庄屋などの軽輩層で占められていた。

これら身分の低い者たちが立ち上がり、土佐の歴史を動かしただけではなく、日本の歴史の表舞台にも登場して、ついには明治維新の一つの原動力になり、時代の脚光を浴びるのである。

他方、武士のなかで身分的に最下級におかれていた足軽層は、どうであったか。横川末吉氏は『高知県史・近世編』のなかで、〈郷士・庄屋のような批判はなかったが、それだけにかえってひたむきに新しい世の中を求めていたものとも言えよう〉と、指摘している。

たしかに、組織的な動きはなかったろうが、自由民権運動家の中江兆民、岩崎弥太郎を支えた石川七財、教育者の奥宮慥斎ら足軽出身者の動きも見逃すことはできない。

（ひろたにきじゅうろう・土佐史研究家）

*御預り郷士＝家老級の重臣が、直接支配下に置いている郷士。
*差木履＝高下駄のことで、歯を取り替えられることからこの名がついた。

「一豊&千代」こぼれ話

山内夫妻のホントの名前から、
一豊妻の裁縫の腕前、
高知特産品のルーツ紹介まで、
隠れた面白エピソードを大紹介。

文＝橋詰 茂
Hashizume Shigeru

こぼれ話 壱 「やまのうち」か「やまうち」か?「かずとよ」か「かつとよ」か?

山内一豊の読み方は、一般的には「やまのうち」といわれているが、山内は「やまのうち」「やまうち」のどちらとも読むことができる。

そもそも山内氏は相模国鎌倉郡山内荘を領し、その地名をとって山内氏と称した。この地は「やまのうちしょう」と読まれており、以来「やまのうち」氏が一般的な呼称であった。

だが、応永年間（一三九四～一四二八）の史料に「やまうち」と記されたものがある。室町時代には「やまのうち」と「やまうち」が混在して読まれるようになっていたことが分かる。

丹波・尾張地方に分布する山内氏は、一般的には「やまうち」と読まれている。このように考えるならば、尾張山内一族である土佐山内氏は、「やまうち」と読む方が理に適っていよう。

ちなみに土佐では「やまうち」と読んでいる。また四国の他の地域の山内氏でも大半が「やまうち」である。

また、一豊は「かずとよ」と一般的に読まれているが、土佐では「かつとよ」と読まれている。土佐では一を「かつ」と読むことが多い。

土佐の山内家宝物資料館では全て「やまうちかつとよ」としており、土佐人にとって山内一豊に対するこだわりが大きいことを示そう。

こぼれ話 弐 一豊の妻はいったいどこの生まれなのか?また、ホントの名前は「千代」?「まつ」?

一豊の妻の出自はいくつもの説があり確定はできない。

まず一つは近江国出身説である。

山内氏系図などでは、近江国坂田郡飯村に住む浅井氏の家臣である若宮喜助友興の娘とする。母は明智光秀の家臣石川小四郎の娘といわれ、父友興の死後、母子ともに母の妹の嫁ぎ先である不破氏を頼って美濃に移り住んだという。

近年になり美濃国の出身説が出された。これは郡上八幡城主であった遠藤盛数の娘とする。遠藤家系図に「女山内対馬守様室」とあり、これを補強するような史料が多く散見する。『寛政重修諸家譜』には遠藤氏の系譜に「山内対馬守一豊が室」と見え、美濃説がにわかに注目をあびるようになった。

ただ『寛政重修諸家譜』の山内一豊の系譜には「室は若宮喜助友興が女」とあり、幕府編纂の系譜でも差違があるところから、必ずしも美濃国出身とは言い難い点もある。

これ以外に美濃国不破の出身説があるが、不破説は幼き頃叔父の重正のもとに身を寄せたことから誤って伝えられたものと思える。また斎藤氏・細川氏説などがあるがいずれも決め手を欠いている。

名前は「千代」とも「まつ」ともいうが定かでない。一般的には「千代」がよく知られているが、その根拠は明らかでない。

明治期からの国定国語教科書の尋常小学読本で一豊夫人が駿馬の購入資金を一豊に渡した逸話が記されている。この夫人の名は特に記されていないが、それがなぜか千代として定着したのである。

また「まつ」は若宮氏の娘で山内家に嫁いだといわれている。これが一豊夫人説のよりどころになっていた。しかし、「まつ」という女性の存在はあったが、これは若宮左馬助（友興）の娘で、一豊の家臣五藤内蔵助為重に嫁いでおり、一豊夫人ではない。

山内氏の家臣に嫁いだものが、いずれの時か山内氏に嫁いだと誤って伝えられるようになったのかもしれない。近江出身説と「まつ」の名が一体化している。

当時の系図は男子を中心に作成されるため、女子の存在や名は確認できないことが多い。それゆえ、このようにいくつもの説が生まれるのである。

彼女は出自も名前も明らかでなく、生年も定かでない。ただ、元和三年（一六一七）に六十一歳で亡くなっており、逆算して弘治三年（一五五七）の生まれと推定できる。一豊の死後見性院という法号を得て、その名を名乗った。

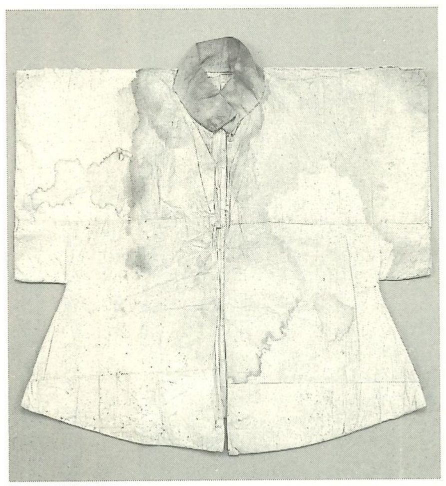
こぼれ話 参 いまはどうなっている?山内家の伝統行事、紙衣・馭初

山内家の伝統的正月行事として紙衣と馭初がある。正月の総出仕では紙衣の着用が義務づけられた。これは、長浜を拝領して初めて迎えた天正十四年（一五八六）の元旦に、一豊が紙でできた羽織（紙衣）を着用して儀式に臨んだのがその起こりである。

紙衣は家臣としての召し抱えの印や戦功の褒美として遣わされたが、主従関係の証でもあったろう。

この儀式は江戸時代を通じて土佐藩の正月儀礼として続いた。この紙衣が現在山内家宝物資料館に所蔵されており、往時の様子を偲ぶことができよう。

紙衣着用の儀式の後、正月十一日に馭初の儀式が行われた。これは、一豊の御前を家臣が馬に乗って走り抜ける儀式で、一種の閲兵式である。



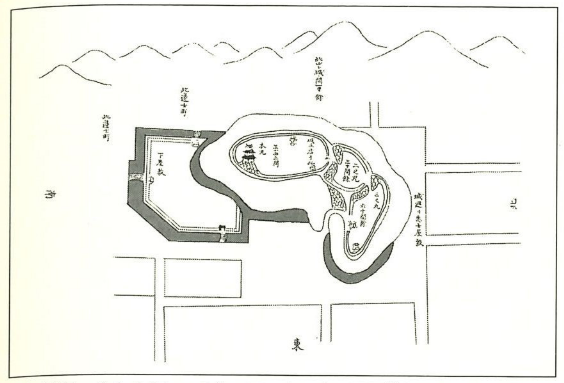
一豊着用の紙衣。紙の衣装は、家臣に倹約を勧める思惑があったと思われる（土佐山内家宝物資料館蔵）。

東西二手に分かれた騎馬武者が、一騎ずつ駆け出し、櫓の上から采配を振るう一豊の前ですれ違う。この儀式は土佐入国後も行われ、山内家の正月の恒例行事となり、明治三年（一八七〇）まで続いた。

土佐山内家宝物資料館に所蔵されている「黒糸威七十六間小星兜」は、一豊が掛川を拝領後の馭初式で家臣の祖父江勘時に与えたものと伝えられている。土佐武士の勇壮さを示す儀式である。

その後、一豊・一豊夫人・二代藩

主忠義を祀った藤並神社では、十一月四日の祭礼の際に騎馬行列が市内を練り歩く行事が戦前まで行われていた。騎馬行列は山内家家臣の子孫らによって始められたが、馭初式を偲ぶ行事として行われたのであろう。戦災による藤並神社の焼失とともに騎馬行列は姿を消した。



高知城図。本丸の北に二の丸、三の丸、南に下屋敷を配している（『一豊公紀』より転載）。

水害を防ぐために改名「高知」の名前の由来

こぼれ話 四

慶長六年（一六〇一）、山内一豊は遠州掛川から土佐に封じられ入国した。一豊は前領主長宗我部氏の居城であった浦戸城が手狭で不便であったため、浦戸城に代わる新城の築城を計画した。

同年九月から百々安行を築城奉行に任じ、高知平野の中央に位置する大高坂山に築城を開始した。同八年に本丸と二の丸が完成し一豊は入城する。

新城の地は長浜雪渓寺の月峰和尚（真如寺在川和尚ともいう）が河中山と命名した。河中とは鏡川と江ノ口川に挟まれた地形から名付けられたという。

だがこの地はその名の通り二つの河川に挟まれた湿地帯で、たびたび水害に悩まされた。そこで二代藩主忠義は、この地名を嫌い五台山竹林寺の空鏡上人に相談した。

空鏡上人は河中山の文字を高智山と改めた。慶長十五年（一六一〇）のことである。高智とは、文殊菩薩加護の土地を意味しており、竹林寺本尊文殊菩薩の力により水害を防ごうとしたのであろう。のちに高知と記されるようになるが、高智が高知の名の由来と伝えられている。

土佐の名品「唐人豆腐」の元祖は一豊が優遇した朴好仁の朝鮮式！

こぼれ話 伍

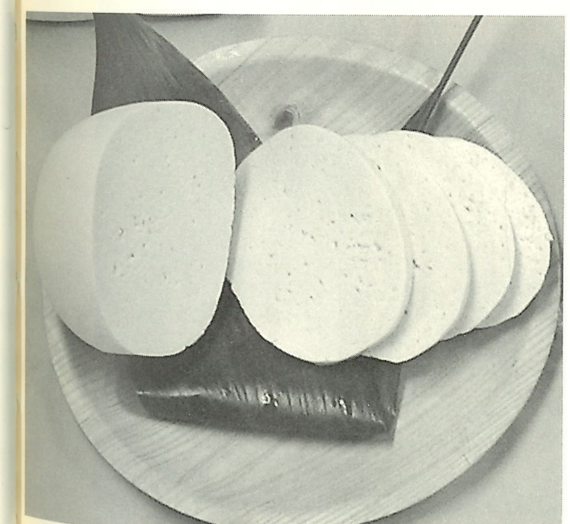
朝鮮の役の時、参陣した多くの武将が朝鮮人を連れ帰ったが、朴好仁も長宗我部元親によって連れてこられた捕虜の一人である。

彼は慶尚道の貴族で熊川の戦いに参戦、元親の家臣吉田政道に捕らえられ、一族とともに土佐へやって来て浦戸に居住した。朝鮮の医療技術や医書、豆腐・こんにゃくの製造法など進んだ朝鮮文化を土佐へ伝えた。

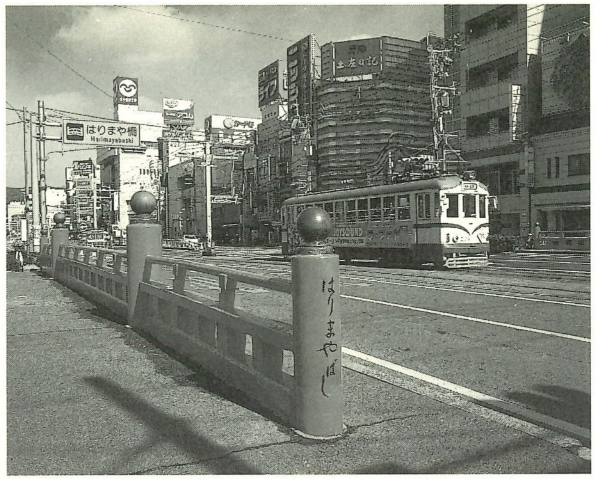
山内氏入国後好仁は町役を免除され、三反の扶持を給せられた。やがて高知城下へ移り、豆腐製造の特権を与えられ、他の朝鮮人とともに境川の川沿いに居住した。

彼らの住む町は唐人町と称され、豆腐製造が盛んに行われた。後に好仁は朝鮮へ帰国したが、息子朴好赫が土佐に残り豆腐製造販売を続け、製造された豆腐は「唐人豆腐」として土佐の名品になったという。

好赫はその後秋月氏を名乗り、山内家に仕えた。この豆腐は昭和初期まで作られており、その後すたれたが、近年再興された。水分が少なく固い豆腐である。



唐人豆腐。食品会社タナカショクにより土佐特有の豆腐文化が再現された（現在は販売休止中。提供＝タナカショク）。



高知市街の中心部にあった先代の播磨屋橋。下に川が流れているわけでもなく、ただ道路脇に赤い欄干が突き出ているだけだった。

全国三大がっかり名所の一つ播磨屋橋の由来とは？

こぼれ話 六

「おかしな事よな播磨屋橋で坊さんかんざし買うを見た」とよさこい節に歌われ、一躍有名になった土佐の名所播磨屋橋は、全国三大がっかり名所の一つとまでいわれる。高知市の中央部、東西南北を結ぶ交差点の北にその橋があるが、訪れた観光客はついつい見落としがちである。

播磨屋橋のはじまりは江戸時代初期に、高知城下町の堀川に架けられた橋である。

山内氏による城下町の建設にあたり、旧領地掛川から招集された職人や京・堺からの商人が多く住み着いた。長宗我部氏時代の商人もそこに居住したが、その中に播磨屋宗徳と櫃屋道清がいた。播磨屋宗徳はその屋号が示すとおり播磨の出身で長宗我部氏に招かれて土佐へやってきた。

櫃屋は紀州出身の武士であったが後に商人となり、播磨屋とともに山内氏入国後も有力商人として活躍をした。両人とも町年寄りを務めるほどの有力商人であった。

そして、堀川の北岸播磨屋と南岸櫃屋の邸宅を往来するために私橋が架設された。これが播磨屋橋で、橋名は播磨屋の屋号に由来した。やがて通行する者が多くなったため、公橋となった。

江戸時代中期の記録によれば、橋の長さは一六間、幅二間であった。文政十年（一八二七）には町住人の願い出により、中央三間を除く橋上の東西両側に小杮葺きの小店が建てられた。橋を中心とした町の賑わいぶりがうかがえる。

しかし、昭和四十一年（一九六六）に堀川は埋め立てられ、はりまや橋公園となり、同四十六年（一九七一）には橋の下は地下道化した。現在は、はりまや橋公園が整備され、公園の地下に播磨屋宗徳の碑文と先代の播磨屋橋が展示されている。

「いごっそう」「はちきん」という土佐気質を表す言葉はいつ生まれた？

こぼれ話 七

土佐人の気質の典型として「いごっそう」と「はちきん」があるが、その語源については諸説ある。

「いごっそう」とは、言動も異なるが、骨相まで異なる「異骨相」からきているという。また、自然に人を威圧し、威服・畏敬させる豪傑であり、そういう相貌をしているところから「威豪相」「畏豪相」とも記されている。

語源はともかくとして、現在では強情・がんこ・負けず嫌いなど全ての意を含む土佐独特の男性の大らかさを持った気質を表している。

しかし、幕末のある寺院の日記には、村の石鎚講の先達と称する三人のことを「いごっそう」と記しているものがあり、「人と異なる性質にてほめらるる事はなく、誇らるる事多し、いわゆる異兀粗なるもの也」と、けっして褒められる人物ではないことが分かる。

現在では男らしさを示す言葉として用いられているが、時代の変遷とともに言葉の持つ意味が変化してきたのであろう。幕末の坂本龍馬や明治の板垣退助・浜口雄幸なども「いごっそう」な人物といわれており、混乱の時代を生き抜いた彼等の人間性に「いごっそう」を当てはめて、いい意味で用いるようになり、現在に至ったのではなかろうか。

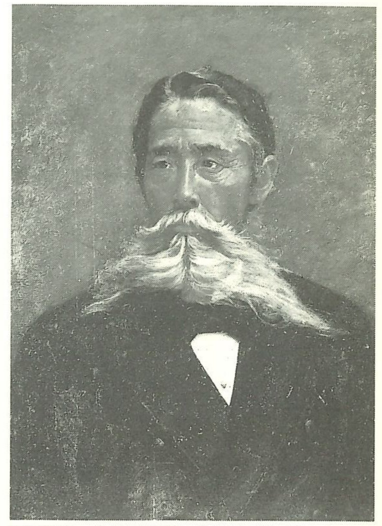
また「いごっそう」に対して、土佐の女性は「はちきん」と呼ばれているが、これは行動的・魅力的で活発な女性を総称して用いている。だが、語源を紐解くと多くの説がある。江戸時代に針屋金蔵というお調子

＊先代の播磨屋橋＝昭和33年に作られた上の写真の橋（欄干）のこと。現在の播磨屋橋は公園内にも太鼓橋として再現されている。

者がおり、針金と称していたが、やがて八金に転じたという。また八綿屋金右衛門という馬鹿者がおり、これから八金となったともいう。

いずれも調子にのる馬鹿者、思慮八分の人を八金といったのである。本来は男性にも女性にも使われる言葉であった。

これが、いつごろ女性をさしていうようになったかは明らかでないが、男性の「いごっそう」に相対する言葉として、いい意味での男勝りの女性を「はちきん」と言うようになったのではなかろうか。


板垣退助。石川寅治筆。生涯赤貧に甘んじたというその不器用さが〝いごっそう〟らしい（高知県立美術館蔵）。

長宗我部遺臣の襲撃に備え 一豊に五人の影武者あり

こぼれ話 八

関ヶ原合戦で西軍についた長宗我部盛親は土佐を没収された。そのため長宗我部氏旧臣の抵抗は大きく浦戸一揆が起こるなど、領内は不穏な状況があった。そのような中、入国した一豊は慶長六年（一六〇一）から浦戸城に代わる新城の築城にとりかかる。そして長宗我部氏旧臣を中心とする反山内勢力を警戒するため様々な施策がとられた。

その一つとして築城現場の各部署に守備の武士が配置され、火急の際に事態を知らせるための狼煙が準備されていた。一豊はたびたび築城現場を視察したが、敵からの襲撃を警戒して自分と同じ服装をした背丈・格好の五人の影武者を従えたという。

市川大炊・野中玄蕃・柏原半右衛門・乾和三・乾伊助の五人で、一豊と合わせて六人衆と称された。

戦国時代には敵の襲撃から身を守るため、影武者をおくことがあった。武田信玄や徳川家康などにも影武者がいたが、一豊が五人もの影武者と行動を供にしたことは、一豊入国後の土佐が不安定な状況であったことと、一豊の用心深さを示すものである。

土佐拝領は二四万石か？ 大出世のホントの稼ぎの中身

こぼれ話 九

山内一豊は遠州掛川から土佐二四万石を拝領し、大出世をした人物とよくいわれているが、一豊が入国したときに本当に二四万石であったのだろうか。

二代藩主忠義の書状によれば、山内氏入国以前の長宗我部氏の石高は九万八〇〇〇石であり、一豊は慶長七年（一六〇二）の江戸普請の時に長宗我部氏の石高に従い九万八〇〇〇石の役を務めた。つまり一豊は長宗我部氏の石高を引き継いだのであり、二四万石にはとうてい及ばない。

その後、慶長十年（一六〇五）に一豊から出された土佐国総目録には二〇万二六〇〇石の数値が見える。どこにも二四万石の数字はない。

では、二四万石の数字はどうして生まれたのか。『長宗我部地検帳』によると土地はおよそ二万四〇〇〇町ある。単純に一反一石で計算すると二四万石となる。この数字がいつのまにか土佐の石高となって定着したのであろう。

のちの時代になっても、公式に土佐二四万石を認められたことはなく、石高はほぼ一貫して二〇万二六〇〇石であった。

秀吉未亡人との交流もあった 京における一豊の妻

こぼれ話 十

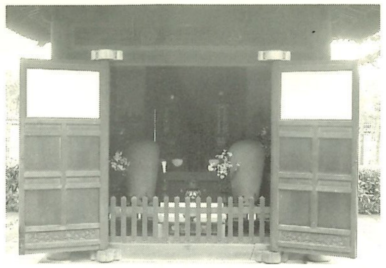
慶長十年九月、一豊が六十一歳の生涯を終えるや、妻は落飾して見性院と称した。やがて上洛を決意して同十一年三月上洛、まず伏見屋敷に

入り、その後京都桑原町に屋敷を構えた。在京する見性院には、藩主より賄料として一〇〇〇石が与えられた。

京で見性院は秀吉の正室北政所と交流を深めている。ある時、二代藩主忠義へ北政所が土佐にある薄色の山茶花を所望しているので届けるようにと、書状を認めている。

当時の政治状況を考え、京において山内家と豊臣家との関係を保つように努力していることが分かる。いまだ天下の情勢が不安定な中、徳川への忠誠を誓う藩主に対して、母として豊臣との関係を絶やさずに、いかなる場合にも備えるように考えていたのであろう。

見性院は、元和三年（一六一七）一豊と同じ六十一歳で生涯を閉じたが、上洛後は一度も土佐へ帰らないままであった。荼毘に付された後、遺骨は妙心寺大通院に埋葬された。今、大通院には一豊と妻の位牌が並んで安置されており、死後も二人の仲むつまじい夫婦愛を見ることができよう。


一豊夫妻の霊廟（妙心寺大通院。撮影＝房前政彦）。大通院は、慶長8年に一豊が建立し菩提寺とした。

天皇への献上品も縫い上げた？ 一豊の妻の裁縫の腕前

こぼれ話 十一

一豊の妻が書と裁縫に長けていたことは、駿馬の購入ほど知られていない。だが裁縫に関しては一つの逸話が残されている。一豊が近江長浜城主の時に、唐織りの端切れを集め、たまるとそれを縫い合わせて小袖を仕立てていた。その出来栄えが見事であったため、周囲の人々は驚いていた。小袖を見た人物が、秀吉に見せたらどうかと勧めたため、一豊が聚楽第にて秀吉に披露した。秀吉もその出来栄えに驚き、ついには後陽成天皇へ献上したと伝えられている。

裁縫の手ほどきをしたのは、一豊の母法秀院である。一豊の妻は幼き頃から手先が器用であった上に、裁縫を習いまたたく間に上達したのであろう。その上達ぶりを見て、法秀院が一豊の嫁に決めたともいわれている。

唐織りの端切れを小袖に仕上げることは、質素倹約を身上としていたことを示す。この逸話は、質素倹約と裁縫上手が一つになり生まれたものであろう。こんなエピソードにも一豊の妻の人となりが表れている。

一豊の妻が仲立ち？ 大坂城五人衆毛利勝永と一豊の関係

こぼれ話 十二

関ヶ原の合戦で西軍についた武将の一人に毛利勝永がいる。毛利姓だが中国の毛利氏とは関係ない。元は森姓で、秀吉に仕えて各地を転戦し、やがて豊前小倉城主となった。

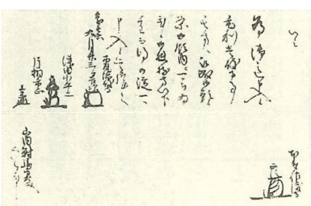
それを機に毛利姓に改めた。関ヶ原の敗戦後、父勝信とともに加藤清正に預けられたが、その後、以前より親交があった一豊に預けられる。勝信は高知城西の丸に、勝永は久万村に所領を与えられた。

この背景には一豊の妻の尽力があったともいわれる。やがて勝永のもとに秀頼の使者として家里伊賀守が訪れ、大坂方に加勢するように求めた。そこで勝永は妻と次男を残し、土佐を出奔して大坂城へと入った。

入城した勝永は、真田幸村・長宗我部盛親・後藤又兵衛・明石全登とともに大坂城五人衆と称せられた。

冬の陣では西の丸西の守備隊となるが、和睦によりほとんど戦わずして終えた。夏の陣では真田幸村とともに城外へ討ち出て徳川勢と戦い、徳川勢を窮地に追い込む奮戦ぶりを見せる。だが幸村が戦死したため、やむをえず大坂城に撤退した。炎上する大坂城の中で秀頼を介錯し、息子勝家とともに自害したという。土佐で人質となっていた次男は首を切られ、勝永の血筋は絶えるのである。

一豊の妻の胸中はいかがであったろうか。


本多正信などから一豊に送られた「毛利吉成（勝永）預ノ件ヲ依頼スル来書」（『一豊公紀』より転載）。

（はしづめしげる・香川西高等学校教諭）

価値ある文献から不朽の名作まで

もっと知りたい

「一豊・千代」関連ブックガイド

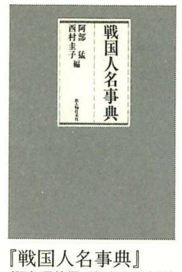
文＝淡野史良
Tanno Shirô

二〇〇六年大河ドラマ『功名が辻』とのかかわりで、書店には山内一豊・千代の関係書が数多く並んでいる。ここでは広く戦国時代への関心ももてるように、最近書かれたものだけでなく、古典といえる参考書目もとりあげたい。

事典
最初のアプローチ



『国史大辞典』
（全15巻／吉川弘文館）



『戦国人名事典』
（阿部猛他編／新人物往来社）

①『**国史大辞典**』（全15巻／吉川弘文館）
②『**戦国武将合戦事典**』（峰岸純夫・片桐昭彦編／吉川弘文館）
③『**戦国人名事典**』（阿部猛他編／新人物往来社）
④『**戦国全史**』（池上裕子他編／講談社）

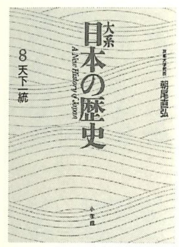
①は現在、最大・最高レベルの日本史辞典。ただなにぶんにも大部すぎる。その中から戦国の人名・武家系譜・合戦の項目一〇六三を抜き出し、時代順に三部構成とし一冊にまとめたのが②である。ともに項目末尾に「参考文献」が示されていて、次のステップに進める。

④は編年史だが、事典としても重宝。

通史
一豊の時代を展望する



『日本の歴史12』
（林屋辰三郎／中公文庫）



『大系日本の歴史8』
（朝尾直弘／小学館）

①『**日本の歴史12　天下一統**』（林屋辰三郎／中公文庫）
②『**大系日本の歴史8　天下一統**』（朝尾直弘／小学館）
③『**日本の歴史15　織豊政権と江戸幕府**』（池上裕子／講談社）

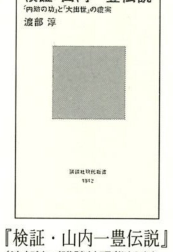
①は元版が一九七〇年、③は二〇〇二年の刊行。それぞれ戦国の全体像をつかむのに最適で、とくに③と①の新旧二書は、山内一豊への目配りもきいている名著といえる。

研究書
戦国最強の二人三脚

【一豊】



『山内一豊』
（小和田哲男／PHP新書）



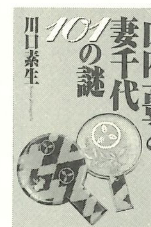
『検証・山内一豊伝説』
（渡部淳／講談社現代新書）

①『**山内一豊**』（山本大／新人物往来社）
②『**山内一豊**』（小和田哲男／PHP新書）
③『**山内一豊のすべて**』（小和田哲男編／新人物往来社）
④『**検証・山内一豊伝説**』（渡部淳／講談社現代新書）

山内一豊および戦国山内氏に関する研究はもともと少なかった。この分野の開拓者といえる山本大（たけし）や平尾道雄の著述は一九六〇年代半ばに書かれたもので、①も初版は一九六六年の刊行。だが、今なお命をもっているものである。

②③④は最近の戦国研究を踏まえた論考である。山内氏のルーツから二〇万石の土佐一国の領主となるまでを諸史料から追跡している。

【千代（見性院）】



『山内一豊と妻千代101の謎』
（川口素生／PHP文庫）



『山内一豊と千代』
（田端泰子／岩波新書）

①『**山内一豊公夫人**』（武田まつ編刊）
②『**戦国乱世に生きる**』（人物日本の女性史4／集英社）
③『**山内一豊の妻**』（楠戸義昭／新人物往来社）
④『**山内一豊と妻千代101の謎**』（川口素生／PHP文庫）
⑤『**山内一豊と千代**』（田端泰子／岩波新書）
⑥『**賢妻・千代の理由**』（小和田哲男／NHK出版）

①には明治二十三年（一八九〇）に書かれた千代伝『かゞみ草』が収録され、有名な逸話の場面が味わいある絵で描かれている。②ではお市の方・北政所・淀殿など戦国の女性九人が分担執筆されている。寿岳章子が「山内一豊の妻」伝説の意味を解き、他の戦国女性と違う独自性を具体的に指摘している。③④は一豊・千代にまつわりついている多くの謎を諸史料から解き明かす。

ところで近年、中世女性史研究はひじょうに進展した。その成果を踏まえたのが⑤⑥。最近刊行されたこの二著では、戦国武将の妻が担っていた主君・夫・家族に対する役割をくわしく掘り起こし、とくに⑥では、妻が戦場で戦う夫とは違う形で参戦していたことが知れて、とても興味深い。

【一豊と千代の生きた時代】



『関ヶ原合戦』
（二木謙一／中公新書）



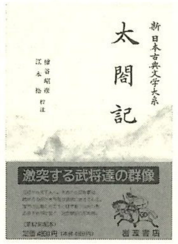
『日本名城伝』
（海音寺潮五郎／文春文庫）

①『**戦国時代論**』（勝俣鎮夫／岩波書店）
②『**関ケ原合戦**』（二木謙一／中公新書）
③『**関ヶ原合戦**』（笠谷和比古／講談社）
④『**土佐藩**』（平尾道雄／吉川弘文館）
⑤『**日本名城伝**』（海音寺潮五郎／文春文庫）
⑥『**戦国武将の危機管理**』（新宮正春／PHP研究所）
⑦『**逆説の日本史12**』（井沢元彦／小学館）

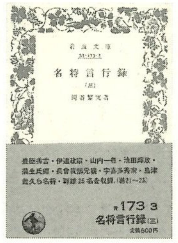
①では戦国時代を、民衆が台頭して村や町が成立し、呪術的社会から合理的観念が優勢になる社会へと移行する転換期としてとらえる。戦国社会は近代・現代社会の出発点に位置づけられている。②は関ヶ原の戦いの推移を臨場感をもって書いている。③では近世初頭のこの戦いの政治史的な意味をも解明している高著。

遠江掛川から土佐に入封した一豊が長宗我部（ちょうそかべ）氏の旧領に、どのような支配体制を立てていったか。一豊以来の歴代藩主によって培われた土佐藩の政治・経済・文化力が、やがて幕末の志士たちを生んだといえる。それらのことが納得させられるのが、土佐藩の歴史を骨太に記した④と⑤である。

史料
原史料のおもしろさ



『太閤記』
（小瀬甫庵／岩波書店）



『名将言行録三』
（岡谷繁実／岩波文庫）

①『**山内家史料 第一代一豊公紀**』（山内神社宝物資料館）
②『**皆山集二・三**』（松野尾章行編／高知県立図書館）
③『**信長公記**』（太田牛一／桑田忠親校訂／新人物往来社）
④『**太閤記**』（小瀬甫庵／新日本古典文学大系60／岩波書店）
⑤『**名将言行録三**』（岡谷繁実／岩波文庫）
⑥『**寛政重修諸家譜 第十三**』（続群書類従刊行会）

①②は山内家に関する根本史料で、一豊・千代・高知築城などの諸記録が収録されている。原典には黄金一〇枚で名馬を買った話はどこにもない。

③には一豊の名は登場しないが、信長の馬揃えの華麗な様子など、信長側近による鮮明な記録がある。

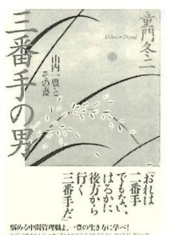
一豊の活躍が随所に記されているのは④である。⑤は戦国武将一九二人の言行を大量の歴史書から集め、一人ずつまとめたもの。山内一豊についても『藩翰譜（はんかんふ）』『鳩巣小説（きゅうそう）』『常山紀談（じょうざんきだん）』などにある話はみな集録されている。

⑥には山内家が江戸時代半ばに幕府へ提出した家譜がある。一豊以来の歴代藩主の武功・履歴が詳述されている。

小説
ドラマで広がる一豊と千代



『功名が辻』
（司馬遼太郎／文春文庫）



『三番手の男』
（童門冬二／NHK出版）

①『**功名が辻**』（司馬遼太郎／文春文庫）
②『**旦那さま大事**』（橋田壽賀子／ラインブックス）
③『**三番手の男**』（童門冬二／NHK出版）

山内一豊・千代を主人公にした小説は最近、数種が刊行されたが、特徴的なものをあげた。①は大河ドラマの原作。それまで戦国武将として主人公になれなかった一豊を、妻千代を隣にすえることで痛快な戦国物語にした。信長・秀吉・家康を理解するうえでもよい。②はテレビドラマの原作・脚本を改めて小説化したもの。③は現代の企業社会を多分に投影して、決して一番手ではなく三番手の男である一豊とその妻を描いた歴史小説である。

（たんのしろう・歴史研究家）

一豊&千代生涯年表

太字は一豊関連事項

参考文献　近世大名の誕生（土佐山内家宝物資料館刊）
戦国セレクション・激震織田信長
歴史群像シリーズ・羽柴秀吉（以上小社刊）ほか

製作=編集部

和暦	西暦	事項
天文3	1534	5月　信長、尾張勝幡城に誕生
天文6	1537	2月6日　秀吉、尾張中村に誕生（異説あり）
天文11	1542	12月26日　家康、三河岡崎城に誕生
天文12	1543	8月　鉄砲伝来
天文14	1545	**一豊、尾張黒田に誕生（異説あり）**
天文15	1546	信長、元服し三郎信長と名乗る
天文16	1547	家康、織田信秀の人質となる
天文18	1549	キリスト教伝わる 家康、今川義元の人質となる
天文22	1553	第1回川中島の戦い
天文23	1554	秀吉、信長に仕える
弘治元	1555	家康、元服し松平元信と称する
弘治3	1557	7月　一豊の兄十郎、尾張黒田にて戦死 **この年　千代誕生か？**
永禄2	1559	**春　岩倉城落城、一豊の父盛豊戦死（異説あり）。一豊の流浪始まる** 信長、尾張統一を完成
永禄3	1560	5月19日　桶狭間の戦い。信長、今川義元を破る **この年　一豊元服か**
永禄4	1561	第4回川中島の戦い 秀吉、ねねと結婚
永禄7	1564	家康、三河一向一揆を平定
永禄9	1566	家康、徳川に改姓
永禄10	1567	**この頃から秀吉に仕える**
永禄11	1568	9月7日　信長上洛開始
元亀元	1570	信長、越前金ヶ崎城攻略後に浅井長政の裏切りで撤退 姉川の戦い **この頃から天正年間に一豊・千代結婚**
元亀2	1571	8月27日　信長、小谷城を攻め、浅井長政を自刃に追い込む
天正元	1573	4月12日　武田信玄没 **8月14日　朝倉攻め。一豊、三段崎勘右衛門を討ち取る（三段崎討ちは金ヶ崎撤退時との説あり）** **この年、近江唐国400石を与えられる** 秀吉、羽柴と改姓
天正3	1575	**5月21日　長篠の戦い。一豊も参戦**
天正4	1576	**竹生島に金を寄進** 信長、安土築城を命ずる
天正5	1577	**10月23日　秀吉に従い播磨制圧に出陣** **11月　上月城に出陣** **この年　播磨有年に700石を与えられる。後200石加増**
天正6	1578	**3月　秀吉に従い三木城を攻める**
天正8	1580	**この年　一豊と千代の間に与祢姫誕生**
天正9	1581	信長、天覧馬ぞろえ **6月25日　秀吉に従い鳥取城攻め** **11月8日　岩屋城攻め**
天正10	1582	**5月　秀吉に従い高松城攻め。高松城外に堤を築く** 6月2日　本能寺の変。明智光秀の急襲により信長自害 **13日　山崎の戦。秀吉、明智光秀を破る。一豊も参戦** 27日　清洲会議。秀吉、信長の孫・三法師を擁して信長の後継者となる 9月25日　播磨印南郡500石を加増される
天正11	1583	**秀吉に従い伊勢亀山城攻めに参戦。五藤吉兵衛戦死** **3月　秀吉に美濃出陣を命じられる** **4月21日　賤ヶ岳の戦い** **この年　河内交野361石を加増される**
天正12	1584	**3月　小牧・長久手の戦い始まる。秀吉に従い一豊も参戦** **9月　近江長浜に5000石を与えられる** **この年　一豊の弟康豊、長浜に移る**

和暦	西暦	事項
天正13	1585	**3月21日　秀吉に従い紀州征伐に参加** **6月2日　若狭高浜に1万9800石を与えられる** 7月　長宗我部元親、秀吉に降伏 **8月18日　秀吉に従い、越中佐々成政攻略戦に参加** **閏8月21日　近江長浜に2万石を与えられる。秀次の老臣となる** **11月29日　長浜大地震で与祢姫を失う。千代、禅宗に帰依**
天正14	1586	**1月1日　一豊、紙衣を着し、年頭の儀礼を行う。馭初式を行う** 5月　秀吉の妹旭姫が家康に嫁ぐ **7月17日　一豊の生母・梶原氏没** 12月　秀吉太政大臣となる
天正15	1587	9月　京都に聚楽第が完成 **この年　一豊、正五位下対馬守に任ぜられる**
天正16	1588	**4月14日　後陽成天皇、聚楽第に行幸。一豊も供奉** 7月　刀狩令発布
天正17	1589	5月　淀殿、秀吉嫡子・鶴松を生む（早世）
天正18	1590	**3月29日　秀次に従い伊豆山中城攻め** **4月3日　小田原攻め。約3カ月後、北条氏直降伏** 8月　秀吉奥州征伐開始 **9月20日　掛川5万石を与えられる。**
天正19	1591	12月28日　秀次が関白に、秀吉は太閤に キリスト教禁止
文禄元	1592	**文禄の役（第1次朝鮮出兵）。一豊は秀次に属し京都を守る** **一豊の弟康豊に忠義誕生（のち一豊の養子となる）**
文禄2	1593	8月3日　秀頼誕生 **閏9月22日　一豊、掛川領内で秀次を饗応**
文禄3	1594	**1月　伏見城築城。一豊も普請に関わる** **2月17日　秀吉の逆鱗に触れ、朝鮮出兵を命じられるも許される** **9月　伊勢鈴鹿郡内1000石を加増される**
文禄4	1595	7月　秀次自刃に追い込まれる **遠江の秀次闕所8000石を加増される** **8月　周智郡一宮筋の蔵入地2964石の代官を命じられる**
慶長元	1596	12月　秀頼、4歳で元服
慶長2	1597	慶長の役（第2次朝鮮出兵）
慶長3	1598	**8月18日　秀吉没。一豊、秀吉の遺品を受ける**
慶長4	1599	5月　長宗我部元親没
慶長5	1600	**4月　家康に従い、豊国神社に参拝する** 6月　家康、上杉征討のため大坂を出発 **一豊、小夜中山にて家康を饗応** **7月　小山にて千代の書状を受け取り、封をしたまま家康に差出す** **小山評定。一豊、小山評定で城明け渡しを言上** **8月　岐阜城攻撃に参加** **9月15日　関ヶ原の戦い。一豊は南宮山の敵に備える** **11月　一豊、土佐一国の領主となる** **12月　浦戸一揆**
慶長6	1601	**1月8日　浦戸城へ入城** **3月　桂浜で相撲興行に集まった有力な一領具足を捕らえる** **9月　毛利勝信親子を預かる**
慶長7	1602	5月　家康、諸大名に二条城を築城させる
慶長8	1603	2月12日　家康、征夷大将軍となり、江戸に幕府を開く **3月　従四位土佐守に任じられる** 7月　千姫、秀頼に嫁ぐ **8月　浦戸より大高坂（高知）へ移る** **11月　滝山一揆**
慶長9	1604	**この年　江戸へ参勤し、江戸城普請課役を負担する** **春　養子忠義と家康養女阿姫の婚約成立**
慶長10	1605	4月　家康、将軍職を秀忠に譲る **9月20日　一豊没。千代、翌日に「見性院」の法号を受ける**
慶長11	1606	**3月　千代、京都へ移る**
慶長17	1612	3月　キリシタン禁止
慶長18	1613	公家衆法度・勅許紫衣法度発布
慶長19	1614	11月　大坂冬の陣
元和元	1615	5月　大坂夏の陣。秀頼・淀殿自刃し、豊臣氏滅亡 閏6月　一国一城令発布 7月　武家諸法度・禁中并公家諸法度発布
元和2	1616	4月17日　家康没
元和3	1617	**12月4日　千代没**

次号予告　歴史群像シリーズ83

演義 三国志

三英雄が義兄弟の契りを結ぶ桃園の誓い。
暴君董卓と猛将呂布の仲を裂く美女貂蝉。
赤壁を勝利に導いた孔明が祈禱した東南の風…
お馴染みの三国志名場面は「正史」ではなく
「演義」に描かれているのだ。
演義を問い直すことで改めて三国志の魅力に迫る一冊!!

2006年 2月中旬 発売予定
B5判・180ページ
予価 **1575円**(税込)

主な内容

【巻頭カラー】
三国志絵巻

【ダイジェスト演義三国志】
桃園の誓い〜三国鼎立／白帝城〜三国一統

【史劇三国合戦】
虎牢関の戦い／官渡の戦い／長坂の戦い／赤壁の戦い／潼関の戦い／合肥の戦い／襄樊の戦い／夷陵の戦い／街亭の戦い／五丈原の戦いほか合計16合戦

【カラー企画】
三国演義計略図解／イラスト再現・演義を彩るアイテム

【三国演義人物伝】
《蜀漢》劉備・関羽・張飛・諸葛亮・龐統ほか／《曹魏》曹操・司馬懿・夏侯惇・夏侯淵・張遼ほか／《孫呉》孫権・周瑜・陸遜・太史慈・甘寧ほか／《後漢・その他》董卓・袁紹・呂布・貂蝉・孟獲・左慈ほか総勢60名

【『演義』の世界】
七分の事実に三分の虚構『演義』成立の過程／明代4大奇書『三国志』『水滸伝』『西遊記』『紅楼夢』／日本人が描く新たな『演義』の世界

※編集の都合により記事が変更になることがあります。

歴史群像シリーズ82
山内一豊

発行所　株式会社　学習研究社
印刷所　大日本印刷株式会社
編集長　新井邦弘
編集担当　佐藤香澄　今若良二
吉村大輔
表紙装丁　高山静美
AD　松下誠之
デザイン　〔パコファクトリー〕
松下誠之　浅見祐子
杉田美奈子　野口恵美子
津田敬子
編集協力　赤坂大輔　岡野和美
小倉一邦　河島めぐみ
菊地のぶお　田部井聡
露木馨　中島清視
春本剛之　安田岳美
大野信長
(有)ブルボンクリエイション
データ・アトラス株式会社
(株)広研　(有)ジオ・ブレーン
取材協力　一宮市木曽川資料館
掛川市商工観光課
高知県教育委員会文化財課
山内一豊夫人顕彰会
房前政彦
(株)吉川弘文館

歴史群像オフィシャルホームページ　http://www.gakken.co.jp/rekigun/